

漢字文献 情報処理研究

第 19 号

漢字文献情報処理研究会 編

好文出版

漢字文献情報叢書研究 第19号

目 次

論文	4	N-gram を用いた文献比較 師茂樹氏作 ngsim.pl を用いた発見の技法	石井 公成
<hr/> 特集1 新型コロナウイルスの流行と中国学の教育・研究 11 <hr/>			
座談会			
	12	座談会①：総合	
	47	座談会②：少人数授業	
	65	座談会③：中国語教育	
オンライン授業の成績評価方法			
	95	語学授業でオンライン試験	田邊 鉄
	101	初習中国語のオンライン授業における成績評価について ——大学1 年生向け授業のパフォーマンス評価実践報告——	吉川 龍生
オンライン授業 Tips 集			
	109	オンデマンド教材の作成	千田 大介
	115	課題・オンライン試験	千田 大介
オンライン学会事例報告			
	124	日本印度学仏教学会 第71回学術大会 参加者の立場から	師 茂樹
	131	中国語教育学会の事例報告	水野 善寛
<hr/> 特集2 デジタル時代の中国学リファレンス③ 137 <hr/>			
1. 現代中国語をしらべる			
	138	正しい読み方をしらべる	
	140	ピンインの正しい表記法をしらべる	
2. 文献をしらべる			
	142	蔵書印をしらべる	

3. 歴史をしらべる

145 人口をしらべる

148 移民をしらべる

151 日記をしらべる

153 解説：法制史

4. 音韻をしらべる

155 解説：音韻学～中古音と上古音

171 音注の意味

173 中古音をしらべる

176 上古音をしらべる

178 方言音をしらべる

5. 映画をしらべる

180 中国映画を見る

182 映画のストーリー・俳優・製作スタッフをしらべる

185 映画の評価・興行成績をしらべる

187 解説：中国映画史を学ぶ

レビュー & リソース紹介 189

MS Office 2019・365 / Amazon の音声合成 "Polly" / オンライン漢籍 /
中国国家図書館の古典文献データベース / 慶大・早大図書館の新 OPAC

小島 浩之 / 田邊 鉄 / 千田 大介

208 執筆者紹介

210 編集後記

- 本誌記事中のソフトウェア名・プログラム名・会社名などは一般に各社の商標または登録商標です。本文中では、™・®等のマークは明記しておりません。
- 本誌記事の記述に基づいて行われた作業の結果生じたあらゆる損害について、編著者・翻訳者および出版社は一切の責任を負いません。
- 本誌記事の内容に関するお問い合わせには応じかねます。

N-gram を用いた文献比較

師茂樹氏作 ngsm.pl を用いた発見の技法

石井 公成（いしい こうせい）

回 はじめに

近藤康弘氏の技術支援を得て、N-gram 分析を平安文学研究に適用し、次々にすぐれた成果をあげられた近藤みゆき氏^[1]が、昨年亡くなられた。本稿では、近藤みゆき氏と近藤康弘氏に感謝し、仏教学の分野において N-gram 分析による発見をするための実践的なコツを紹介したい。

これまで、筆者は、処理したい文献のテキストファイルを UTF-8 に改め、頁行表示や句読点を削除し、師茂樹氏作成の Perl 用スクリプトである morogram.pl を用いて N-gram 処理をおこない、その結果ファイルを益山健氏作成の並べ換えツールである sortl で辞書順に並べ換え、さらに近藤康弘氏作成の ngmerge.pl によって複数文献の結果ファイルを統合して対照表の形にしてきた。慣れればさほど面倒ではなく、またバッチファイルにしてしまえば簡単なのだが、万事スマホですませ、パソコンはあまり利用しない者も少なくない最近の大学生・大学院生には、筆者が NGSM (N-gram Based System for Multiple Documents) と名づけたこれらの一連の作業は、かなり荷が重かったようだ。とりわけ、コマンドプロンプト画面を表示し、変数を指定して Perl や sortl を走らせるのは敷居が高いらしい。そもそも、ActivePerl をインストールし、作業用ディレクトリで動くよう PATH を設定するという段階でつまずいてしまう人が多いようだ。これまで 10 年以上、内外の大学で NGSM を紹介・宣伝してきたが、使えるようになったのは数人し

かいない。

ところが、筆者の要望に応え、師氏が簡単で高速なスクリプト、ngsm.pl を作成してくれた^[2]。つまり、morogram、sortl、ngmerge でおこなっていた作業が一度に実行できるツールだ。しかも、きわめて速い。このおかげで、昨年、大学院の演習で説明した際は、8 人の参加者のうち、70 代後半の社会人学生などを除く 5 人が 1 時間で使えるようになった。さらに、導入法のマニュアルを作成したところ、演習に参加していない 2 人の院生が、それを読んだだけで使えるようになった。

残る問題は、膨大な結果ファイルからいかにして有益な情報を取り出し、学問的に意義のある発見をするかだ。そこで、本稿では、パソコンを苦手としている Windows ユーザーの仏教研究者を想定し、N-gram 処理のやり方と発見のためのコツをまとめておきたい。

回 準備と作業の手順

1. ActivePerl のインストール

プログラミング言語である Perl をインストールする。Windows ユーザーは、無料で公開されている ActivePerl を使うのが通例であるため、そのサイトからダウンロードする。インストールする際、[Add perl to PATH environment variable] のチェックボックスにチェックを入れておくと、自動的に PATH が設定される。

2. エディターをインストール

エディターをインストールし、正規表現の基本を学んでおく。よく使う表現の一覧表を印刷し、横に置いておくと便利だ。エディターは何でもかまわないので、新たに購入しても良いという人には、高速であって巨大ファイルの処理ができる、多国語処理に強い EmEditor をお勧めする。

3. 電子テキストのダウンロードと処理

SAT（大正大蔵経テキストデータベース）、CBETA（中華電子仏典協会）その他から、処理しようとする電子テキストをダウンロードする。CBETAは、台湾作成だけに基本は繁体字であって、「説」は「說」(JIS無し)、「衆」は「眾」(JIS無し)、「徳」は「德」を用いているが、「真・為」などは新字を用いており、一方、SATは旧字主義でありながら新字の「徳」を使うなどしているため、SATのファイルとCBETAのファイルを比較する際は、文字の統一をしておく必要がある。区点・読点については、誤っていることが多く、またテキストによって区切り方が不統一であるため、すべて削除しておく。この処理に際して、正規表現が必要となる。句読点入りの比較もしてみたい場合は、削除せずに別にやってみれば良い。

4. ファイル名と UTF-8 変換

電子テキストは、玄奘訳『般若心経 (Prajñā pāramitā-hṛdaya)』であれば h.txt、鳩摩羅什訳『金剛般若経 (Vajracchedikā-prajñāpāramitā-sūtra)』であれば k.txt などといったローマ字の簡単なファイル名にし、UTF-8 (BOM 無し) に変換しておく。UTF-8 に変換する方法はいろいろあるが、フリーソフトの KanjiTranslator などを使うと、変換できなかった場合は表示されるため、失敗が少なくて済む。

5. 作業用ディレクトリの設定

どのドライブでも良いが、ng など簡単な名

前のディレクトリを作成し、ここに PATH を通し、ngsm.pl と処理する電子テキストを置いておく。

6. コマンドプロンプトでの処理

Windows だと画面左下、虫メガネ・アイコンの「ここに入力して検索」欄に cmd と入力し、コマンドプロンプト画面に移る。ng ディレクトリを C ドライブに作った場合「cd ¥ng」(cd の後に半角スペース。¥は日本語 Windows 以外ではり) と打って ng ディレクトリに移動する。

7. ngsm.pl による処理 (1)

C:¥ng ディレクトリで h.txt と v.txt を比較する場合、

```
C:¥ng>perl ngsm.pl -g4,7 h.txt  
k.txt > hk.txt
```

などと入力して実行する (間隔は半角スペース)。

```
Microsoft Windows [Version 10.0.18363.959]  
(c) 2019 Microsoft Corporation. All rights reserved.  
C:\Users\kose>cd ¥ng  
C:\¥ng>perl ngsm.pl -g4,7 h.txt v.txt > hv.txt  
h.txt  
v.txt  
C:\¥ng>
```

これは、Perl で ngsm.pl を実行し、h.txt と k.txt のそれぞれを 4 字から 7 字までの単位で切り出して対照表の形にし、hk.txt という名の結果ファイルとして出力せよ、という指定を意味する。その実行結果は次のようになる。

説般若波	(h:1 k:1)
説般若波羅	(h:1 k:1)
説般若波羅蜜	(h:1 k:1)
説般若波羅蜜則	(h:0 k:1)
説般若波羅蜜多	(h:1 k:0)

これは、「説般若波」という表現が『般若心経』

に 1 回、『金剛般若經』に 1 回出てくることを示す。「説般若波羅蜜則」であれば、「般若心經」には 0 回、『金剛般若經』には 1 回、「説般若波羅蜜多」は『般若心經』に 1 回、『金剛般若經』には 0 回ということになる。最後の例については、梵語（サンスクリット語）の使用が普及していた時代のテキストに基づいた玄奘訳では、*prajñāpāramitā* を「般若波羅蜜多」と音写したのに対し、早い時期の西北インドないし西域の言語によるテキストを用いた羅什訳では、*paññāpāramit* のような形の発音を「般若波羅蜜」と音写したこと示している。

8. 対照表を整形

発見をするには、対照表が見やすい形になっていることが重要であるため、テキスト名を

説般若波	(心:1 金:1)
説般若波羅	(心:1 金:1)

などのように整形する。

9. *ngsm.pl* による処理 (2)

上記は、基本となる 2 つの文献を 4 字から 7 字の単位で切り出して比較する例だが、実際には、

```
perl ngsm.pl -g4,7 a.txt b.txt  
c.txt ~ f.txt > a-f.txt
```

などのように、多くの文献を比較することができるし、一つの文献を章ごとに 8 つに分けてそれらを比較するといったことも可能だ。

また、切り出す単位は、

```
perl ngsm.pl -g5,5 a.txt b.txt  
c.txt > abc.txt
```

といった指定にすれば、以下のように 5 字固定の形の対照表となり、ファイルの大きさは

数分の 1 となる。

上下虚空可 (a:0 b:1 c:0)

上不也世 (a:0 b:1 c:2)

上乘者説若 (a:0 b:1 c:0)

上呪是無等 (a:1 b:0 c:3)

10. *Ngsm.pl* による処理のコツ

コマンドプロンプト画面では、日本語入力に切り替えれば漢字も使える。このため、よく使う指定は、単語登録しておけば入力の手間が省ける。たとえば、

```
perl ngsm.pl -g4,7
```

を、7 の後の半角スペースまで含めて「もろ」で登録し、

```
perl ngsm.pl -g5,5
```

を「もろご」と登録しておくなどだ。

回 発見をもたらす検索法

このように対照表を作成したら、そのリストを見ていくことになる。ただ、結果ファイルは元のテキストの何十倍もの巨大なものとなるため、大事な箇所のみを検索して見ていく必要がある。基本となるのは、複数のテキストに共通する表現の検索だ。筆者は N-gram 分析によって、三経義疏の共通度、『大乗起信論』の訳語の特色、真諦三蔵の訳書の特徴その他について発見を重ねてきた^[3]が、ここでは最近の例を紹介し、検索のコツを紹介してゆく。

とりあげるのは、中国北地で作成され、馬鳴菩薩造・真諦三蔵訳とされて流行し、東アジア仏教に絶大な影響を与えた『大乗起信論』（以下、『起信論』）に関わる文献だ。その『起信論』に対する特異な注釈である『釈摩訶衍論』は、龍樹菩薩造・伐提摩多訳と称しているものの、奈良時代から偽作論議があった。しかし、空海が密教と顯教を区

別する重要な箇所で論拠して用いたうえ、日本の本覚思想の源泉の一つともなったため、きわめて重要だ。

本書については、筆者が内容と語法が新羅の華厳文献と共に通していることを指摘し、新羅成立であることを論証した。この『釈摩訶衍論』と似ているのが、『起信論』と同様に馬鳴菩薩造・真諦三蔵訳と称する『大宗地玄文本論』だ。となれば、当然のことながら、『大宗地文本論』（以下、『玄論』）と『釈摩訶衍論』（以下、『釈論』）との比較をすることになる。すると、以下のようになる。

一一現前	(玄:1 釈:0)
一一現前漸	(玄:1 釈:0)
一一現前漸漸	(玄:1 釈:0)
一一現前漸漸轉	(玄:1 釈:0)
一一白白	(玄:1 釈:2)
一一白白是	(玄:1 釈:2)
一一白白是故	(玄:1 釈:2)
一一白白是故名	(玄:0 釈:2)
一一白白是故說	(玄:1 釈:0)
.....	

ただ、結果ファイルは 12.5MB もあるため、エディタで読み込んだら、

玄:[1-9].*釈:[1-9]

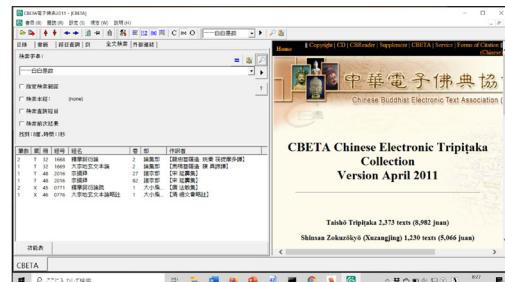
という正規表現の指定で『玄論』と『釈論』に共通して出てくる例だけを検索してゆく。すると、

一一白白	(玄:1 釈:2)
一一白白是	(玄:1 釈:2)
一一白白是故	(玄:1 釈:2)

といった用例がヒットする。この場合、「一一白白是故」といった見慣れない表現が 6 字も一致しているため、これを SAT や CBETA などで検索する。SAT は大正大藏經 85 卷すべてが含まれ、CBETA は、日本撰述部を除く大正大藏經と大日本続藏經その他の叢書が電子化されており、多少

テキストが異なっている場合もあるため、重要な例については双方で検索してみる必要がある。

まず、上の例を CBETA で検索すると、次のような結果となる。



一見して明らかなように、早い例は、『玄論』と『釈論』しかない。唐代の例は、法敏による『釈摩訶衍論』の注釈のみであり、あとは、宋代の『宗鏡錄』100巻と清朝末期に書かれた『玄論』注釈だけだ。となれば、『玄論』の表現を新羅の『釈論』が用いたか、新羅の『釈論』の表現を『玄論』が用いたかのいずれかということになる。なお、『宗鏡錄』の作者である延寿は、高麗国王に尊崇されて多くの留学僧たちを託されるなど高麗との交流が盛んであって、そうした結果、『宗鏡錄』は元暦や義湘など新羅僧の文章も盛んに引用していることで知られる。

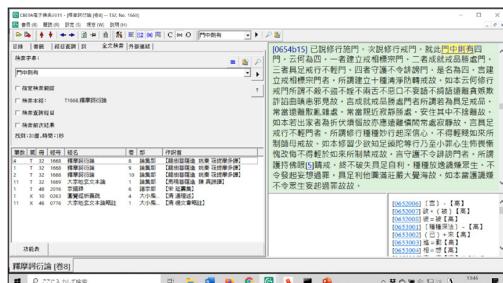
こうしたことから考慮しつつ、さらに『玄論』と『釈論』の共通表現を検索していくと、次のように、『玄論』と『釈論』のみに共通しており、他の早い例がない場合が多いことが知られる。

三就初門中則有	(玄:1 釈:1) *のみ。
不信心誹謗	(玄:1 釈:1) *のみ
不相捨離俱行	(玄:1 釈:3) *のみ
中作如是説復次	(玄:6 釈:2) *のみ
中則有三種云何	(玄:3 釈:1) *のみ
.....	

「*のみ」というのは、筆者が結果ファイルに書き込んだコメントであり、後でこの部分だけ検索できるようにしたものだ。重要であれば、「*のみ」に加えて「重要」と書けば良い。種類によって分

けるのであれば、最初の「三就初門中則有（三に、初門に就く中、則ち～有り）」というのは、科文（仏典の章段分け）の表現であるため、その情報も加えたいなら「*のみ、重要、科文」などと記しておけば、後で科文関連の用例だけチェックできる。

『玄論』と『釈論』のみが一致する例はきわめて多く、それも用語、語法などすべての面で良く似ている。上の例はごく一部を示したのみだが、気になるのは、「～門中則有～」という言い回しにおける「則」だ。「この～門にこそ～が有る」「この～門には意外にも～が有る」という点を強調したいなら、「則有」でなく「即有」となるはずだからだ。そこで、CBETA でまず「門中則有」を検索すると、以下のようなになる。



すると、「門中則有」は、『釈論』と『玄論』、そして、またしても『宗鏡錄』に見えるのが早い例であって、数が少ない。『宗鏡錄』のこの箇所は『釈論』の引用部分だ。一方、「門中即有」は、検索すると、数は多くはないものの、隋や唐の中国仏教文献も用いていることが知られる。「即」と「則」を混同して使うのは、新羅や日本の漢文の特徴だ。

これらのことから、『玄論』と『釈論』とはきわめて似ていて変格漢文で書かれており、同じ人物の作か、どちらかが先行する文献を徹底して読み込み、その文体や用語でしか書けなくなったことが推測される。

『釈論』は、序が「一山界中，在兩日月、一天下中，在兩皇帝」(592a) と述べ、「有」とすべきところを「在」としており、本文でも「何故衆生先有成仏、後有成仏、今有成仏」(大正 32:637b) とあるように、「有先～、有後～、有今」とすべき部分の語順を誤っていることが示すように、中国人が書いたものと

は思われない以上、極似する『玄論』も同様ということになる。

そこで、上で見たように「則」の用法がおかしかったことを手がかりとして、「則」の用例を検索して読んでいくと、「則白仏言」(669a) という特異な表現が見つかる。「即白仏言」であれば多くの仏教文献に見えるが、「則～」に作っているのは『玄論』だけだ。こうした点に気づいたら、後は同様の変格語法を探せばよく、見ていくと、「一切皆悉隨時不移」(670c) とあって、「不隨時移」と書くべきところが誤った語順になっている。

否定表現におけるこうした誤りは新羅や古代日本の文献にはしばしば見られる。検索してみると、大正藏では「不隨時～」の用例は多いものの、「隨時不～」とするのは『玄論』のこの箇所のみだ。こうした発見を手がかりにして筆者が精査した結果、『玄論』は『釈論』が書かれた後に、同じ人物かその影響を強く受けた人物によって書かれたことが分かり、新羅成立の可能性が高いことが明らかになった。

回 3つ以上の文献を比較する

3つ以上の文献の比較、あるいは、1つの文献を複数に分割したうえでの比較の場合、基本となるやり方は変わらない。ただ、結果ファイルを検索する際は、やや工夫が必要となる。ここでは、菩薩戒の代表的な經典である『梵網經』に関する3部の文献をとりあげてみたい。一つは、代表的な注釈である唐の法藏の『梵網經菩薩戒本疏』、新羅の元曉の『梵網經戒本私記』そして『梵網經』中の個別の問題を論じた元曉の『菩薩戒本持犯要記』だ。『起信論』の注釈である法藏の『起信論義記』が、元曉の『起信論疏(海東疏)』の影響を強く受けていることは良く知られているが、『梵網經』解釈の面での影響関係については、近年研究が始められたところであって、まだ不明な点が多いためだ。

この3部の文献を ngsm.pl で処理し、法藏『梵網經菩薩戒本疏』を「法」、元曉の『梵網經菩薩戒本私記』を「私」、『菩薩戒本持犯要記』を「要」

として表記し、

法 : [1-9].* 私 : [1-9].* 要 : [1-9]

という指定で、3つの文献に共通する箇所を探すと、驚くべきことに、

如是菩薩 (法:6 私:1 要:1)

という1箇所しかヒットしない。そこで、「法」と「私」、「法」と「要」、「私」と「要」の一致箇所を検索してみた。すると、不思議なことに、「私」と「要」は同じ著者の作でありながら、一致するのは『梵網經』の語ばかりであって、解釈面で一致する語句はほとんどない。これに対し、「法」と「要」、「法」と「私」は以下に示すように一致箇所が多く、特に「法」と「要」の一致度の高さが目立つ。

不得中間	(法:1 私:0 要:1)
不得中間如	(法:1 私:0 要:1)
不得中間如是	(法:1 私:0 要:1)
不得中間如是求	(法:1 私:0 要:1)
.....	
如是求戒	(法:1 私:0 要:1)
如是求戒永	(法:1 私:0 要:1)
如是求戒永不	(法:1 私:0 要:1)
如是求戒永不是	(法:1 私:0 要:1)

「不得中間如是求」をCBETAで検索すると、右のような結果となる。すなわち、この2部にしか登場しないのだ。しかも、それぞれの箇所を比較すると、その直前の「即緣非戒離緣無戒。除即除離不得中間」という句まで一致している。こうした一致は、法藏の『大乘起信論義記』と元暉の『起信論疏』の間でも見られたものだ。

大正蔵では『梵網經菩薩戒本疏』と『菩薩戒本持犯要記』にしか登場しないのは、「如是求戒永不是」の場合も同様であり、こうした例は他にも多い。こうなると、法藏は『起信論』解釈だけでなく、菩薩戒解釈の面でも元暉の影響を強く受け



ていたことが分かる。

一方、『菩薩戒本私記』については、「暁公造」とあるため元暉の作とみなされてきたものの、『菩薩戒本持犯要記』との違いの大きさは気になるところだ。実際、元暉を尊崇する高麗の義天が編纂した『新編諸宗教藏総録（義天録）』では、元暉の著作を44部も収録しておりながら、『菩薩戒本私記』は収録されておらず、日本でも永超の『東域伝灯目録』には収録されていない。これ以外にも元暉の他の著作との違いが目立つため、元暉の著作であることを疑う説もある^[4]。こうなると、『菩薩戒本私記』が元暉の他の著作と用語や語法がどれだけ一致しているか調べる必要が出てよう。また、『梵網經菩薩戒本私記』は、法藏の『梵網經菩薩戒本疏』と一致する箇所がある程度あるのだから、この二つの文献の成立時期、影響関係を調査する必要も出てくる。このように、ngsm.plが生み出す対照表は、研究の手がかりを与えてくれるのだ。

■ ngsm.pl を活用するために

これまで見てきたように、ngsm.plはきわめて強力なツールであり、その能力は高い。ただ、これを活用するには、様々な知識やコツが必要となる^[5]。上の場合でも、『梵網經菩薩戒本私記』の元暉撰を疑う論文を読んでいなければ、さらに調べようとはしないだろう。また法藏は元暉の『起信論』注釈を大幅に取り入れていたものの、華嚴宗の法藏はあくまでも『華嚴經』を最上として『起信論』をその下に位置づけており、『起信論』を最高の論書とする元暉とは立場がまったく異なっていたことを知っていれば、単に一致箇所が多い

という指摘ですることはせず、菩薩戒解釈の場合も法藏と元暉の立場の違いを検討しようするに違いない。ngsm.pl の結果ファイルをどのように活用するかは、それぞれの人の学力と問題意識次第なのだ。

『玄論』の変格語法について検索する場合も、CBETA で「唐・遁倫『瑜伽論記』」と用例が一致すると表示された場合、遁倫は「大唐の新羅国」の学僧であることを知っているかいないかで、受け取り方は違ってくる。筆者が大学院の授業で聖徳太子作とされる三經義疏をとりあげ、その変格語法の諸例について説明していた際、「先生、漢訳經典に同じ表現があります」と言われて青くなったりことがあったが、その漢訳經典とは、北宋の施護の訳だった。施護訳は梵文をそのまま漢字に置き換えていっただけで、通常の漢文の語順にならない箇所が多いことで有名だ。そのため、この時はたまたま日本語の語順に近い形になっていたのだ。施護訳のこうした特徴を知らず、「漢訳經典に見えるなら、そうした用法があるんだろう」としていたら、変格語法の用例を一つ見逃すことになっていたろう。

また、結果ファイルを検索していく、気になった用例を CBETA や SAT で検索するにしても、漢訳經典、中国成立の擬經（偽經）、中国や新羅や日本の仏教文献をある程度読んでいないと、特色ある表現は気づかないだろう。すべての一貫する語句をいちいち SAT や CBETA で検索していくのでは、効率が悪い。

正規表現に関する知識も重要となる。たとえば 4 つの文献を比較し、A と C と D の文献に出てきて B の文献にだけ出てこない例、といった検索をするには、正規表現に慣れておく必要があるからだ。また、場合によっては、対照表の順序を、

(A :0 B:1 C:3 D:0)

でなく、

(B:1 A :0 C:3 D:0)

といった順序にする方が見やすかったり、検索しやすかったりすることもあるだろう。そうした場合は、目的に合わせていくつでも対照表を作ればよい。幸いなことに ngsm.pl は非常に高速なので、時間はかかるない。

結果ファイルは Excel に読み込んで処理することもできるが、これについては別稿でとりあげたい。なお、今回は漢字文献をとりあげたが、どの言語の文献にも適用できる。とりわけ、チベット語文献は、単語ごとに区切れており、サンスクリット語やペーリ語のように連声（リエゾン）しないため、検索が容易だ。

注

- [1] 近藤みゆき「n グラム統計処理を用いた文字列分析による日本古典文学の研究——『古今和歌集』の『ことば』の型と性差」（『千葉大学人文研究』29、2000 年）、近藤泰弘・近藤みゆき「N-gram の手法による言語テキストの分析方法—現代語対話表現の自動抽出に及ぶ」（『漢字文献情報処理研究』2、2001）ほか。こうした経緯は、石井公成「N-gram 分析の誕生と広がり」（『漢情研』16、2015 年）。
- [2] 師茂樹氏の以下のサイトで最新版が公開されている。
<https://github.com/moroshigeki/ngsm>
- [3] 石井公成「『大乗起信論』の用語と語法の傾向 :NGSM による比較分析」（『印度学仏教学研究』52(1), 2003 年）、同「三經義疏の語法」（『印度学仏教学研究』57(1), 2008 年）、同「三經義疏の共通表現と変則語法（上）」（『駒澤大学佛教学部論集』41、2010 年）、「真諦闇与文献の用語と語法 : NGSM による比較分析」（船山徹編『真諦三藏研究論集』、京都大學人文科學研究所、2012 年）ほか。
- [4] 木村宣彰「菩薩戒本持犯要記について」（『印度学仏教学研究』28(2)、1980 年）
- [5] 石井公成「仏教学における N-Gram の活用」（『明日の仏教学』8、2002 年）



新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

新型コロナウィルスの流行は、大学教育や研究に大きな影響を及ぼした。空前の規模で実施されたオンライン授業では、教員・学生のICT環境やスキルの不足、図書館閉館にともなう資料アクセスの困難、試験に代わる評価方法の模索といったさまざまな問題が露呈したし、政府や社会の情報化意識の落伍ぶり、情報インフラ整備の遅れも目を覆うばかりであった。我々漢字文献情報処理研究会は20年以上前から、我が国的情報化の遅れに警鐘を鳴らしてきたが、それがいさか予想外の形で、いきなり目の前に突きつけられた形である。

本特集では、新型コロナウィルス流行の長期化が予測され、ニューノーマルが言われる状況にあって、2020年上半期のオンライン授業期間の状況を検討するとともに、これからの中中国学の研究・教育はいかにあるべきか、座談会・オンライン授業の評価方法とTips紹介、学会オンライン開催報告などを通じて、多角的に検討したい。

CONTENTS

座談会

座談会①：総合	12
座談会②：少人数授業	47
座談会③：中国語教育	65

オンライン授業の成績評価方法

語学授業でオンライン試験	田邊 鉄 … 95
初習中国語のオンライン授業における成績評価について ——大学1年生向け授業のパフォーマンス評価実践報告——	吉川 龍生 … 101

オンライン授業 Tips 集

オンデマンド教材の作成	千田 大介 … 109
課題・オンライン試験	千田 大介 … 115

オンライン学会事例報告

日本印度学仏教学会 第71回学術大会	師 茂樹 … 124
中国語教育学会の事例報告	水野 善寛 … 131

座談会

座談会①：総合

◎ 概要

- 日時：2020年8月20日
- 参加者：
 - A：私立大学経済学部専任教員。中国文学専攻。
 - B：私立大学文学部専任教員。東洋哲学専攻。
 - C：国立大学経済学部専任教員。中国史学専攻。
 - D：国立大学情報センター専任教員。メディア専攻。
 - E：国立大学社会科学系学部専任教員。中国史学専攻。

漢情研幹事有志によって行われた総合座談会であり、個別の授業の内容やタイプにとらわれず、広く新型コロナウィルス流行に伴うオンライン授業の実施状況を点検し、またそのことが浮き彫りにした我が国の大学教育や研究環境および関連政策の問題点、中国学・東洋学の情報化の課題などについて議論した。実際には他の2つの座談会の後に行われており、また参加者が重複しているため、話題に一部重なる部分があるが、ご容赦頂きたい。

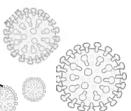
* 春学期のオンライン授業を振り返って

A: それでは始めたいと思います。はじめに、春学期の遠隔授業対応全般の問題点を、特に中国学・東洋学関係のところでどのような問題があったのか、というようなところから話しあっていきたいと思います。

個人的な印象ですが、首都圏の有力私大では、文学系の学部が全般として意志の決定が遅かったり、方針がちょっとずれていたりといふことが目立ったように思えます。ある大学の文学部では、方針の決定や伝達が授業開始の1週間前を切っていたと聞いていますし、完璧を期するあまり、教員へのアナウンスが

遅くなったり混乱をきたした例もあったようです。全学としてオンデマンド中心の方針が決まっていながら、文学部がリアルタイムの授業にこだわった大学もあったようです。オンデマンドというのは、学生の通信環境にも配慮した、比較的妥当な判断だと思われますが、そうした点が、特に人文系にはうまく共有されなかったかな、というように感じました。みなさんの周辺では如何でしょうか？

B: オンデマンドかリアルタイムかという問題については、文学部に限るのかわからないですけども、従来の対面授業をなんとかオンラインで再現したいという欲求を持つ先生が一定数いて、かつ世間ではちょうどZoomが注目されていたのもあって、Zoomでやるのがオ



- ンライン授業みたいなステレオタイプが形成されてしまった、というような雰囲気があったかなという気はしますね。
- A: 確かに。
- B: 全国的に見たらどうなのは分らないですが、私の知っている範囲では、例えば教育学系にはリアルタイムの授業にこだわっている人が多かったような印象もあります。観測範囲が狭いので、あくまで印象ですが。
- A: 私の大学の場合は、理工学部主導でオンデマンドの方針が決まりましたが、むしろ理工学部では実験が不可欠なので、是が非でも対面でやりたい、あるいは学生の環境を無視してリアルタイムでやりたい、という教員が出てくることを警戒して、早めに手を打ったという側面もあったようです。
- B: 私の大学でも先手を打って、オンデマンドでいいんだよ、というように誘導していました。それがよかったのかどうかは、今後検証しないといけませんが。4～5月の段階だと、教員間で情報の格差がものすごく大きくて、何をやっていいか分からないという人がいる一方で、ネットで情報を集めている人もいました。自分のやりたいのはこれ、楽そうなのはこれ、学生のことを考えたらこれ、といった具合に選択が出来る人と、まったくできない人に大きく分かれていたような気がします。
- A: それと、中途半端な人も目立ちましたね。そういう人ほど、とりあえずZoomだ、私にZoomができるのだから全員できる、使えるようになってこれで授業をやれ、というように突っ走っていたように感じました。
- B: そういうインフルエンサー的な人はいましたね。大きな大学などでは、組織的にオンライン授業について検討するチームがあって、そこで全学の方針を決めたりしていたと思いますが、大学によっては、教員に丸投げというところもあったようです。そういうところでは、同じ大学なのに、文字情報だけの教材と課題ばかり、という学生もいれば、Zoomの授業ばかりという学生もいる、みたいなこと

が起きたようですね。大学や学部単位の方針がしっかりあったかどうかに、オンライン授業の質が大きく依存していたのかなという気がします。

A: きちんと情報が分かっている人がある程度影響力を発揮しうる立場にいたかどうか、という偶然性に左右される部分も大きかったように思えますね。

B: そうですね、本当にそれが大きかったと思います。逆に、対面こそが授業であるというような意見が、コロナ禍の中で影響力を持ってしまった大学は、大変だったかもしれません。

A: これからまだ、秋が危ないですね。

B: そうですね。後期に対面授業を決めたマンモス私大が今後どうなるか、気になっています。

A: 悲いですよね、250人以下の授業は対面でやるということでしたね。

B: トップダウンで決定したところも多いですね。大学のトップダウン経営を推し進めてきた文部科学省の大学改革の負の側面と言えるかもしれません。失敗したときが怖いですね。

A: 悲いですね。情報関係では、今回の春学期は緊急事態対応で、その中でいかに学生を切り捨てるかというのが、実は一番の課題だったと思うのですけれども、意外とそこを意識していないところが多かったという印象があります。

B: そうでしたか？ 「学びを止めない」「学びの継続」というのが、スローガンみたいになっていたと思いますが。

A: 大学レベルではちゃんとしていても、学科やセクションのレベルでは怪しかったように思えます。Zoom授業ということでとにかく突っ走れ、出席を厳密に取れ、じゃあ繋がらない学生はどうするかというと、個別に適応に対応してね、みたいになったという話を複数、聞いています。これは、Webのユニバーサルデザインの特集を『漢情研』の17号でやりましたけれど、ああいった考え方への理解不足と通ずるところがあるのかな、と。

B: 確かにそうですね。「ラーメン屋は座席数を減らすなどの経営努力をしてお客様を入れているのに、大学はなぜそういう努力をしないんだ」という批判がありました。学生にもそんなことをちらっと言わされたことがあります、ラーメン屋さんはお客様の入店を制限できるけど、大学はとにかく学生全員に授業を受けさせなければならないので、そういう対応はできないわけです。しかし、ラーメン屋さんと大学が簡単に比較されてしまうということは、そういう前提が学生にも世間にも共有されていないんだな、と今回思いましたね。コロナ禍以前から、たとえば障害がある学生に対して学びの保障をしましょう、というときに、なるべくユニバーサルな方向性で考えよう、という発想があったわけですが、今回も本当はそういった考え方が必要だったはずなんですよね。

逆に腹立たしく思ったのは、オンライン授業をポジティブに評価しようとするあまり、「オンライン授業は、これまできちんと学べなかっ引きこもりの学生などに対して、きちんと学びを提供したんだから良かった」みたいなことを言う人がいたことです。確かにオンライン授業にはそういった面もあると思いますが、そういうのであれば、コロナ禍以前から、そういう学生に対してオンライン授業を提供してこなかったのはなぜなんだ、と言いたくなります。オンライン授業で教育の質が下がった、という批判に対して、いやそれで満足した学生もいるんだ、などと返るのは、ちょっとずるいなと思いましたね。ただ、怪我の功名的ではありますが、オンライン授業は教育のユニバーサル化について考える大きな契機にはなったと思いますね。重要なポイントだと思います。

A: ちゃんと考えてもらっているのかな。これが契機になって皆さんを考えてくれれば良いのですが。なんとなく、オンライン授業はだいたいうまくいった、一人二人、全然出てこない学生がいてフォローはしていないけれど、

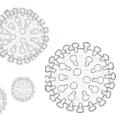
それくらいは仕方ないよね、と考えている可能性がありそうです。

B: そういう納得の仕方をしている人はいたと思いますね。つまり、オンライン授業で一人二人取りこぼしがあっても、対面授業だって毎回何人かは取りこぼしているのだから、気にしなくていいのではないか、みたいな感じで難に考えていた教員もいるんだろうなとは思います。

A: 確かに、大学に入学したあとで進路に悩んで来るのをやめてしまうというような学生はいるので、そうしたことが原因なのかどうかを見る必要がありました。その上で、情報通信環境の問題がないのにオンライン授業に来ない学生は仕方ありませんが、問題があつて参加できない学生には、なんとか手立てをしてあげないと、というのがありましたね。

B: 通信環境のサポートについては、大学にもよるのでしょうか、大学のリソースをかなり注ぎ込んだところもあるでしょうし、まったくほったらかしにしていたところも恐らくあつたのではないかと思います。

E: その話は別の座談会でも話題になりました。とりこぼしをするかしないかは、学校や学部、学科など組織としてのシステムがどうなっているのかということと、かなり密接にかかわっていると思うんですよ。うちの大学の例を出して申し訳ないのですが、うちは学科がないんですよ。学部の下にはなにもないんですよ。そうすると、国立大学なので人がものすごく少ないのでけれど、1学年240人がいて、3年生でゼミに入るまで、学部以外の帰属先がないのです。そして、それをなにがカバーしてきたかというと、語学のクラスだったり、基礎ゼミみたいなものだったり。それから、もっと大きい背景としては、サークルや部活の中でいろんなつながりができるので、そこで自助努力的に解決していたという状況がありました。解決できなかった一部が、保健センターに来たり、学生センターにきたりして、カウンセリングを受けるという



ような状況でした。そうやって、ある程度うまく回っていたのです。うちの場合はそのように機能していました。

しかし、今回コロナになって、ある意味インフォーマルな自助努力が効かなくなってしまって、おそらくまだ完全に把握されていないんだけれども、漂流しかかっている人が結構いるのではないかと思います。そういう状況をどうやってコロナ後の時代に、学生をつなぐ場をどうやってセッティングできるのかが別の座談会の方でも話題になりました。

B: でも「場」は難しいですよね。

E: 「場」は語弊がありますね。「場」というか装置、仕組みというか、オンライン上の「場」も含めてですけれども。

A: そうですね。私の大学で、他学部の知り合いのクラスでは、教員が何も声を掛けていないのに、自然にLINEグループができて、Webお茶会を何度も開いていたそうです。

B: それを出来る学生と出来ない学生が、本当に分かれちゃいましたよね。

A: だから、ある程度、教員側からそれを働き掛ける必要があったのかな、というのはあります。大学によっては、学科などの小さいセクションごとに、TAや担当教員が個人個人とZoomをつないで面談をしたところもあり、学生の満足度がかなり高かったみたいです。語学を担当している立場からすると、やはり教員が主催してクラスの全員参加が難しくても、12～13人で茶話会をネットで実施するようなことは、してあげた方が良かったのかなと反省しました。

E: 先ほどの話題にちょっと戻るんですけども、この数か月の授業をやって思ったのは、結局オンラインで授業しても、できる学生はものすごくできていて、対面授業でもあまりできてなかっただろうなという生徒のできなさが減が非常に目立ってしまうということです。確かに割合でいうと非常に出席率がよくなつて、30人くらいの授業でも欠席するのはだいたい毎回1人か2人という感じだったので、

確かに見かけ上の出席率が上がって、教育効果が上がったのかなという錯覚を教員は持ってしまいますけれど、できない子が非常にできていない、落伍している度合いが、こういう状況の中で目立ってしまうようになっているのではないかと思うのですよね。それをどうフォローできるのだろうということを、先ほど話をうかがって思いました。まあ、自分の中に答えがあるわけではないんですけども、そんなことを感じました。

A: 確かにそうですよね。普段の対面授業では、2・3回休んでいたら、お前、どうしたんだよ、とコミュニケーションを取って、それでなんとかモチベーションを引き出して、というようにしたりしますが、それが出来なくなったらというのは大きいですよね。

E: そうですよね。

B: 対面授業をしてほしいという学生からの声をいくつか聞いたのですが——一般化できるかどうかはわからないのですが——周りに人がいなくとも勉強できる学生と、周りに誰かがないと勉強ができない学生で、意見が分かれるように思います。例えば、ミニッツペーパーなどを毎回書くような場面で、周りに人がいないと書けない学生がいる。それは別に、周りの人が書いてのを写させてもらう、ということではなく、周りの学生が書き始めているから自分も書こう、とか、周りの人が何行書いているから自分もあれくらい書こう、とかといったことを、ずっとレーダーのように周りをサーチしながら判断している学生がいる。あるいは、テストが終わったあとに、自分がどれくらいできたのかを周りの学生に確認しないと安心できない学生がいる。言わば、自分の判断や評価を外部委託する学生が、少なからずいるのではないか、ということです。そういう学生は、オンラインになったときに、仮にZoomなどで交流できたとしても、かなりつらかったようです。

私は最初、なぜそんなに学生が対面授業を求めているのか、よくわからなかったんです。

もちろん、友だちが欲しい、といった新入生の気持ちはよくわかります。でも、コロナ禍以前に対面授業を学生が喜んで受けているか、と考えると、大教室授業の学生は寝ていたりスマホをやってたりしたわけです。ですから最初は、「対面授業」で求められているのは授業ではなくて、サークルをはじめとする学生同士の交流なんだろうな、と思っていたのですが、いろいろ話を聞いてみると、本当に授業が対面じゃないと辛い、オンラインでは辛い、という学生がやはり一定数いたのです。

こういった問題をどう解決したらよいのか、私にはまだ答えがありません。究極的には、どんな状況であっても、そういう学生に対して対面授業を行う、という方法もあるかもしれません。周りに人がいる、という環境がある種のインフラだったんだだと思います。対面じゃないと勉強できないという学生は、どんなにコンテンツが良くても放送大学や通信教育は無理。ただ、小学校の時から勉強する時に周りに人がいるのは当たり前でしたから、不自由が顕在化しなかった、ということなんだろうなという気がしています。そういうのって、オンラインでどうやってカバーしたらいいのかなっていうのは、すごく思いましたね。インフラなんですよね、人が周りにいるっていうのが。

E: その話を伺っていて思ったのは、それって完全に教育の本質ですよね。結局対面授業がなぜなくならないかという本質問題ですよね。そういうレーダーを上手く張っている学生はまだいいと思うんです。レーダーすら張れないともうどうしようもないと思います。まだ、対面の時はそうやって上手く切り抜けていくからいいんですよね。

B: 我々も、運転免許更新の教習などに行ったりして、何か書かれる時、結構、周りをチラチラ見たりしますよね。隣の人、何しているんだろうとかね。あれって割と重要だったんだなって感じですよね。

A: 語学の座談会でも出たのですが、授業でわ

らないと周囲の人に教えてもらうことがありますよね。あれが意外と教育効果がありますし、人間関係の構築やあるいは社会的なポジションの取り方など、いろいろな無形の勉強になっていた面があるのだろう、と。

- B: 教員は私語されるとムカつくんですけど、私語ができるのが保証されてるっていうのが、実は教育上、重要だったのかもしれません。変な言い方ですけれど。レストランに行って、隣の人が何を食べているのか見るような感じで、そういうことが許されないと決められない人がいる。
- E: 隣のテーブルのあれを食べたい、という人はいますよね。
- B: ああいう感じで、決断とか判断とかを外部委託するということが、教室では日常的に起っていたんだな、というのは感じました。それを断たれた人が、すごく辛い思いをしているのではないか、と思います。
- E: これも少人数授業の座談会で出たのですが、初年次ゼミでは批判的リーディングをするために新書を1冊みんなで読みました。そこでいくつかの2・3人のグループに分けて、章やセクションごとに共同発表させました、学んだことや疑問点などのレジュメを作らせて。その際、1人で3分の1ずつとか4分の1ずつとかにしないで、担当の部分もみんなで話し合ってレジュメを作って、感想や疑問点を書いて、それぞれグループで発表してもらったのですが、それが意外に学生たちには好評でした。それはなぜだろうと思ったのですが、先ほどのBさんの話にあったように、非常に勘の鋭い頭の良い子は疑問点やひっかかりなどをすぐに見つけ出すのですが、さきほど出たような網を張らないとなかなか自分の意見も言えない子というのは、そういう共同作業の中で、ああ、これってポイントだったんだ、ということに気づくのです。我々からしたら、レジュメを作って、疑問点を列挙するなんて普通のことではないかと思うのですが、特に低学年の学生にとってはそうでもな



いようです。そういった部分は先ほど出たレーダーを張らないとやっていけない学生との共通性があります。それをどう解決するかということについては、ありきたりですけれど、我々が思っている以上にグループワークが学生たちが知見を深めていくための重要なステップになってるんだなと感じました。もっとそれをオンライン授業の時にもうまく組み込んで、私語ではない許された会話ができる、そういう仕組みを考えると良いのかなと思います。

- B: 半分遊びみたいな感じで、150人くらいの講義科目で、川柳を作れという課題を出したんですよ。今のコロナ禍の状況を川柳にしてみよう。作りたくなければ作らなくてもいいし、たくさん作りたければ作ってもいい。提出された作品をお互いに投票しよう……みたいなのがやったところ、受講生に好評だったんです。もう一回やってほしい、という意見もありました。やりませんでしたけど。その時に感じたのは、さっきの話じゃないんですけど、自分と同じように悩んでいる人がいる、自分の悩みは自分だけじゃないんだ、ということを確認できたのが、すごく安心感を生んだみたいですね。
- E: 自分のポジションができたっていうことですね。
- B: そうです。学んでる途中の学生は、自信のないところが当然あり、学んでるうちにだんだん自分で判断できるようになる。そのためには教育を受けてるわけです。その途中段階では、本当にこれでいいのか承認してもらいたい、という気持ちが生まれる。学生からのフィードバックの中に、「オンライン授業なので単位が不安です」というのがあったんですが、それも最初意味がわかりませんでした。オンライン授業であろうと対面授業であろうと、単位が不安なのは変わらないのではないか、と。でも、学生は、周りの人とのコミュニケーションのなかで、どれぐらい自分が理解できているかを確認しながら授業を受けて

いたんですね。ところがそれがオンラインではできなくなってしまったので、どんなに課題をきちんと出してても不安が拭えない、ということなのだと思います。周りに確認したところで、成績が悪ければ落ちるわけですが、それとは別にそのような確認と承認と評価が必要だったんだな、というのが、私のごく個人的な印象です。それをオンラインという環境で、どこまで用意できるか。

- E: なるほど。Facebook のコロナのグループ（「新型コロナ休講で、大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」<https://www.facebook.com/groups/146940180042907/>）で、他の大学でそういう試みをしているってありましたよね。
- B: そうそう、それを真似してやったんですよ。そうしたら、自分と同じ辛さを持っている人がこんなにいるのが確認できて良かった、という感想がたくさん来たんです。私から見たら、正直言って、学生の作品は全然おもしろくありませんでした。「コロナで毎日つらいよね」みたいなのがばかりで、全然共感できないんです。でも、学生はみんな共感し合っているんですよね。教員と学生では本当に立場が違うんだな、と思いました。
- E: なるほど。だから先生に見せるというよりも、みんなが拙いながらも川柳を作って、作ったものをみんなで見あって、それが良いわけですね。
- B: そうですね。
- E: アイスブレイクに良いですね。
- B: そうですね。Eさんがおっしゃった、みんなでレジュメを作るとかいうのでも、絶対、誰かに作らせちゃうとかのズルをする学生が出てくると思うんですけど、そういうズルも含めてそれは学びだったんだな、と思いますね。
- E: 私の授業では、レジュメを作った後に、誰がどういう貢献をしたのかを一応説明させています。こういう貢献をしました、というように。ただそれは、単純に3分の1で分けても良いし、種類で分けても良いし、得意分野で貢献してねと言うと、意外にみんな話し合っ



て真面目にやるのですよね。

- B: そうですよね、学生って、何だかんだで真面目ですからね。まあズルする者も一定数はいますが。

* インターネット接続環境

A: ちょっと話題を変えましょう。当初はインターネットにつながらない学生が結構出て大変になるんじゃないかなという予想がありました。私の大学では、理工学部の事前調査でだいたい1割ぐらいの学生が問題を抱えているとされていたのですが、蓋を開けてみると5%に満たない程度でした。問題があると言っていた人たちも、多くはただ単に投資していなかっただけで投資の余力はあったようです。実際にインターネットが従量接続で辛いと言ってきた子は、授業開始の4月終わりころの時点で、30人のクラスに1人か2人いるかいないくらい、というのが私のところの状況だったのですが、皆さんはどうでしたか。

B: 偏差値と保護者の年収に相関がある、というようなことが言われています。うちは地方の私立大学で、旧帝大や大都市の有名私大と比べると、相対的に貧困学生が多いと思うのですが、それでも通信環境に関しては予想より問題なかったです。繋がらない学生がいるというので後追い調査したら、スマホが壊れてしまった、とか、寮の通信環境が悪かった、といったケースが多く、通信インフラそれ自体が問題というケースは、当初懸念されていたほどにはなかったと思います。ただ、家庭事情というのは大きくて、個室を持っていないのでZoomで顔を出せない、掃除機の音が入るので声を出せない、といったケースは、保護者の年収格差などが如実に反映しているのではないかと思います。ただ、これも統計を取ったわけではないので、確実ではありませんが。ただ、通信インフラについてはあんまり騒いでたのに、少し拍子抜けでしたね。

それ以外の問題の方が大きかったと思います。

- D: あんまり通信は問題なかったですね、うちも。ソフトバンクのポケットWi-Fiの貸し出しとかをやったんですけど、確かに300台用意していたうちの半分使ってないと思います。100人ぐらいは、やはり困った、よこせという学生がいたらしいですが、これも本当に必要だったかどうかは、まだ全然わからないという状態です。もらえるのだったらもらう、貸してもらえるのだったら貸してもらう、と言っていた学生もいましたし、あとアンケートでは大丈夫ですって書いたのだけれども、その下宿屋が午後6時を過ぎると突然通信環境が悪化する、とかいうそういうのがありました。

B: ネパールみたいですね。

- D: みんな帰ってきたら一斉に繋ぐので突然だめになるみたいです。

B: ああ、それはありますね。高層マンションの上の階が繋がらない、といったこともあったみたいですね。

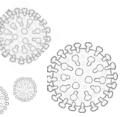
- A: 確かに、むしろ学生よりも大規模マンションに住んでいる教員の方に問題が発生していたような気がしますね。私の同僚でも大型マンションに住んでいる人がいるのですが、夫婦で繋ぐともうテレワークにならないと。むしろそういう教員のために、オンデマンド型の授業である必要性があった、という側面もあるのではないかと思っています。

D: 教員だけ学校に出てネットを使っている、というところもあったようです。

- B: あると思いますね。あとは、ご夫婦で大学教員をやっている場合、同じ時間帯にZoomで授業をやるとうるさい、とか。

A: 我が家も夫婦と子供で3つ同時並行でオンライン授業をやりました。

- D: それは大変。私はもう学校に出てきちゃってるで。結構家だと繋がらないという先生もいますね。あとパソコンは家に持つて帰っていないとか。在宅ワークで何やっているんだろうと。



- A: 確かに貸与のパソコンは、原則自宅に持ち帰ってはいけないと言われたりしますよね。
- D: 持ち出してはいけないです。
- A: 今回はそうも言つていられないから、認められたようですけれども。むしろ Zoom や Webex を使っていて、マイクが反応しなくなるというのが、トラブルとして多かった気がしますね。
- B: ありました、ありました。
- A: あれは解決が難しくて、プロパティをいじつてもなかなか上手く行かないで、再起動させたことが多かったですね。
- C: スマホだと、熱を持ってダウントしちゃう場合もあるのですよね。だから、保冷剤で冷やしながら使ったりしますね。
- A: スマホ用のクーラーが必要なわけですね。

* 情報処理教育の立ち後れ

- B: しかし、広い意味での IT インフラを考えると、今の学生はスマホ中心なので、パソコンを持っていたとしても結局スマホで見ちゃうとか、レポートもスマホで打った方が速いとかいったことも含めて、日本の ICT 教育の弱さを痛感しましたね。キーボードが打てない学生、メールを使ったことがない学生、添付ファイルが何だかわからない学生、というのがいました。
- A: それに関連して、オフィスアワーで学生から相談を受けたのですが、ある先生のオンライン試験では、問題を発表して 1 時間後までに答えを全部入力して提出しなければならない、でもブラインドタッチができないので、問題は解けても時間内に入力できるか心配です、というのですね。実際にその科目で習う知識とは違う、今までの教育の過程で全く習っていないスキルを前提とされているわけですね。このような事例は、かなりあったのではないか、と。
- B: あると思いますね。メールで学生とやりとりする機会がかなり増えたと思うのですけれど、

学生がメールをちゃんと書けないので、そこから指導している教員がいっぱいいたと思います。学生のメールにイラッとした教員もいたんじゃないですか。

一同：(笑)

- B: 学生に悪気はないのですがね。
- A: SNS しかやっていないから、もうその延長でしか書けない。
- E: メールを書くのに皆、メールのタイトルをつけませんよね。
- B: つけないですね。名乗らない。ただこれは私、ずっと観測してるんですけど、10 年以上前から学生のメールには、タイトルをつけない、名乗らない、というのが一定数あったので、SNS 以前から学生はメールを書けなくなってしまったんですね。「明日休みます」という 1 行が書いてあるだけのメールは、10 年以上前からずっと来ているんですよ。これは教員に対してだけではなくて、学生同士でもそうみたいですね。もちろん、そういう極端な学生は少ないのですが、メールが書けない、という問題は今回に限った話じゃないと思います。こういうことがわかつていたのに、10 年以上何もしてこなかったんですよ、我が国は。大学は、って言うべきかもしませんが。メールが書けない、基本的な ICT スキルがない、キーボードが打てないという学生を放置してきた。こういうのは大学の 4 年間だけではなかなかカバーできないので、小学校からやらなくては、という話になると思うのですが、ともかくそれがなされてこなかったというツケが、今回まわってきたと思いますね。
- E: 問題が先送りされて、結局大学でそういう現象が顕在化したというのは、その通りだと思います。私がさっき言いかけたのは、だから初年次教育でそういうことを教えていくのです。メールの書き方のような内容です。ちゃんと 2 時間くらいかけてやってるんですけどね。それでもやはり書けない学生がいるんですよね。それでもなおそういうメールを出してくる学生がいて、自分の授業をどう受けて



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

いたのかと脱力します。

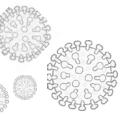
- B: 今回のコロナ禍では、テレワークに全然対応できない企業などもあり、IT化の遅れというのがいろいろなところで強調されているので、さすがに今後は教育のIT化が進むのではないか、という期待はありますよね。先日、学生に「何で小・中・高校は対面授業をやっているのに、大学は対面しないんですか」と聞かれたので「逆だよ」と答えました。大学はオンライン授業ができたけど、小・中・高はやりたくてもできなかつたんだよ、と言ったら、ああそうか、と納得してました。
- E: ようやくiPadを配るとか言い出しましたもんね。
- A: 文科省が今まで、小・中学校にパソコンを購入する予算を申請していなかった、それを経産省が代わりに申請したら一発で通った、というのが報じられていましたね。学習指導要領に書いておけばみんなやると思っていたと。やりませんよね。
- D: 金がないのに。
- A: やれる教員もいないのに、勉強する暇がないのに。
- D: 本当は今年はもう始まっていないとおかしいんですね。
- E: 二学期から配ると言っていましたね。
- B: 大学は、それこそ10年あるいは20年くらい前から、少しずつ学内LANの整備や、ICT教育の普及など、それなりに継続してやってきていたこともあって、インフラがなんだか



高校情報科教科書

んだ言ってあったんですよね。最近だと、学内にWi-Fiを設置するなどしていたわけです。それには国から補助金が不十分ながらも出ていたわけで、そういうのが結局生きたってことですね、今回は。

- A: そうですね。
- B: 大学に来なければオンライン授業ができない教員がいた、という話が先ほどありましたけど、逆に言えば大学に行けばオンライン授業ができたんですよね。小学校だと、家よりも通信環境が悪かったり、そもそも自分用のパソコンが無かったり、メールアドレスも複数人で共有だったりして、もうまったくダメじゃないですか。
- E: ダメですね。
- B: 大学は、教員が1人1台、パソコンを支給されていることが多いですし、LMSを導入してきたわけです。LMSが大学ごとにばらばらだと、LMSによっては機能がショボいとか、いろいろ問題もありましたけど、ともかくそれに予算がついてきたわけです。やはり10年、20年の蓄積ですよね、ここ数年とかではなくて。これは大きいと思います。要するにお金ですよね。しょうもない話ですけれど。
- E: 身も蓋もない話ですよね。そこで不思議なのは、先ほどBさんがおっしゃったみたいに、15年20年の取り組みということを考えると、情報科の免許が高校でてきて、一時期は派手に情報化を進めるんだ、情報科教育するんだと言っておきながら、高校ですらどこまでしっかりとした情報教育をしているのだろうかと。そのあたりの高大接続に問題が……。
- A: それについては、以前Sさんがおっしゃっていましたね。情報教育が成り立っているのは偏差値55前後の高校だけに限られると。そこより上になると情報教育をやらないで、受験指導に割り振ってしまう。そこから下になると、そもそもやる気がなくてついていけない生徒ばかりで授業にならない、と。だからそこをどうにかして、底上げを図りつつ、上



のほうを伸ばす方法を考えないといけないの
でしょうね。

E: 私事ですが、うちは子供が受験生なので、最近三者面談によく行く身から感じたことがあるんですね。中学校から高校を受ける時や、高校から大学への推薦入試だったり付属で内部進学する場合だったりの時は内申点が使われますが、大学の一般受験は内申点って全く関係ないのでよね。内申点では4つの視点から評価すると言いつつ、実際の試験はほぼ一発勝負になっているというのが現状です。この点では高大連携が全然なされていないんですよ。だから結局さっきAさんがおっしゃったみたいな、ある一定の偏差値の高校は、情報科などという入試に直接関係ないものを切り捨ててしまいます。だけど、内申点つまり3年間の教育の結果や成績を大学受験にかなり反映させるという入試システムになれば、受験一発勝負的な勉強の仕方を変えられ、情報教育ももっとちゃんとした形で根付くのではないかと思います。

A: 結局のところ、大学が入学の要件として何らかの形で情報処理能力を取り入れない限りは変わらないでしょうね。

E: 情報科全体というよりも、ブラインドタッチもできないような学生を減らせるのではないでしょか。高校や中学の授業の中でも折り込んで使うようにし向けていけば、いろいろなスキルが自然と身につくと思うんですよ。

B: 受験というのも大きなファクターだと思うんですけれど、やはり教員が教えられないのではないかと思っています。というのは、今の学生を見ていると、自分の頃と比べると、明らかに英会話が良くできるんですよ。私たちは、全然できるようにならなかつたじゃないですか。でも今の高校生は、英会話が上手なんですよね。やはり、ネイティブをちゃんと雇って、小学校のころから軽い英会話教育を受け続けていると、なんだかんだでしゃべれるようになるんだな、と思います。それから、「調べてまとめて考えよう」という教育が小

中高で行われているので、今の大学1年生にいきなりプレゼンをさせても、それっぽくやるんですよね。PowerPointとかも知っています。

E: 総合的学習の時間ですね。

B: そうです。だから私は、もちろん受験に絡んでいるかも大切だと思いますが、総合的学習は受験に出ないわけですし、英会話も——共通テストに入れようとして失敗しましたけれど——受験にスピーキングがないにも関わらず結構喋れる学生がいるということは、やはり教える側の問題も大きいのではないのかと思っています。ICTに関しては、教員免許を作ったにも関わらず、そもそも教える側が必要性を感じておらず教えていないか、教えられないのではないか、という印象が——これも調査したわけではないのですが——あります。だから、初等・中等教育のICT教育に手を入れたら、ちゃんと変わると思うんですね。逆に教えなかったら、本当にわからなくなる。

社会科も近代史が中心になってきていて、古代のことまったく知らない学生が大量生産されているんじゃないでしょうか。

E: 世界史ですけれど、新しい世界史総合は、一応世界史AとBと並んで選択できるんで、世界史Bが消滅しちゃうわけではないから、結局、受験で世界史の必要なところは世界史Bを選んでくるのではないですかね。

B: そうでしょうね。

E: だから学校間の格差が非常に広まってしまうのではないかと。

A: 高校生情報処理試験などを導入するという歩みがあるかな、と。それで、タッチタイピングと、それとWordの、スタイル機能を使うかどうかは別として、提示された書式の文章を作れるか、などなどを見る、とか。

E: 商業高校の子達は、そういうスキルのある先生がいると、情報資格を揃えて進学してきますよね。だから、人がいるかいないかは、確かに1つの非常に重要なポイントですね。



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

- A: 教えられるという意味では、大学教員も実は教えられる人の絶対数が少ないですよね。
- B: 少ないと思いますね。
- A: 語学の座談会の時に、語学の授業がある程度初年次教育やコンピュータ教育、情報教育的な機能も兼ねられるのが理想的だ、みたいな話が出たのですが、じゃあ実際にそれをできる教員がどのくらいいるかというと、もうかなりお寒い状況です。ただ今回、大半の大学教員が PowerPoint で動画を作ったり、Zoom でつないだりしたというのは、それはそれで 1 つ大きかったと思うんですけどね。底上げという意味で。
- B: 大きいと思いますね。今も Zoom で話してますけど、これ日常になりましたもんね。
- A: そうですね。
- B: JAET の幹事会では、ずっと Google ハングアウトを使って、会議をしていたじゃないですか。これまで周りでやる人は全然いなかったですが、今ではもう当たり前になりましたもんね。
- A: あっという間でしたね。
- B: あっという間ですね。すごく良いことだと思います。あと、PowerPoint の録音機能とかも、デジタルサイネージとかでしか使われてない感じだったところが、一挙に世界中の大学の授業で使われたと思います。
- D: PowerPoint ビデオが今、あちこちで YouTube に山ほど上げられてるし。ほら丸パクしてくれればできるんじゃないかなっていう。
- B: MOOCs が出た時に、これからはオンライン教育の時代だ！とか宣伝されてた割にまったく



東京大学 OCW

く流行りませんでしたが、今は頼みもしないのに YouTube に授業動画がどんどんアップロードされています。やはり大学教員って自己顯示欲が強いのかな、と思ったりします。そういうこと言ったら、トゲがあるかもしれません。

- E: いやいや、おっしゃる通りです。
- A: ただ単に、授業のオンデマンド配信に YouTube を使ってるから、そのまま公開しているというのもありますね。
- E: 公開しなければ良いのに。
- B: やっぱり、見せたくなっちゃうんでしょうね。もちろん、学びの機会を開くべきだという、高い志のもとに行っていた方もおられましたけど。しかし、こんなにオンライン教材が増えたことはないですね。質とかバラバラだし、体系性もゼロだし、誰かまとめてよ、と思いますけど。
- D: OCW、何をやってたんだってくらい。
- B: 「こんなのがタダで見れて嬉しい、もっと公開してくれ」みたいな感じで、社会人が歓迎してたりしますよね。反転授業もこれから増えるでしょうね。対面授業に戻っても、予習用のビデオ教材を作つておこう、みたいな感じで。
- A: そうなるといいんですけども、一部には単純に、オンラインで授業できるじゃない、だからこれでやろうっていう、要するに手抜きに使おうっていう人たちが出てきていて、それがちょっと心配なんですね。
- B: 「先生のオンデマンド教材は、できがいいから使わせてください」という教員はいませんでしたか。同僚の先生で、作るのが苦手だから、面倒だから、使わせてほしい、みたいな人はいませんでしたか。
- A: それは、うちでは教科書を統一していないからできないんですよ。教科書が統一されているところだと、専任教員が全てのオンライン教材を作つて、非常勤講師は個別の対応と採点と、あとはリアルタイムの発音指導、それだけに特化するというような授業をやったとこ



ろもあります。あくまでも緊急事態としてやっているから良いのですが、大学によっては経営者が、これでOKなら非常勤の首を大量に切れるよね、という発想に行く危険性は大きいにあるでしょう。これも、語学の座談会でも出た話ですけれど。

- B: ありがとうございますね。思ったほどそういう合理化ってできないと思うんですけど、ただ一部そういうのが進むでしょうね。

A: そうですよね。だから本当に大学の対面の授業の本質的な意味は何かというのを、先ほど教室の中でのそれぞれの役割やポジショニング、キヨロキヨロする、そういったのも機能だという話がありましたけれども、ある意味発展的に反転授業的な方向にいくように、色々と主張して働きかけていなければというのは感じています。

E: 誰かが統一的なオンライン教材を作つてそれを使えば学べるじゃないかという発想の方で突き詰めていくと、語学以外でもかなり専門的な授業でもそういう方向にもっていくられるのではないかと。しかし少なくとも人文学者は教える教員の個性と考え方、知識の体系と密接不可分なので、それをろ過して真水を出すような合理化は不可能だし、してはいけないと思います。それで、なぜ対面授業をしてはならないかというと、その教員の個性を深く知るにはやはり会う必要があるからだという議論もありました。

もう1つはさきほどBさんがおっしゃっていたことと関係します。オンライン授業で配布された教材を再配布しないように学生に注意している大学は多いと思います。大学や教員側から学生に対する注意喚起はなされていますが、教員が作成したオンライン教材を公開することは何も問題はないのですか。

A: 業務著作にならないですかね。

B: 複数の非常勤先の授業で、まったく同じ映像を使ってる人はいましたよ。

E: そうなんですか！

B: 同じテーマの授業だから、ということでした

文科省 4月21日付け Q&A から

けれど。

- E: もし2つのクローズドな環境でその映像が使われるっていうのであればまだわかるのですけれど、誰もが見られるように配信してしまうのは何も問題ないのかな。学生には厳しくいっておいて、教員自ら流していいのかなという疑問が浮かびます。学校はそういう事態を野放しにしておけるのかという素朴な疑問があります。
 - B: 今回、文科省からの通達なんかにもありましたが、オンライン授業は、単にオンラインで講義をするだけではなく、その後に教員とのインタラクションがあるっていうことが前提でしたので、講義が共通でも、インタラクションが個別にあれば、いいのではないか、という考え方ではダメですかね。
 - C: 教材は教員が職務上作成した資料になるので、国立大学法人によっては法人文書として扱うことになっている可能性があります。
 - D: うちはテストの類とか教材の類は法人文書としての管理規定がないので、基本的には勝手にやれですね。
 - C: 教材やテストに関しては、法人文書となるか否か、大学の裁量に任されているんでしたっけ？
 - D: 大学の裁量だったと思います。
 - C: 大学によっては保存年限とか決められている

かもしれませんね。

- E: (公開した教員の場合) YouTube に教材を保存しているということですね(笑)。

D: うちは学生から文句が出来ても、学校としても一切責任を取らない方針なので、

C: すごい。まるで単位を出しているのは教員個人であると。

D: だからなんだろう、かなり中国の学位みたいな感じになっているんですよ。

* 大学図書館休館の影響

- A: ちょっと話題を変えましょう。今回の自粛期間では、その後もですが、大学図書館が閉まつていて研究や教育ができないという人文系の院生や教員が多かったです。私も学部生向けの少人数ゼミ授業で、図書館で参考図書を調べてこさせることができなくて困りました。それと概説書も、図書館のどのあたりに中国関係の本があるのかを探して、そこから役立ちそうな本を3冊を持ってきなさい、というようなことができなかつたのが辛かったのですが、みなさんはどのように対応しましたか。

D: 図書館が開けば二度と開けることはないであろうという本を、大量に研究室で買いました。先ずそれが1つです。あとは図書館と交渉して、今年度中に学位論文を書く学生だけは指導教員のサインがあれば使えるという話になりました。でも最初は、書庫は入れないと言ってたので、それでは使えないだろうと言ったら、OKになったのですが。今、図書館も多少は開きつつありますけど、でも本当に困り



Maruzen eBook Library

ましたね。図書館にしかないものもあるので、
まだまだ図書館はちゃんと知の集積の役
割を果たしているんだなと思いましたね。

- A: 私も辞書関係は家に何十冊か研究室から持ち帰ってきて、学生に分担箇所でわからない言葉や調べたい言葉があったら Google フォームに書かせて、その箇所をスキャンして送つて、それで発表させましたね。

D: 人力「はてな」みたいなものですね。

B: 初年次教育を担当していてレポートの書き方をやるのですが、図書館で何か調べて、引用して、出典をきちんと書いて、というのをさせている、それができなくなつたので困りました。しかたがないので、ネットの情報でもよい、としたのですが、図書館が使えないのは非常に厳しい。今回、ネットの情報がいかに使えないか、というのを痛感しましたよね。今回、図書館にお願いしたところ電子書籍サービスを拡充してくれたので、すごくそれはありがたかったのですが、そもそも既存の電子書籍サービスがショボいのが困りました。

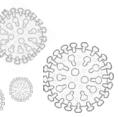
D: ショボいですね。

B: 丸善の「Maruzen eBook Library」や紀伊國屋書店の「Kinoppy」など、「ああ、こんなものか」という感じです。ジャパンナレッジも、図書館が使える状況だと便利だと思いますが、ジャパンナレッジしか使えないとなると、単体ではすごくショボいですよね。

一同：うんうん。

- B: 今回のコロナ禍で、アクセスしやすくなったりとかいろいろ良くなりましたけど、それでも国内の電子書籍サービスは本当にショボいなあと思いますね。海外と比べると、やはり我が国の電子図書サービスは、申し訳ないけどショボい。全く教育には使い物にならないというのがよくわかりましたね。

- A: 面白いことに、中国古典文献は意外と手に入るんですね。北京の中国国家図書館の遠隔サービスを使えるようにしておけば、あそこの善本が全部見れますからね。それに日本も、国立公文書館の内閣文庫、国立国会図書館の



- デジタルコレクション、あと東文研などもありますから。ですが、入門書的な学生に読ませる日本語のものが、とにかく足りなかったですね。
- B: いわゆる二次資料が全くというほどないですよね。全くではないけれど……。
- A: 全くではなかったですが、もうちょっとなんとかして欲しいと思いましたね。新書や選書の類も、発売から5年10年経ったものは、どんどん電子化して、包括契約で大学図書館経由で読めるようにして欲しいですよね。
- B: 新書は全部デジタルでいいんじゃないかな、とさえ思います。あと、新潮選書、角川選書といった選書ですね。岩波新書が割と電子化されていて、電子書籍サービスにまとまって入っていたりしますが、それ以外の新書・選書は入っていない。もちろん、Amazonとかで買うことはできますが、学生に図書館で読める本を買えというのも難しいですし、ちょっと厳しいですね。
- A: 専門でやろうという学生なら、買いなさい、と言えるのですが、それこそ1年生の教養の授業で、ちょっと興味があって取っただけです、というような学生に、じゃあ5冊買って読んでね、とは言えませんよね。
- B: 新聞について言えば、朝日新聞が——本当に短い期間で——「朝日新聞デジタル」を全部無料公開してくれたのはよかったです。ただ、朝日新聞だけでしたが。
- E: あの新聞サービスでは、朝日は蔵でしたか、あれはうちでは同時アクセスが2しかないのです。そうすると使い勝手が非常に悪いです。それはそれとして、あれは結構便利で、戦前のものも入っているので、一次史料としても使えます。だから調べさせると歴史学の色々なネタになるんですけど、同時にアクセス2だと、初年次教育の人数を軽くオーバーするじゃないかと。もう少し安くして公開して欲しいですね。
- C: そういえば、台湾中央研究院のデータベース、申請制で公開していましたね。私はやらな

- かったですが。固定IPじゃないとダメだとのことだったので。どなたか使った方いましたか。
- E: どのデータベースですか。
- C: 漢籍電子文献。
- E: 私は中研院の春秋TISを申請して使っているのですが、あれは自宅からでもID申請して使えますよ。
- C: それは今回コロナで特別に、ということではなくて、通常でも申請すれば使えるんですね。
- E: そうです。所属先があって、後パスポート番号とかを入れればすぐに利用許可がおりるんですよ。あと国史館もそうですね。史料そのものは見られるものと見られないものに分かれていますが、少なくとも検索はできるようになっていますね。档案も。しかしこれはコロナだからというわけではないですね。
- B: 今回、国立国会図書館デジタルコレクションなども、オープンになってくれたら大分良かったのになあ、と思いましたね。さきほど、学生・教職員のICTスキルやITインフラの話をしましたが、電子書籍・電子文献の弱さというのも、今回、本当にがっかりしましたね。
- A: 出版社はしばしば、我々は大学とともに日本の知の重要な一翼を担っているんだ、だから我々をきちんと保護しろ、みたいなことは言うわけですけども、だったら貢献もしろと言いたくなりますね。
- B: そうですね。一部の教科書出版社さんが、オンライン対応ということでPDFを配布してくれたところが結構あって、あれは助かりましたけどね。いつも大学で販売していたのに、大学に行けなくなって、学生が教科書を買えない、ということも起きたようです。
- A: それは語学の方でも話題に出たんですけれども、ある先生が、出版社から渡されたPDFと教授用資料をそのまま学生に配ってしまった、という問題も起きたそうです。
- D: かなり不味かったようですね。
- A: あと地方によっては、地域の書店が教科書販

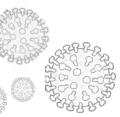
売を担当していて、通販に対応できないので今年度の教科書販売は全部取りやめ、というようなところもあったらしいです。それと自分の学部で使うので、中国で刊行されている中国語教科書をどうやったら日本にいない留学生が入手できるか、というのをリサーチしたんですけれども、アメリカのAmazonでは普通にKindle版を売っていました(リージョンの制限があるため、日本からは購入できない)。むしろ、アメリカのAmazonで中国語教科書は、紙版よりもKindle版のほうが価格がはるかに安く、しかも種類も充実しているんですね。そういうところを見ると、日本の教科書会社、それと教員も、紙版の教科書信仰っていうのを、そろそろ変えていく必要があるのかな、というのを感じました。

- E: なるほど。
B: Kindleは辞書を引きながらバリバリ読みますからね。
A: 実際問題、流通コストがかかりませんしね。
B: そうそう、すぐ手に入りますし、場所をとらないし。
A: パソコンなりタブレットなりを持ってるという前提であれば、その方が良いという学生も多いと思いますよね。ただ、実際に教室でも使うとなったときに、学生がパソコンとかタブレットとかを見ながら授業を受けるというのに日本の教員が耐えられるかどうか、という問題があるんですけど、これも慣れの問題でしょう。
B: 静かに見ていると思いますよ、私語せずに。YouTubeかもしれません。
E: この半年間のこのオンライン事業の経験で、全く何も反応してくれなくとも黒い画面に向かって話し続けるスキルというのが身についたので、これで対面に戻っても、ある程度の開き直りはできますね。今までだと、ある程度反応してくれないとショックを受けてしまうこともありましたけれど、今は別に反応がなくても、反応無いのが前提だからいいやと開き直れるのではないかでしょうか。

- A: 黒い画面の向こうでは、パソコンの前にいることが多いですよね。
E: 最初は皆顔を見させてくれたんですけど、見事に最後の方になると1割くらいの子しか顔を見せてくれなくなってしまいました。もちろん、なるべく顔を出さないでね、と言ったのですが。少人数授業でもそうでした。
C: これまでの話題と少し関わりますが、反対向きの話になるんですけど、あくまで私の感触ですが、図書館というのは席さえあればよい、電子ジャーナルとかデジタル情報だけを提供してくれればよい、ひどい場合には古い汚い本など捨ててしまえ、みたいなことを言う教員や学生もいたわけです。ところが、大学図書館が完全に閉館してしまって、モノを持っている図書館が研究や教育にいかに直結しているかということを、みんなが身に染みて分かったようで、先ほどの図書館不要論が戻すばみになりましたね。逆にもっと予算をつけなければいけない、予算をつけて電子化をはじめとするサービスを拡大すべきだという意見が出てきました。全体としてどういうふうに変わるかわからないんですけど、Bさんがおっしゃったように、日本では電子化されているものが少ないので、出版社がどうするかという問題があるんですけど、図書館のデジタル化事業にとっては追い風になれば良いと思っています。
A: 機関リポジトリとかも、それこそ皆さん必要性を感じたでしょうから、これを機に内容がさらに充実してくれると良いのですが。
C: そうですね。

* 大学のオンライン授業対応

- B: 最近、学生を大学に入れないのは大学の怠慢だ、みたいに言う人がいますけど、逆に言えば、これだけ大学という場が必要だって言われた時期ってなかったんじゃないかなと思います。これまででは、インターネットで学ぶことができるんだから大学なんか不要だ、みたい



なことを言う人もいたわけです。デジタル化が進めば、図書館なんて場は要らなくなるんだ、みたいなことを言う人もいたわけです。でも今回、大学という場が大切だ！大学に通いたい！という声が上がっている。これを追い風にしてもいいのかな、と思っていますが、いかがでしょうか。

- C: 政治家がそれを分かっているかどうかは、ちょっと別問題ですけどね。
- B: あの人たちは、ポピュリストというか……
- A: 単に、みんなインパールに行け、と言っているだけですからね。
- C: サボっているわけではないんですよね。
- E: むしろ頑張っているんですよね。
- A: 真面目にやり過ぎていると思いますけどね。もうちょっと失敗した方が良いくらいですよ。
- B: だからやはり、大学はできちゃったんですね。スキルのある人が一定数いて、それなりにインフラが整っていて、みんなパソコンを使っていたから、おっかなびっくりだったにせよ、何とか4ヶ月間やりきったじゃないですか。
- A: そうなんですね。
- B: ダメな人もいっぱいいたと思うんですけど。だから、ともかくオンラインで授業ができるっていうのを、文科大臣に褒めて欲しかったですね。よくやった、って。
- A: そうですね。
- C: 首都圏の大学の場合、いま対面授業を完全に再開して学生の動きが通常に戻れば、電車やバスなり公共交通機関の混み具合が今の比じゃなくなる。
- E: いやヤバいでしょう。
- C: 結局、そういう部分に大学は、ある種、貢献しているわけですね。
- B: めっちゃ貢献してると思いますよ。
- C: 大学が通常通りであれば、経路不明の感染者がもっと出ますよ。
- E: それはもう、おっしゃる通りですよね。
- C: 私の研究の一つに歴史資料の保存があります。モノを劣化させないためのいろいろな理論な

りスキルなり、さまざまに研究されていることがあるんですけど、これまでの経験から確実に合理的に説明可能なのは、微生物による被害です。カビだとかの微生物による被害が発生するためには、ある一定の環境条件が整う必要があります。逆に言えば、環境条件をコントロールすることで微生物被害は防げます。このことは、今回のウイルスに非常に似ているなど。つまり、密の防止とか、ソーシャルディスタンス、手洗いの励行、マスクの着用などは、環境的にウイルスが活性化する条件を整えないようにしているわけなんです。大学が通常通りであれば、ウイルスを活性化する環境条件がいくらでも整います。だからオンライン授業なのだと論理で、大学とか研究機関は訴えていかないといけなかつたのではないかと思うわけです。決して何もせずに閉じこもってたわけではないと。

- A: 学生には届いていないですね。同僚の生物の先生が言っていましたけれど、学生があまりにも新聞やニュースで流れた情報すら知らなさすぎる、と。ウイルスが何かということもよくわかっていないし、新型コロナウイルスがどう感染してどういう症状になる、みたいな情報も全然知らないで、それこそネットの一部で新コロナはただの風邪だと言われている、それを鵜呑みにしてるような学生が多数で、相当修正したそうです。
- C: 微生物とかウイルスの活動というのは非常に合理的に説明できるので、きちんとその合理性を守ってさえいれば、実は怖くない。守らないから、クラスターになったりとか被害が発生してしまうわけなんですが、その点の理解が行き届いていないと思います。
- B: 移動がウイルスを広めているというのは、本当にその通りだと思います。そうなると電車を止めるのが、多分一番いいんですよね。大学がウイルス拡散防止に貢献してきた、って言うと、ポジショントークになってしまうかも知れませんが、一定程度の感染防止の役に立った、ぐらいは言っていいと思います。ラ

- イブハウスを閉じるのも確かに合理的だったと思うんですけれど、ライブハウスが10個とか20個とかあって、1時間半ごとにライブをやってるのが大学なので、ライブハウスは閉じるが大学は開ける、というのは、合理性がないと思います。ライブハウスを閉じるんだったら、大学を全部閉じなきや、っていうのが当たり前のはずなんんですけど。
- A: うちは、秋学期から少人数授業や語学授業は対面をやってもいいということで、この間、希望調査が来て、とりあえず試験だけやるということで回答したのですが、でも実際問題、語学の授業が一番危ないんですよね、声出しまくりますから。昼カラやっているのと変わらない。
- C: 中国語とか韓国語は発声の問題で日本語とは違うから、コロナが広がったみたいなニュースがありました。
- A: まあ、フェイクニュースですよね。でも実際問題として、声の大きさが違いますから、唾が飛ぶぐらいに発音しろ、と授業で言いますからね、非常に危険なのは確かです。
- B: 教員が何人が死ないと止まらないんじゃないかという恐怖感はありますよね。今の状況だと、やはり亡くなっているのは高齢者が多い。それを考えると、年齢間の非対称性があって、学生は無症状が多いから危機感が弱く、かつ大学に入れないという被害者意識もあるので、その辺は怖いなあと思いますね。基礎疾患を持っている教員もいるじゃないですか。Cさんが今おっしゃったようにウイルスの動きは非常に合理的なので、移動の多い非常勤

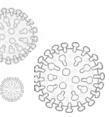


The screenshot shows the homepage of the National Diet Library (国立国会図書館) with a banner for the '2020年6月1日 [重要] 東京本館における抽選予約制による入館制限のお知らせ (申込みフォーム) (9/23更新)' (Important notice for the admission reservation system at the Tokyo Main Branch on June 1, 2020). Below the banner, there is a detailed explanation of the admission reservation system, including the date (September 23, 2020), the admission period (from September 10 to October 10), and the application form (PDF file: 34KB).

国立国会図書館の入館制限お知らせ

の先生とかが危ないんじゃないかなと思ったりもしますけれど。

- C: そうですよね。
- B: 今、大学教員に対する感染が徐々に増えてきていますのでねえ。
- A: 対面授業を再開すると、てきめんでしょうね。
- B: てきめんですね。
- A: せめて、月に1回ぐらいPCR検査してくれ、と思うんですけれどもね。学生も教職員も全員やるべきですし、学生が無理でも教職員だけでもやるべきでしょう。
- B: 私、実は、定期的なPCR検査を大学で提案したら、高すぎて無理って言われました。
- C: あと図書館ということだと、感染者が書庫に入っていたらどうしようという問題も大きいようです。消毒が、その後書庫に入った場合に。
- E: 本を消毒しないとね。
- C: 貸し出しの場合なら、その本を書庫に戻す前にある程度の曝露期間をおけばいいんですけど、人が入ってしまうと、接触したところは徹底的に消毒をされるので、それが貴重な本のある書庫だったりしたらどうするんだ、ということなのでしょう。あと、これはあくまで私の推測ですけど、図書館の多くは、これまで利用者の滞在時間とか、館内での行動とか把握していない。調べようがないんですよ。入退館システムがあって利用者をID管理しているところは、滞在時間はわかるかもしれません、どんな本が一番手にとられやすいとか、どこに人が集まりやいかとかは全く把握できない。そもそも図書館は、博物館とかと異なって、滞在時間が非常に長い人もいるわけで。つまり基礎となる利用者の行動データがないから、科学的根拠をもって入館人数や滞在時間の制限ができるのではないでしょか。
- B: 「図書館の自由に関する宣言」などに基づくと、やはり図書館の利用履歴もプライバシー情報なので、図書館の貸し出し履歴などと同様、記録すべきではない、という原則論がありますね。それが、図書館利用者のデータを



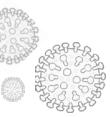
- 取ることの妨げになっている、というのはありますよね。
- C: ただ結局、図書館にせよどんな施設にせよ、こういうことが起きて、ウイルスとか微生物とか目に見えないものによる被害の拡大をどう防ぐかということを考えたときには、個人情報を収集しない前提で、ある程度の情報は集めざるを得ないと個人的には思います。
- A: うちの図書館は今、事前申し込みで、時間帯に分けて最長1時間半、最大50人受け入れます、というサービスを始めています。それでこの間行ってみたら、先々週行った時にはなかった、出るときのカードスキャンが増えました。やはりちょっと管理の方向に行ってるんでしょうね。
- C: 要はそのAさんのおっしゃった基準というのが、多分、科学的根拠に基づいた基準じゃないんですよね。データがないから。
- A: とりあえず、授業1コマ、1時間半なんでしょうね。
- C: そうですね。でも、やっぱりそれでは感染防止という観点からだと何の根拠にもなりませんよね。
- B: これは本当に難しい問題で——フーコーの生権力の問題なんですけれど——感染症対策をする際に、権力側が、生命を守ることを優先するという名目で個人の権利を制限してしまう、ということが行われているわけです。中国なんかは、そういうことが簡単にできちゃうわけですけど、今、日本でも、感染者との接触をチェックするスマホアプリなどが出ており、要するに行動履歴のようなプライバシー情報が収集される形になっていて、この辺りをどう考えるかは問題だと思います。図書館の場合だったら、Amazonのレコメンドみたいに、貸出履歴を活用しよう、という人もいれば、図書館というのはそういうことをやったらダメなんだっていう人もいて、個人的には後者の意見っていうのも傾聴すべきだと思うんですよね。だから、図書館に来ている人の利用の行動のパターンみたいなものの調査は、すべきだと思うんですけど、一方でプライバシーをどこまで守るかという議論も、どこかでやらないといけないと思うんですね。匿名にしたってわかるじゃないですか。個人情報を消そうが、複数の匿名情報を付き合わせたらすぐに個人を特定できてしまう。だからその辺はやっぱり考えないといけないかなって気がしますね。
- C: 確かにビッグデータでも、匿名化処理してあるといつても、そこから結構復元できるみたいですよね。いろいろな情報を突き合わせると。
- B: 全然出来ますよ。今、その研究がすごく進んでいるんで。
- E: 話がとびますが、私はオーラルヒストリー調査をしてきて、そのデータを公開するときはもちろん当事者の同意・許可も取って本名で出してきました。文化人類学者や社会学者が同様の調査をするときには個人が特定されないような処理をすると指摘されました。もちろんそれは当然のことなのですが、実際にしっかり読んでみると、復元できてしまう場合があります。だけど、ダイレクトには誰だからわからないように処理をすることが個人情報の扱い方として重要なようです。さきほどCさんのおっしゃった問題との共通性を感じます。個人を特定されては困るけれども、加工して復元さないようになったデータは、公共的な用途のためには用いられてもよい、ある一定の手続きを経た上でも用いるのは公共の利益に資するのであれば良い、そういう原則で情報を使えないですかね。
- B: 結局バランスの問題ですよね。
- E: はい、そうです。そうしないと情報って使えなくなってしまうと思う。
- B: 今回、大学の授業がほぼオンライン化したっていうのは、教育工学などを研究している人にとっては、ビッグデータができました、ということかもしれません。その中にある学生の行動履歴や、レポートのデータ、教員の作った教材データなどを組み合わせて、こういう

- 教育をやつたらこういうアウトプットが出るみたいな相関を出すみたいなことができるかもしれません。
- E: できますよね。
- B: 対面授業だったらそういうのは発生しないわけですけど、オンライン化したことによって、研究の役に立つんだからそのデータを使わせろ、という欲求が出てくるんだろうなという気はしますね。

* 新コロナが促す大学教育の変化

- E: ちょっと感覚が古いかもしれないんですけど、教員がお互いの授業を見て、他人の授業から学ぶとか、あるいは見られることで授業を改善していくみたいな動きが最近10年はありますけど、私が就職したての時は他人の授業には口出しをしてはいけないという不文律があったと思うんですよ。お互いが教えている内容に踏み込まないで尊重するのが大前提だったと思うんですよ。先ほどの話を伺うと、その前提が崩れますよね。教えている内容と効果が完全に白日の下に晒されるわけじゃないですか。
- B: そうですね。これって、今、文部科学省が推進している、大学のカリキュラムを「順次性のある体系的なカリキュラム」にしろという改革の流れと一致する気がしています。今まで、教員の質というのは、並べて比較できるものではなかったはずじゃないですか。言わば職人の世界みたいな感じで、職人の持ち場に他人が介入することは、学生に対するハラスメントでもない限りはしなかった。一方でFDが実施されて、授業スキルについても平準化が行われ、教員が入れ替わっても同じように体系的な授業ができるように促されている。そのなかで、いわゆる「特殊講義」が多分どんどん潰されている。特に昔は、特殊講義って滅茶苦茶だったじゃないですか。先生が難しい話をいきなりして、授業が終わったらその話がそのまま論文になっていました、

- とか。
- C: そういうものなのでしょう、特殊講義って。
- E: そういうものだと思いまされた部分もあるのかも。
- B: その先生は、さぼっていたのではないと思うのですよね。今思えば、僕らは、そういう授業を受けているのですよね。
- E: 原典講読でも、なんでこの史料なのかなと思っていたら、1年後ぐらいにそれが論文に使われていました(笑)。
- C: 学生の意見を取り入れて論文に使うという。自分の読みは大丈夫かなって(笑)。
- B: そういうある種のクラフトマンシップじゃないですけれど、職人性というのがもう今は「悪」になっていますね。学生が同じような力をつけられるように、段階的に構成されたカリキュラムこそが正しいカリキュラムである、と。
- E: Bさんがおっしゃっていた平準化というのは、まさにその通りのことが起こっていると思います。ある基礎科目は誰がやっても同じだろうと考えている人もいます。もしかしたら実際にそうなのかもしれません。だけど、人文学は少なくともそういう学問ではないのではないかというのが私の意見で、もちろん平準化できるところもあるけれど、でも例えば、哲学概論とか史学概論、文学概論というような授業が、だれがやっても同じような授業になるかっていうとそうではなく、人文学では相当教員の個性が出てしまうのではないかと思うのです。
- B: そうですよね、問題意識みたいなのは共有できないですよね。
- E: できないですし、教員のテーマが有する地域性とか時代性に縛られてしまいますがね。スーパーマンみたいな人はなかなかいないじゃないですか。全時代の全地域をカバーできる超人みたいな人はいないので。
- D: いたらすごい。
- E: だから結局、その人の得意分野で話すことになる。それを文科省がだめだと言ってしまう

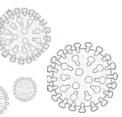


- のであれば、それはもう本当に無理難題ですよね。
- B: クオリティコントロールはすべきだと思うんですね。明らかにクオリティの低い授業をやってる人もいると思うので、そういうのはやっぱり少しでもなくすべきだと思う。あと、国家試験があるからグループワークなんてできない、みたいな分野もありますね。確かに、医師免許とか看護師免許とか、命を預かるような資格の授業で、教員の個性とかによって授業内容に極端にむらがあったりするのも問題だと思うので、何でも特殊講義にすればよい、ということではないですけど。問題は、教員の職人性を一律に悪とみなして、ダメな授業としてレッテルを貼ってしまう傾向だと思います。
- A: 情報を教えるのは親和性が高いかもしれません。
- B: まあ、そうですね。
- A: これから、例えば研究とともに教育もしなければならない、その大枠を教えるとか、情報化対応について教える、それは1つ、やりやすいかもしれません。
- B: まあ両輪だと思うんですけどね、繰り返して言うんですけど。そういうそれこそ個性が潰されるというか、教員の個性を出すのは悪、みたいな感じなのはちょっとね。個性出し過ぎて破綻しちゃう人とかもいるんでしょうね。
- A: そもそも個性的な学生に対応するのに、個性と個性をぶつけなければしょうがないというのがありますけどね。
- B: この先にあるのが教員免許じゃないですか。大学の授業でも、教員免許的なものがあったほうがいいかなという分野もありますけど。
- A: 無理ですよ。大学の教員免許を設けると、議員が選挙に落ちたので大学の特任教授をやらせてもらいます、というようなことができなくなるから。
- B: それが大学だったはずですよね。それこそ1つ高い能力を持ってる人を集中講義とかで呼んで。
- A: 今は、実務出身者の講義を何割みたいな規定がありますよね
- B: 1割ですね。
- A: だからその意味では、大学の教員免許という方向には今のところは進んでいないのかな、と。
- B: そうですね。あの人たちまったく使えないですからね、そういう意味では。
- C: たとえば、経済学は理論が先にあってそれに沿ったモデルをつくって、非合理的なことでも全部合理的に説明してしまう学問なのです。人文科学も確かに理論はあるけれど、結局人間がやることは個別にみると全くもって合理性がない方が多くて、その合理性のない中から「人間とは何なのか」ということを探求していくのが人文科学だと私は考えています。しかし、大学教育が画一的になってしまふと、合理性ばかりが重視されて、人文科学の面白みがなくなってしまうのではと危惧しています。学生の中には、きちんと話してあげれば、そういう人間の非合理な側面に興味持ってくれる子はいっぱいいるわけで、それが可能なのが特殊講義なんだと思いますけどね。私自身も受けた授業で、いい加減な授業に腹立たしく思ったのも、逆に心に残っているのも特殊講義なんですね。
- B: 標準化しなきゃいけない分野って結構あると思いますし、スキルとか一定の知識をとにかく詰め込まなきゃいけないとかいう授業も当然あるので、それはもう全然否定ないですけどね。
- E: もう1つの座談会の方でも話題となったのですが、日本のTA制度はなんちゃってTAなのですよ。もし授業を標準化させたりしていくことが方向性の1つだとして、かつ教員に対してこれだけ労働が強化されている中で疲弊しないようにするには、もちろんこれも最終的には予算がつくかどうかという問題もありますが、大学の教育力をあげるためにTAを活用する必要があると思います。TAが

- 実質的に教えるチュートリアルを整備する。アメリカの大学ではしっかり分かれているではないですか、レクチャーとチュートリアルとで。日本では分かれていないので、TAのやる仕事は資料整理や採点補助のようなただのアルバイトになってしまっている。そこをちゃんと整備すれば、特殊講義でいいとおもうのですよね。そこに TA が張り付いていて、授業でわけのわからないことが話されたけれど、あれはどういうことですかということを、TA と学生たちが徹底的に議論する。少し年上の TA のお兄さんお姉さんに教えてもらって、「そうだったんだ！」となればよいですよね。そうすると、特殊講義でも、教員が話す部分がだんだん面白くなっていくような好循環ができればいいんじゃないかなという話題でした。
- C: 昔はそういうのを、ドクターとかオーバードクターと話してたんですよね。
- B: そうそう。
- A: 師範代がいましたよね。
- E: ^{ぬし}主と呼ばれているような人たちがいてね。
- B: アメリカが強いのは TA をちゃんと組織化してやっているからですよね。先生がいて、その下に TA が、大きい授業だと 10 人とか 20 人とかいて、教員が講義を話す段階でもうかなり学生が暖まっているような状況が作られている。
- E: あとシステム化しているという点では、ゼミ生でアメリカの大学の博士課程に留学した学生がいますけれど、さっそく向こうで RA や TA をやってます。それは奨学金受給の義務になっていますよね。だから博士課程では、TA をやっていれば奨学金があり、アルバイトしなくてちゃんと勉強できるし、しかも TA をやることで実質的なその教育経験が積み上がっていって、教員としても非常に経験値が高くなっていくという素晴らしいサイクルができるがっているのですよね。それが日本では、都合よく切り貼りのように、TA をつかうものだから他の部分との整合性があつ

てないです。日本でいうと学振 DC をもっと増やして、彼らに色々な大学の TA をやってもらえばよいのでしょうかけれどね。それこそ 3 倍くらいに増やして、その代わりどこかの大学で TA をお願いすると。

- C: コロナになって大講義がどうなるかもわからぬし、今後どうなっていくのでしょうかね。オンライン授業で TA って要りますか。
- E: 要ると思いますよ。色々な組み合わせがあると思います。いろいろなパターンがあって TA の使い方も違うと思うのですけれど、私の場合は、春・夏セメスターに漢文を読む古典講読の授業に TA をつけてもらいましたので、最初の回にどうやって訓読するのか、どうやって語彙を調べるのかといったことを TA に実演してもらったのです。そうすると受講生はやりかたをすぐに覚えて、レジュメを作って発表してました。途中でどうしても読めない文字や表現が出てきた場合には、まずは TA の意見を聞いたり、彼と会話したりしました。
- C: 実演というのは、要は発表者をやってもらったということですか。デモンストレーション的に。
- E: はい。デモです。受講生が読んできた時も、TA にも隨時意見を求めて、TA はこう考えるということを話してもらいました。また、受講生が困った時にも、まずは私と TA が議論してみると、みなもその議論の輪の中にどんどんはいってきてくれたのです。少なくとも一人はすぐに話を振ることができる人がいるということにとても助けられました。
- B: 個人的に、教員 2 人体制というのはやるべきだと前から思っていて、研究者 2 人の対話を学生が見るのはかなり教育効果が高いと思うのですよ。
- E: こういうふうに質問するのか、ああいう風に見るのか、そこがポイントなのかを 2 人の対話を聞くなかでわかってくるのですよね。TA と議論することで見せて教えると。
- C: 見せて教えてるのですね。



- E: こちらが教えるというより、受講生たちが自然に読み取っているのですね。
- C: 要は、さっきの話じゃないけれども、われわれがオーバードクターやドクターなどの師範代が報告するのを見て、ああこういうものかと思ったのと同じなわけですね。
- E: そうです。しかも、我々は師範代のような人たちのするどい突っ込みの端々を覚えておいて、どういう辞書や工具書を使うのかを知りましたよね。そういう状況を潜り抜けてきますよね。その易しいバージョンみたいな感じです。
- C: 再現しているわけですね。なるほど。
- B: TA などに予算を使うのは、すごく必要だと思いますね。TA を使えない授業とかもあるのでしょうか。

* 大学経営の問題

- A: 予算関係では、これからかなりの大学で経営が相当厳しくなるでしょうね。
- B: なると思いますね。アメリカの大学が危ないって話は、この間アメリカの先生ともしました。
- A: 日本も大変ですよ。W 大学では学生に情報通信環境整備の補助金を出したのに加えて、試験会場貸し出し収入などが無くなった影響で、来年度以降の新規人事が当面凍結になったそうです。留学生で経営を支えていたようなところは、これから大変なことになるでしょうね。
- B: なるでしょうね。アメリカでは、教職員のレイオフが始まっている、という話もあるみたいです。
- A: 日本でも、親御さんが飲食業をやってたりするとつらいですよね。旅行業界とかも。
- B: 後期の授業料納入がそろそろくるじゃないですか。あれがちょっと怖いですよね。私立大学は。
- A: うちでも、今年は例年に比べて、春すぐに休学する学生が多くったような印象があります。

- やはり色々と影響はでているでしょうね。
- B: 立命館大学新聞社の調査（「【学生の意見割れる】Web・併用・対面、それに拒否感『本紙調査』」 | 立命館大学新聞社」<https://ritsumeikanunivpress.com/08/19/4888/>）で、1割の学生が退学を考えている、といったアンケート結果が出てましたね。対面授業の希望者とオンライン授業の希望者がほぼ同数になった、という結果も出ていましたね。
- C: どうするか考えているが 7.5%、休学を視野に入れている学生が 9.8%、休学を視野に考えているという学生が 25.6%。退学をしますと本格的に考えてるのが 2.3%。ただ 3 万 2 千人のうちの 1,414 件の有効回答。
- B: そうですね。ただ、立命館大学新聞社の調査なので。
- C: 学生新聞。
- B: これが、どれくらい実態を踏まえているかわからないんですけど。
- A: 実はうちのキャンパスのアンケートにかかわらされて、その速報値が上がってきたところです。退学・休学関係は聞かないで、どのように授業を受けたかを中心に聞いたのですが、例えばですね、自分の個室からオンライン授業を受けたのが 8 割でした。
- C: それは一人暮らし家族と一緒にというのは関係なくですね。
- A: 自宅が 7 割くらい、一人暮らし 1 割ちょっとくらいでしたから、自宅と一人暮らしの総数とほぼ一致していますね。
- C: 自宅の方が多いんだ。
- A: 今は自宅が圧倒的ですよ。
- B: 地方からの受験生が減っちゃっているんですね

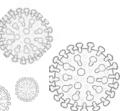
立命館大学新聞社の調査

- よね。
- A: 早稲田や慶應でさえも、実質的に関東ローカル大学になったと言われていますよ。ただ関東の人口の分母が大きいので、偏差値もその分高くなるということだと思います。
- B: でも、こんなに大学教育について考えたことはなかったですよね。
- A: なかったですね。そういう意味ではよい機会になりましたね。
- B: だから今のタイミングを逃すと、さっきEさんが提案されてたようなTAをもっと導入しよう、みたいな話も、たぶん動かないと思いますよね。
- A: ただ、これから絶対に大学の経営が厳くなるので、逆に難しいかもしれません。
- E: 別の座談会の時に出たのは、専任の語学の先生はよいとしても、非常勤の先生が切られるかもしれないという危惧です。また、TA化してしまうというのか、同じ数のTAを雇って、結局給与全体は抑制してしまうというように本来とは違う形でTAを使われてしまうことも危惧しますね。
- A: ありますね。語学の座談会の時にも上がつてましたね、まずは交通費から切られるんじゃないとか、とか。
- C: 交通費というか通勤手当という形になると、就業規則を改正しないかぎり、払わないといけないでしょう。
- B: それは国公立の話ですか。
- D: そうですね。
- C: これから改正を入れてくるかどうかですよ。当局が。

* 遠隔授業のマニュアル

- A: ところで、皆さんの大学の情報セクションなどが作っているマニュアルは、使いましたか。
- B: 私が作っていました。
- A: それならば完璧ですね。
- B: 完璧じゃないんですけど。でも、『電腦中国学』を作ったときのスキルが非常に役に立ちまし

- たね。スクリーンショットを撮って、①・②・③と番号をつけて、手順の説明を書くのが、何も考えずに機械的にできたので。
- A: そうなんですよ、情報セクションの人のマニュアルって、ここまで書かなくても分かるだろう、で作っちゃうので、全然分からんんですよね、初心者には。逐一、ここを押したらどうなる、そうしたらどうする、って書いてあげないといけないんですが、それができない。私も必要なマニュアルは全部自分で書いて、画像に数字を乗せるのも PowerPoint に画像を貼ってスライドを画像出力するのが一番楽だと気づいたので、それでやっていました。あともう1つ分かったのが、今どきはビデオマニュアルを作ったほうが速いし、分かりやすいということです。
- B: そうですね。私といっしょにマニュアルを作ってくれた先生は、ひたすらビデオマニュアルを作っていました。途中から音声すら入れなくなって、マウスの動きだけ見ればよい、という、1分くらいで終わるビデオマニュアルを、いっぱい作っていました。
- A: ビデオマニュアルの方が、作りやすいと言えば作りやすいんですね。操作を画面録画するだけですから。
- C: 失敗したらどうするんですか。編集する？
- B: やり直し。数分の動画だから絶対、やり直した方が速い。
- A: 私はスクリーンショットを並べて動画化して作りましたね。それこそ Windows フォトで、学生向けのビデオマニュアルを2・3種類作りました。
- C: PowerPoint のスライドが流れているようなイメージですか。
- A: 動画としてはね。1画像5秒ぐらいでキャプション付きで、ここをタップします、次はこうなります、みたいに並べてBGMを載せた、そんな動画です。
- B: マニュアルの作り方もそうですが、わからない人が何にひっかかるか、に関するノウハウがたくさんたまっていて、やはり漢情研



- を 20 年やってきたのは伊達じゃないなと思いました。勘が働くんですよね。
- A: そうですね。～というメニューの～をクリックしてください、という書き方だと分からないんですね。ここを押すとこういうのが出て、上から何番目にこういうのがあるから、それを押しましょう、というところですよね。
- B: そういったことをきちんと書いておけば、割と失敗しないし、失敗しても何を失敗しているのかがだいたい把握できます。これを言つたらアレですけれど、事務の人が作ったマニュアルは、全然使えないですね。
- A: 本当に使えない。
- B: しようがないなって思うんですけど。
- A: うちでは、授業が始まる 1・2 週間前になって、独自 LMS のストレージ容量が教員 1 人頭単純計算すると、「manaba」よりはずっとましでしたが、それでも何十 MB しかないと言われました。そうすると、語学で手書きした課題を撮影して、どんどんアップさせていくと 1 週間でいっぱいになってしまふ、となつたので、大学が契約している Box なり G Suite などで代替することになりました。そうしたら事務がマニュアルを送ってきたのですが、個別のファイルに共有を設定して配信する前提の説明なのですよ。フォルダーに共有設定をかけて、しかも学生のアドレスを全部確認して招待してしまえば、一々リンクを貼りつけなくて済むから楽なのに、そういうところが想像できない。だから私は、自分のところの中国語専任・非常勤向けに、その辺を全部マニュアルに書いて、できるだけ省力化できるようにしました。他学部の中国語も、結構、私のに乗っかってやっていたようですが。
- B: 教員向けのマニュアルについて、事務の人たちもこんなに真剣に考えたことはなかったんじゃないでしょうか。上から目線ですけど、職員さんのマニュアル作成スキルも、今回、結構上がったんじゃないかなって気はしますね。マニュアルへの依存度が高くなつたので、マニュアルがちゃんととしていないと理解して

- もらえないというのがわかつたんじゃないでしょうか。
- A: 私はあのマニュアルでは通じません、と言つたんですけれどねえ。
- B: 質問電話が掛かってきたりしないですかね。うちは事務に掛かってくるんで、わかるんですよ。
- A: ああ、事務から、中国語は先生が完璧に統率してくださったから、全然質問が来ませんでした、って言われたのはそういうことか。教員が混乱したのは伝わっても、何が悪かったのかが分かっていない、というべきですかね。
- B: 何も問題がないと反応がないので、かえってわからないんですよね。しばらくしてから「あのマニュアルでできました」みたいに感謝されたりするんですよね。ともあれ、マニュアル作成は、面倒でしたね。
- A: 事務も、ドキュメントのマニュアルを作るのなら、ビデオマニュアルを作る、というのが、対応として効果的なのでは、と思いました。
- B: オンライン教材なんて、誰も作ったことないですからね。
- A: 今回は本当に状況がどんどん変わっていって、情報がどんどん上書きされて、錯綜して、それをどういうふうに一元化するかというのが課題になると思ったので、私は自分のサーバに Wiki を立てて対応しました。それを見ていない別のセクションの先生が、事務方の公式マニュアルを見てやつたけれどすごく苦労した、と愚痴っていましたから、逆に自分のマニュアルはそれなりに役に立つたのかな、と。だから、春学期のオンライン授業は、何とかなつたのかもしれません、もっとやりようがあったのも事実でしょう。

* オンライン授業の実施状況と成績評価

- B: 皆さんの大学では、教員がどんな授業をしているか、途中でチェックしましたか。
- D: ないです。

B: 先生から課題が来ないんですけど、といった問い合わせが学生から来るので、うちは事務の人がLMSの利用状況だけ、モニタリングしていました。

A: うちはやっていませんね。

B: これを皆さんに聞いたのは、文科省が出している文書（「本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について」https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxi_kouhou01-000004520_1.pdf）で、「大学等として、どの授業科目が遠隔授業等で実施されているかなど、個々の授業の実施状況について把握していること」と書いてあったからです。この「把握」っていうのが、どの程度のものなのか、よくわからないんですが。

A: うちは、やれないでしょう。

B: まあ、教員の授業の不可侵、みたいなのもありますよね。

A: それもありますし、学生への伝達には一応LMSを使うことになっているのですが、必ずしも徹底できていなくて、メールやLINEとクラウドで対応した人もいるので、モニタリングはできないんですよ。かといって、うちは中国語だけで非常勤が30人弱いるから、とてもじゃないですけれど、専任教員が全員をチェックするのも無理です。普段の教室ですと、学生が「あの先生、全然やってないですよ」みたいなことを言ってくるのですが、この状況になるとそれも機能しないので、なかなか難しいところがあります。

B: 学生に対する課題の量が多すぎて大変だ、という話があったじゃないですか。多分、そういうのが念頭にあるのかな、とも思うんですよね。

A: やり過ぎですか。

B: やり過ぎ。このテーマだったら500字では無理だろう、と思って、2,000字と言っちゃうわけですね。

A: 学生から聞いて面白いと思ったのが、教員によっては、レポートを出し慣れていないらしくて、レポートのタイトルがわけがわからな

い、と。課題が抽象的すぎて書きようがない、そういうのがかなりあったみたいですね。

B: そうでしょうね。

A: 今まで一発試験、あと講義だけだったのに、今回は途中でレポートなりアクションペー‌パーなりを課さないといけない、その時に何を書かせたら良いか絞り込めておらず、抽象的な課題にしてしまい、学生が何を書いたら良いのか分からなくて混乱した、と。

B: 先ほどの話に戻りますけれど、その先生の授業が、仮に今までうまくいっていたのだとしたら、先輩が教えてくれたりとか、教員の指示以外に情報が流通していた、という面もあると思います。先生の方も、そこそこ良いレポートが出てきていたので、自分の指示の仕方に問題があるとは気づかなかった。

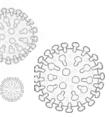
A: 可能性はありますね。

B: 実際、オンライン化すると、細かく説明しないと学生が書けない場合があるようです。また、教員が採点する際、どういう基準で採点するのかが明確でない、という意見も聞きます。要するに、ループリックみたいな考え方定着してないので、そういう問題も起きるんだと思います。教員の課題提示の能力が低いということですかね。私も人のことはあまり言えないのですが、教え方があまり上手じゃない先生の評価が、極端に低く出ちゃった、というのはあるのかもしれないですね。

A: 難しいですね。今、ループリックの話が出ましたが、語学の座談会でも、今後、ある程度、ループリックとかいう方向に行かざるを得ないだろうと話したのですが、でも実際どうですかね、ループリック。あれはあれで、やり出すとそれなりに手間が掛かりますよね。

D: いやあ、やりだしたら死ぬでしょうね。

B: あれは割り切りのツールだと思っています。そんなに単純な話じゃないけれど、割り切って単純な評価にしますよ、という宣言じゃないでしょうか。本当に質的な問題とか考えたら、ループリックに落とし込むのって多分無理じゃないですか。



- D: 無理。
- B: 相当大変ですよね。だからあれは、学生と教員の間で合意を取りながら、雑にするためのツールだと私は思っているんですけど。
- D: 確かに。
- B: だから逆に、ループリックが妙に称揚されるのには、ちょっと違和感があります。
- A: 私は秋になったら試験をやって、それで成績をつけるつもりですが、一応それができない時の対応策もいろいろと今から考える必要があるって、それに来年度以降も同じですからねこの調子だと。
- B: 東京はそうかもしれませんねえ。
- A: 難しいですね、色々と。評価の方法についても、網を広げていろんな方法を用意しておかなければいけない。オンライン試験の方法とかもそうですし、ループリックのような評価も考えていかなくてはならないし、やることが増えますね。
- B: 増えますね。オンライン教育で教員は楽をしている、とか言われると、ちょっとムカッしますよね。
- A: ぶっちゃけ授業なんて、教科書持つて教室に入つて、その場でこの説明はこうだな、と適当にやっている方が遙かに楽ですからね。
- B: そうですよね。まあ、ノウハウが蓄積していますからね。
- A: なんですよ。そのノウハウをスライドにうまく落とし込めれば良いのですが、難しいところがありますね。

* 教員のITスキル向上の必要性

- B: こうなった以上、もう変わるしかない、というところがありますよね。だからこれから的学生は、教室で学ぶ以外の学び方がこれまで以上にポピュラーになっていくって思つてもらわないとダメだし、教員もそれをできるようにならないといけないと思います。
- A: そうですね。PowerPointというのも、今回遠隔授業をやってみて改めて実感しました

が、40代半ばから上の世代が受けってきた教育は、PowerPointを前提としているんですね。40前後から下の世代になると、ITブームで情報処理入門授業を受けていたり、大学院時代の発表などでPowerPointを使わざるを得なかつたりで、ある程度知ってるんですけども。だから、その上の方の層の人たちへの対応が今回大変でした。

- B: 別にPDF+音声とかでもいいんですけどね。
- A: いいんですけどね。でも結局、PowerPointと大して手間が変わらない。
- B: そうそう。手書きでレジュメを作つて、PDFにして、あとはそれにあわせて音声教材を作るのでも、まったく構わないんでしょうけれど。この半年は大変でしたね、本当に。
- A: 大変でしたね。ただ来年度以降は、語学座談会でも言ったのですが、高校とか予備校とかで、いろいろ形で遠隔授業を受けてきた学生が入ってくるわけですね。
- B: そうでしょうね。
- A: そういう子たちが、どういうふうに大学のオンライン授業に向き合いますかね。もしかすると予備校などである程度、専門スタッフがいて、きっちり作られているようなを見てきて、大学ショボいじやん、と思われてしまう危険性もあるわけですね。
- B: あると思いますね。うちの子は今、塾に通つてますが、その塾から来るオンライン教材は、ホワイトボードの前で授業するのを録画したものなんですね。これとPowerPointに音声を吹き込んだものが比較されちゃうんだな、と思いましたね。同じオンデマンド教材でも、一つの授業に対してかけている人数が全然違う。塾の動画には、普通にカメラマンがいる。もちろん内容はいろいろ差があるんでしょうけれど、基本的に個人の努力でやっている大学と、企業として組織でやっているのとでは、やはり違うな、という感じですね。
- A: 大学では、W大などはスタジオがいくつかあってオンライン教材を撮ってくれるのですが、こういう状況になつしまうと、全ての

授業の動画を作ることは不可能ですし、スタジオも閉鎖されたので、結局、個人個人でやらざるを得なくなつたそうです。こうしたところで、クオリティの確保というのは難しいですね。

B: 大学でも、できる人は、自動追尾のカメラなどを自分でセッティングして、練習も何回かして、授業の録画と PowerPoint のスライドをビデオ編集で同期させる、みたいなことを個人でできてしまう。でも大部分の人は、個人ではせいぜい PowerPoint に声を吹き込むぐらいしかできない。教員のスキルの差が、如実に教材に影響してしまう、みたいなことが起きてしまう。紙の教科書は、出版社さんが作っているので、内容の質にはもちろん違いがありますけれども、少なくとも商品としてのクオリティは大きく変わらないじゃないですか。でも、オンライン教材の場合だと、教員のスキルにすごく依存する。今後はオンライン教材を作る会社ができるかもしれません、そんなところにお金を払う余裕は今の大学はないでしょう。となると、やはり教員個人のスキルに依存して、それこそピンからキリまで出ちゃって、それを見た高校生ががっかりするみたいなことはあるんじゃないでしょうか。

A: 確かに。もしかすると限定的に対面授業を再開して、それを録画した教材を配り始めるかもしれません、それでもやはりプロの撮ったものには絶対になりえない。

B: 絶対に勝てないですよ。ユーチューバーは偉いなと思いましたもん、今回。

A: 思う思う、本当に思います、あれは。

B: あの人たちは凄い。

A: 結局、ちゃんとした機材を揃えていくと、どんどんユーチューバーに近付いていくんですよね。

B: そうそう。

C: 大学でユーチューバーを正規の職員として雇つたら。

A: いやいや、みんながユーチューバーになるん

ですよ。

B: ただし自分の金でやれ、でしょ。

* 情報・教育インフラの問題

C: 今、Gmail とか Google ドライブとかに障害が出ているみたいですね。今日は Zoom において良かったですね。

B: 教育インフラを企業に依存している割合が、オンラインの場合は非常に強いので、ちょっと怖いなと思いますね。LMS が落ちた、という問題もそうですし、Google こけたら皆こけた、みたいになるリスクが今後続きますね。

A: 確かに Google も、4月頃に数日間調子の悪いことがありましたし、Zoom とか Webex とともに、日によってすごく重かったりしますからね。

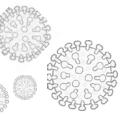
B: 研究・教育費がたくさんあって、良いパソコンを持ち、良いマイク、良いカメラを買える教員は、相対的に良いオンライン教材ができる。逆に研究費とかがない先生は、お金をかけられない。こういう、個人の財力に強く依存した現状は、教育インフラとしてどうなんでしょう。特に非常勤の先生の個人負担は大きいと思います。

A: 一部の大学では非常勤にも補助金を出していました。

B: そうでしたね。対面用の教室に黒板とマイクが用意されているように、オンライン対応の教室が各大学に 10 個とか 20 個とかあって、そこに先生がパソコン 1 台持つていったらオンライン授業ができます、みたいなのが、もしかすると本来の姿なのかもしれない、と思いますね。

A: あるいはオンデマンド教材を、パッと作ってもらえます、とかですね。

B: そうそう。だから教員は授業のための準備さえしっかりとしておけば、あとはインフラは職員さんが準備してくれているというのは、多分普通のあり方なんでしょうね。



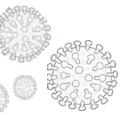
- C: 全部教員がやっていますもんね。
- B: そうですよね。
- A: そこも緊急事態対応で今は仕方ないとしても、どういうふうにニューノーマルを持っていくかという問題がありますね。
- B: 大学のキャンパスの必要性はみんなが訴えているわけなんですけど、現実問題としてコロナが蔓延して使えなかつたらどうしようもないわけです。それで今回は、緊急対応的に個人の持ってる財力とスペックだけに依存するという、綱渡り的なことが行われた、ということだと思います。今後もこういう状況が仮に続くのであれば、大学にスタジオを作っても入れなかつたら使えないで、スタジオを作るだけでなく、教員の個々のスキルを高め、機材やソフトウェアをパワーアップしてもらうような方向をやはり考へないといけないのかな、と思います。これは非常勤も含めて。
- A: 日本では現場対応で何とかしなければならないという、いつもの問題ですね。
- B: そうそう、現場の頑張りで乗り切ってしまいました、みたいな。でも実際そうですよね、今回も。
- A: 今回もそうですね。文部科学省からして、色々と指示は出しているけど、具体的に何をどうやるという話になったら、彼らは何も考えられていないと思いますよね。
- B: そうですよね。ひたすら単位制の話しかしてない、時間だけ確保しろ、それしか言ってない。
- A: それと、日本も基本的人権としてインターネット接続権を確立してほしいですね。
- B: そうですよね。かなり人権ですよね。
- A: 生活保護でもクーラーが認められるようになり、基本的な最低限の生活の一部になった、というのと同じようなものだと思うのですが。
- C: クーラーが無かったら死にますよね。
- B: インターネットは、本当に人権になってきていますよね。公的情報とか、今どんどんインターネットになっているので。
- A: そうですよね。そもそも電子政府を本気で実現するつもりだったら、電子政府に繋ぐ権利

- を保障しなくてはいけないはずですからね。
- B: そうですね。
- A: ところが今年の場合は、e-Tax が Chromium に対応していないおかげで、日本だけ Edge のアップデートがされなかった。そのせいで Blackboard・Box その他、アメリカ系の LMS などで、日本版 Winodws の Edge がサポート対象外の旧版ということになってしまい、不具合が多発したんですよね。国税のあの旧 IE 決め打ちシステムには困ったものです。今度のマイナポイントのオンライン申請も IE 決め打ちでしたね、もう Edge がアップデートしちゃったから。
- B: うわあ。
- A: だから、10 年くらい前の IE 前提で作ったシステムをずっと使い続けている政府に、間接的にオンライン授業を妨害されたことになるんですよ。
- B: 誰も得しないじゃないですかね。
- A: 本当ですよ。
- B: もしかするとそれで袖の下を貰ってる政治家がいるのかもしれないけど。今、シェアは Chrome が一番多いんですよね、たしか。
- A: そうですね。Edge がこの間、Chromium ベースのニューバージョンになりましたが、あれが海外では去年の 11 月か 12 月にアップデートされていたんだけども、日本は e-Tax が IE と旧 Edge でしか動作しないので、確定申告が終わるまでは旧版 Edge のままということになり、その確定申告の締め切りが新型コロナの影響で伸びたので、日本でのアップデートが 6 月にずれ込んだ、その間、学生がアメリカ系のクラウドや LMS を使うときに、いろいろな問題が発生した、と。
- B: 何か胃がキュッとなりますね、そういう話を聞くと。繋がりません、という学生の苦情がどかっと出て、原因を必死に探している教職員の気持ちを思うと、本当に辛いですね。
- A: だから政府は、確実にオンライン授業の足を引っ張っていたのです。特に国税が。
- C: そもそも使いにくいシステムですからね、あ

- れは。
- A: そう、e-Taxは、本当にやめてほしい。
- B: そんなに君らは源泉徴収票の形が好きか、と毎回思いますね。ウェブページを紙の書類と同じデザインにしたりとか。わかりますよ、紙の源泉徴収票を持って入力するわけですから。でもそもそも、何のためにマイナンバーを職場に提出しているのかと、思うじゃないですか。
- A: 入力するときは、紙版の書式なんて関係なく、フォームからどんどん入力して、出力する時だけ書式になっていれば良いのにねえ。
- B: そうそう、確認するときとかね。
- A: その抽象化ができないんですね。それもやはり、情報リテラシーの問題になるのでしょうか。Excel方眼紙が消えない日本。
- C: そういえば、図書館が電子化をしようとした最初の頃って、何とかして書棚から本を取り出してそれを見てページをめくるのを、何が何でも再現しようとして、珍妙なデジタルアーカイブが山ほどできた、というのと似ています。
- A: 確かに、ビジュアル的に本が並べてあって棚から下ろす、みたいなのがありましたね、昔は。
- C: こだわるのはそこじゃないでしょう。
- B: 対面授業をオンラインで再現しようとしたのと、同じかもしれないですね。「常識の更新」というのが最近よく言われますけれど、これまでの常識を更新して新しい常識にしないといけないんでしょうね。
- A: そういう意味では、大学に入ってきた学生は、大学ではPowerPoint+音声、これでいいじゃん、となる可能性はありますよね。
- B: そうですね、それこそ常識の更新ですよね。教室で先生が板書するみたいなやつとは違う学び方があるっていう。
- C: 逆に戻った時に混乱が起きるかもしれません。
- B: ははは。よく言われますよね。何で対面授業は1.5倍速再生できないのかって思う学生が出てくる。オンデマンド教材に比べて、すごくかたったるく感じられる。オンライン教材を

倍速で聞くのを許さない教員もいるみたいですが、私は全然良いと思っています。1.5倍速再生でちゃんと把握できるのなら、やっぱりそちらのほうが効率的ですよね。なぜITによる効率化をこんなにかたくなに拒否する人がいるのか、まったくわからないですね。時間が増えるのだから、よいと思うんですけれど。

- A: 根性論ですよね。甲子園のピッチャーの球数を制限しないのと、結局同じことですよね。科学的根拠は全然ない。
- C: 大学の様々な事務のシステムでも、電子決裁が可能なのに、わざわざ紙での決裁も併用するというようなこともあります。
- B: 10万円の特別給付金も、IT化ができていなかったみたいですね。電子申請を印刷して、職員が目でチェックしていたとか。
- A: うちは、そもそも紙オンリーでした。
- C: 法令制度上、必要ではないけれど、監査で聞かれた時に備えて念のため集めておくような書類が多いですよね。
- B: まあ無駄ですねえ。
- C: コロナは、ある種そういう要らないものの尾っぽを切り捨ててくれるかもしれませんね。でも、収束したらまた戻るかな、こういうのは。
- B: でも、だいぶ減りはしましたよね。大学に行かなくても結構仕事ができる。行かなくても済む、というのがわかった。
- A: 会議がリアルじゃなくてZoomなどでも大丈夫になった、これは本当に大きいですね。
- B: 出張もしなくて良くなりました。
- A: リニアモーターカー、やはり要りませんね。
- B: 全く要らないですね。海外とのミーティングは、時差の問題もありますけど、国内はZoomみたいなので十分ですね。
- C: 国内旅費が出なくなるかも。
- B: 一括して出なくなると困りますが、不要なものに出さなくなるのであれば、コストが減るんじゃないでしょうか。その分、オンラインミーティングをストレスなくできるようなインフラにお金をまわしてほしい。高層マン



- ションに住んでいるとオンライン会議に出られない、みたいなことが起きてましたからねえ。
- A: そうですよね。高層マンションに住んでるような人は、むしろモバイルルーターを必要に迫られて買ったらしいですね。
- C: 高層でなくても、マンションは弱いような気がします。
- A: オリンピックを持ってきた時に、東京に公衆無線 LAN がないことが問題になるんじゃないかと言われていましたが、むしろ東京に来る人が逆にローミングで対応するようになってしまったので、うやむやになりましたよね。それがむしろ今度は、小・中学校のオンライン授業を受ける環境の未整備に直結しているんですよね。
- B: タブレットってかなり普及していると思うんですよね。日本人は iPad が好きみたいですね。
- A: チャイナパッドだって、Kindle の Fire タブレットだって安いですよね。
- B: 安い安い。数千円で買えますからね。
- A: だから、Wi-Fi さえあれば、それなりにオンライン授業を受けられる環境は、すぐできると思うんですよ。
- B: 今の小学生だったら、すぐに Zoom とかはできるようになりますよ。一瞬でできるようになると思います。だから、本当にインフラですよね。
- A: アメリカだと、Chromebook を配って、Google クラスルームでやるのが、デフォクトスタンダードらしいですね。
- B: そうそう。キーボードついている方がね。
- A: Chromebook だって、3・4万で買えますよね。変に Windows でやるよりも、そのほうがよっぽど賢明なローコストな選択だと思いますよ。
- B: 昔の Surface くらいの感じで。今の Surface はちょっとリッチになっちゃったんで。日本には、なにか iPad 信仰があるみたいですが。
- A: あれを小・中学校のオンライン授業用に配布するのは、ちょっといただけませんよね、高いだけで、オーバースペックですよ、授業では。だから Google で、全部とりあえず済ませれば良いんですよ。
- B: それで良いと思いますよ。あまり Google を礼賛するのも何ですけれど。
- A: その都度、安くて安定して使えるものをちゃんと選んで使えば良いんですよ。
- B: インフラ整備してね。
- C: 5G より Wi-Fi 整備してくれ、って感じですね。
- B: まあ 5G でもいいんですけどね。5G がタダ、みたいな感じでやってくれたら。
- C: 高いですもんね。
- A: なかなか難しいですね。公衆無線 LAN は、日本の警察が作らせなかったと、よく言われます。いろいろなところで、やはり昔ながらの手法から新しい手法に更新できていない。警察だって、公衆無線 LAN を認証付きにして、それでたどれるようにしたら、むしろ捜査に役立つのではないかと思うのですが、そういう方向に行けない。
- B: 悪くすれば、超監視社会ができますからね、みんなが Wi-Fi を使うようになったら。
- A: 日本はいろんなところが情報アレルギーだったのが、この機会に無理にでも使わざるを得なくなった、というところで、何かが良い方向に変わってほしいですよね。
- B: そうですね。それは期待したいところですね。コロナ禍が終わった後に、また以前と同じ日常に戻ったら、逆に絶望しますけどね。今この辛さが、少しでもプラスに変わってくれたらまだ救いがあるんですけど、何の変化もなかったら苦労したかいもない。
- C: 一般企業でも、緊急事態宣言の時にかなりリモートでいろいろできたので、これからもリモートをやるぞ、というふうになるかなと思ったら、非常事態が解除された途端に、すべてが普通に戻りつつありますね。やはりまだ日本人は、何よりも出勤してその場にいることがすごく大事なんですね。
- A: それもありますが、取引先などのすべてが対応しきれていないから、なんだかんだで、行

かざるを得ないんですよ。さっきの国税の話もそうでしたけれど、判子をついた書類を整える必要が出てきちゃうんですよね。後は中小企業ですかね。電子化はおろか、まだPDFって何だ、というレベルの人が相当いるみたいですから。

- B: 本当ですよね。大学教員は社会を知らないとか言われるんですが、Excel方眼紙を使っている社会のことなんか知りたくないよ、と思うときがあります。

A: そうですね。

- B: 以前、本当に悪気なく「社会人ってもっとExcelが使えるんだと思ってました」と言ったら、半ギレされたことがありました。

C: 誰に半ギレされたんですか。

- B: 普通の企業の人ですね。俺らは使える、みたいなことを言うんだけれど、話してみたら全然使えないことがわかって。

- A: 有名企業の本社企画部で、Excelで統計処理ができる人が一人しかいなくて、その人が退職して大惨事が起きた、とかいう話を聞きましたからね、そんなものですよ。

- B: それ、笑い話だと思っていたら、割と日本の常態なんじゃないかって思うようになりました。

- A: 常態ですよ。結局我々が教えている学生が、そのまま会社員になっていくのですから。

* 中国学情報化の課題

- A: 中国学というか、仏教とともに含めて東洋学というか、何をどうしたら良いと思いますか、これからデジタル化を推進していく上で。これまでには、中国でデジタル化が進んでいるから、否応なしにある程度対応しなければいけない、というところがありましたけれど、一方で、意図的にそこから目をそらしている中国学研究者が、かなりいるような気がするんですよね。

- B: 仏教学は、全国学会をオンラインで開催したこともあるって、オンライン研究会とかが一挙

に普及した感があります。このあいだも欧米の研究者と、時差をものともせずに研究会をやっていました。その時に出た意見としては、学会発表ではPowerPointを使って喋るんだから、いっそ動画にしてしまい、発表時間全部を質疑にしたらいいんじゃないのか、というのがありました。それはありますよね。反転授業の研究発表版みたいな感じで、最初にレジュメを配るだけじゃなくて、研究発表も全部オンデマンドにしちゃう。

- A: 日本中国学会は、オンデマンドでやりますね、今年は。

- B: ああ、そうなんですね。それはいいと思います。そういう提案を、ITに詳しいわけではない普通の研究者が言い出し始めてる、というところに変化を感じましたね。

- A: それとオンラインの教育リソース、研究リソースが足りないという問題に、どう取り組むべきか、というのがあります。学会があるいは業界として。

- B: やはり、論文とか研究書ですよね。

- A: そうですね、研究書がね。

- B: 先ほどの図書館の問題で、図書館資料のデジタル化というのは、やはり大きいかなという気がします。

- A: 学会などが、少なくとも論文のオンライン公開をしてほしいですね。まだまだ全部は、していませんよね。

- B: 歴史学がすごく弱いですね、論文のオンライン化って。

- C: 少ないです。古いところが全然無いですね。

- B: 図書館が使えないフランス語圏の若手研究者が、Facebook上で、PDFの交換をするグループを作った、というのがありますね。「～のPDFを持っていたらください」とリクエストすると、持っている人が送る、みたいな。簡単に言えば違法なんですが、それでもPDFのやりとりが大発生したみたいですね。

- C: 持っていたら、というのは、その書いた著者が、という意味じゃないんですね。



- B: そうですね。コピーは皆、それぞれ持っているじゃないですか。図書館が閉まって論文を書けない院生がそういうのを始めた場合については、やはり考えないといけないなと思いましたね。そういうことは違法だからやるなって、言いにくい面もあるじゃないですか。博論が書けない、ということもあるわけです。機関リポジトリみたいな形でオフィシャルなPDFの公開がもっと進めば、そういうのは減るんでしょうけれど。オンラインジャーナルだと、一本の論文をダウンロードするのに数千円を払わなければならなかったり、オープンアクセスにするのに著者が何十万円も払わなければならなかったり、といったものもありますから、お金がない院生にはいろいろ難しい面があります。常勤の研究者だったら、自分の研究費を使える場合もありますが。
- A: 日本にオンラインジャーナルのちゃんとしたのがない、というのも、1つの原因なのでしょうね。
- B: そうでしょうね。
- A: 大学が契約していれば見られるのだけれど、そもそも契約するべきジャーナルがないという。
- C: 日本のはいりません。
- B: まあ、紀要に上げておけばいいんじゃない、紀要是そのうち機関リポジトリに上がるから、それでいいんじゃない、みたいな、割とゆるい感じでやっているのはありますね。
- C: 国立国会図書館が雑誌もガンガン進めていたと思うんですが、あれどうなっているんですかね。保存のためだけで、別に公開するとか仕組みを作らないのですかね。
- A: 国立国会図書館デジタルコレクションの説明を見ると、「図書館向けデジタル化資料送信サービス」で、明治以降で刊行から5年以上経過した非商業誌を提供していますね。これは提携している大学図書館なら閲覧できるけれど、自宅からはダメですね。
- このような状況になって、ネット上で見られるのが紀要だけだから、学生がやたらと紀

- 要を引きまくるようになっているようです。何でこんな変な論を立てているんだろう、と思ったら、どこかの大学の紀要にそういう変な論文があった、という話を聞きました。
- B: 学生に対して、図書館に行きなさい、って言えない状況ですから、もう仕様がないですね。
- A: それと、4月に知り合いと半分冗談で話していたのですが、こんな状況だから我々、Wikipediaにテコ入れしよう、と。Wikipediaに学術引用可能な項目をどんどん増やすというのも、1つの手でしょう。
- B: まあそうですね。クオリティを上げるというのは、いろいろな意味で良いでしょうね。それこそ百科事典的に、ちょっと下調べするときに、ちゃんとした情報が下調べできたり、あるいは参考文献がきちんと載っていたりすれば。まあ、参考文献が載っていても、それが読めなかったら意味ないのですが。
- A: ニューノーマルに向けて、ということになると、皆がそれぞれICTを使えるようになった、あるいは使うようになった、じゃあその先に何をやっていくのかというのが、本当に問われるようになるでしょうね。
- B: そうですね。時間をかけてでも、今からでも、10年先20年先のことを考えて整備していくとダメだな、という実感ですね。さっきも言いましたけれど、やはり大学が今回それなりに対応できたのは、10年前20年前からインフラをちょびちょび整備してきたのが、今になってしっかりと生きた、というのがあると思います。

* 危機管理と研究活動の継続

- C: 結局は危機管理の問題でもあると思うんですよね、洪水だとか地震だとかそう言うのと同じで。大学としての機能をこういうウイルスだとか細菌だとか、ちょっとこれまで考えていないかったことではあるんだけど、バイオハザード的なものに対して、どういうふうに対

応して、その業務を遂行するか、研究・教育の最低限のレベルを維持するかっていうところが、やはり大事ですよね。そういう考え方でやっていかないと、また何か違う危機が来たとき、今度は破綻するかもしれません。

- B: 本当に、今回はたまたまうまくいった、というところがあると思います。うまくいった、というのが適切でなければ、帳尻だけは合わせた、みたいな言い方でもいいと思います。なんだかんだで今、後期から対面授業をやっても大丈夫、とか、来年の4月になったらコロナ禍が終わっている、みたいに考えている人も多いんじゃないかなと思うんですよ。正常性バイアスでしかないと思うんですけど。

C: 多いねえ。

A: 3年は無理でしょう。

B: 地域によって差はあるんでしょうが、卒業までキャンパスに入れないかもしれない、みたいなことは、誰も考えたくないでしょうからね。それはわかるんですけど、危機管理というのはそういうのを想定するってことですよね。

C: そうですね。そこまで想定できなければ、危機管理ではないですね。

B: そうそう。

C: 自分は関係ない、という意識なんですね。

B: 各大学にいわゆる教務系の事務セクションがあると思うんですけど、そこにクラスターが発生したら、大学の教育って止まるじゃないですか。

C: ありますよ。

B: でも、そんなのを想定していないじゃないですか。クリティカルなところが止まると、多分かなり悲惨ですよね。

C: うちの大学では3月中はみんな右往左往して、レベルに応じた段階的な危機管理策が出てきたのは、4月に入ってからだったと思います。危機管理って、やはり、まず最悪のことを想定してレベルを分けて考えないといけないんですけれど、こういう知識ってみんなに共有されてないんだと思いました。

B: 今年、日本中国学会が、2年連続開催中止になる可能性がありました。これって本当に象徴的な話だと思います。昨年の段階では、来年、絶対できるってみんな思っていたんですね。1年はしようがない。しかし、2年連続で閉じるのはありえないって思ってた。

C: 去年は何でしたっけ。

B: 台風。

A: あのときの対応は批判されても仕方ないです。もう2日早く中止を決められたはずでしたから。

B: 私も参加予定だったので、気をもんだ記憶があります。

A: 国立大学はじめいろいろな大学で、ドクター論文を出すのに全国学会の発表要件があるので、止められないのですよね。

B: そうそう。

A: 今回は、4月の皆がZoomなどを使い始めて問題が噴出していた時期に方針を決めたのでオンデマンドになったという噂ですが、今となっては、皆、Zoomとかに慣れてしまったので、リアルタイムでできたのかもしれませんね。

B: 学会の災害対応じゃないんですけど、コンスタントに開き続けるということに関しては、今回すごく良い教訓になったと思うんですよ。それこそ、台風でも止めなくていい学会とかね。台風が来ているから、急遽オンラインにしますみたいなのが、今後できるわけじゃないですか。

C: ああそう、緊急に切り替えます、と。

B: その準備をしておけばいいのかな、と思いますね。

C: 鉄道会社が、計画運休を始めたような。

B: そうそう、代替輸送を準備しておく、みたいなね。

C: いろいろな人も言っていますけれど、元に戻ると考えない方がいいんだけれども、やはりBさんがおっしゃるように正常化バイアスで、皆、元に戻るって考えているんですよね。

B: まあ、願望ですよね。



- C: それは戻れればいいけど。その辺は、うちの大学は本当にまともで、危機管理を始めたのはちょっと遅かったんですけど、4月以降の動きはすごく速くて、だから基本的な今の方針では、仮にワクチンができる、すべてのリスク要件が下がったとしても元には戻れない、全て人の大学滞在時間率を8割以下に抑える、オンラインなどを活用して完全に元に戻れるということは考えないようです。
- B: それは割と正しいと思いますね。
- C: 大学も責任ある立場の人次第のようで、緊急事態宣言は終わったんだから、通常のレベルでの出勤はあたりまえみたいなところもあるようですね。
- B: 先ほど言った「常識の更新」が必要だと思うんですが、すごく偉そうに言えば、それって学問の力だと思うんですよね。そういう俗情に惑わされないで、冷静に状況を分析して、論理的に考えて、それらに基づいてきちんと対策を打つ、というのが。やっぱり人間というのは弱いので、「そんなに人が死ぬわけないじゃん」「感染者が出たって風邪みたいなものだよ」と思いたいですよ。でもやはり、最終的には医学の研究者がきちんと答えを出すと思うんです。研究の途中では、データが出るたびにどんどん手のひらを返すけれど、手のひらを返すというのは、研究に対して誠実だということだと思います。人文系だってそうじゃないですか。「こんな新出文献が出ました」ってなったら、みんな手のひらを返すじゃないですか。だから、資料なりデータなりに基づくっていうのは、僕らのとるべき態度だと思うし、学生の気持ちに寄り添うっていうもあるけれど、そこはやはり学術的・学問的態度をとるべきだと思うんです。
- C: さきほど、図書館の自由との関係についておっしゃっていましたけれど、やはり大学図書館は利用を制限するにせよ、ちゃんと根拠に基づいてやらなきゃいけない。何の根拠もないのに、科学的根拠もないのに、1人1時間半だけとかをひとり歩きさせる。今はまあ

非常時だから良いけれど、ずっとこれが続くっていうのは私は大学の図書館としてまずいな、と思います。やはりそこは研究者もきちんと入って、それなりの科学的根拠に基づいて非常時のレベルとか、制限を決めていかなければいけないんだろうな、ということは思いました。

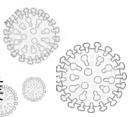
- B: そうだと思いますね。図書館情報学という学問分野があるんですからね。「中国学」学っていう、中国学をどうすべきかという学問はないので、それは中国学の人が考えるしかないんでしょうけど、中国学研究を止めないためにはどうしたらよいか、ということについては、学会として考えないといけないと思います。先ほど、アメリカではコロナ禍で大学が危なくなっている、という話をしましたが、それに関連して、若手研究者のポストが減ってしまうのではないか、研究活動がストップしてしまうのをどうすればいいのか、といった議論が出ています。そのなかで、オンライン学会を若手の研究者のために開こうという意見も結構出ているんですね。我々もやはり、若手が少なくなっている学界を、ますます若手がいなくなるような方向を持っていくのではなく、むしろこれを機に若手が増え、のびのびと研究発表をしてもらえるような環境づくりをやっていかないと絶対まずいと思いますね。教育もそうでしょうね。
- C: 漢情研として、若手の発表の場を確保しますとかどうですか。
- B: うちは発表してくれる人がいないので。
- A: したい人がそもそもいないから。
- B: そうそう。漢情研としては、例えば中国学系の学会がオンライン開催したいというときに、コンサル、あるいは共同研究をすることはできると思います。一緒に研究・教育のオンライン化について考えましょう、と提案されたら、これはうちの得意分野だから、マニュアルだって作りますよ、みたいな感じになると思います。なんだったら、『電腦中国学再入門』とかやりましょうか、みたいな。



新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

- C: なんとなく、次取る科研費の方向が決まった
ような。
- B: そう、中国学の強靭化。
- A: なつかしい。
- B: でも強靭化は今のキーワードじゃないですか。
国土強靭化。
- C: 学術情報基盤の強靭化。
- B: マジでそれだと思いますよ、本当に。図書館
がこんなに脆弱だと思っていなかつたじゃないですか。
- C: でもさっきの話じゃないですけれど、これ危
機感を図書館情報学にしろ多分あまり抱い
ていないですよ。
- B: 図書館は、感染リスクが他の施設よりも
ちょっと高い。モノに触ることが多く、長時
間滞在する場合もある、ということから、割
と早く閉めたじゃないですか。
- C: はい。
- B: それは正しかったと思うんですけども、その
後図書館は何ができるか、という議論はあり
ましたよね。
- C: どうしたら早く開けられるか、そういう議論
になってしまふんですよね、図書館情報学は。
- A: 大学はね、窓口で受け取ったり、教員向けに
郵送もやっていましたが、公共図書館はどう
ですかね。
- B: うちの大学は、学生向けにも郵送していま
たけど、人数が少ないので。
- C: 都道府県立図書館ではやっていたんですかね。

- A: その辺も、図書館のデジタルインフラ整備の
問題にも行きますよね。
- C: もう1つ、今回、貸し出しの対応が遅かった
のは、貸し出した人が感染者だった場合、返っ
てきた本に対してどうしたらいいんだ、とい
うのが凄く議論になったんですね。そういう
ノウハウがなかったという。
- B: 本にはウイルスが残っちゃう、という話はで
ましたよね。全部の本を消毒するわけにいか
ないし、1冊1冊拭くわけにもいかない。
- C: 紫外線の消毒機器に注目が集まつたみたいで
すけれど。
- B: 怖いですからねえ、図書館の中の人も。
- C: でも大学図書館の場合、本の劣化を促進する
ので紫外線の消毒器はちょっと無理だよな。
- B: それはそうですね。もしかすると漢情研で、
こうしたことに関する、いろいろな角度から
のシンポとかパネルとかを、やってもいいの
かもしれないですね。コロナ時代の学会運営
とか、コロナ時代の図書館はどうするかとか、
アフターコロナの学術教育とか。まあ電子化
しなきゃね、とかいう話になると思うんで
けど、結局は。あるいはそういう提言をして
いくとかね。それは必要かなと。
- A: それでは、今年度大会のテーマということに
して継続的にやりましょうか。
- C: オンラインになるんですかね。
- A: オンラインでやらざるをえないでしょうね、
今度の冬でしたら。



座談会②：少人数授業

◎ 概要

- ・日時：2020年8月16日
- ・参加者：
 - A：国立大学社会科学系学部専任教員。中国近現代史関連科目を担当。
 - B：私立大学国際学系学部専任教員。中国史や中国語の授業を担当。
 - C：私立大学外国語学系学部専任教員。外国語教育センターでの業務が中心。
 - D：私立大学外国語学系学部専任教員。現代中国事情や中国史の講義を担当。
 - E：私立大学社会科学系学部専任教員。人類学関係の講義を担当。
 - F：中国の国立大学人文学系専任教員。東北アジア近現代史関連科目を担当。

この座談会では、少人数授業の形式で開講された様々な形態のゼミ・演習のオンラインでの実施状況について、担当者が100分にわたり体験談や私見を語った。参加者6名のうち30代が3名、40代が3名であることからも分かるように、授業オンライン化への対応が若手教員と中堅教員からどのように感じられたのかの一端が窺える内容となっている。

座談の結果、共有されるに至ったことは、大きく次の3点である。第1は、基礎ゼミ（初年次教育ゼミや入門ゼミなど）のような低学年対象のオンライン実施の方式も実に多様だということである。これはそもそも各大学や教員における基礎ゼミの捉え方が相当異なることも背景にある。第2は、オンライン時代における授業は、様々な「コーディネート力」を強化する必要があるという点である。オンライン講義の利点は遠隔地の方をゲストなどで招いて授業に参加いただける点にある。また、Zoomを通じた海外大学との交流というオプションもありえよう。このようなコーディネーター力を通じて教育の質を高めていくことが今後求められると思われる。第3は、オンライン授業時代における教育力についてである。第1点と関連するが、リテラシー系の科目について共通のオンデマンド授業を推進することによって、教員の持つリソースをより多く専門科目に向けることができ、そのことが大学の教育力を高めることになるのではないかという意見で一致した。

* 担当講義の内容

A：国立大学社会科学系学部にいます。よろしくお願いします。既に「座談会の流れ」という文章をみなさんにお読みましたので、大体の趣旨をご理解いただいたということで早速本題に入りたいと思います。最も重要な趣旨の1つは、2020年4月・5月に急遽対応せねばならなかったオンライン授業、特に各種ゼミですね、1年生ゼミから4年生ゼミ、原典講読

とか史料講読とか演習などの少人数授業においてどういう対応をして、どういうご苦労をなさったのかということです。また、この経験をコロナ後において、いかにうまく今までの授業と組み合わせて授業していくのかについて、皆さんがどういうお考えをおもちなのかを伺いたいというのが今回のもう1つの重点です。

「座談会の流れ」で挙げた項目に即して順番に伺いたいと思います。まず私の担当科目で

ですが、今学期は結構多くて、1年生対象の初年次教育、学部生の史料講読、それから大学院生のゼミ、大学院生対象の史料講読、4つの科目を担当しました。

B：私立大学国際学系学部に勤めています。本日はよろしくお願ひいたします。授業は1年生ゼミと中国語、そして中国史に関わる講義科目が2つ、そしてオムニバスの授業が2つになります。少人数といえるのは中国語と基礎ゼミくらいで、あとは比較的多い授業でした。

C：私立大学外国語学系学部に勤めています。よろしくお願ひします。所属は学部ですが、実質的には外国語教育センターの方の仕事が主で、いわゆる第2外国語の中国語のコーディネーターの仕事をしています。なので、担当科目は1クラス30人ー40人くらいの中国語がほとんどです。1つ補足すると、うちの大学はクオーター制で、第1クオーターは4月末から、第2クオーターは6月ぐらいから、2つの学期を担当しました。

D：私立大学外国語学系学部に勤めています。私は中国史が専門です。私がこの春学期に担当した少人数科目は1年生ゼミ17名、2年生ゼミ13名、3年生ゼミ15名、4年生ゼミ3名です。

E：私立大学社会科学系学部に勤務しております。私は文化人類学的な研究をこれまでしてきました。担当している授業は、今年は前期ですと文化人類学が140名くらい、コミュニティ論が76名、これが講義科目ですね。いずれもオンデマンドタイプの授業を作ってやっていました。少人数教員の方は、1年生のゼミが11人、2年生ゼミが22名、3年ゼミが6名、4年生の卒論ゼミが3名で、いずれも、Google Meetというテレビ会議システムをつかった授業をしてきました。その他にも、1年生向けのフィールドワーク入門編のような実習授業も担当予定だったのですが、今年は全滅でした。そこで、教員が引率するのではなく、学生1人でも実行できるようなプログ

ラムに変更するかたちで、2プログラム対応しました。また、2年のゼミはもともと2名の教員の合同でフィールドワーク実習を行う予定でしたが、急遽、文献の輪読と、「オンライン・フィールドワーク」のような授業形態に切り替えました。これが少し工夫したことですかね。その他にも、本来ですと学生を引率してのフィールドワーク実習が予定されていたのですが、国内研修・海外研修ともにやはり中止となりました。

F：中国近現代史を中心に研究しています。日本の大学院で修士課程と博士課程を卒業してから、現在中国の大学の人文系の職場で働いております。私は昨年末から今年初めにかけてようやく正式に入職できたので、今学期は新任ということで授業は非常に少なく、僅か1個だけでした。それは大学院対象の授業で、4名の学生を中心に日本における東洋史研究の学術史を中心に、学生と一緒に文献を講読しています。

* オンライン授業の経験談

A：Eさんが少し言及なさっていましたが、放送大学の担当者でもなければ、みなさん初めてオンライン形式の授業を体験されたと思うのですね。それでオンライン授業を迫られたときに、みなさんどういう工夫をしたのか、あるいはどんなご苦労をなさったのかということを、それぞれお披露いただきたいなと思います。

まず私から申し上げますと、私は正直ほとんど苦労していないのです。なぜかと申しますと、弊学のオンラインシステムでは、Zoomでリアルタイムにやるか、あるいはGoogle Classroomを使ってオンデマンドでやるかという2つの方式がメインです。結局私は、今期は少人数のゼミったり、史料講読だったりといった少人数授業しかなかったので、全部Zoomを使ってリアルタイムでしました。この方式だと授業のやり方を根底から変える



ことはなく、通勤時間や研究室からの移動時間が節約できましたし、毎回授業で感じる過度な緊張感もありませんでした。モニタに向かって話すことも割とすぐになられました。ですので、割とやりやすかったという経験しかないです。そんなに苦労らしい苦労はしていないのです。少し工夫したところを言うと、特に史料講読で中国語と漢文の文献を読んだのですけれども、そこで書き下し文を書いたら翻訳させたりする中で、「この字はこうだよ」みたいな説明をするときに、iPadのタブレットの画面を表示させて、板書するようにタブレットを活用したくらいです。これらはみなテクニカルな問題で、従来の授業のあり方そのものを覆すようなそんな大きな苦労ではなかったのですね。

ところで、コロナ後における授業のあり方の話題との関連でいえば、2点気がついたことがあります。1つは、初年次教育ゼミでの気づきです。16名の学生に、どうやってレジュメを作るのか、どうやってプレゼンテーションをするのか、どうやって批判的なリーディングをするのかというような内容を話しました。それを教員が専門としている分野の古典的な作品や新書を読みながらやるというものです。私は毎年に3～4人くらいのグループに分けてやっているのですね。Zoomだと、ブレイクアウトルームができるので、途中でディスカッションする部屋を分けたのです。今年度の新入生の場合、そもそも大学に来ていなくて、誰もほぼ友達がいない状況でZoomでのブレイクアウトルームをやったことは、私としては毎年にやっていたことをまたまZoomに置き換えただけなのですが好評でした。学生たちは濃密に議論した上で、LINEでグループを作り、そこでようやく友達ができたと喜んでいました。

第2点は、成績評価に関してです。特に原典講読の漢文の授業で感じたのですけれども、対面授業では「ここはこういうふうに書き下すんだよ」みたいなことを、原典を読みなが

らその場で指摘して、それで教えた気になっていたのですね。それで、学生はしっかり真面目にレジュメを作って読んでいたし、A評価でいいかなとなっていたのですね。今年は授業で指摘されたところはWordの校閲機能を使って反映させた上で、そのファイルをmanabaにアップロードするという手順を踏んだのです。受講生は対応して、ものすごくしっかりやってきたのです。その分、教員が確認する作業は例年に比べてかなり増加しましたけどね。それでも中には適当にしか直してこない受講生もいて、「あんなに説明したのに、まるで人の話を聞いてない」ということが最終版のファイルではっきりとみえるのですね。このように、教員が個々の授業にかける熱量も増えたし、丁寧に学生を評価することになったと感じました。

B： 私の方は、大学でZoomなどのリアルタイムのツールはなるべく使わないという方針でした。それはインターネット環境が十分でない学生がいますし、パソコンを持っていなくてスマホだけという学生もいますので、そのような現状に配慮し極力教育機会を奪わないようになります。基本的にオンデマンド式の授業で、PowerPointに音声ファイルを挿入したものと、それを動画に変換したものをアップロードして、環境に合わせてどちらかで視聴するというスタイルでした。ファイルはMoodleだと大きなファイルが使えませんので、Google ドライブにファイルをアップロードしてMoodleからリンクを貼るようにしていました。オンライン授業が始まると、いわゆる「バケ死」の問題が盛んに報道されていましたので、ファイルのサイズにも気を配りました。動画はどうしてもサイズが大きくなりがちですが、フレームレートを小さくして90分授業で100MB程度におさめるようにし、それをさらに3つ程度のファイルに分割して、それぞれ視聴してもらうようにしました。

多くの大学はゴールデンウィーク明けから

授業が始まったと思いますが、私の大学では通常より1週間遅らせただけだったので、あまり準備する時間はありませんでした。授業回数も15回全部行うというスケジュールでしたので、ゴールデンウィーク中も全て授業がありました。この頃になるとあらかじめ用意したストックが無くなってきて、自転車操業になっていました。そういう意味で教員も大変でしたが、おそらく学生も慣れないオンライン授業の連続で大変だったのではないかと思います。

C：私は中国語科目のコーディネートが主な仕事でしたので、その辺の苦労が多かったです。非常勤の先生が10数人おられて、30クラスほどをコーディネートするという状況でした。大学からは基本的にはZoomを使っての同期型授業と、資料をアップロードする大学独自のシステムの2本立てが主なやり方と伝えられていました。一番困ったのは、非常勤の先生、特に年配の先生だとパソコンに詳しくない方もおられて、授業開始前に非常に不安だと言われましたし、実際に運用してみてもやはり厳しかったんです。そういうこともあって、まずは同期型授業はなしという形にして、課題のみですべての授業が進められるように設計しました。それとともに、独自に講習会を開いてZoomや大学のシステムの使い方を教えて、ある程度できるなという公算がたってからZoom授業開始を学生に通知して、徐々に非常勤の先生方にお願いすることを増やしていくという形で進めてきました。

A：オンライン授業に対応できなかった先生はいらっしゃいましたか。

C：結果的に全員ある程度のところまではいったんですが、例えば何度も言及されているブレイクアウトセッションを使って授業してくださいと指示したら、多分もう対応できない先生が出てくると思います。とりあえずZoomを立ち上げて授業をするというところまでは一応全員できるようになりました。

A：漢字文献情報処理研究会のみなさんはみんな

すごくコンピュータに詳しい人たちが集まっている、技術的なことはすでに定着していることが前提で話が進むのですね。しかし、今のお話を伺うと、実は全然定着していないのではないかと感じました。もっとそこを議論しても面白いかもしれませんですね。

D：私が工夫したのは3つあります。1つ目は板書です。従来は印刷したレジュメを配布して、あとは板書するという形で授業を進めていました。オンラインの双方向授業ではZoomを使い、レジュメはPDFファイルで配布できたのですが、板書をどうするかというのが最初の悩みでした。そこで、試してみて良かったのは、昨年購入していたSurfaceです。タッチパネル搭載で、スタイラスペンで手書きできるので、非常に便利でした。Wordは標準で手書き機能があり、PDFファイルもMicrosoftブラウザのEdgeで開けば標準で手書きができるんですね。ですから、SurfaceでWordファイルやPDFファイルを開き、Zoomで画面共有して手書きをすると、学生から「クリアに見える」「ライブ感がある」と好評でした。これで従来通りの授業ができたという印象が強いです。2つ目は、Zoomのブレイクアウトセッション機能を使っての学生交流です。学生は「朝から4コマ連続でZoom授業を受けると結構きつい」「オンライン授業では学生同士で交流できる時間ががない」ということでしたので、私の授業1コマ90分のうち、授業内容は60分前後で終わらせて、あとの時間はZoomのブレイクアウト

●マルクス主義の世界觀

時間	過去	現在	未来
時代	前近代	近代	将来
制度	封建制	資本主義 認める	社会主義(共産主義) 認めない
私有財産	認める	認める	認めない
スローガン	身分秩序	自由・平等	自由・平等
男女	男尊女卑	男女同権	男女同権
宗教	認める	認める	認めない
階級	地主・商人・地主 商人・地主・農民	資本家・地主 労働者・農民	労働者・農民

マルクス＝「宗教は民衆の阿片（ヘロイン）」
★労働者が暴力革命を起こして資本家を打倒！

毛沢東＝「妇女能頂半邊天（女性は天の半分を支える）」
★労働者・農民が暴力革命を起こして資本家・地主を打倒！

1989
世襲
清
1966-76
フランス
工業化

タッチパネル機能を利用した授業例



機能を使って4～5名一組の小グループに分け、学生同士で交流させました。興味深かったのは1年生ゼミで、入学直後なので全員に自己紹介をしてもらうのですが、「私は人見知りですが、話すことは大好きなので、みなさん話しかけてください」というタイプが非常に多い。彼らはブレイクアウトルームに入っても、自分からは話し出さないです。外国語学系学部は言語だけでなくコミュニケーションや異文化理解などを学ぶところですので、自分からコミュニケーションをとろうとする心構えを身につけて欲しい。そこで、雑談に関する自己啓発本を学生に紹介し、「まずは自己紹介から始める」「5W1Hの枠組みで相手に質問する」「沈黙があっても気にしない」など、初対面の人がいかに雑談して仲良くなるかというコミュニケーションの手法を学ぶ時間にしました。これも1年生には好評でした。3つ目は口頭発表です。3年生ゼミは従来、こちらが指定した文章を読んでレジュメをつくり、1人10分程度の口頭発表、という流れでした。これが4～5月の間はオンライン授業の試行期間でしたので、Zoomであまり長時間の授業はしないというのが大学の方針でした。そこで、今回やってみたのは、レジュメは従来通り提出させる一方で、学生に自宅で録音させて音声ファイルを提出させる、という方法です。私は口頭発表を指導する際には、「できるだけ文章化をせずに、自分が作ったレジュメにメモ書きをして、たどたどしくてもいいから血の通った発表をすること」と伝えていて、従来であれば対面で確認できたのですが、自宅で録音だと、やはり原稿を読み上げるという読経みたいな発表になっていました。そのため、6月からはZoomによる双方向授業で口頭発表させました。

E：私もオンライン授業には非常に苦労はしたんですけど、それは主にオンデマンドの講義動画作りのためでした。今年は前期の授業が8コマあって、だから1つ授業が終わるた

びに次の授業がくるんですけど、講義の前日ですかね、これまでに作っていて手元にあるPowerPointのスライドに音声を吹き込んで、それを変換して動画化してアップロードするぐらいの作業でも毎回6時間から10時間くらいかかるでいて、非常に苦労しました。それに対して少人数授業の方はGoogle Meetでの授業で、ある程度準備して当日にいどめればよかったです。だいぶリアルタイム授業のほうがいいなと。やっぱりオンデマンド形式にしないで、リアルタイム配信にした方がどうやら楽、というか人間的な労働時間に収まるのではないかと思うので、後期の講義科目はそういうかなと思っています。少人数の方ですが、文献の輪読では学生にレジュメを用意して来てもらって発表してもらうのですが、発表者に事前にレジュメを共有してもらい、また、当日はレジュメを画面共有で表示させながら発表してもらいました。3年生の専門ゼミも、割合スムーズに、事前にこうやってやるんだよって説明した通りに進みましたし、2年生のゼミも、これはなんというか初めてのゼミ演習みたいな授業だったんですけど、こちらもあまり問題なく進んだかなと思います。ただ、これはよく言われる話ですが、やっぱりテレビ会議システムでの授業だと、しゃべる人が一方的にしゃべるだけになってしまい、議論が盛り上がりにくいという傾向はなんとなくあったのかなと思います。なので、なるべく今日の座談会でもそうですが、パソコンの画面上で皆さんの顔を一覧に見えるようにして、頷いてるとか、そういう反応は見えるようにしましょうと授業を進めました。それだと、カメラで自分を映したくないという学生以外の姿は、頷いてたり笑ったりする様子が見えたので、無音であっても少し音が聞こえてくるような感覚があったなと感じていました。あとやっぱり、余韻とか雑談がないというのがネックでした。休み時間とか授業終わりもすぐにオフラインにできてしまうというのは寂しい、物足りない

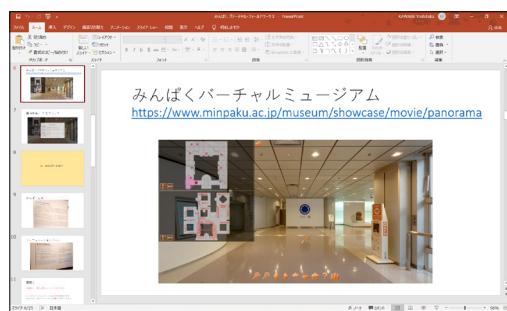
さを感じるといった声は、学生の反応でもありましたし、教員の間でもそういう話はあったのかなと思います。ただ、これも苦労というほどではなかったかなとも思います。やっぱりオンライン授業はちょっと今までとは違うよね、と、みながまだ慣れていないだけなのかもしれない。でも、教育の意義というようなことを考えたら、一見無駄に思えるような時間が共有できないというのは、一番良くないところのような気はするのですけれど。

あともう1つ、先ほど少し述べたオンライン・フィールドワークのことですが、この授業ではもともと、学生を教員が引率しながら、ちょっとした街歩きでフィールドワークの練習をしてみるというような授業でした。外での調査のあとには教室に戻って PowerPoint でのプレゼンテーションですね、文章と写真を使った短めの口頭発表のトレーニングもして、最後にレポートにまとめる、といった授業の予定だったんですけど、「皆で一緒にどこかに行こう」というのが軒並み中止になってしまった。そこで、バーチャルミュージアムのようなホームページを公開している博物館のサイトにアクセスして調べてみようとか、Google マップのストリートビューでこれこの場所を見てみよう、Google Earth を使ってどこどこに行ってみようといったかたちで、自宅に居ながらにしてできる模擬フィールドワークのような授業内容に変更したという次第でした。今までよく見知った光景だけれども、あらためて見てみたら発見があるよねといった趣旨で、オンラインでのフィールドワークプログラムをやってみました。また、これとはまた別の授業でのオンライン・フィールドワーク・プログラムの例ですが、文化人類学の系譜図の作り方、記号の使い方とかを教えて、自分の家族にインタビューしてみながら実際に家系図をつくってみましょう、という家系図作成入門。あと、オートエスノグラフィー入門というタイトルにしたんですけども、要は自分の家族に、自分と同

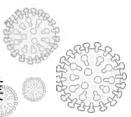
じ年齢ごろの話を聞いてみましょう、それで自分の中に、広義の「自分」ですけれども、織り込まれている社会・文化を改めて見つめ直してみよう、それでレポートを書いてみよう、というプログラムを用意してみました。いずれも、初めてのインタビュー・初めての家系図作成みたいな経験ができる粗なものがですが、もともとは全然違うプログラムを行う予定で、一緒に横浜の関帝廟に行ってみましょう、みたいなプログラムでした。これをやめて、オンラインでできる内容に変更して、特に、学生が外を出歩かなくても済むような調査内容を意識しました。学生が家族と一緒に暮らしていなければ、LINE 電話とかで解決できるであろう、そういう範囲でのインタビューですむようなプログラム内容にだいぶ寄せました。

A：その話を伺うと、コロナで従来できていたことができない、だから緊急的な措置をしたというのが当初の現実であったと思います。先ほどのオートエスノグラフィーや家系図を作ってみると、こういう状況に追いやられたからこそ気づいた、対面授業であっても取り入れることができた、身边にある教材に気づいたということですね。

E：そうですね、それはその通りだと思います。ただ、それは良い「教材」ではあるのですが、少し面倒な側面もあります。学生の家族のことなど個人情報がレポートとして出てきてしまうので、今回はやむを得ずこのプログラムにせざるをえなかったというのもやはり事



「オンライン・フィールドワーク」の一例



実です。このプログラムへの参加希望の申し込みをする時点で、個人情報を含んだ内容のレポートを書くことになるが、了承のうえで申し込んでねという注意喚起をしたり、誓約書を書いてもらったりといった手続きは踏みました。こういった点は遠隔授業になってしまってもやっぱり変わらずにありますし、必要だと思います。

F：私は今期授業を1コマしか担当していなかったので、それほど苦労はないですが、あえて苦労というならば、やはり中国の大学で教えているということで、学校の方針が直前まで全く決まらなかったという点ですね。ゴールデンウィーク明けにいきなり1週間後からオンライン授業を始めるという通知がきたので、そこから急に授業準備を始めました。通常約20週間の授業を12週でやってほしいといわれましたが、最終的には10回前後で学期が終わってしまいました。このように、途中で急に方針が決定されたり、よく変更したりするので、常に急な対応が求められました。そして、大学院生の授業っていうことで、基本的に院生の発表を中心でしたが、オンラインでよかったこととしては、日本における東洋史研究の学術史を中心に授業で教えていましたが、それと同時に日本のオンラインで利用できるいくつかの資源、例えば国会図書館であったりとか、CiNiiの使い方であったりとかをその場で画面共有して、見せられたことが学生たちにとってはすごく勉強になったという感想を聞きました。あと、ご存知のように、中国では、日本語の文献であろうと中国語文献であろうと、一部のものがフリーでダウンロードできるので、そういうダウンロードしたデータをお互いにその場で共有しあったり、画面共有して見せたりすることができたのは、すごく便利でした。私も逆に自分で見つからなかった文献を学生に教えてもらったというのもありました。そういう意味でオンライン授業は非常にやりやすかったと思います。一方、少人数のゼミや講読で難し

いと感じたのは、議論する際に相手の表情が見えないことですね。私が担当しているのは大学院生の授業で、4人の院生の発表を中心でした。日本の学生ですと遠慮がちで質問しなかったり、遠回しに質問したりすることが多いと思いますが、中国の学生の特徴ということもあって、最初から活発に議論していく感じです。しかし、対面であれば、お互いの表情を見ながら質問できるので、質問の意図についても、その表情でいろいろ伝わってくることがあると思います。オンラインになったことで、必ずしも互いや聴衆の表情を確認できないので、時には普通の質問であっても非常に厳しく聞こえたり、批判されたりしていると感じたりすることがあるみたいですね。授業をやってみてそれをすごく感じました。

A：中国の場合は、CNKIがあれば基本的に必要な論文は全部ダウンロードできる環境がある、それに対し日本では論文ですらまとめてダウンロードできないというのは、かなり大きな差ですね。

* オンライン授業のメリットとデメリット

A：現段階ではコロナに対応するために、対面授業ができずにやむを得ずオンライン授業をしたという状況の中で、対応に迫られています。逆にオンライン授業をやってみて、オンライン授業ならではのメリットを話していくだけるとありがたいです。もちろん、授業形態によってかなり異なると思います。先ほどEさんがおっしゃったフィールドワークのような実習や実験は、どうやったってオンラインのみにすることは無理です。ですので、メリットの面だけで語れない類型の授業はあります。これらはさておき、オンライン化することによって出てくるメリットもあると思うのです。みなさんはいかがお考えでしょうか。

D：学生がパソコンを使う機会が増えたので、パソコンスキルの向上には大きく貢献したなど

いう気はしています。

B：1年生だとまだパソコンを持っていない学生がかなり多かったと予想されますが、オンライン授業を実施するにあたり大学からパソコンの購入補助が出ましたので、パソコン自体の普及も進んだと思います。レポートをWordで提出したり、語学では音声を吹き込んで提出させたりしたので、その辺のスキルは向上したでしょうね。

A：1つはパソコンスキル。そうですね。確かに今までずっと教えてきた中で、1年生の時から口を酸っぱくしてWordのアウトライン機能を使えっていってきたのに、卒論の時もまだアウトライン機能を使ってないという。あの徒労感は教員からすると感じたくないものですね。そういう問題が変わる契機になるかもしれませんね。

D：はい、私の大学は自宅生が大多数で、彼らのパソコンはデスクトップや大型ノートパソコンが多く、大学には持参できない。そのため、従来は授業中、手元にパソコンがない状態でパソコンやアプリケーションの使い方を指導して、学生は帰宅してからパソコンを使うというタイムラグがあった。結果として、指導内容が全然伝わっていないということになりがちだったのが、オンライン授業ではリアルタイムで指導できるので、その点でパソコンスキルが向上したなという気はしています。また、これは学生の初年次教育とも関係てくるのですが、学生との面談の設定がしやすいですね。従来はオフィスアワーを設定していても学生にとっては空き時間ではなかったり、私が大学にいない日もあったりで、面談の設定が案外難しかったのですが、今年はZoomを使って面談できる機会が断然増えましたね。オンラインだから生身の対面ではないけれど、かえって会いやすくなつたというのありますね。

A：対面ではないけれども学生との、ある意味での距離は近づいたということですか。

D：はい。私の場合、学生との連絡はメールだけ

でなくLINEやSlackも使っています。学生にとっては、教員にアポを取るときもメールよりもLINEやSlackのほうが気楽みたいで、その点で敷居が下がって、面談が設定しやすくなつたのかもしれません。

A： そうなのですね。Dさんのところは学科に分かれていますが、ある程度1年生の時からもう所属が決まっているじゃないですか。うちは学部の下に下部単位が何もないんですよ。ですので、3年生でゼミに入るまで何も所属がありません。サークルとか課外活動を行っていれば別ですけれど。あと語学のクラスがありますが、語学のクラスがばらけてしまうと何もなくて、大海に漂流する小船みたいになる学生もいます。3年生になってゼミに入るとゼミティンやゼミ教員との関係がものすごく密になります。学科みたいな枠組みがある学校では、学生たちのつながりは全く違いますよね。

D：この点、皆さんの場合でも、基礎ゼミがいわゆる担任みたいな役割を果たしているのかと思っていたのですが。

A： クラス担任制度があるのですが、私が担当した2年間には1回も相談はありませんでした。うちの場合は何か相談事があった時に1年生と2年生がクラス担任に相談できるということと、あと留学に行く時や休学届を学生が出す時、そういう時に印鑑を形式的に押すという、それだけの話なんですよ。相談がないというのはよいことですけれどね。あと語学クラスがありますね。オンライン授業がニューノーマルになると、どこかにある程度の枠組みが必要かなと。外側の枠組みがないような群れをつくってしまうと、孤独感も増してしまう可能性があるなと思いました。ですので、どこかに気楽につながれるシステムを作つておかないといけないですよね。

D： それでは、1年生ゼミや2年生ゼミで教員と学生のつながりができるかというと、そもそも限らないということですか。

A： 授業だけですよね。人によって違うと思うん



ですが、基本的には授業でのつながりっていうだけだと思う。もちろん学生の中には中国に興味があって、私の開講する授業もかなりとてくれる学生がいて、個人的に話をしたりすることはあります。しかし、うちのゼミに入るのに私の授業を何個かとてないといけないみたいな、そういう縛りはないのですよ。

D：面白いですね。基礎ゼミといつても、大学によって役割が異なるのですね。

A：今回のような座談会があってこういう話を交換できると、初年次教育や基礎ゼミとか導入ゼミといった低学年向けのゼミって、ずいぶん自分が持っていたイメージとは結構違うことが浮き彫りになってきていますよね。

D：確かに。オンライン授業から話はそれますが、私の所属学科の場合、1年生ゼミは4クラスあり、その4クラスの担当教員が横のつながりをもち、授業の進め方や毎回の課題の分量などを統一しています。ただ、確かに大人數学科だとそれも難しいかもしれませんね。

A：何を教える学部なのかどうか、どういう人材を養成しようとしているかという最終目的との関連で考えないとなかなか難しいですよね。

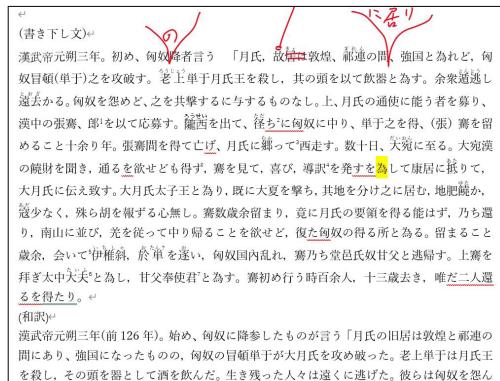
* TA の活用方法

A：少人数授業で、あるいは他の類型の授業でも結構ですが、TAをどう活用しているかとい

うことを皆さんにお伺いしたいです。これは個人的な経験を申し上げます。香港で集中講義を行ったことがあるのですが、その時に60分×3の180分授業したのです。そのうちのレクチャーが2時間で、1つはチュートリアルだよって言われて、2時間授業した後に1時間チュートリアルがあり、TAが学生と議論しました。35人しかいない授業だったのですけれども、博士課程の学生2人をつけてもらいました。私が2時間話した後、TAが学生と議論していくのです。最終的にそれでもどうしても疑問が残った問題がいくつか出てきて、その次の授業時に私が補足して説明していく方式でした。香港なのでおそらくイギリスやアメリカのTA制度を適用していると思うのだけれど、日本のTA制度はここまでなってない気がします。

オンライン授業にはTAの活用が重要だと思います。先ほどEさんがおっしゃっていましたけど、オンデマンド教材を作成するのに膨大な時間がかかるてしまうし、あとオンラインデマンドの授業の後には、様々な質問やコメントが来ます。それに逐一対応していると、対面授業に比べて労働時間が3倍とか4倍とかそういう状態になりますよね。そういった点も含めてTAをどう活用してオンライン授業をすればよいかを話したいです。この点については2点あります。第1は、今皆さんの大学TA制度はどうなっているかということ、第2はあるべきTA活用法についてです。

私は今年度2つの授業にTAをつけてもらっています。1つは先ほども申し上げた原典講読の授業で、修士の大学院生が務めてくれました。もう1つは2年生向けの基礎ゼミです。これは9月の以降の話なのですが。原典講読の方では、初回の授業の時にレジュメの作り方や漢文の訓読、現代語訳などをTAにまずは実演してもらったんです。そうすると、私は背景的な説明をするだけでほとんど何も教えなくても、受講生はTAに倣ってレジュメを作って、毎回しっかり発表するので

(書き下し文)


漢武帝元朔三年。初め、匈奴者言う「月氏、故~~敦煌~~^{敦煌}、祁連の間、強國と為れど、匈奴冒頓(單于)之を攻破す。^{老上}单于月氏王を殺し、其の頭を以て飲器と為す。余衆遁亡して遠去かる。匈奴を怨めど、之を共撃するに与するものなし。上、月氏の通使に能う者を募り、漢中の張騫、郎を以て応募す。籠置を出て、徐^徐ちに匈奴に中り、單于之を得、(張)騫を留めること十余年。張騫間を得て亡^亡げ、月氏に縛^縛つて西走す。数十日、天宛に至る。大宛漢の饅頭を聞き、通るを欲せども得ず。薦を見て、喜び、導^導すを命ぜ^命じて康居に抵りて、大月氏に伝へ致す。大月氏太子正と為り、既に大夏を擊ち、其地を分け之に居む。地肥饶か、税少なく、殊^殊ら胡を報する心無し。薦數余留まり、竟に月氏の要領を得る能はず、乃も還り、南山に並び、光を從て中り帰ることを欲せど、復た匈奴の得る所となる。留まること数余、会いて伊稚斜、於^於單を遂い、匈奴国内亂れ、薦乃ち^乃昌邑氏奴甘父と逃帰す。上薦を拜ぎ太中大夫^と為し、甘父奉使君^と為す。薦初め行う時百余年、十三歳去き、唯^だ三人還るを得たり。[。]

(和訳)
 漢武帝元朔三年(前126年)。始め、匈奴に降参したものが言う「月氏の旧居は敦煌と祁連の間にあり、強国になったものの、匈奴の冒頓单于が大月氏を攻め破った。老上单于は月氏王を殺し、その頭を器として酒を飲んだ。生き残った人々は遠くに逃げた。彼らは匈奴を怨んで

TAによるレジュメ実演



すね。あと、担当者が読めない部分、考えがまとまりにくい部分があると、まずは「TAの何々君どう考える」と私が聞くと、TAは「この辞書を引くとこういうふうに出てきたので、私はこのように考えます」と答える。それに対して教員が応答する。そういう対話を教員とTAがやってそれを見せるができるのですよ。そうすると、受講生たちは「そうか」としっかり見ていて、しっかり模倣してくれるのです。少人数授業だからこそTAが活きる方法ですよね。

もちろん、大人数授業についているTAとは同じTAでも機能がだいぶ違う。少人数授業でも積極的にTAを活用することで、教員と学生の中間にある経験を持った人が一枚かんで、学生の理解度を促進していくってことできるのではないかと思うんですね。今回オンラインでやって特にこの点を感じました。皆さんの大学での状況とお考えやご経験をお聞かせ頂ければと思います。

F： はい、海外の経験になりますが、中国の大学院生の授業は、人数が少なくてもTAが1人つきります。多くの場合は受講生の1人がそれを担当します。今回は海外からのオンライン授業ということもあって、授業開始前に実際どのように事前のセッティングをするのか、日程をどのように調整するのか、私も少し心配していましたが、実際TAが全部やってくれました。TAが毎回の授業のセッティングをやってくれて、そのアカウントを授業の1～2日前に私宛に送ってもらって、当日直接に入れば授業できるという感じでした。私としては大変助かりました。また、大学院生向けの授業ということで授業時間を学生と調整してよいということでしたので、どの曜日のどの時間帯にやるかなども含めて、TAが他の学生との間の調整を全部やってくれたので、すごくやりやすかったです。

D： そうですね。うちの場合は、TA制度があるにはあるんですけど、私の授業ではTAを用いる機会がありません。一方、私の所属学科

では上級生によるサポートがさかんです。学年の垣根を超えた交流を促進するための学生団体があって、その上級生たちと1年生全員でLINEグループを作るんですね。そこで、大学生活や授業内容、将来の留学などについて、分からぬことを随時質問できる仕組みを作っています。これは今年、例年以上に活用されたという印象があります。特に、教員ではわからないことで、大学生活だったり、外国語の予習復習の仕方であったり、あとは教員に聞きにくいことであったり、ですね。ですから、TAや上級生のサポートが活用されることは大事だと実感しています。

A： なるほど。TAをうまく活用すると、つまり学生の周りに集まりやすいような情報で、教員が必ずしも持っていないような情報がうまく新入生や新たに入った人たちに流通するようになるという話ですね。前任校の教育学部時代にはTAはほとんどいませんでした。大学によって事情がだいぶ違いますよね。そもそも教育学部は学生のとる授業がだいたいカリキュラムで決まっていて、専攻内のつながりも強かったから、互いに教え合っていたのですね。

D： そのTAのような先輩、兄貴的な存在というのは、とても必要だと思います。

A： そうそう、学科という固定した人間関係があると、先輩との関係もしっかり出来上がっていて、その中でいろいろ勉強しているのですよね。TAを活用するといっても、人件費や人材の問題をどうするか、財源をどうするのか、ふさわしい人をどこから呼ぶのかなどは、容易には解決できない難しい問題ですね。

D： たしかにその通りですね。信頼できる学生を普段から探しておくことが大事だと思います。

A： オンラインならではのメリットが1つありますね。私がメリットになるのではないかと思ったのは、先ほどEさんがおっしゃったこととかぶるのですけれども、オンラインでのインタビューです。私は下半期に2年生を対象とした入門ゼミをやります。これは個々



の教員の分野の教材や文献や研究方法の入門を教える授業です。そこで私は中国の近現代史、あるいは中国社会はどういうものなのか、中国における統治はどういうものなのかななどといった問題を学生と考えています。

今年初めて試みようかなと思っているのは、これはオンラインならではなんですが、2人ゲストを招いて、オンラインでインタビューを実施するということです。インタビューというより現地事情を教えてもらうというほうが正確かもしれません。1人は香港の雨傘運動に参加したことがある若い人で、中国に対するイメージは最近の香港ではどう変化しているのかといった問題をみんなでインタビューする。もう1人は中国の若い友人で、中国社会の現状や中国国内から見える世界情勢についてみんなで実際にオンライン上でインタビューして、そのゲストに生で話をしてもらう。学生も中国語ができるものは中国語を使ってみたり、英語でないと駄目な場合は英語を使ったりしようかと思います。あるいはこれもTAがついて、通訳してもらつてもよいですね。インタビューの準備段階では文献を読みながらみんなでインタビュー項目を考えていって、そして実際にオンラインでそのゲストとお話ををして、その会話の中でどんなことを得られたのかを受講生と議論をしようと思っています。

こういうことができるのって、おそらくオンラインならではですよね。私のネームバリューではすごい人を呼んでくることはできないのだけれど、人によっては実際には簡単には会えないような人がゲストとして来てオンライン授業上で交流できてしまう場合もあるわけですよね。先ほどCさんがおっしゃっていましたけれども、こういう外部のゲストをうまく交えて授業を組み立てる、コーディネートする能力というのはおそらく今後の授業に必要になってくるのではないかと思います。「コーディネート力」が、これから授業のオンライン化が広がる中では結構問われて

くるような気がするのです。教員がコーディネート力を鍛えていくことで、学生たちの学びの選択肢や得る情報を広げることがオンライン時代には問われるような気がします。

D：私もコーディネート力は大事だと考えています。私の場合、今年はオンライン授業になったことから、OBOG をゲストに招き、体験談を Zoom で在学生に語ってもらうというキャリア形成講演会を急遽企画して、6月に2回開催しました。このような企画ができたのは、私が平素から OBOG とのつながりを持っていたからだと思います。在学生の側も4月から5月にかけて、新型コロナウイルスの影響によって就活が不透明化したり、アルバイトが激減して時間が余っていたりということもあって、参加者は非常に多く、好評でした。ですから、研究者など多くの人々との人脈を作つて、それをオンライン授業に生かすということに、私は賛成です。

F：私もすごく賛成です。私が感じるオンライン授業のメリットは、やはり海外からもできるということです。新型コロナの影響により私は日本から中国に戻れていませんが、先学期の授業も問題なく日本からオンラインで行うことができました。以前であればその授業を中止にしたり、代わりの先生を探したり、その対応策を考えなければいけなかつたですが、オンラインで対応できるということで、日本からでも問題なく授業することができました。これが一番のメリットで、一番便利な点だと思いました。これはアフターコロナでも活かしてほしいと思います。もちろん専任の先生は学校で教えることを求められますが、海外の先生に依頼してオンラインの授業や講座を定期的に開催して、学生により多くの教育資源を提供してよいと思いました。現地に行かなくても済むので、海外の先生も比較的受け入れやすいと思いますし、招待する側も費用をおさえられると思います。今後はこのような取り組みが増えるような気がしますし、実際増えてほしいと思いました。

* 成績の問題

- A：オンライン授業での成績をどう付けるかという問題についてのご苦労や工夫についてお伺いしたいです。
- C：やはりコーディネートの話になりますが、大学のシステム上にすべての課題の評価や授業参加度の評価を集約させて、100点満点で表示されるよう工夫しました。私の大学の中国語はほぼすべてのクラスを2名の教員がペアで担当していて、成績の情報共有の問題があったのですが、これでほぼ解決できたと思っています。
- A：すみません、Cさんが担当している、あるいはコーディネートなさっている授業では、評価の割合はどのように処理していますか。うちの大学だと、A+、A、B、Cという割合が決まっているんですね。オンライン授業になって、差がつきにくくなつたことを方々で聞くのですけれども、そのあたりはどう工夫なさっていますか。
- C：私の大学では特にその割合は決まっていないので、いわばなすがままであったのですが、結果的に言うと割合は昨年度とほとんど一緒でした。それでも差がつきにくいという傾向はあって、良い評定の割合が若干多いというのと、逆に一番上のA+の割合が若干少なくなったという印象です。
- D：私の大学は、定期試験で筆記はおこなわないという方針でした。
- A：それは今回のクオーター限りのことですか。
- D：はい、筆記試験はおこなわない。そのため、レポートもしくは毎回の課題で評価しました。これで言えば、Cさんの場合は毎回の課題が中心だったんですよね。
- C：そうですね、第1クオーターは課題提出が100%で、第2クオーターはちょっと同期型授業ができたので、その分授業参加度を入れましたけど、筆記試験はできなかったという状況です。
- B：私の大学でも定期試験は中止になりましたの

で、毎回の課題のみか、それにレポートをプラスして評価するしかありませんでした。今回はかなりイレギュラーなオンライン授業になっていて、学生の方もMoodleなどのシステムに慣れていたわけではありません。通常であれば、レポートの提出が遅れた場合学生の怠慢と評価することになりますが、オンライン授業ではシステムにファイルをアップロードしているのに、「提出」ボタンを押していくなくて提出されていなかったという事例もかなり多くありました。ですから学生もオンライン授業に慣れていない前期の成績については、そこまで厳しくつけられないなどいうのはありました。ただ当然後期は慣れたわけですから、対応は変わってくるとは思います。

* 秋以降のオンライン授業

- A：皆さんの大学での秋以降の対応状況はどのようになっているのかを順番にお伺いしたいです。まずうちの大学を申し上げます。うちでは、一部対面授業を再開することになりました。語学の一部と2年生のゼミと3年のゼミと4年生、大学院生のゼミです。ただこれは、対面してもよいということで、対面授業に参加できない事情がある学生がいればオンラインを並行してやるか、或いは完全にオンラインでもよいという選択制です。対面でやることについて皆さんの学校はどうなっているのかということと、今までの経験を生かして、下半期はオンライン授業でどういう工夫するか、あるいは対面でするとしたらどうやってオンライン授業と組み合わせていくかということについてお伺いしたいです。
- B：現在のところ、うちの大学は後期も基本的にはオンライン授業になりますが、1年生から4年生のゼミについては対面でやるという方針になりました。ただ教員のなかには健康に問題を抱えている方もいますので、教員の判断でオンライン授業をする選択肢もあります。私は学生に、対面で授業をしたいかオン



ラインのままが良いかアンケートをとりました。多くの学生が対面を希望してくるのでは予想していたのですが、実はオンライン授業を望む学生の方が多かったので、後期のゼミもオンラインで行うことにしました。学生のなかにも、対面で授業をすることに不安や抵抗があるのだと思います。実際に対面で行う場合には、感染予防対策などでかなり大変になるのではないかでしょうか。

また前期の授業では Zoom などは使っていませんでしたが、この状況が今年だけで終わるとは限りませんので、後期のゼミでは今後のことも考え Zoom を使うつもりです。内容は中国語の文章や論文の講読になりますが、みなさんの経験に学んで少しでも教育効果をあげられるよう工夫しようと思います。

C：基本的にオンライン授業です。外国語科目も含めた一部の科目については対面授業にするという選択肢も与えられたのですが、結果的にはほとんどがオンライン授業にするという回答だったと聞いています。私が担当する科目も全てオンライン授業ということで決まっています。方針として特に大きく変わるものではないんですけど、上半期では最初は同期型の Zoom 授業をしない形からスタートしたんですが、下半期は Zoom 授業の実施を前提に出来るので、それを効果的に組み合わせてやりたいなと思っています。

D：オンライン授業について、3年生ゼミは秋学期にアメリカの東アジア国際関係の授業と交流授業する予定です。これは昨年の段階から企画されていたもので、当初はメールや SNS を使った非同期型の交流を予定していたのですが、Zoom や Google Meet を使えば対話もできるという話になっているんですね。先日、先方の教員が Google Meet をお薦めしてくださるので、試みにこれを使ってビデオチャットしてみたら、この字幕機能がとても便利だと分かったんです。つまり、相手が話した英語を音声認識して字幕にしてくれるんですね。私は英語を全く使わないので相手の英語が全

然聞き取れないのですが、字幕だと読んで分かる。これを使った交流ができるのではないか、というのは新たな発見でした。

A：ちょっと話はそれますけど、少人数授業と関係なくなってしまいますけれども、そうなると語学研修でも Zoom コースっていうのが、現地短期留学コース、長期留学コースとなるべく選択肢として登場しますね。非常に低いコストでいろいろ交流できますよね。

D：そういう点では、E さんもおっしゃっていたフィールドワークですね。私の所属学科では2年生の台湾への海外フィールドワーク授業で台湾の大学と提携していて、今年は中止になったんですけど、かわりにその大学の日本語学科と相談して、オンラインで学生同士の語学交換をしようということを検討中です。

A：オンライン授業ならではのメリットですね。オンラインをうまく活用することで、語学でもそうですし、少人数の対外海外事情みたいな授業でも質を上げていくというか、実がすごく出てきていいですね。

E：対面授業も始まる予定です。それに従わざるを得ないという気もしています。また、基本的には対面授業の時にもオンラインでの配信も並行してやらなければいけない。学生がどちらかを選択できるようにという配慮です。特に、少人数のゼミのようなものや、1年生のゼミなどは、今年度の新入生たちがまだ学校に定着していないものもあるという事情を汲んで、なるべく対面でできないでしょうかということを言われています。前期の間は遠隔地から、例えば沖縄とか神戸とか遠隔地から授業に参加していた学生もいたんですけども、この授業は対面だけこの授業ではオンラインですって、デコボコしていると学生が困ってしまうんですよね。なので、自分の授業をオンラインにするのか対面にするのかは教員も選択もできるという状況ではあるのだけど、1年生に関しては基本的には足並みをそろえる形で、「感染対策に気をつけながらオンライン配信と並行しながらの対面

授業」、ということが行われようとしています。でも最終決定はまだですね。もっとギリギリまで判断を保留したまま、様子を見ながらになりそうです。関東圏のほかの大学の動きや、ニュースをにらみながらということになっていると思います。

F：先ほどの苦労話とも重なりますが、現段階ではまだはっきりとした方針が決まっていません。8月末に学校が始まりますが、まだ現段階でははっきりした通知がきていないです。ただ、予想にはなりますが、私の場合は外国人ということもあって中国に入国することが難しいと思いますので、おそらく最初のうちは日本からのオンライン授業になるのではないかと思います。中国国内にいる先生たちはどうなるかは私もわからないです。中国は本当に直前にならないと通知が来ないので、現段階では何とも言えない状況です。

A：あと、中国の大学が対面授業を再開したとしても、Fさんにすぐビザがおりるかという問題ですよね。

F：まさにその通りです。外国人が入れるか、入れないかという問題もあるので、そこも含めて、私は8月末からオンラインになることを予想して準備を始めました。担当の先生に聞いてもまだわからないとしか言われないので、予想してやるしかないですね。

* 学生のつながりをどう作るか

A：今伺った感じだと、だいたいどこの大学も安全面に気をつけながら一部再開の選択肢も出したことでかなり共通していると思います。ただ、そうするとみんなリスクを避けるためもあって、結構オンラインの方に傾いているのではないかと思います。そこで非常に問題となってくるのは、先ほどDさんがおっしゃったことです。つまり、2年生以上の学生は大学に来たことがあるので様々なつながりがあるのだけど、オンライン授業というものが前提になってしまふと、新入生の人�크



中国で広く用いられているテンセントンの「騰飛会議」

ながりをどう担保してあげるのか、そのための環境をどう作るのかということがものすごく深刻な問題となるということですね。この点についての工夫や取り組みを教えていただきたいと思います。

そのための1つの手がかりは、Zoomで一緒に受けた少人数授業でとか、Google Meetになりますかね。もちろん実際に顔を突き合わせることには及ばないけれども、それに準ずるようなつながりを作ることはできるかもしれませんと思います。

D：私の場合、先にお話ししたように、1年生ゼミの毎回後半を交流の時間にして、Zoomのブレイクアウトセッション機能でメンバーをランダムに入れ替えることができるので、これでいろんな人と交流してもらおうという工夫はしてみたんですけども、この授業は5月末で終了でした。その後、7月の終わりに1年生に聞いてみたら、結局6～7月は授業を受けるだけで交流の機会はほぼなかった、ということでした。ですから、学生が交流できる場を大学や学部、学科が意図的に設けた方がいい、と考えています。

A：そうすると、どういう可能性、どういうアイディアがありますか、年間を通じて、1年生同士でくっついているだけでいいのか、先輩ともつながらないということですよね。だからどうすればいいんだという問題です。

D：要は、「人はオンラインで初対面の状態から友達ができるのか」という命題なんですねけれども、私がやってきたZoomのブレイクアウ



トセッションなどは、やはり「上から」作られた枠組みという限界があるんですよね。そうではなくて、学生たちが自由に移動したりして学生同士で接点を作ったりできないかな、と。そういう意味でヒントになるのはオンラインゲーム、たとえば「あつまれ どうぶつの森」じゃないかなと思うのです。

A：以前そういう話題になったことがありますよね。任天堂とチームを組んで各大学バージョン、例えば、「あつまれ K 大学の森」のようなものを作ればいいのではないかという話を私は戯れでいいました。そういうものを作って、教員立ち入り禁止にして、その中で仲良くしてくれればいい。

D：そうなんですよ。だからバーチャルオーブンキャンパスみたいなノリで、バーチャルなんとか大学みたいなシステムをつくって、自分のアバターを作ったりして。

A：しかし、そういう仕組みはリスクとメリットって結局紙一重ですね。オンラインでは入念に認証しないといけないですね。

D：そうですよね。そのうえで、オンラインでも仲良くできる方法を模索できないか、バーチャル世界とかそういうのと提携できないかと、真剣に考えるんですよ。

A：オンラインで仲良くなる方法、あるいはオンラインで大学内の人間関係を作る方法とか何かないですかね。どういう方法がありますかね。

B：新しいシステムを作るということだと、今の状況がいつまで続くと想定するかというのが、たぶん大きく関わってくると思います。来年以降も長期にわたってこのような状態が続くという前提であれば、やはりそのような試みが必要だと思います。

D：それはアフターコロナでも使えるシステムで、構築しておいて損はないと思うんですよね。

A：一部の大学ではサークル活動が再開されいると聞きます。うちの場合、サークル活動は少なくとも学校内では禁止ですね。そうしないと簡単にクラスター発生してしまいますよ

ね。結局、昨年度までの対面授業のみで学べていた世界に戻るのか、しかし完全に戻れるような気はしなくて、やはりオンライン授業を活用する形で今後は進んでいく／進めていくのが趨勢ではないかと思い、こういう設問を立てたのです。Bさんはどちらかというと、戻るのではないか、あるいは戻した方がいいのではないかとお考えなのでしょうか。

B：そうですね。やはり対面でしか出来ないこともあると思います。ただ戻って欲しいですが、今の東京の状況では少なくとも来年の前期は難しいかなと思いますので、楽観的にはなれません。

A：話は戻りますが、アバターとかで集まるシステムって、基本的必ずしも同じ帰属集団に属さない人たちが、自分の素性をいきなり出すのを避けて、あえて可愛らしくしたりして、自分が何者かがわからないようにしたいという点が土台にあると思うのです。あるいは、現実にいる自分と違う自分を演じて人と付き合いたいという欲求が生んだものですよね。でも同じ帰属集団に所属するメンバーがアバターになる必要があるのかな。

D：参考になるのは、マッチングアプリでしょうか。プロフィールを極力明かしてそれで仲良くなるんです。だから友達を作るという意味では、たとえば韓流ドラマが好きだったり同じアイドルが好きだったりという共通点探しをできることが大事だと思うんです。アバターとかじゃなくても、交流掲示板でもいいかもしれません。お互いのプロフィールを自由に公開できる仕組みを作り、お互いの人となりを事前に知って交流のきっかけにする、という。

A：大学でいえば、ちょっと古いかもしれないけど、manabaなどの教学システム上に掲示板を作ておくということですか。

D：例えばそういう形ですよね。

A：フォーマルな掲示板だとみんなびびって何も書かないですかね。学生がオンライン化することで、希薄になる人のつながりをどのよう

につなげていけばいいのか。

B：私も自分の授業の参加者用に「交流掲示板」などを作ったのですが、ほとんど活用されませんでした。恐らくゼミのようにほどの信頼関係が出来ていなければ、教員も見ている場で自由に交流するというのは難しいのではないかと思います。

D：ちゃぶ台をひっくり返すような話で恐縮なんですけど、そもそも私自身は大学時代、3年生で研究室に配属されるまで、学科内に友人がほとんどいなかったな、と思います。

A：私の場合、2年生から専攻に所属したのです。ですから、そんなに積極的にコミットしなくとも定期的に食事に行ったり、授業が一緒でノート交換とかしたりで結構交流していました。その状況が今の1年生、特にうちみたいに学科がない240人がバラバラの砂鉄みたいになっている状況に対してどういう磁場を発生させることができるのかということです。

D：私は大学のサークルで友達をつくりました。そう考えると、友達作りという役割は、サークルなど課外活動に任せてもいいのかもしれません。

A：1つはそうだと思うのですよ。だからこそみんなあのサークルも参加できずに孤独感が増幅してしまっているんですよ。

D：たしかに、大学や学部、学科として出来ることは限定的かもしれませんね。

A：ましてやこの座談会のテーマである少人数授業にそんな大きなことを任されてもできないですね。ただ少人数授業を受ける中で、授業で一緒だったねみたいな関係ってキャンパス中にあると思うのですよね。ちょっと飯でも食うみたいなのりが結構大学時代にありました。だからこそ少人数授業で仲良くなる効用だと思うのですよね。

E：私はオンライン上でのつながりは、今おしゃったようにその後のキャンパスライフでのつながりの種にはなるのかなとは思っているのですが、オンライン・コミュニティだけでは、学生たちの帰属集団には成り得ない

のではないかと悲観的に捉えています。ただ、学生たちは匿名でかもしれませんけど、Instagramなり、Twitterなりで授業動画のスクリーンショットを勝手にアップロードしていたりしますよね。規則としてダメだよと言っても実際にはしているというのがちらほら見えますし、授業情報の交換もなされてたりする。そういうインフォーマルなつながりというのは今も形成されている。なので、オンライン授業下の学生間交流というものは無理なものは無理だし、できているものは見えないところでも既にできている、できつのあるのかなと。教員が交流の場を設けてあげようとしても難しいような気もする。やっぱり、自分の受け持った授業の中でこの90分は少人数で対話しておこうねっていうのが次につながるかもしれない。今はそのように考えています。

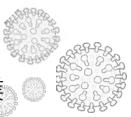
A：だから先のEさんの話で示唆的だったのが、私たちがインフォーマルの方まで目配りする必要は全然なくて、フォーマルの部分の回路をしっかり拾って、フォーマルの問題に対してしっかり対応できるようなシステムを個々で作っておいて、それ以外のところに関しては、おそらく勝手にネットワークが広がっていくんだろうということです。そこで無理やりにアバターがでてきます。

D：結構いいと思うのですけどね、アバター。

E：面白いと思いますよ。大学教育のシステムとして軌道にのるのかは難しさもあると思いますが、一個のツールとしてはとても面白そうだだと思います。

A：任天堂でも教材を作っているから、大学うまく組めれば、さっきの問題でもかなり面白いことができるのではないかと妄想しています。Nintendo Switchで学ぶなんとかみたいな。むしろそれにうまくキャッチアップした大学は意外にそこで創業者利益を得てしまうんじゃないかなと(笑)。

D：たしかにこれが実現すると、その大学は「学生全員に Nintendo Switch 配布」ということ



になるんでしょうね（笑）。

* オンライン化時代の教育力とは

A：授業のタイプによって授業の仕方も違うし、効果も違うし、準備する材料も違いますよね。授業の類型によっては個々の教員の個性をそれほど出さなくてもいい授業もありますよね。例えば、初年次教育でのレジュメの作り方って、私が教えたからものすごく個性的なレジュメが作るような学生が輩出されたとか。それって良くないことじゃないですか。まずはオーソドックスな作法を押さえないといけないわけですよね。だからそういう授業こそはほとんどオンデマンドにしてしまって、個々の教員にかかる負担を減らして、その分もっと専門的な、例えばEさんが言及したフィールドワーク実習のような、教員の個性がかなり出る授業の比重を増やす。そして、対面授業であるか否かを問わず、教員が持っている個性の中から学んでいくことが必要だと思います。

ですから、今までベタッと同じ比重をかけていた教育の比重を見直すことになると思います。オンラインで授業できることが今回の経験でわかったので、教員の個性が出ない授業、言い方は極端ですが誰が教えてもそんなに変わらないような授業群に関しては、オンラインを活用していく。それに対して、教員の個性や教員の持っている様々な知識や知識の体系みたいなものが密接に関わるような授業に関しては、なるべく教員と学生とが密接に関わる形でカリキュラムを設計していく必要があるかなと思うのです。こう考えた時に、Dさんがおっしゃるようなオンラインのシステム、みんなが仲良くながるシステムと、教育のカリキュラムの設計とかどう関わってくるのかがわからないのですよね。

B：確かに大教室での講義式の授業なども、このままオンライン授業でやるのも悪くないかもしれません。後から何度も見直すことが出来

るのも、オンデマンド式の利点だと思います。

D：Aさんの話を聞きまして、1年生ゼミは4クラスに分かれて教員4名が担当してたんですけど、文章指導の基本といった共通部分は教員のうち1人が動画を作成して学生全員に配信し、学生の提出物の添削は各クラスの教員がする、という方式にもできるのではないか、と思いました。

A：思うに、そういう授業こそTAを活用すればいいのではないかと。TAもそこで十分な教育経験を積めるのですよね。そういうふうにステップを踏んでいけばよいと思うのです。

D：Cさんの中国語の授業は、共通部分の教材をCさん1人で作成・配信してるんですよね。

C：そうですね。教材のアップロードまで私が全部やりましたので、残りの仕事は非常勤の先生方にわざわざお願いするまでもない内容です。お話を聞きながら同じようなことを連想していて、少なくとも前期の体制だと、TAとか中国人留学生とかに手伝ってもらえたたら十分な程度の授業になってしまっていたなと思いました。

A：それが教員削減の方向ではなく、より高度で専門な授業に人材を割り振る方向、教育能力を振り向けるという方向にいくとよいですね。そうすることで大学力があがるわけではないですか。

E：同時に「首切り」の流れにもなりかねませんよね。

A：ですので結構大きなジレンマがあって、結局それをつきつめてしまうと、「では、みんな全員放送大学に入ってしまえばいい」という話になるけど、そうはまったくならないです。オンラインだけではやはり難しいのですよね。

E：放送大学はこんなことはないですけれど、極端な話としては、大学教員が1回授業動画を作り、あとはそれを学生が見れば大学での学びが得られますということになってしまうと、非常勤講師も専任教員もいらない、研究室も教室もいらないという発想になってしまふのではと危惧しています。そんなことで大学で

の学びが得られる訳はない、そのような知識のパッケージ化はできないと思います。大学のキャンパスにいろんなタイプの人間が集まっている、今まで会ったことのないような教員や学生がいる、その環境のなかに身を置くことで得られる相互作用のなかで、大学での学びがあるはずだと考えています。

A： そう考える教育とは何かという大きな問題になってきて、そもそも教育っていうのは生身の人間が介在しないで成り立つか、成り立たないかという問題になります。もちろん分野や授業の類型によると思いますけれど。

E： その点に関してですが、フィールドワークとはもともと現場主義の発想にたつものです。現場にいってはじめて「分かる」といいますが、この日本語には、なんというか分類する・分けて整理して、頭で理解するっていうだけじゃなく、体感・体得するっていう意味もあることが大事ですよね。この側面があるから、「身に着く」という言葉が「理解する」っていう意味になるじゃないですか、日本語の場合。これは英語だと訳がわからない表現ですよね。この日本語の「分かる」というのがやっぱり教育時にも大事だったんだろうなあとあらためて思います。たとえオンラインの授業であったとしても、やはりその教員の身体を通り抜けた知識、個性をもった言葉であることが大事で、冒頭に話がありましたけど、お経ではダメなのですよ、その人のからだを通

り抜けた言葉じゃないと意味がない、伝わらないと思うのですよね。

A： 個人の話し方に個々のアクセントとか、一定の訛りがあるじゃないですか。そういう表現になるまでもっていかないと結局身につかないですよね。

E： 先ほどの基礎教養いじめのような議論は、半分は賛成できるのですけれども。

A： 基礎教養いじめというのではなくて、教員の様々なリソースが限定されていく中で、それをどううまく分配するかという時に、オンラインや今回の経験をうまく使おうという意味でいったのですよ。

E： はい、私も敢えて議論を吹っ掛けるような形で述べてみましたけれど、全く同じように思っています。授業の数があまりにも多くて、勘弁してくれと思っています。だけど、一方で心配もしているという。

A： だからオンライン授業がうまく普及するとしても、なるべく1年の時から個々の教員の個性が分かるように、様々な教員に触れるようなカリキュラムを組んでおかないといけないですね。3年生になって個性の強い人が突然現れてきて、急にえらく濃い味付けになるというのは難しいと思うので、最初からいろんな味付けを用意しておいて、そこから個々の好きな味を選んでもらうみたいな感じかなと思います。

座談会③：中国語教育

◎ 概要

- 日時：2020年8月15日
- 参加者：
 - A：国立大学情報センター准教授。初級中国語を担当。
 - B：私立大学経済学部教授。初級中国語を担当。
 - C：私立大学理工学部教授。初級中国語を担当。
 - D：私立大学経済学部教授。初級中国語を担当。
 - E：私立大学外国語学部専任講師。初級中国語を担当。

初級「中国語」の授業は、発音と日常会話を重視した指導になることが多く、コロナ禍で「いかに対面に依存した授業を行ってきたか」が露呈された格好になった。外国語科目は「リアルタイム」「オンデマンド」「課題提示・レポート提出」の3つの授業形態およびその組み合わせで実施されたが、オンデマンドで行う授業は、準備は面倒だが、学生の自律的な学習能力を高めるのに役立っているかもしれない。遠隔授業で最も難しいのは、成績評価である。オンラインで不正を行うことができないようにする工夫も大切だが、主に記憶力を問うてきた、外国語教育の評価方法自体を見直す必要もあるのではないか。昔と比べれば、はるかにたくさんのメディア教材を用いることのできる今の学生は恵まれていると言えるかもしれないが、そういう環境を十全に活かした学習が成立するためには、教員も絶えざるバージョンアップをしていく必要があるだろう。

* リアルタイムかオンデマンドか

A: 今学期はほとんどのところで遠隔授業だと思いますが、リアルタイムでオンラインでやっているところと、それからオンデマンドでやっているところとあると思います。皆さんそれぞれどんな感じでしたか。うちの大学では語学は原則、Zoomでオンラインするっていうことになりました。最初は教師が個人で契約していたZoomを途中から学校でまとめて入れたりして。最初はあんまりずっと画面を見させるのも健康に良くないだろうというので、40分ぐらいに時間制限しながらやってたんですけど、だんだん伸びていって、今だいたい、ほとんどの先生が1時間ぐらいビデオを繋ぎっぱなしにして、学生に顔見せてるんで

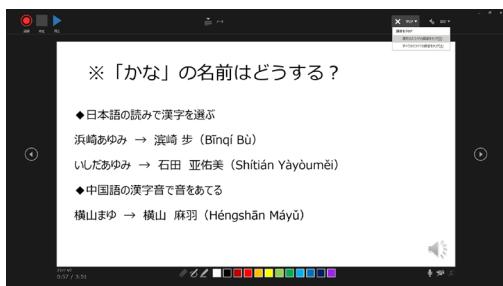
すね。中には、目一杯使っていいもんだと思って90分間ずっとオンラインしてる先生もいます。それプラス、オンデマンドで視聴するビデオ教材や、ドリル練習のeラーニングまで提供するっていうので、これまでの対面授業よりも、はるかにたくさんのことを行っています。教師の労働も増えているし、学生のやることも増えている。

B: うちはキャンパスによって対応が違います。例えばAキャンパスでは、学部長が「我々は完璧な最高レベルのオンライン授業を提供する」と宣言したことが、ネットでも結構な話題になっていましたが、Webexのトレーニングでやっていますね。Bキャンパスの場合は、近隣にある理工学部で、おそらく1割ぐらいインターネットに接続できない学生がい

る、そこへの対応を重視して基本オンデマンドでやる、という方針になり、すぐ近くの私の勤務するBキャンパスも、だいたいその方針で行くことになりました。私は経済学部Bキャンパスのワーキンググループのメンバーになったのですが、3月末に会合を開いたときに、オンデマンド教材をどの程度の長さで作るかを一応取り決めておこうという話になり、講義科目は45分から1時間、語学は一人ひとり指名する必要がないことを考えればだいたい20～30分で良いだろうと合意ができて、だいたいその線で教材を作りました。同じ経済学部でもCキャンパスの先生は、Webexで90分みっちり授業をやった人が多いようです。

C: 私の所属している理工学部は、おそらく色々な学部の中で一番早く動いていて、3月上旬ぐらいにはワーキンググループができていきました。

理工学部はBキャンパスから歩いて10分のDキャンパスにあるのですが、1・2年生の間はBキャンパスで勉強し、私はそちらの所属なので、Bキャンパスのワーキンググループのメンバーになりました。教員の多くがライブでのオンライン授業を希望することが予測されたが、クラスに1人でも常時接続ができない学生がいる場合、それを見捨ててはいけないということで、基本的にはオンデマンドにしてください、ライブで行う場合も必ず録画してオンデマンドで受講できるようにしてくださいという話がワーキンググループから回ってきたので、私はそれをB



スライドの記録でナレーションを入れる

キャンパス所属の学部教員に伝えて回る役をしました。時間については、特に経済学部のように決めてはいませんでしたが、文科省から出ている書類に、どのくらいの時間をやるべきは彈力的に決めて良い、という文言があって、そうすると必ずしも1時間やる必要はないので、それを元にそれぞれの語学や、いわゆる一般教養のオンデマンド授業のガイドラインを作って配付しました。ただし、オンデマンドで教材を作ると、PowerPointファイルに映像なり音声なりを付けて動画として出すというのが、けっこう苦労しますよね。そこで、6月ごろからは学生全員が常時接続できると確認できれば、そして学生全員がうんと言えば、リアルタイムでやってもいい、という風になりました。特に6月からは大学がZoomとも契約したので、割となし崩し的にWebexやZoomのライブでやる人も増えた感じです。ちょっとこういう言い方はなんんですけど、その方が楽なんですね。教科書をもとにその場で喋ってればいいので、易きに流れた人もいたかな、と思います。ただ、仮にZoomでやるとしても、それは録画して、Boxという大学が契約しているクラウドストレージにも置いておきなさい、つまり、リアルタイムオンラインでやっても、常時接続じゃない人も録画を見られる配慮をしなさい、というのが理工学部ではかなり強く言われた感じです。

A: 易きに流れるってまさにその通りで、うちもなんかなし崩し的にどんどん緩くなっていました。最初は、学生がディスプレイに向かう時間っていうのは限りあるリソースだっていう考え方方が主流で、長すぎるオンラインセッションは駄目だ、せいぜい時間の半分まで、45分までだよっていうような話をしてたんですけど、結局なんかどんどんどんどん伸びていきました。先日何人かの先生に聞いたのですが、思ったよりもトラブルってなかったよね、うまくいったよねっていうようなことを言ってる先生が多かったです。教員は対面と同じことをやったわけで、教員が「思った



よりうまくいった」と感じるのは当たり前です。この後、学生からどういう反応が返ってくるか、どういう成績が出せるか、戦々恐々としているところです。

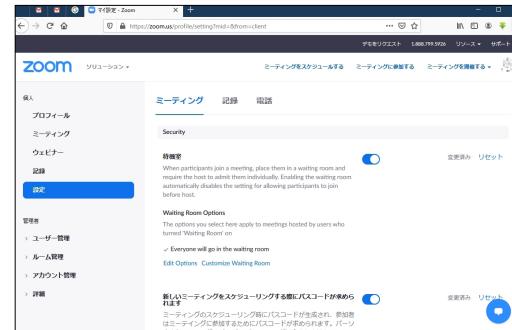
- C: 私が非常勤で行っている他所の大学では、かなりそれが問題になって、朝から晩までZoomなりWebexなりでオンライン授業を受けて、課題が多くすぎて、とてもじゃないけどこなせない、という不満が、特に保護者から結構出たようです。

それは確かにそうだろうなと思います。対面の授業がなくて、学生にきちんと伝わっているか、教育効果が上がっているか、どうしても不安に思ってしまう教員が、マックスで課題を出していく、ということも多かったのかなと思います。

一方ですね、うちの子が可哀想だ、ずっと1人で部屋にいて課題に追われていて、大学生活をエンジョイできないじゃないか、みたいな話もちょっとありました。おそらく、そういう保護者の方が考える「大学生活をエンジョイ」というのは、授業とは違うところにあるのかな、と思いました。しかし一方で、課題を減らしたら減らしたで、今度は「金返せ」と言われるんだろうな、というようにも思います。

- A: 保護者はリアルタイムの授業をやってると、子供が家にいてもちょっとなんか安心するみたいなところあるんですけど、Eさん、M大学はどうですか。

- E: M大学は大学としてはデータダイエットの関係でオンデマンド形式を推奨していましたが、特にそれにこだわらず多くの先生は自由にリアルタイム形式やオンデマンド形式の授業を選択されていました。講義形式の授業を担当されている先生方の中には、課題型を選択し、「教科書のこのページからこのページまでを読んで、レポートを書いてきなさい」みたいな授業を展開されている方もおられ、学生の鬱憤を買っている例もありました。学生アンケートや話を聞いていたり、リアル



Zoom の煩雑な設定

タイム形式のほうが評判が総じて良く、課題形式になると悪評が多くなるという傾向がありました。

リアルタイム形式を選択される先生には、案外コンピューターに慣れてない先生も多かったのに当初驚かされました。最初の設定さえできてしまえば授業の進行自体は通常の対面形式と変わらないで楽なんでしょうね。こだわりのある先生は、教室の中にスタジオみたいな設備を作っている人もいましたし、慣れない先生であれば、教室に臨時に設置したZoom配信設備を使って、普段通りの授業が出来てしまうというのもいいところなんでしょうね。実際に教室で1人で板書しながら授業をする先生をちょくちょく見ました。

私自身は非常勤で出講している大学も含めると、リアルタイム、オンデマンド、課題型の一通り形式を経験することができました。リアルタイムで授業をするタイプのものと、あとはオンデマンドで教材を作つて配信してそれに対してフィードバックをするんですね。極端な形式としては、課題型として学生がやってきた課題を「赤ペン先生」じゃないですが、ただひたすら採点し、コメントを返すという授業もありました。T大学のある学部はそういう形式でしたね。本当に14、5回中13回はもうずっと学生から送られてきたものに、丸つけるだけでした。教材自体は専任の先生が1人で全部作つておられたので非常に楽でしたが…。一番最後に学生間でフ

ストレーションがたまっていたんじゃない
かと思うのですが、1回だけリアルタイムで
やってくださいって言われてやりました。た
だ、出席を任意にしたので、35人ぐらいの
授業では10人、10人ぐらいの授業では、1
人だけしか来ませんでした。

A: むしろ、来ても来なくてもいい、という授業
で、よく10人も来ましたよね。

E: 来ないと不安、ということもあったのかもし
れませんね。大学入学から数か月経って「初
めまして」でしょう？顔もわからない教員が、
授業での接触もなしに成績をつけるわけです
から、「自分で見落とされるんじゃないかな」「
私の努力を正当に評価してもらえるのか」、
と不安を感じてもおかしくないですね。

別の非常勤先では、ビデオ講義動画を作っ
て、それに対して課題を出してやってもらう
という形にしたんですけど、30分の講義と
かちょっと作るの無理だったんですよ。あっ
という間に終わっちゃったので、最初に15
分の講義動画を作り、その中で課題を出し、
その課題をフィードバックする形で後から
別に15分の講義ビデオを見せるという風に、
課題を講義動画で挟む形にしました。終わっ
た後にもう1回見てね、と。

A: うちの授業でも、講義動画を作ったのですが、
なるべく短くしちゃって、例えば3分間を4
本立てとかにして、それを最初に見せてオ
ンラインセッション、その後演習問題で再確
認、という風にしていました。

E: ええ、私も講義ビデオは5分でいい、と思っ
ています。中国語の授業って、やっぱり説明
ではなくて練習をいくらさせるかが大事だと
思っていますから、練習とか課題を多くして
いました。まあ、講義ビデオを見る時間も含
めて、授業時間の1時間半以内に全ての活動
を終われるような分量にしていましたが。

* 教員のICTリテラシー

B: 課題方式でやって鬱憤を買った先生は、なぜ

その方式にしていたのでしょうか？

E: 実際のところはわかりませんが、オンデマン
ドにてもリアルタイムにしても何らかの準
備が必要で面倒くさい、ということに尽きる
かと思います。最初から「私機械音痴だから
できません」と逃げ腰の方もおられましたし、
頑なに拒否をされた先生方もずいぶんおられ
ました。ただ、そういう先生方にまさか「じゃ
あ、やめて下さい」と言うわけにもいかず、
後に禍根を残すのも良くないので、「解決策」
として、「課題方式を認めるという通達が上
から出てきました」と言いました。実際には
課題形式でもやり方次第でいくらでもうまく
できるはずなのですが、本を読みレポートを
書くだけではだめですね。

C: うちの理工学部も同じようなケースがありま
した。理工学部なので、Dキャンパスの物理
や数学の先生たちはもちろん問題ないですが、
Bキャンパスの語学の先生や、いわゆる
一般教養の先生の中には、PCにちょっと苦
手意識を持っている年配の方などもいて、学
部の執行部もそれを把握していたので、そ
ういう方にも何とか授業していただくためにと
いうことで、例えば語学の中級や上級のクラ
スであれば、PDFで何か課題を置いて、そ
れを学習していくという形でも構わない、た
だし課題を出しっぱなしにするのではなくて、
課題を回収し、きちんと採点して、コメント
を付けて返すというように、双方向にすること
だけは必ず守って欲しい、という提案をし
てきました。

A: MITでオープンコースウェアが最初に始
まったとき、いきなり1,000本を目標に掲げ
たらあちこちから「クレイジー」な試みだと
言われたそうですが、やっぱり、「絶対やら
ねえよ」って言ってる年配の先生に、とにかく
PowerPointでもPDFでも何でもいいから
出してね、って言って、やらせたっていう話
です。なんか似たようなものを感じますね。

B: 年配の先生は本当に対応が難しかったです
ね。中・上級では訳読の授業になってくるの



で、Google フォームで「日本語訳提出フォーム」を作って配布しました。第何課の何行から何行かを記入して、日本語訳を貼りつけて提出するようなものです。それを配って、提出された訳を Word にまとめて、コメントをつけて返してください、という風にやってもらいましたね。

E: それって、学生は、スマホでパシャッと写真撮って、アプリで翻訳をして、コピペとかしゃいませんか。

B: その可能性はありますね。

E: 授業に真剣に取り組む気がない学生だとそれで全部やっちゃいそうですね。

話を教員の ICT リテラシーに戻しますが、M 大学では 3 月ぐらいに、どの先生がどれぐらいのパソコンスキルを持っているのか、いないのかを、5 段階の表を作つて調査していましたね。

A・B・C・D: すごい！

E: この表をもとにどこにサポートする人的資源を集中するかっていうのを考えていたようです。ほっといていい先生・レクチャーしたら何とかなる先生・手取り足取りやらなきゃいけない先生などに分類して、必要不可欠なところに資源を投入するっていうことをやって取りこぼしをなくそうとしていました。

C: 全く同じ発想で、取りこぼしをなくすのはうちもやりました。まず、オンライン授業はこうやってください、というような全体のガイドラインを作つて共有し、さらにそれに基づいて各語種の専任教員が非常勤講師にやり方をレクチャーし、少しいろいろと教えてあげなければならぬ先生には、責任者が貼り付いて教えたりしました。

A: 取りこぼしをなくすために、わたしは 50 何人の外国語教員を対象に、毎日毎日昼休みをつぶして、Zoom のレクチャーをやっていました。全学教育担当でも似たようなことをやってたんですけど Moodle のレクチャーを Zoom でやったりして。どちらもだんだん参加者が増えすぎて質問対応もまとまにできな

くなり、みんな不満に思っていました。学生以上に先生も不安なんですね。とにかく講習に出なきゃ、出でていればできる、みたいになっていました。初心者用とか上級者用とか分けたやつたのに、とにかく全部参加するっていうなんか、カルチャーおばさんみたいな人が続出して困りましたね。専従のヘルプデスク担当、とか置ければいいんでしょうけれど。

うちはなんかネイティブの非常勤がやる気を出して、ガンガン参加して、新しいことをやろうとしてくれたのは良かったんですけども、「どうやればブレイクアウトルームはできますか」とか、授業中に電話をかけて来る先生がけっこういて。講習会をいくら受講しても、結局一対一で教えてもらわないと、安心できない、ちゃんとできない、みたいですね。

B: 逆に、NII のサイバーシンポでいろいろ情報が出ていましたよね。あの辺も踏まえて、やはりデータダイエットも必要だし、それと持続可能性を考えると、しょっぱながら非常勤の人たちに鞭打って、ブレイクアウトを使いこなして完璧にやれ！ みたいにしたらもたないだろう、というのがありました。とにかく今回は緊急事態で準備も全くできていなかつたから、「とりあえず形を作ることが大事で、理想の結果を追い求めてはいけません」と、むしろこちらから言いました。

C: うん、うちもまったくそうですね。

B: ただ、この状態が 1 年限りで終わる感じでもなくなってきたので、そうすると今後、「新常态」に向けてどうするかというのは考えていかなければなりませんね。今学期の経験で、多くの教員が徐々に Zoom なり Webex なりに慣れてきていますし、リアルタイムはオンラインよりも楽ですからね。今年度いっぱいである程度しっかりできるように持つていけば、来年度以降はそこそくうまく回せるだろう、くらいの塩梅で行こうと思っています。

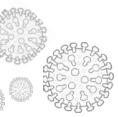
A: うん、そうですね。なかなかやらない先生やできない先生を、どういうふうに説得してくかっていうのはもう重要な問題ですけどね。

* 非常勤講師は各大学への対応が大変

- E: 非常勤の先生に辞められて困ったっていう大学の話をいくつか聞いているのですが、皆さんのところはなかったですか。
- B: うちは、それを出さないのを目標にやっていました。ただ、ある大学では授業開始3日前ぐらいにオンラインで説明会があって、その場で非常勤の先生が1人辞めたそうです。そのほか、具体的な事例は詳しくお話しできませんが、心の健康を害した先生が、非常勤、専任を問わず、かなりいるみたいですね。
- C: ええ、真面目な先生が夜中までオンデマンド教材作って、双方向も必ずやらなきゃということで全員の課題を採点して、全く寝てないみたいな話を、あっちでもこっちでも聞きましたが、もうちょっとサスティナブルにしないと、やっていけないです。
- B: それもおそらく原因は2つあって、事務方の作る公式のマニュアルで解説されるやり方が、必ずしも各科目の状況に応じて労力を最低限にするように最適化されていない、というのが1つあります。こうすればできる、と書いてあるだけだから、マニュアルに従って愚直にやると、作業量がものすごく増えてしまう。もう1つは、本人のIT・ICTスキルが低すぎる、というのもありますね。今回はどうも前者が悪さしていたかな、というのを結構感じますね。
- C: まあ、後者もけっこうありますけどね。(賛同の声)
- A: うちでは特にネイティブの先生が多いんですけど、半端に詳しいとなんかいろいろやってみたくなっちゃって、私のところに昼も夜も関係なく、電話で問い合わせが来るんですよ。午前0時前に電話かかってきたときはさすがにむっとしましたが。
- E: 電話番号を公開してしまうとそうなりますね…。
- A: これはどうしようもなくって、ヘルプデスク

用に1台ケータイ用意して、それを持つのが私しかいない、と。

- B: 中国語の非常勤講師は他の語種に比べると、やはり新しい技術を貪欲に取り入れたいという人がかなりいるんですよね。ネイティブの中国語非常勤は、秋学期に語学は対面授業もできることになったのですが、全員がオンライン授業継続を希望していました。
- C: それがフランス語のネイティブだと、リアルタイム・オンラインをやりたがって、周りが困ったという話も聞きました。フランス語ってちょっと面白いですよね。対面をやりたがって、オンラインだとライブを選びたがる。国民性の違いなのか何なのか、よく分かりませんが。
- A: うちの中国語ネイティブとか、付き抜けちゃってて、Zoomの画面共有もちょっと使いづらいから、って自宅にホワイトボードのでかいの買って、ホワイトボードと一緒に自分が画面に入って授業をやってたりします。そこまでやられたら、まあうちのネイティブ、放っておいても大丈夫だな、という感じなんですが。
- B: 中国のネイティブの先生方は、思ったよりも、と言うと失礼ですけれど、順応力が高いという感じがありますよね。
- C: ZoomもWebexも、作ったのは中国人ですからね(笑)。あと、私は非常勤の先生がたに負担をかけないように、かなり気をつけました。他の大学で非常勤をやっている方からは、manabaを明日から使え、Zoomも使え、でも講習会はもう専任だけでやったから、非常勤は自分で勉強しろとか、そもそもすべての話を非常勤に丸投げしているとか、無茶苦茶な話を結構聞きました。それで半年たって、色々な方たちが一生懸命覚えたという側面はありますか、ずいぶんひどい話だなと思いました。うちは最初に非常勤を大事にしようというベクトルが働いたのは良かったなと思っています。先ほどEさんからもありましたが、うちは専任がビデオを作って、非常勤の先生



方は学生との課題のやりとりを行って、それで双方向を成り立たせるというようにしましたが、それができたのは、もともと全クラス統一教科書で、進度も統一していたからです。それで非常勤の先生方の負担をかなり軽減することができました。また、学部長から「そういうやり方もあるから、それでもいいよ」という提案があったのも大きかったです。ただ、今回は非常事態だからということでそうしましたが、これがずっと続していくと、変なところからつかれる可能性もあることは警戒しなければと思っています。これで済むんだったら非常勤全部要らないじゃないかとか、ビデオを流せば済むのならそもそも専任すら必要ないだろう、みたいな議論に結びついでいくと嫌だなと思っています。実際、職場にはそういうようなことを口にされた方もいますし。

B: そうなんですよね。今回うまくいった。だから、自分の負担を減らすためにビデオの授業を導入したいとかいうふうに主張してくる人がいるんですよね。

E: ああ、そっちからですか。

B: ええ。専任教員の方からそういう声が出てるんですよ。そういうのは外国語潰しとか、教育の質の低下とかをもたらす危険性があるので、むしろやるのであれば「反転授業の材料として使う」というのが一番建設的で、落としどころとしては妥当だと思うんですけども、どうもそういう方向にすんなりいってくれそうもないところが悩ましいですね。

A: 第二外国語潰しの動きの1つに、CALL授業・教室潰しも入ってきそうですね。うちは英語も初習もCALL授業が1コマ必修であるので、もうすでにいろんな学部の先生がたから、「学生が学校に来られないのにCALL教室維持する意味あんの、高いんでしょあれ」って言われてます。成果報告書は毎年出していますが、それだけでは踏ん張れなくなりそうです。実際、他の情報端末室と比べて、サーバーもクライアントも高いんですよ。だから最終的に

は他の情報端末室と同じぐらいにしなさい、とかになっちゃうのかなあと。あと実は4年あるんですけど、レンタルが。その間になんかそういう嫌な方向に行かないように手を打たないと、と考えています。

B: ただ、第二外国語云々とは別に、今回CALLはいろいろと試練にさらされていますよね。パソコンを使って、家からこういう風にある程度できる、となると、CALL教室での授業ってどれだけやる意味があるのか、という議論は出てくるでしょう。それに、今までCALLはかなり特殊な人たち、いわゆる技術系の人が非常にやりたがってやってきた、というのがあって、他の人がやらないことで希少価値が出ていた、という側面もおそらくあったと思います。それを今回、非常事態に際して情報がどんどん共有され、今までCALLとかe-Learningなんて聞いたこともなかったような人までもが体験することになっちゃった。そういう状況下で、じゃあCALLっていう分野はこれから何を売りにして、どういう層にアピールしていくべきかを業界戦略として、もう一度練り直した方が良いと思いますね。

A: CALLは、確かに「誰もわかっていなかった時代の驚き」に依存した部分が非常に大きい分野であると感じています。それだけではマズいし、情報をめぐる技術が日々進化する中で、より先進的なものを提供していくこと、それを多くの人が使えるよう言語教育固有の課題に落とし込んでいくことの両方に目端の利くエキスパートが出て来る必要があるでしょうね。たとえば今はAI音声通訳機が出てくる時代で、これで第二外国語の授業が全部なくなる、みたいな極端でネガティブな主張をする人がたくさんいます。でも、そんな風に簡単に誰でも使えるような高性能の翻訳装置があったら、初心者でも高度なコミュニケーション訓練が可能になるかもしれない。これまでみたいに、記憶力を競うような外国語の授業はなくなるかもしれないけれど、形を変えればまだまだ生き残りはできると感じ

ていますし、変わらなければならぬ
でしょう。

以前、専門と接続する初年次教育のあり方を議論する中で、外国語と情報を両輪として進む初年次教育が議論されました。外国語教育の位置づけは、おそらく大学ではそういう方向に進むのがベターなのかな、と思いますが、CALLという専門分野は、やはり技術的な面で先頭を走り続けなきゃいけないかなっていう感じはします。

- B: CALLを理論付けて体系化するっていうのは、やっぱりAさんとかEさんみたいに専門にしてる人にしかできないですよね。
- E: 私は、これまでCALLはほとんどというか全く使っていません。パソコンあればどうとでもなるという考え方なので。
- A: CALLに使えるものはいっぱい作ってるでしょう？（笑）
- B: いずれにせよ、知識や理論の体系化は、誰かがやらなければいけないと思いますね。
- A: 中国語CALL大系を出さなきゃいけないですね。実はなんというか、そういう概論書、企画としてはありますので、それこそ科研の皆様よろしくお願ひします。
- B: あ、逆に振られてしまった（笑）

* 学生の学習環境と大学の支援

- A: さて、一口に大学側、とまとめていいのかどうかわかりませんが、大学の制度や対応、それに教員個人の資質や対応にいろいろな問題があることが見えてきましたが、学生の学習環境、といった面からも考えてみましょうか。

先ほどネット上の環境が用意できない学生はどうするのかという問題が指摘されていました。

うちは据え置き型のWi-Fiルータを、言つてきた学生全員に貸し出しました。この辺の大学はどこも同じような対応をしたようですね。

あと、学校の教室、ネットワークを、オン

ライン授業受講用に開放してはどうか、という意見もありました。緊急事態宣言が解かれからは、三密に配慮しながら、たとえば60人ぐらい入りそうな教室に3～4人といった感じで人を入れていました。でもあんまり教室を使いたがらないですよ、学生が。教室使うには申込が必要ですし。その代わり、校舎に設けられたホールのようなところで勉強している学生が現れました。そこに何人か集まれば、教室より危ないんじゃないかと思うんですけど。もっともほとんどが自宅でやってるんで、よくわからないところもありますね。

ただやっぱりいろいろ問題はあって、同居の家族の目に入るがちょっと嫌だっていうものもあるし、また、双子の妹が大学生で、2人とも授業、という場合、パソコンはあっても恙なく授業を受けられる部屋がないという問題もありました。そこにさらにご両親の在宅ワークなどが加わると、通信容量は大丈夫か、とか、ネット関係がたとえ問題なくとも、ちょっとなんかやりにくいよね、という話がありました。そういうのってどうなんでしょうね。

- B: 当初理工学部の見積もりだと1割ぐらい繋がらないんじゃないかなでしたけど、蓋を開けるとだいたい5%前後でしたね。
- C: しかもそういう学生には資金補助をする、ということになりましたね。全学的に、1人2万でしたっけ、3万でしたっけ。
- B: その後どんどん金額が増えましたよね。
- C: 私は結局その話に関わっていないので、どのくらい利用されたのか知らないのですが、学生と話した限りでは自分の周りにはいませんでした。うちの大学の学生は、世間並より少し裕福な家庭が多いのではないかな、という気がしました。もちろん困っていた学生もいるはずで、この制度を使ったのかもしれませんが、おそらく他の大学よりは学生の経済状況が良いのかもしれない。
- D: 結局、領収書ベースで補助を出すということ



になったようですが、かなりたくさん申請が出たものの、精査してみると、授業履修のための最小限のネットワーク環境を確保するためではなくて、すでにある環境をもっと良くしたいみたいな学生がすごく多くて、かなりが補助対象外になったというような話を聞いています。だから、本当に困ってた学生っていうのは、どれぐらいいたかはよくわからないです。ただやっぱり C さんと一緒に、感覚的には大半が何とかできてるっていう感じはします。

- C: 「出来てない子は目に入らない」という問題もあるのかもしれないけれど、そうですよね。最初はブロードバンド環境でない学生のことがすごく心配でしたが、問題はそこじゃなかったかも、という気がしています。
- D: 多分、事務部門とかにも、ネットワーク環境を準備できないみたいなクレームはほぼ来ていないのではないかと思うんですよね。どういうふうにしてなんとかしたのかわからないですけど、どうしようもないことはほとんどなかったという感じでしょうか。
- E: うちの場合、テスト前になるとタイミングを計ったかのようにパケ死しました、と言ってくる学生がいました。1回だけならともかく、毎回だぞ、みたいな（笑）。
- B: 一時期、レポート提出期限の直前に、きまって学生のプリンターが故障していたのと同じパターンですね。
- E: それをどこまで鵜呑みにしていいのか、さじ加減がすごく難しかったです。金錢的な貸し出しとか、援助みたいなものもありましたが、学生に直接じゃなくて学費から減免するって形で補助していたみたいなので、「もらった感」がないんですよね。
- 個人的には現金で渡して、さあ、契約してこい、領収書をもってこい、だったらいいんでしょうけれど、還付金でもなく、学費からの減免という形だと、結局それをこっちの意図するものに使ってくれなかつたっていう可能性は大いにありますね。

だから、領収証で返すっていうのは、やり方として正しいなって思います。

- C: 例えばタワーマンションに住んでいて、保護者の方がテレワークをしている、兄弟なんかもいてネットを使っている、だから通信環境が悪いというような問題は、解消されてない気もするのですが、そのあたりどうなんでしょう。私の学部はオンデマンド推奨で、私自身もオンデマンドしかやってないので、例えば Webex や Zoom で授業をやって、うまく入れない学生がいるというような状況には接していないのですが、ライブでやられた先生方はその点どうですか。
- A: 大学院のゼミですが、親が在宅ワークでおられて、授業中に挨拶に出てこられたことがありました。授業中なのでスミマセン、と丁重にお引き取り頂いたのですが。
あと、中国からつないでいる学生もいたのですが、つないだとたんにご両親出てきたりしますね。中国関連の話題の時には、ちょっと意見をもらったりして。
- B: ニャンコ、ワンコが、というのはよく聞きましたが、ご両親というのもあったのですね。
- A: 親、聞いてますよね。あと兄弟姉妹で受けてて、何か別の授業の声が聞こえてきちゃったりとか。
- B: 私は語学のオフィスアワー的にライブでやるのと、あと少人数ゼミ授業をやってましたけれども、音が聞こえないというような学生は、どうしても毎回毎回出てきていましたね。Webex などでは、マイクやスピーカーを別のソフトを持って行かれてしまうと、聞こえるように直すのが難しい、という問題があって、とりあえずリブートさせていましたが、それでも 100% 是解決できなかったですね。これは、コンピューター環境、情報環境、通信環境の問題ではないのかもしれませんのが、いずれにしても「どうしても繋がらない」学生が出てきましたね。
- A: 繋がりません、をどこまで鵜呑みにしていいのかってのはあるんですけどね。繋がらな

いって言ってるものを、繋がってるだろうとは言えないのです。

E: そのため私の授業では、リアルタイム形式でする場合には、出席は必須とせず、万が一出席できなかつた場合は、録画を確認して欠席者用の課題を出すっていう形式にしていました。途中で居なくなつた場合も同じですね。

テストもオンデマンドでいいかなって言つたら、「すいません YouTube 繋ぐだけのパケットもなくて」と言うので、「YouTube は操作して通信量を下げられるから、下げ方教えるから」と伝えたのですが、「よくわかりません」と逃げようとするのでこのあたりのやり取りには非常に苦労させられました。

A: だいたい皆さん、学生はみんな PC ですか？ タブレットとかスマホとかいうのはないですか。

E: 当初はスマホが多かったです。でも、授業が進むごとに、スマホ率が減ってきました。最初の方では 80% ぐらいスマホなのが、終わりの頃には、みんなパソコンでつないでいました。また笑い話ですが授業の終わりの質問タイムに、お母さんの声が聞こえてくるんですよ、「先生、パソコンはどの機種買ったらいいですか」と。そういうこともあります、最終的にはパソコンを使用している学生が多く



Youtube で教材を限定公開

なっていましたね。

B: 私は今回、課題は全部紙に手書きさせて、写メもしくはスキャンして提出、にしてたのですが、だんだんスキャンして PDF で提出する率が増えてきました。スキャン機能のある複合機を買う学生が増えたのでしょうか。

E: 学年による違いってなかったですか。M 大学の場合、1 年生はわりとパソコンをそろえているのが多かったんですが、3 年生ぐらいが一番頑なにパソコン買わない人が多かったです。4 年生は就活もあるので、だいたい持っていました。学年による差ってすごく大きいな、という印象です。1 年生は、最終的にはほぼ 100 パーセント持っているような印象でした。

B: 1 年生は、「授業で必要だから買わなきゃいけない」と親御さんが思ってくれたのが大きですね。

A: でも、いまどき就活には絶対必要ですよね。

E: いやでも、それもスマホでやっちゃう学生はいますね、今時は。エントリーシートもスマホだけで書いている学生もいるし、入力もキーボードよりも早い学生はかなりいる印象です。

A: すごいな。

E: なので、3 年生でパソコンを使わせるのは大変で、最初にずっと、入力練習なんてさせるんですけど、すごいやっぱり時間かかりますよね最初は。

* オンライン授業における成績評価

C: A さんの話の中で、「記憶力を競う」課題ができるのではないか、というのがありました。具体的に言うとやっぱりテストですね。たとえば「声調が合っているか」とか「ピンインの綴りが」とか、そういうことは教科書を見てしまえば答えられるので、従来型のテストは画面を通してはできない、ということですね。絶対教室に来い、とも言えないわけですし。



- A: で、どうするのかっていうのがいろいろアイディアとしてはいっぱい出ていて、たとえばうちのドイツ語でやってるんですけども、20分100問とかいうテストをやって、カンニングできないようにするとか。でもやり方考えればできちゃうんですよね。中国語の場合は、さらに上手がいて、バイト先の中国人を連れてきて、横に置いとく、とか。なんかEさんのところは何か学生をだまくらかすことやってましたよね。
- E: 断定はできませんがやっている学生もいるでしょうね。対策として、問題を数パターン用意したりしています。
- A: あ、そうなんだ。
- E: 実際の試験や課題で、数パターン用意をしてやってみたところ、提示した問題と異なる問題の答えが返ってくる学生がいましたね。個人的にはカンニングするグループを「カンニングクラスター」と呼んで、通常の授業で「共闘」しているグループを事前に探るようにしています。課題を出しながら、回答をシェアしていると考えられる学生をグループ化していく、最終試験ではそこを分断する形で出題したりしていました。そのため1回の試験で評価をするのではなく、課題や試験を複数回出し、回答の間違いや正解でパターン化されている学生がいないかをあぶり出しいくわけです。そのあたりはかなり念入りにやりました。出題する場合も、回答が学生間で完全一致することがないような問題を出題したり、事前に百度翻訳などのサービスを使って、この問題だったらこういう答えが返ってくるかといったことを検証したりしていました。そうすると、怪しい不自然な回答をする学生をあぶり出すことができます。
- B: 確かにね、それこそGoogleは「Chinese」を「中国語」と「中国人」に訳しわけられない、というようなところを使えばある程度簡単に作れそうですね。
- E: これも学年別に傾向がでており、通学経験がなく、まだ横のつながりがあまりいない1年

- 生は、このトラップにはひっかかりませんでしたね。逆に上位年次になると横のつながりもあるので、似たような解答が出てくる例はありましたね。しかし、上位年次の中国語の問題は1年の問題に比べて解答が簡単ではないので、こういった問題は顕在化しやすかったりします。
- B: もちろんLMSを使うにせよ、Googleフォームを使うにせよ、試験機能にはランダム出題機能があると思うので、たとえばGoogleフォームなら問題の出題順を並べ替えるだけでもかなり抑止にはなりますよね。
- E: ほかに問題に時間制限を設けてしまって相談させる時間を与えないっていうのが、わりと効果的だったみたいですね。さらに問題ごとに解答時間をバラバラにしておくんです。そうすることで学生同士が問題をやる時間が揃わないんで、相談する時間がなくなり不正をする可能性をつぶすことができます。
- C: もちろん、時間を短くするとか、Eさんみたいに学生をよく観察しておいて、こいつとこいつは気を付けるとか、あとLMSでランダム機能使ったりというのは有効だとは思うんですけど、持続可能性ということを考えるなら、もっと根本的に変える必要があるのかなと個人的には思っています。記憶力を競うっていうことは、もうやらなくて良いのではないか、というような。よく、Google翻訳使っちゃってけしからん、という話を聞きますが、社会に出て、慣れないドイツ語なんかが出てきた時には、やっぱりみんなGoogle翻訳を使うわけですよね。そういう現実に合わせた方向に、学校教育は変わらなければいけないだろうという気がしています。
- 特に〇大学の学生だと、短期的な記憶力は非常に良いので、前の晩に徹夜でもして教科書を暗記すれば、かなり高得点を取れてしまうわけです。そして1日経ったら全部覚えてない。そういう能力がある。それは学力が高いというより、試験スキルが高いということかもしれません。そして実は我々は、学生

はそうしてきているなど分かっていたわけです。しかしそれで表面上S・A・B・C・Dというように成績を分けることができる、そこに甘えてきたかなと思っています。その結果、1年間中国語を勉強して、いわゆる初級文法は終わったけど、中国語が全然できない、自己紹介すらできないという学生を量産してきたということが、今回あぶり出されたという気もします。ぼくらが目指すべきのは、成績を振り分けることではないんですね。もちろんそれは、学校組織としては重要なことですけど、ここで少し発想を変える必要があります。すこし前からパフォーマンス課題のことも勉強していたので、ピンインを書ける能力ではなくて、中国語を目の前で喋ってもらって、それで成績をつけられないかなと思い、それで、まあ月並みではありますか(笑)、ループリックでできないかなと考えたわけです。たとえば学生に動画を撮らせたり、あるいはライブで目の前で喋ってもらっても良いのですけれど、そういう風にすれば、吹き替えということもできないでしょうし、何かを見てもそれを上手く話せているかなので、カンニングの問題もなく、一番本人の能力を見ることができて、それで成績をつければ良いと思います。問題はそのループリックですよね。いろんな人からものすごい抵抗を受けるでしょう。自分1人でやるにはいいんですけど、「ループリックって何ですか」というレベルの人にループリックの話をすると、「そんなもので成績を付けられないでしょう」という反応が来ます。今、この場に集まっているみなさんにとっては、ループリックは「知っているツール」です。でも、多くの教員はそうではない。20年前、30年前に身につけた中国語の教え方で一生食っていこう、という方が多いわけです。しかし今回、コロナのせいで記憶力を競うことできなくなったり、一種のチャンスでもあると思っています。ピンイン書かせて、「君は声調記号の場所を、ここじゃなくてここに

してしまったから、-1な」みたいに言ったり、学生を最終的にS・A・B・C・Dに振り分けたりすることも重要なのですけれど、そういうところばかりにエネルギーを費やし、授業のゴールについていたのではないか。そうではなくて、中国語を喋れるようにしようよみたいな、割と当たり前のところに照準を合わせて、パフォーマンスとかループリックっていう方向に持っていくべきだな、と思うのです。もちろん、周りの人たちを説得するのは大変ですし、勉強もしていかなければならない。教員間で共通理解を作り、このループリックでいこうというような議論もしなければならない。これはこれから大きな課題ですけれど、このあたりどうでしょうか。

D: Cさんのおっしゃる通りで、いろんな先生から質問が来て、ループリックも使えますよって言うと、これで成績振り分けられますね、みたいな方向で返事が来ることも多くて。だから、コロナで成績のつけ方が心配な状況だったので、多くの先生が成績を振り分けることを中心に授業を考えがちだったのかなと。そこはやはり根本的に見直さないといけないなと思いました。何のために授業をやってるのかという点についても、コロナのせいでも本質的な部分があぶり出されているところがあると思います。第二外国語の授業のもともとの趣旨は何なのか、ただ単に成績つければいいわけじゃないというところ、そこがあぶり出されていると思うし、Cさんとやってるプロジェクトで出てきている話ですが、中国語は忘れちゃうかもしれないけどその後何が残るのかみたいな、メタ認知とかメタ言語能力みたいなところで、どういう成果を学生に残せるのかみたいなところまで考えていかなないと、ただ単に成績評価がどうかっていう話で終わってしまうのはちょっとまずいと思います。テクニカルに成績振り分けできるようなテスト方法を考えるのも非常に大事なことだと思うんですけど、やっぱりある種のチャンスだと思うので、ここで単に成績評価のた



めだけではないやり方を入れていくっていうのは、非常に大事かなというふうに思います。具体的にどうしていくのかというのは、まだまだ研究や協力が必要だと思いますけど。今後のためにも必要なことですよね。

- A: 結構これまでサボってきたツケが回ってきたっていう感じはあるんですけどね、ループリック。
- B: この特集にも、ループリックの記事がありますから、具体例として参考になるでしょう。
- A: まだ、こうすればできるんだっていうことすら全然誰もわかってないような状態なので、本当にわずかやってる人はいるけども、身の回りに何人かそういう人が出てくれないと、すぐ始められないですよね。特に統一授業、統一試験、統一教材とかやってるところも多いから、ますますそうですね。自分はやりたいんだけども他の先生もいるし、となるので、なんかお手軽に入門できる何かがないと。ループリックの入門書、ひとところ流行つていっぱい出ましたけど、簡単は簡単なんですけど、手間はむちゃくちゃかかるよ、っていうのが多くて。考えなきゃいけないこともいっぱいあるよっていう、そういうものなので、そこら辺をもう少しうまくできないかなっていうのを、ちょっと今考えてはいるところです。なかなか難しいですよね。
- B: そのあたりがうまくできれば、先ほど話題に挙がっていた、「統一教材だから非常勤でいるよね」というような議論にも、ある程度対応していくことができるのではないかと思います。評価のあり方の見直しは、ちょうどいろいろなところで言われるようになっていたと思いますが、新コロナによって強制的にそういう機会が与えられてしまった、と。日本では、情報化を今まで積極的にやっておらず遅れていたのが、否応なしにやらざるを得なくなったり、というのと同じかもしれませんね。
- D: 確かにおかしな統一化というのも、この機会に見直していただければ、という感じはあり

ますよね。同じ科目名だからといって全部統一基準でやらなければいけないというのはそもそも無理なわけで、ちょっとよく考えれば分かるわけですけど。

- E: O 大学の 2 年生の中国語の授業ですが、ループリックを使うと、学生がそれに対応してきますね、どうやったら良い点を取れるかをすごく考えていて、最初のときは 10 点とか 20 点しか取れなかった学生でも終わり頃には 80 点とれるようになっている。点を取るために勉強になってしまっているので、これでいいのかという気もしますが。
- D: どうやったら評価されるのか、すごく探りを入れてきますよね。
- E: それで O 大学に関しては途中でループリック評価のポイントとか配点を変えていく形にしました。1 週間単位で評価の指標を変更すると、簡単には対応できないようで混乱していたみたいですが…。かなりマメにやらないとループリックはやりにくいところがあるような気もしました。また点数をつけた後に、なんでこの評価になって、ここは何が駄目でこの評価になっているのか、ということを説明しないと、O 大学の学生は納得しなかったのでかなり細かく評価をしてきましたね。
- A: 段階分けするためじゃないと言いつつ、段階分けしなきゃいけないっていうのは、総合入試で入学した学生の学部移行の時に、外国語の成績ってすごく大きいので、11 段階で細かく評価しないとだめだ、と言われていて、ただ今年はさすがに非常事態なので、それはちょっと勘弁してくださいって言ったんですが、結局今年も 11 段階で評価するっていう話になっています。普段でさえ、希望の学部に入るかどうかのかなりシビアな話で、必ず毎年、何人かから文句が出る、そういう評価なんんですけど。オンラインの授業で、公平性をどう維持していくかは難しい問題です。それこそカンニングし放題のオンラインのテストじゃ絶対できないようなようなことになってるんですよね。だからとうとう中国語

- では諦めて、対面の統一テストをやりますっていうふうに、結局外国語間で意思統一できませんでした。中国語とドイツ語はやるけど、スペイン語とフランス語はオンラインとかですね、成績を11段階に無理やり分けたところで、すでに公平に分けられてないだろうっていう話になっちゃって、多分今年は散々学生から目安箱に批判投稿が殺到するんじゃないかと恐れているところです。
- C: 要は第二外国語の立ち位置ですよね。第二外国語は多くの大学で1年ないし2年までの必修科目で、その成績が希望するゼミや学科に行けるかどうかに結構大きく響くので、成績をきちんとつけなければという圧力がすごくかかっているわけです。ただ、そこに走りすぎてしまうと本末転倒になることになる。
- E: 成績をつける場合に、中国人の先生と日本人の先生で厳しさが違うということはありませんでしたか。
- C: 放っておくと差が出るので、うちの学部では教員間で成績の割合が同じになるよう決めています。外国語の成績は、2年生に上がる時に希望学科に行けるかどうかに大きく関わってきますから。ただ、そういう成績の重みのせいで、みんなちょっと変になっている、というところはありますよね。
- B: うちの学部でも、S、他大学ではA+と言うところも多いのかな、その比率だけは一応協定を作っているのですが、一部語種が成績を緩くつけることで語種人気の不均衡が生じるのを避けたい、という意見が根強くあったのが動機になっています。うちは3年生からゼミですけれど、一部の人気ゼミを除けば、あまりにひどい成績を取っていない限り、そこまで関係ないのでよ。でもやはり、就職や留学を考えて、あるいは受験勉強をずっとやってきていて点をとるのが大好き、という学生が多いので、GPAなどは結構、気にしますね。
- A: あんまりそんな人生の決まる部分で、ちょっと点数使われると困るんですけどね本当は。

- ちょっとつらいですね。
- B: しかし、将来的にはループリックというのもアリですけれども、一方で今年度のこの状況で、いろんな先生に急に今から使ってくれ、とも言えませんからね。
- E: 私はループリックの使用についてはかなり言いましたよ。ほっとくと学生全員に評価Aを与えてしまいそうで、実際に今学期は評価Aしかできませんとか言ってきた先生も何人かいましたし。
- B: うちは、それでも良いという感じです。
- C: うちもそうで、この状況では仕方ないと思っています。
- E: うちは留学派遣の学生を決める際にもGPAを使うので、年度ごとで評価軸がズレて差が出来てしまうと不利になってしまふ学生が出てしまうので、それを避けるために、通常通りやって欲しいというがありました。
- C: 今年は非常事態ではあるけれど、ただ一方でこれがしばらく続く可能性もあるし、何か考えていかなければいけないのですが、だからこそループリックだと思っています。この状況では教室で試験はできないし、オンラインで試験だと画面の向こうで何を見ているか分からないのですが、そこでループリックでの採点の話をすると、そういうのに全然関心のなかった人でも、それはやってみたいと言ってくる人もいて、これはいいなと思ってます。それから、私のところでは専任が授業ビデオを作って、それに非常勤の先生方が、いわばぶら下がるような形で課題のやり取りをしているのですけれど、これを逆に利用して、専任の方でループリックの採用を決めちゃって、こうやってやるんだよと非常勤の方に伝えていけば、そういう人たちの中に浸透させることも、状況次第でできるかなと思ってます。ただ、もちろん抵抗する人はすごく抵抗するでしょう。特に10年20年、あるいは30年、ずっと自分は自分のスタイルで語学を教えてきたという方は、それでは現実に対応できないとか、もう時代遅れだとか言われると、本



人にとって非常に難しい問題になるわけで、そこもどうしたものかなと思っています。ただ全体的な方向として、最終的にはやっぱりみんな変わらなければいけないんだろうなと思います。

- A: ループリックの入門じゃないんですけど、ループリックを簡単に書くための何かメソッドなりシステムなりっていうのを、ちょっと開発すればいいんですかね。質的研究の、大谷先生の SCAT システムみたいなものとか。ゼロからやり方を踏んでいけば、適切なループリックが書けますよみたいな、そういう何か簡易的な方法があれば、もっと普及するかもしれませんですね。
- B: マニュアルとサンプルと、その辺が完備した教科書を 1 つ作るのがてつ取り早いかもしれません。
- E: 今年たしか、ループリックを教授用資料に掲載していた教科書も出版されていましたよね。
- D: あの九州のほうの先生が書いたやつですよね。
- E: 確かそうだったと思います。
- C: 中国語だけではなくて、他の言語でも同じような動きが確実にあるんだろうと思います。
- E: ループリックは何人かの先生が旗振り役をされていて、少しずつ広がってきている印象はあります。
- C: ドイツ語やフランス語だと格変化を覚えなければいけないのですが、中国語はそれがないですし、社会に出たら使えるみたいな、会話ユースが前面に出ていることもある程度プラスに働いて、学生に話させてループリックで採点というのは、割とストンとはまりやすいですね。ドイツ語やフランス語の教員は、そこはすこし抵抗があるかもしれません。ロシア語だとさらに、キリル文字を覚えさせなければ、こともあります。そして論文を読めるようになるというのも重視されていて、だから逆に喋れなくてもいいんだよという方向もあって、そこはちょっと難関かもしれません。
- A: 変な統一をしない、っていうのは、そういう

ところでも言えそうですね。中国語ができる、それなら、中国語はそっちにどんどんと進んでいいといいんじゃないかなと思うんですよ。今は何か、学科分属・学部分属に重要な役割を果たしているので、きちんと足並み揃えて、基準を決めないとやっぱりまずいでしょう。でも本当は、そういう足かせなしでやりたいですよね。それぞれの語学によって、全部事情は違うわけで、好きなだけネイティブの TA 使えますよ、っていう中国語ならではの進め方も当然あるはずで、そんなら中国語だけ、ぱっとそっちの方向に舵を切っちゃってもいいのかなとは思ってます。

- B: でもぱっと見た感じで、学生がどれだけ授業の課題などを真面目に出了かどうかで、A を基準にして、S と A と B の 3 段階くらいには、結構すんなり分けられそうな感触です。Aさんのところみたいな 11 段階は、それは当然無理だと思いますけれども。
- A: さすがに、今年に限っては“たまたま”使わなかったグレードがあってもかまいませんとか言ってきましたけど。

* 発音が意外とできている

- B: 驚いたことに、今年はオンデマンドを中心に、オフィスアワーを Webex でやったんですが、発音が意外とできていました。
- C: そう、できるの！
- A: いったい今までの発音指導って何だったの、と思っちゃいますね。
- E: やっぱり普段より話す量が多いんじゃないですか
- D: 結局、勉強してるんですね。時間数が多分増えてると思うんですよ。最後の発音テストに向けて、Google 翻訳の発音を聞いて練習してみたら、みたいなアドバイスをしたんですけど、ちょっと面白かったのは、まるで Google 翻訳そっくりな読み方をする学生が現れて、結構みんな練習してるんだなって（笑）。「もしかして Google 聞いて練習したの？」つ

て言ったら、「はい」って。もうなんか切れ切れの、Google そっくりに読むんですよ。すごく練習したんだな、と思いました。

- A: 物真似しなさいって僕よく言うんですけど、教師の真似をするのが一番だっていうんだったら、Google 翻訳の調子まで真似できるぐらいまで練習したってのは、相当すごいですよね。
- B: 確かに舌のそりが甘いとか、母音の口の形が甘いっていうのは、それなりに感じるんですけども、普段の授業でもそこまで厳密にできない学生が大半なので、そう考えると、あまり変わらないな、と。
- C: ええ、私の体感でも全然変わらない。4月の段階では、こんなの、畳の上の水練でしょう、水泳の授業をやるのに、プール使えませんからって言って、畠の上で泳ぎの練習という話かと思ったけど、やってみたら、学生は結構一生懸命やってる。授業のビデオで、発音練習しましょうって言って、こちらが発音してから、はいやってみてくださいと言って、ちょっと間をおいて画面の向こうで発音してもらう、というようにしましたが、おそらく教室だったらダレてしまうところを、部屋に閉じこもって、発音しろと言われて、そうするとやらざるを得ないので、真面目にやっていたのだろうと思いました。
- B: 意外と教室に 90 分拘束されるよりも、15 分でも 20 分でも、オンデマンドでビデオとか一生懸命聞いて練習する方が、集中力を保てるのかもしれませんね。
- C: 教室だと周りを見てしまいますがね。あいつもサボってるし、いつも寝てるし、俺もグダグダするかみたいな圧力が、オンデマンドでは働かないというか。
- ただ、だからといってこれからずっとオンデマンドでいいか、みたいな話はまずいし、嫌ですね、僕はオンデマンド好きなんですけど(笑)。
- A: 常態化するとどんどんと、手の抜きどころを覚えてくるので、結局、同じことにはなると

思うんですよ。だから、今が常態になってしまうとちょっと困りますよね。

- B: 現実問題として、向こう数年、少なくとも 2・3 年はこの状況が続きますよね、多分。一方で、政治家が、大学は対面で授業をしないとダメだ、大事なものを学べないっていうふうに一生懸命主張してくださっているんで、ある程度対面授業を再開せざるを得なくなるだろう。そうすると語学の授業で、それこそオンラインデマンド教材を 20 分ぐらい見せて、10 人以内のグループに分けて、教室に代わりばんこに来させて、距離をとって発音練習、といったあたりが、最終的な落としどころになるんじゃないかと思っています。
- D: 反転授業とか言いながら、ビデオ見せとけばいいんだみたいな主張する人も出てきそうでした。
- B: それって、ただの通信教育ですよね。
- A: 反転授業じゃなくて、半分授業、と。
- C: NHK 中国語講座だけで中国語は喋れるようになった人って、どのくらいいるのか分かりませんが、どうなんでしょうね。今回は非常事態で、いろいろな圧力がかかったので、思ったよりも学生ができた、っていう側面はありますよね。ただしこれで、大学の経営側に言質を取られて、変な方向に行かないよう気をつけないといけないな、と思いますね。

* 教科書とメディア教材

- B: NHK の中国語といえば、昔、あれで 2 年間中国語をみっちり勉強して、完璧に中国語を訳せるようになったという元テレビプロデューサーの人が、三国志の民話の翻訳を出していたのですが、「諸葛孔明は急に死んだ」と書いてあって、そのあとまだ生きてるんですよね(笑)。もちろん“急死了”です(笑)。というのは極端な例ですね。程度補語のヨタ話にはいつも使ってますけれど。
- A: まあ 20 年以上聞いてきました、っていうおじいちゃんが、それなりにサバイバルの中国



語は喋れますよ、っていうのはよくあるパターンなので、せいぜいそれぐらいまでですよね。

昔のラジオは、もっと難しい講読があったりしたので、そういう意味では多少できる人も出てきたのかもしれないけど、今のテレビではねえ。まあでも発音のところとか動詞の説明とか、何月何日のテレビの中国語を見なさいっていう指示を Moodle に書き込んだりはしてます。

- D: 発音は、朝日出版社がネットで公開してくれた「快音」のビデオを見なさいと指示したり。雨上がり決死隊が若くて面白いよとか言って勧めました。
- A: コーヒーにスープを入れるやつね、“放湯”。ああいうものがいっぱい公開されているのは嬉しいですよね。
- B: それもプラスアルファで使うのはいいけれど、あまりおおっぴらに使いすぎると、今度は「お前授業やってないじゃないか」という突っ込みが絶対出てくるので、難しいところではあります。それだけでやっちゃうのは、ちょっとさすがにね。
- C: 便利だし、学生にも勧めたいところですが、そればっかりにしてしまうと、お前は何やってるのって言われそうなのは、確かにちょっと怖いですね。
- B: 文学部の専門で中国文学を目指している、という学生のための中国語と、理工学部とか我々の経済学部みたいなところでやる中国語とでは、位置づけが違ってしかるべきなので、そういうところへの配慮も必要ですね。とはいえ、雑談程度しかできないのですが。雑談といえば、オンデマンドでやっていると雑談がしにくくて困ります。入れますけどね、例えば“銀行”って出てきたらお前ら、中国四大銀行ぐらい知っておけよ、とかそういうのは。
- C: もっと逸脱した雑談かと思った（笑）。
- B: オンデマンド教材だと、あまり逸脱できないんですよね。

第2回発音編 1 (5月13日・14日・15日)

- + 00.今日の授業 (発音編1) 「中国語1」第2回の授業です。今日から中国語の発音を学びます。
- + 01.中国語の音節 (PDF資料) 中国語の音節についての教科書の説明を補足する資料です。中国語の音節の発音を確認できるサイトのアドレスも掲載しています。
- + 02.ビデオ指導 発音1「單母音」 発音編の2本目は、陳添海先生による3ヶ月連続中国語【発音編】(東京トキ社)1本約5分です。
- + 03.ビデオ指導 発音2「單母音」 本日のビデオ2本目です。

Moodle でディレクション

- C: 難しいですよね、自分でオンデマンド撮って、そこで逸脱した雑談をするのは。
- B: “马路”的語源は「馬」と関係ないんだぞ、とかそういう話はするんですけどね（笑）。
- E: 講義動画、なかなか見てくれないんですよね。30分も集中力はもたないので、どうでもいい雑談を仕込んだりしています。雑談に関連した問題を課題に入れたりしてなんとか最後まで見させるような工夫をしていました。学生同士で答えをシェアしないように、出席番号何番から何番の学生は何番目の問題をといった形で問題をふりわけたり。このあたりの工夫は講義動画を見せるための工夫としてはすごく役に立ったなど感じました。
- そして、雑談は授業に関連があるものもあるれば、全く関係ないものなどを織り交ぜていました。そうすると逆に興味をもって見てくられる学生が多かったのが印象的でした。
- C: やっぱり我々はエンターテイナーにならないと、というイメージはありますよね。学生の側からすると、教員がずっと喋っている映像を30分も見てられるかって話ですよね。しかも、朝から晩まで見なければならないわけですから。
- B: そうそう。かなりの数の先生が講義動画を作るのに、PowerPoint のノートにシナリオを書いて、それを見てやってますよね。
- E: マジですか！ シナリオ作るんですか。
- C: よく聞く話ですね。なんか、学会発表みたいな。
- 全員： 絶対俺はやらない（笑）
- E: 私は授業はシナリオは作らず、その場の雰囲気で考えてやりますね。
- A: 間違っても振り直さない。その場で言い直し

ちゃう。あ、ちがった、とか。

- E: そこにこだわる先生は授業準備で困ってしまいますね。失敗したら撮り直しだとちょっとしたミスでもやり直しになってしまい、準備がめちゃめちゃしんどいですね。
- C: うん。挙句の果てに、それを学生がつまらないって言ったりしてね。何も報われない。
- B: オンデマンド教材を作るのがつらいという先生、結構多いのですけれど、それって自分でハードルを上げちゃってると思うんですよね。私は最初に、PowerPoint のスライドに教科書を全部載せる必要なんてない、教科書何ページを見ましょうとだけ書いておけばいいんですって、非常勤の人にもアナウンスしてやりましたけれども、大半の語学の先生が、放送大学とか NHK の講座を目指して、完璧なスライドを作って、完璧に間違いないナレーションを入れたがるんですよ。あとは、PowerPoint のスキルの問題で、たとえばナレーションを入れるときスライドごとに撮り直せる、ということなんか、今でも意外と知られてないんですよね。知らない人が使ったら、それこそ最初から録り直すしかない。
- C: そうか、知らないのか、みんな。
- B: 4月頃、オンデマンド教材の作成方法を探しているときに、PowerPoint では頭から録画というマニュアルを見て、それだったら Zoom の方が楽、Webex の方が楽っていうので決めちゃって、修正できていないとかね。Zoom で PowerPoint を見せながら録画するって、余計な手間をかけているんですけどね。
- E: 私の場合は、出版社と著者にお願いをして、教科書の一部を iPad に取り込んでノートアプリ使いながら、画面収録かけて喋りながらやるようにしました。ここ見てくださいって拡大して見せたり。
- A: 教科書そのままを使うんですか。
- E: 教科書全部収録してしまうと、許可を取っていても教科書が売れないなどの問題が生じる可能性があるので、全てを見せるわけではなく、たとえば、解説のとこだけを見せ

ながら話すような形にして、一部のみを使うような形にしていました。問題は教科書に直接書き込んでもらい、写真にとって提出をしてもらうなど。そしたら収録用にスライドや資料を別途準備する必要もなく手間も少なくてすごく楽でした。iPad で解説する部分を拡大してあげると、どこに注目しているのかが学生目線で分かりやすく、さらに、そこに直接ペンで解説を書き込んでいたので、学生的には分かりやすかったようです。

- A: 教科書がまだ手に入りにくいときは、僕も iPad で教科書を見せながら、そこに書き込み入れながらやっていましたね。
- E: それが多分一番お手軽というか、全く苦労のいらない教材の作り方だと思います。ただ必ず出版社に利用許諾を取らないといけませんね。
- B: そういうえば今回この状態で、教員は出版社から教科書本文含め、様々なデータの提供を受けているわけですよね。先日聞いた話だと、ある大学のあるネイティブの先生は、教授用資料も本文の PDF も、まるまる全部学生に配布しちゃったとか。
- E: それはかなりまずい使い方ですね。
- B: まあ、出版社の人から聞いたわけですから、ばれてるんですけど。
- A: 教科書の入手とか大丈夫だったんですか。
- C: うちの大学でもやっぱり時間がかかりましたね。
- B: 大学生協はおおむね対応してたんですが、地方の大学で、地元の書店が教科書販売をしているところがあって、通販対応が一切できないので教科書を全部キャンセルしたところもあったそうです。
- D: メルカリで間違ったのを買っちゃった学生が結構いて、あれは困りましたね。生協が書名を間違えてたんですね。
- C: それはどこに怒りの矛先を持ってたらいいのか、分からぬよね。
- D: でも、クレームしたら、結局生協が全部保証してくれました。



- B: 生協の教科書発注システムのデータが、何故か教科書の名前そのまじやなくて、微妙に丸めて登録されているのが原因だとか。そういえばこれも聞いた話ですが、某出版社がこの状況で教員向けに PDF の本文を提供したら、ベトナムで海賊版を出されたんだとか。
- E: まあ、ベトナムで海賊版が出ても日本の販売には影響しませんしね。
- B: どうなんでしょうね。中国人が日本語を勉強するために、買っていくとかいうニーズがあるのかもしれませんね。
- E: 現地では教材がないからじゃないですか。
- B: そういう意味では、今回は教科書出版社との共存共栄というような面でも、いろいろと考えさせられる面が大きかったです。
- E: 来年新刊が売れないんじゃないのか、ってすごい皆さん心配してますよ。今回、多くの先生が遠隔授業に対応するために教材やスライドを作りこんでおられるでしょうから、来年出版される予定の教科書、売れないかもしれませんね。
- B: たしかに変更したくないですよね（笑）。今年作ったものをそのまま使いたいですよ。だからそこはやはり PowerPoint スライドも全部作って配るぐらいはしないとね。
- E: いやー、そこは、できれば教える先生が工夫を凝らして欲しいところだと言っている出版社の方もおられましたね。もちろん、それを全部パッケージとして提供すれば売れるでしょうけれど、それで教育として本当にいいのかっていう話ですね。「先生らしさ」ってのはそこに、いらないのかっていうことを、逆に心配してましたね。
- C: でも、売れば良いのではないでしょうか。オプションでプラス 2 万とかで、そういうものがくっついてくるとか。
- B: 昔『話す中国語』が出たとき、これだけ懇切丁寧な教授用マニュアルと小テスト集と全部ついていて、いいのか？ という話がありましたが、売れたんですよね。ビデオまでついていて。

- A: それで自由に使っていいけど、e-Learning 教材を作った場合は、1 本提供してください、それをまた CD に入れて配りますから、と。そういう企画だったんだよね。僕も単語練習かなんか送りましたよ。Visual Basic で作ったやつを。
- E: まあ全ての先生が中国語を教えることを専門としているって考えれば、そういうのがあってしかるべきだっていう考え方もあるんですね。
- B: むしろそういうのを使うことによって、中国の教授能力を高めてもらうための教科書だと考えれば良いのでしょうね。
- A: そういうのをすごく充実させると、一番得をするのは多分ネイティブの先生ですよね。日本語の不自由なところが弱点なわけで、そこは教授用資料の充実でカバーできてしまう。そうなると日本人の先生はそれをプロデュースするだけで、あとはいらないよって言われるかもしれないですね。利権と言われればそういうなんだけれど。

* 学生同士、学生と教員・学校の「繋がり」

- A: オンラインにしろオンデマンドにしろ、学生同士の繋がりが希薄になってしまう、という意見もありますね。クラスとか学校への帰属意識というようなものは、我々が担当している初習外国語科目みたいに、例えば週 1・2 回でやるような教養の授業で、どれぐらい影響してるんでしょうね。2003 年に科研でやった研究で、授業外でのふりかえりの効果を調べたのですが、「授業の外で授業のネタを話すことがあればその授業はだいたい成功」という結果でした。面白いのはその授業のネタ、というのも単位の取得方法やテストの話のように、直接学習に関わるものではなくても、たとえば先生のネクタイは変だとか、そういう話でも、同じような効果が期待できる、ということなんです。オンラインの授業だと、

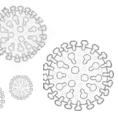
そういう機会はさすがにないのですが。私の在宅授業は、背景にいろいろな漫画が全巻並んでたりするので、そういうネタはあります。

- E: うちの先生でコスプレをして授業している人がいましたね。
- C: そっか、それぐらいやってもいいかもね。
- E: 毎回異なるコスプレしてインパクトを与えて、背景もネタとしか思えないようなものを貼り込んでいたり。必ず学生が画面を見るように仕掛けていたんですね。
- C: 私もそういうのは少し考えたのですが、ただ学生がそれをスクショに取って、ツイッターで流して、こいつ面白いぜみたいなことをやると、SNSでそういうことをやるのは処分の対象なので、Twitterなどでそれをたまたま見ちゃった場合、大学に報告して、学生処分をやって、というのに巻き込まれたら嫌だなと思って、やるのをやめました。
- A: ぬいぐるみを集めるっていうのはやってるんですけど、パンダグッズが大量にあるので、それを後ろに大量に並べてあるんですけど・・・
- E: 今日のパンダは何匹いましたか、とか、1匹だけ右を向いていたパンダはなんという名前でしょうかとか、中国語で質問すると面白そうですね。
- A: それとはまたちょっと違うんですけど、オンラインでやるとき、なんか目線が難しいんですよね。なので、リアルタイムで授業をやるときに、カメラ目線が自然にできるように、カメラのところにパンダのぬいぐるみを取り付けておいたりします。VLOG用のカメラとかは、なんかマスコットつけられたりするのもあるみたいですけど。そのためにぬいぐるみを集めている先生とかいて、面白いですね。
- C: 学生同士の繋がりという点で言うと、私は今まで全部で9つぐらいの大学で語学の授業を担当したことがありますが、どこも語学はホームルーム的な機能を持っていました。学

生が全員集まるのは必修の語学の授業だけなので、ここでクラスメイトとしての人間関係ができるといふ。それが今はなくなっちゃっているので、そこがどういうふうになってるのかは興味があります。私がいる学部では担任制度があって、語学の授業はそういう機能も重要だと言うことで、自分が持っている1年生の第二外国語のクラスの担任をしているのですが、授業はオンデマンドだけども、定期的にWebexで会合を開くようにと言われています。そこで、「最近どう?」みたいな話をしていますが、ここに限っては、やっぱり普段と全然違うんですよね。普段であれば、クラスメイトの間で、物理の試験はレポートか、みたいな話をしているのですが、そういうことは当然できません。グループLINEは作っているのですけれど、会ったこともない人に色々なことをお願いするのは、多分できないでしょうね。それで、人間関係が希薄になってるのかな、とも思います。そこが学生のメンタリティにどれぐらい、どのような影響を及ぼしているんでしょうね。プラスの面も、マイナスの面もあるとは思いますが。

- A: うちは1年生の基礎クラスと、外国语のクラスは全然別なので、あまりホームルーム意識はないでしょうけど、それでもやっぱり何か、毎週1つとこに集まって授業を受けてると、今まで結構なんか麗しい「かばい合い」みたいのが、結構発生してて、特にできない連中に多いんですけど、誰かが答えられないとか、横から一生懸命サポートしてあげたりするんですね。プロンプトつけてたりとかね、すぐえなこいつと思ってたんですけど、そういうのが全然できないっていうことなので、その辺は少し影響しているかな、と思います。でも見かけ上授業はあまり変わってないですね。何かそういう細かいところの影響っていうのは、まだ結果が出てないのでわからないですけど。

- B: たしかに学生同士で教える合うことの学習効



- 果が失われたことは、すごく影響がありそうですね。うちの学部も担任制ではあるんですけども、特にそういう指示は来ていないし、結構ほっぽらかしになってるんですけれども。ある大学では、学科の個人面談を Zoom でやったそうです。何か問題ありますか、春学期の授業ではちゃんと繋がりましたか、とかいうのを一人ひとりに。
- E: それ、私もやりました。
- B: やりましたか。本来ならば、我々もそのぐらいはした方が良かったかな、と。
- A: SNS でリアルなお店とかと結びついたオンライン・コミュニティって、いくらでも出来るじゃないですか。それと同じようなことが大学でも起きるのかなと、実は期待してたところもあるんですけど、そういうことやってるところもありますよね。
- B: うちの大学でも、他学部の知り合いと話してたら、彼の担当クラスでは、授業開始一週間でクラス LINE ができていたばかりか、Web お茶会を 2・3 回やっていたそうです。音頭をとれる子がいると、そうなるんでしょうね。自分が担任している 1 年のクラスの女子学生とオフィスアワーで話していたら、地方在住で、クラス LINE はあるけれど、あまりお互いに親しくなれない、と。なら自分が呼びかけて Web 女子会とかやってみたら、と言つておきました。某 Twitter 漫画じゃないですけれども、リアルなコミュニティがうまく作られていないことで、ストレスとまではいかなくとも、寂しさを感じている学生は、当然ですが結構いますね。
- E: それ学年による違いとかってないですか。2 年生以上の学生と話してると、煩わしい人間関係がなくなってる、むしろすっきりしたっていう学生が多くて、おいおい、今までどんな人間関係だったんだよ、みたいな。
- C: 1 年生と 2 年生以上は明らかに違いますよね。1 年生は、高校出て大学に入ってきたらこんな状況で、誰も知り合いかいない。ただ、憧れの大学に入ったはずなのに、憧れの大学に

- 行けてない、どうしてくれるみたいな話は、いやもうそこはいいから、と思ったことはあります。
- A: 大学をなんだと思ってたんだよ、と思ったりもしますね。
- B: もう 1 つ、少しずれますが、今の高校 3 年生は意外と Zoom 授業を受けているんですよね。それが来年入ってくる、というのを考えると、大学教員も Zoom をうまく使いこなせるようになって、オンデマンド授業ももうちょっと洗練した動画が作れるようになっておかないと、大学が舐められちゃう恐れがあるかな、と。
- A: もうね、高校以下だなんて言われた日にや、金返せ騒動だから。
- B: そういう意味では、評価などの問題だけではなくて、スキルについてもやはりこの秋学期にスキルアップを考えてください、とアナウンスしないといけないと思ってるんですよ。
- A: B 先生のバーチャル背景が、とか、いろいろ噂になるんですね。
- B: そうそう。でもね、ここに映っているの C さんだよ。
- A: ほんとだ！
- C: あ、上海のメイド喫茶か！
- A: 僕も背景を変えたりはしますよ。対面授業の時は、ネクタイして行ってたんですが、パンダの小さい柄の入ったネクタイをしていくと、前列 2 列ぐらいまでの学生にだけはっきり見えて、授業始まるときの辺からクスクスっていうの聞こえて嬉しかったんですけど、そういう細かい楽しみは、オンラインで一層加速するかもしれませんね。
- B: 私は、授業の課題を毎回 Google フォームで出させていたのですが、ヘッダーの写真を毎回、中国銀行だったり、中国工商銀行だったり、キャッツアイという北京のゲーム屋の看板だったり、中国の CoCo 一番屋の看板だったり、いろいろと取り替えて遊んでいました。これだけではなくて、いろいろなところにネタをちょいちょい仕込んでいかないと、と思っていますが。

- C: 教員と学生がお互いオンラインに慣れてきてるいるので、そうすると今度はエンターテイナー的なところをもうちょっと上げないといけないでしょうね。
- B: 今年の1年生を実験台に、というと語弊がありますが、教員も学生もお互いに慣れていないところでスタートした者同士、ICTスキルについても、高めあっていけると良いのかな、と。

* 来年以降が正念場？

- A: 今年は何ていうか、ちょうど「CALL授業の1年目」みたいな感じで、ある意味勢いだけで飛ばせたというところはありますね。初期のコンピュータ利用教育が、教員も学生も目新しさ、未知なるものへの好奇心だけで動いたのと同じですね。で、それがそこそくうまくいったという成功体験になっていて、自信満々で来年同じことをやつたら、全然うまくいかなくて愕然とする、っていうことになるんじゃないでしょうか。
- C: これ、3年、4年と経ったら、いったいどうなるのでしょうか。完全に元に戻るとは思えませんが、しかし一方で、本来オンラインでの授業は制限があるのを、今は特例で許されているだけという状況でもあります。ただ、例えば5年経って、みんな教室に戻ってきて、それで去年までと全く同じに戻る、同じことをするとはちょっと考えられませんよね。この点、Aさんはどう思いますか。
- A: そうですよね。例えば同じ状態があと4年続ければ、この非常時対応を全員が体験しているわけですよね。そうなると、「それ以前」に戻そうとしても、総スカン食らうような気がしますけどね。その時にはオンラインの良いところも悪いところも両方知っていると思うんですけど、今でも既に、対面になったら面倒くさくなったり、言い出す人がたくさん出てくるんじゃないかと思います。
- B: うちの大学のある学部で、6月半ばから一

部で対面授業に戻したら、途端にはほぼ100%だったレポート提出率がガクンと下がったので、オンライン中心に戻したという話がありました。ですので、オンラインの方が学生がきちんとやる、という認識も一部出てきているかもしれません。もっとも、通年4単位の授業は、2時間の教室での学習と2時間の家庭での予習復習が必要なわけですから、ある意味、その学習時間が否応なしに現実化しているとも言える、だとしたら文科省としては万々歳かもしれませんよ。

- C: たとえば宿題とか、レポートのやり取りとかは、授業が完全に教室に戻ったとしても、今後はみんなLMSを使って行くだろうなと思います。
- B: 人によるでしょうね。設定して受け取って、とやるのが面倒くさいという人は一定数いますから。パソコンに慣れている我々からしてみれば、そもそもレポートは以前からLMSに提出させていましたけれど、でも、やはり紙でプリントされたものを事務所に提出して受け取らないとレポートにならない、という人もいると思うので。日本のハンコ文化に通じるところがありますね。
- A: レポートボックスに提出されたものを事務が回収して何かスキャンして送ってくれるというサービスを要求するような教員が出てくるかもしれないですね（笑）。そこからこれまでと違う仕組みがまた生まれるかもしれない。まあ、ちょっともう紙レポートは見たくないないです。

白状すると、すごくこれっていいなと思っちゃってるので、これから楽できる部分はいっぱいあるし、準備がすごく大変になるっていうのもあるんですけど。オンラインで課題を完結させるっていうのは、特に遠くから通ってる学生とかには好評ですよね。家でできるからって喜んでるんですけどね。常にオンラインっていうオプションがあるっていう状況になったときに、完全に元に戻す気力はないです。



- D: 休講しにくくなるんでしょうか。休講するならオンデマンド用意しとけよみたいに。
- B: 逆に、それで授業期間中にも休講がしやすくなる、という考え方もできますよ。これまでには、補講期間に補講しなければいけない、とされていましたが、オンデマンド教材の事前準備と配信と、場合によっては出先からのリアルタイムのフォローで問題なく授業できてしましますから。
- D: なるほど。教室にいなくても授業は進められますよね。
- B: だから一長一短で、どういう運用がされるかですね、結局。
- C: 学内の会議は、もう Zoom でいい、と思いますが。
- B: それでも、やはり Face to Face じゃないと、という人もいるでしょう。
- C: 学部の性質上、理工学部はそっちには行かないと思いますが、例えば文学部にはそういう人がいそうですね。
- D: 確かに、文学部はリアル学部会議やってましたね。6月ぐらいだったか。
- A: うちでは教育学部かな。
- B: 確かに、教育学部は対面じゃなきゃ駄目、というのがすごく強いと、いろいろなところで耳にします。
- A: 教育は対面でっていうのがある意味、教育学部のアイデンティティみたいなもんなんでしょうねけれど。
- B: ところで、皆さんの大学に、オンライン教材を作る専門の部屋とか部署とかはありますか。
- E: この夏休み中に作れと言われたので今現在進行形で作ってます。
- B: Eさんが自分で作ってるんだ。
- E: せっかくなんで私好みの部屋を作ります。
- A: うちは専門のセンターができて、ビデオ教材なんかは、その人が撮りに来てくれて、編集から公開まで全部やってくれます。ただ、企画から完成まで時間がかかるのが難点ですね。あと、そのセンターが、e-Learning のシステムなどの面倒も見てています。言語では技

術職員 1 名がいて、CALL 教室の管理のほか、スタジオ型教室と音声収録スタジオで教材作成を支援してくれています。

- B: O 大学はね、そういうのが全然ないんですよね。T 大とかはね、学内にスタジオが 2・3ヶ所あって、そこで作ってくれるのですが。逆に T 大の先生方は、スタジオに行けば作ってもらえるというのがあったんで、今回、スタジオも閉鎖されて、自分で作らなければいけなくなって苦労したらしいですよ。

A: なるほど。

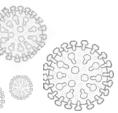
- B: これだけ大規模になっちゃうと、少数のスタジオでの対応は無理、というのはありますね。もちろん教材として売ることまで考えて、それこそ生涯学習に使います、みたいなのであれば、きちんとしたスタジオで、きちんとしたクロマキー合成で作られていないと恥ずかしい、というのはあると思いますけれども、その辺はどうなっていくでしょうね。やはり、「普段使い」的な自分で作るオンデマンド教材と、きちんと作ってもらう教材というのは、今後、棲み分けていくんですかね。

- A: 結構融合する部分もあるんじゃないかなと思います。この間買っちゃったんですが、ここに 16 万のスイッチャーがあります。テレビ局レベルの機材が、個人でも無理すりや手に届くところまで価格が落ちてきている、ということもあるし、また、タブレット 1 枚でもそれなりのものが作れるようになっています。そうなるともうプロの作る本格的な教材って、私たちの授業に必要?ってなっていくのかもしれませんね。

B: 実際、クロマキーの幕を買って、あとは操作に慣れた TA でも雇えば、作れるんですよね。

- C: あと、これでネット授業のハードルが下がりますよね。アメリカの大学とかやってるじゃないですか、ネット授業で金儲けてっていう、あれが日本でもできるようになるのかなと思いますし、そこに目をつけて商売をする大学も当然出てくるだろうと思います。ただ一方で、全世界が同じ状況なので、商売敵がいつ

- ぱいいる、という状況もあると思いますけれど。
- B: そうですよね。下手すると、分野によってはハーバード大学の授業と、もろに競合するっていうことがありうるわけですよね。そこで自分たちが勝てるのかっていう。あとはやはり、いわゆる反転授業ですね。海外ではネットに出していく授業動画が授業の全てではない、でも日本では、あれが全てだと思い込んでいる人が、どうもまだ多いように感じられます。
- A: OCW の最初のとき、MIT は「教材は提供するけど教育は提供しません」って言ってたんですよね。近年は、学位を出すところまで出てますけどね。
- まあ、創意工夫が途切れない教員にとってはこれからまだまだ活躍の場が広がっていくんじゃないかなあと思いますけど。未だに中国語のオンライン授業というと、特にライブの授業で、マイクを一斉に ON にさせて、皆で発音練習をやるという驚異の授業をやっていたりしますからね。
- 1回だけ試しにやってみたのですが、耳壊しますよね、あれ。しかも一つひとつ聞こえるわけじゃないから、単なる雑音にしかならない。
- B: 人数にもよりますが、Zoom のブレイクアウトで練習させた後で、全体で何人かピックアップして矯正して、くらいがせいぜいだと思いますね。やはり普段のやり方を変えたくないんでしょう。今までのリアルな教室とは状況が違うのだから、割り切って変えなければいけないので、それが上手くできない。
- A: 学期の終わりまで貫き通したネイティブの先生とか、いますけどね。
- だから元に戻りたいっていう先生が、相当多いと思うんですよ。あくまでも今やっているのは非常事態に対応した緊急の措置なんだから、と。なので、前に進もうとする人と過去に回帰していくとする人とで二極分化するのかなあと思っています。
- B: ぶっちゃけ、事前に教科書ちょっと読んで、教室に行って適当に喋って、というのは楽ですかね。ただ、通勤時間がいらないというのは、本当に大きいんですけどね。
- A: ライブで同じことができるんだったら、在宅でやった方がはるかに楽ですよね。だからそっちに走りたくなる先生の気持ちはよくわかるんですけど。
- B: そうすると、やはり最終的には、大学とは何かという、根源的な問いを突きつけられている、ということになりますね。
- A: もう建物としての大学はいらないんじゃないとか、語学の先生って必要なもの、とかまたぞろそういう議論になっちゃうんですよね。
- B: 大学というのは、オンライン教材で「画一」を提供するのが必要な部分もありますが、むしろ、多様性を学んで、しかも最先端の知的営為ですよね、それをどんな人がどんなふうにやってるのかを、実際に見せて、体感・体験させることができるとできれば、それこそが高等教育ですよね。近頃の政治家の皆さんのは発言は、ちょっと方向性が違うにせよ、「画一」的な授業だけが大学ではないと言っていることになりますよね。そのところをもうちょっとうまく理論付けつつ、やっていく必要があるでしょう。
- A: ここしばらく疑問に思ってることがあって、大学で、1年生から結構オンラインに対する文句が来るんですよ、こんなのは大学じゃないとか言って。その理想の大学觀っていうのはどこから生まれたものなんだろうか、と考えています。いろんなところで大学ってこういうところ、っていう情報を得ているから、そういうことを言うわけですが、大学生活の経験のない高校生からみて、大学ってどう思われてたの？ ネタ元はどこなの？ って思ってしまうんですけど。
- C: オープン・キャンパスって、大学の建物を見せて、いいでしょうここ、みたいな感じがありますよね。入学後、以前のイメージと実際が違っていても、4月の第1週、第2週と通



うことで、なんとなく頭の中が矯正されていくわけです。ところが今回、入学して半年経つのにキャンパスに全然行くことができていないせいで、元のイメージが肥大化して、「テニスやって、授業も面白くて」みたいな、現実とは違う何かを持っている方もいるのかかもしれませんね。親御さんからは、うちの子は部屋に閉じ込められて、課題ばかりやらされて大変だ、どうにかして欲しい、というようなクレームも入りますが、しかしだからといって、オンライン授業も課題を大幅に減らしたら、今度は「高い学費払っているのにこの程度ですか」みたいなことにもなってしまう。外出に制限がある中でどう授業をしていくべきか、という話になっていないのだとしたら、とても困るわけです。

- A: コロナで、良くも悪くも我々教員が慌てふためいているところが開陳されてしまったっていうので、ちょっと何かイメージ補正がかなり働いているんじゃないかなと思うんです。
- C: あとは多分地方の私立ですよね。さっきBさんが言ったようなことっていうのは、首都圏なり国立なりの話で、経営的に厳しいような地方の小さい私立は、知的営為みたいな世界で動いていない部分があって、ともかく文科省の動きを伺わないといけないという感じで、多分今一番混乱してるんだと思います。そういうところで働いてる人たちの話を聞くと、文科省から出てきた話を振り回されていて、しかも関東と違って若干コロナに対する警戒も緩いので、ハイブリッドも割と早くからやっていたりとか。でもそこで言ってることはメチャクチャで、オンラインでもリアルでもやれっていう話で、そんな時間ないですよと教員が言っても、いや、ともかくやるんだ、みたいな。その上、やり方が分からないと言ったら、自分で考えろみたいに言われたり。そういう状況のせいで、かなり色々なところが疲弊してるのかな、という気がしますね。
- B: 全般に関西の方が警戒度が低いですね。完

全に対面再開した大学もありましたね。有力大学でも秋から250人以下は対面授業をやると言っていることがありますし。

- E: ええ、で、学生にアンケートとったら8割は反対だったっていう。
- A: 爆弾騒ぎも起きましたからねえ。
- E: 昔教えていた大学でも最近爆弾がしけられていましたね。ほんと多いですね。
- B: 地方の、オーナーが強い大学だと、全面対面授業というところがかなり出てくるでしょうね。
- E: 関東でも某大学が、対面授業を再開するって言ってませんでしたっけ。
- B・C: あ、そうですか。
- E: なんか5月ぐらいの段階で、対面授業を再開するって言って、ネット上でめちゃ轟轟買つてましたね。
- A: うちは7月中旬にTOEFL-ITPの試験を、単位認定のため、必ず受験しなければならないというので、地方にいる学生も無理矢理全部呼び出して、対面で試験を実施したんですね。8月に予定していた期末試験を中止したこと也有って、地方の学生を中心に反発くらっていましたね。
- E: 何をやっても結局、誰からか非難されますね。
- B: うちも秋学期は、語学と少人数授業は対面授業をやっても良いと来たので、それじゃあ試験だけやります、と答えましたが、実際わかりませんよね、どうなるかは。
- E: この状況だとこれからも感染者が増えるでしょうね。
- A: うちは2学期は最初の2回はオンラインでやってください、あとは対面でやってもいいです、というのが来ていますね。
- E: うちは逆ですね。オンラインはできるだけオンデマンドにしてくださいって通知が出てました。なぜかと言うと、実技系の科目をやるので、学生がキャンパスに来なきゃいけないんですよ。そしたら他の科目で、リアルタイムで授業されたら困るっていうことで、オンラインでしてくださいと。その一部の実技

- 系科目でなんでもほかの科目が規制されなければならぬんだって言って反対している先生もおられますか。
- B: やっぱり学科によって違いがありますね。
- E: ええ、医療系とか理系があると、どうしても大変ですね、実技系があるんで。
- B: 理工系は研究室・実験室が使えないといふにもならないですからね。
- A: この期に及んで語学で対面やるときって、マスクどうしますか。
- E: フェイスシールドを使うように言われたりしませんか。
- B: うちは、マスク着用が対面授業をやる上で必要条件で、外せません。
- A: ですから発音練習のときも外せないわけですよね。
- E: 発音練習していいって言えますかねえ。どこの学校で外国語の授業で発音練習するときは、声に出さずにしろって言われているのを映像で見たことがあります…。発音矯正するにも声を出しちゃいけませんって、コロナ下の対面授業では発音指導もままならないのかと思ってしまいました。
- C: それは…いい話ですね。うちはそこまでは細かいことは言われていません。
- E: どこの大学かまでは覚えていませんが、そういった通達が出てるって噂も耳にしました。しっかり確認していないので本当かどうかわかりませんが。でも、いかにもありそうでしょう。
- C: 日本の学校ではあります。
- E: 先生は、フェイスシールド着用は必須で決定ですね。
- A: 口パク発音練習みたいな。
- E: そうですね。音は出すべからず、です。
- B: 結局のところ学生が大学に実際に行くのは、外国語の授業にせよ、学生同士にせよ、コミュニケーションするためなのに、コミュニケーションしてはいけない、というのは非常に矛盾していますよね。
- A: 外国語授業を全部手話にするとか。
- E: 手話も口いりますよね。
- A: あれはでも、口パクでもいいので、声は出さなくてもいいですよ。
- E: 今年、ここまでオンラインでやってきて、まあ対面授業、ってちょっと怖いですね。
- B: しかも中国語なんてね、「皆さん大きい声を出してね、お腹から発声してね、前人の背中が、授業終わると、あなたの唾でしっとり濡れるぐらいのつもりでやってね」という感じですから。
- A: 口元を見てくださいとか、いつも発音指導でやっているので、ちょっとそれができないっていうのも困りものですね。
- B: 学生もね、顔をアップで映させて発音矯正、というのも道義的な問題を引き起こす可能性が高いです。
- A: 口元を隠して、「マスクで中国語」みたいなのをやるか。
- E: まあ、透明マスクですね。あとはフェイスシールドやマウスシールド。
- B: うちの場合は、対面授業で、教員向けのフェイスシールドもしくはマウスシールドを、希望者に貸与します、と言っています。ただ、フェイスシールドをやってみると、発音が籠もるので慣れるまでが大変。あと、額のスピンジが横一線のやつは結構蒸れる。切れ目が入ってるやつの方が多分良いでしょう。
- A: ちょっとした部分でやっぱり対面の授業、難しいよな、と思っちゃいますね。
- B: 筆記試験は発音してもらう必要がないからできると思います。本当は発音してもらって、それを矯正する、というのこそ、対面でやりたいですが、それは危険ですよね。
- A: 口の中に入れて口の形を見る新しいデバイスとか、何か開発した方がいいのかな、何か発音矯正用のデバイス。
- B: 昔、T大の某先生が「あなたの発音は違います、舌の位置はここです！」とチョークまみれの指を女の子の口に突っ込んで指導していた、という伝説がありますが、現在ではいろいろな意味で即アウトですね。



- A: もうそれこそオンライン授業でさえ、マスクを外すのを強要したら、アウトでしょうね。
- B: NII のサイバーシンポでも出ていましたが、顔出し Zoom でオンラインストーカーが発生した事案があったみたいですね。大講義授業で、かわいい子を物色する。それと、写真加工用の素材を集めるために使われる。偽造用・コラージュ用の素材。
- C: 今のこの座談会の Zoom でも作れるよね、D さんのとか使って(笑)。
- B: だからカメラオフにして真っ黒でやるのは仕方ない、でもそうすると学生はカメラをオフにしたまま、どこかに遊びに行ってしまう。
- A: むしろ教員がタレント化して、プロマイドをばらまくとか、そっちの方に使えばいいんですかねえ。
- B: でもね、そこまで割り切れる先生は少ないから。
- A: まあ、教員はいじられてなんばとは思いますけどね。
- 以前、TA の似顔絵を載せた専用サイトを作って、学生との交流を促進しようとして、受けはよかったですですが、ストーカーメールなどは怖いですね。

* 情報収集・辞書・オンラインリソース

- B: 今回、意外だったのが NII のサイバーシンポで情報収集する人が、案外少なかったっていうことです。こういう状況で、いろいろ有用なレポートが上がっていたので、授業開始時期との兼ね合いがあったのかもしれないですけど、もうちょっと参照されてしかるべきだと思いました。データダイエットの呼びかけとかずっとやっていますしね。Zoom というと、世間的には「乱入問題」ばかりが取り上げられてますけど、それ以外の問題もいろいろあるということに、もうちょっと自覺的であるべきですし、うちだと上から「お達し」が出て、学生に「お前らやばい事したら処罰

NII 「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」

だからな」と脅していましたけれども、もうちょっと教員もその辺の情報収集をすべきだったし、そういう情報収集を全くしないままに方針を決めちゃった、大学というよりも個別のセクションが結構あったようですので、そうした点は反省なり総括なりをきちんとする必要があるかな、と。

- A: NII のサイバーシンポで情報収集する人が少ない一方で、学内の Zoom 研修は、1,000 人以上集まって大騒ぎでしたよ。急遽ウェビナーに変更して、最終的には教職員全員来てるんじゃないかなという感じになっていましたね。みんなとにかく「今日から使える Zoom や Webex の Tips」ばかりを求めて、自分でいろいろなところから情報収集して、最新のセキュリティ情報をチェックしたり、Zoom・Webex のリアルタイム授業に対して、オルタナティブを試してみるといったことが全くなかった。僕がやっていた Zoom 講習会も、初級・中級・オタクと分けて実施していたのに、結局 50 人以上の「常連」が毎回参加して、細かな練習などは全くできない状況でした。知の最先端にいる人々が、コンピュータやネットワークの話になると思考停止してしまう。謎ですね。
- B: 私は大学が当初、Webex だけと契約していたので、非常勤向けの説明会で「ほら、大変ですよね。だから無理して使わないで良いですよ」と、むしろリアルタイムを使えという圧力をかけないことに主眼を置いていました。

C: ほら、D 大が Zoom だという話が、2 月、3 月ごろに先行してワードで広まったので、O 大学でもあれをやらされるんですかみたいな不安が、かなり早い段階から非常勤講師の間なんかでもあったので、いや、必ずあれをやって欲しいという話ではありませんと、まずは「火消し」をして回ったりしました。D 大の、あの Zoom のぶち上げ方っていうのは、非常に罪作りだったと思います。それで、蓋を開けてみたら新学期最初の授業で D 大の Zoom、いきなり落ちたでしょう。

A: うちも、Webex が早い段階から営業かけてきていて、有償ライセンスを大量に契約していたんですよね。でも、教員全員で使うには全然足りない。部局でいくつかとて、使い回せばいいんじゃないの、ぐらいのつもりでいたみたいですね。部局でとったライセンスだから、他学部や非常勤先の授業、科研の打ち合わせには使っちゃダメよ、みたいな謎の掟ができたり。それが嫌われて「野良 Zoom」がどんどん増え、学校としてオーソライズせざるを得なくなって、Zoom のサイトライセンス契約を結んだ、というお粗末。

B: うちも、確か 4 月の下旬ごろに、Webex のアカウントが枯渇してしまいました。1 週間か 10 日くらいしてから、追加契約してなんとかなりましたが。

A: うちは経済学部だけが早くから Webex でやるって言ってて、いきなり 100 欲しいって言い出したんで追加契約していましたね。うちで 300 ぐらいはあったのかなあ。

B: 語学で使うとなると、やはりブレイクアウト機能がある Zoom の方が使いやすいですね（現在では、Webex もブレイクアウトに対応している）。ただ、Webex でも少人数に分けて工夫してやればできなくはない。そのとき使用可能なツールに合わせて最適解を考えるというのも、特に今回のような緊急事態では大切なことだと思いますね。

A: ツールと言えば、ちょっと話はずれるんですけど、学生の使うツールについて。僕は中国

語専門の学科で、授業中に辞書を引くなんて、無作法なことをするんじゃない、とか言って先生に怒られていたクチなんですが、授業中に電子辞書をバンバン参照できるとか、翻訳サイトでも音声認識でも、何でも使えるっていうような、そういう状況下で授業をやる、あるいはオンデマンドに解答させるっていうことについて、そういう学生の ICT スキルは、むしろ伸ばしていっちゃったらどうだろう、という考え方について、どうお考えですか。先ほどの、評価の問題とも繋がりますけども、今はもう中国語に関するほとんどの情報は、少なくとも教科書に載っているような情報なら、ネットで検索すれば確実に出てくる。その検索のやり方をもっと授業でちゃんと教えて、これはネットで勉強してね、と振る、そういう方向に進むべきかどうかっていう問題、ありますよね。

E: ありだと思います。

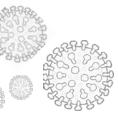
C: 私もそうだと思います。

B: ただ、初級段階でどの程度、という問題はあると思いますね。

E: 私は 1 年生の授業で発音編が終わった段階で、入力の仕方は全部教えてしまって、とにかく調べるクセを作らせるようにしています。

C: 学生に適当にググらせると、どこの馬の骨とも知らない人が書いているブログから、変な中国語の解説を拾ってたりして、それが間違っていたりすることがあるので、調べる場合はこの辺とこの辺、とか教えたりね。

E: 単語をどうやって選ぶか、とか、毎回授業の中で繰り返して教えていくと、回が進むごとに、変な調べ方はしなくなっていますね。辞書の使い方と同じで、使い方がわからないだけなので、最初に叩き込んでやうってのはありだなって思います。でも、今 Weblio を使ってるんですけど、最近、白水社以外の辞書もたくさん収録されていて、変な例文や初級の学習者にとっては余計な単語が出てくることもあるので、初級の学生には、ちょっと使わせにくくなってきたなと感じています。利用



- しやすい初級の学習者向けのオンライン辞書
が欲しいと感じています。
- A: Eさん以外は、私の主催している科研のメンツでして、そういう辞書、というか単語集を作ることを目指しています。HSKの単語リストをベースに。
- B: 困ったことに、HSKが今度変わっちゃいますね。どうしたものやら。
- E: もう今持ってるリソースを、全部公開しちゃって例文検索できるようにしちゃうかな、と思うくらいに、辞書が使いにくかったんで、やっぱそういう初級者向けのがあるといいなって思いますね。
- A: 学習辞書みたいのが、オンラインであればいいですよね。
- B: 少なくともオンラインの単語集+例文集的なものは、何か作りたいと思っています。現実的な問題として、こういう状況でアルバイトが確保しにくいんですよね。院生や非常勤をやっているような人に、例文の作成やらを投げたいのですが、いろいろと難しい。
- E: 一応うちの方は早ければ来年、または再来年ぐらいには導入したいな、と思って今準備しています。
- A: オンラインでデータエントリー依頼するとかダメかな。
- E: いや、それはあります。従量制にすれば多分バイトは雇えますね。
- B: その辺も考えないといけませんね。
- E: 学生さんが辞書買ってくれるのが、一番いいんですけどね。
- D: 辞書に関しては、先日の中国語教育学会で、「模擬授業」に紛れ込んで余計なことを話してしまいました。
- ※ 模擬授業「中国語中級テキスト『文学の窓』を使用した模擬授業」
- E: あれは評判良かったんじゃないですか。辞書の使い方すごく良かったです。
- D: 全体としては、文学を語るほうに重点がいつてしまった感じもありまして。
- E: 模擬授業が、オンラインでもできるんだって

- いうことがわかったのが収穫でしたね。
- D: 文学の模擬授業になってしまったかも。
- C: うん、文学を熱く語る場になってましたね(笑)。でも、あれができてしまうのは、彼の話術、彼の人柄であってね、普通はあれをやつたら非難囂々かもしれませんね。
- B: オンラインでフリーで、というと『北辞郎』がありますが、どちらかというと技術系翻訳者の新語共有システムみたいなものですしね。
- D: 模擬授業のとき、「辞書を買わせるにはどうしたらいいですか」みたいな質問がありましたが、やっぱりそういうことが問題になるんだなと思いました。紙の辞書を買え買え言うけど、7,000円とか8,000円で小学館とか講談社を買うんですか、みたいな話をされると、ちょっと困るところはあります。使うなら買わせる工夫をしないとダメでしょうと思いますけど。
- C: でも、学生はコスパで考えてしまうから、これで7,000円出すのはコスパが悪い、何とかごまかして買わずに済ませられないかと思うのも、私はすごくよくわかるんですよ。
- B: しかも1年・2年でしか使わないという。ただ、毎年学生になぜ中国語を取ったのかっていうのを、4月にアンケートで聞いているのですよ。そうすると、やはり4割5割くらいは、専門に進んだときや、就職したときに使う可能性があるから、と答えるんですよ。そういう意味では、将来も使えるんだから4月のうちに買っておけよ、というのがかなり有効だと言えるでしょう。
- C: それがちゃんと使い方がわからなくて、多分そういう経験が高校でもあって、高校で英語の辞書を買ったけど、誤語しか見てないみたいな。使い方を教わっていなければ、ググればいくらでも出てくるじゃん、みたいな発想になるでしょう。中国語も当然ググると適当な結果が出てくるので、これはこれでいいだろうみたいな方向にどうしてもいっちゃうんだろうと思うんですね。真面目な学生は当然買うでしょうけど、真面目でない学生も多い

- でしょうし、特に地方の私立の学生とかね。やっぱり科研で単語集作らなきゃダメみたいですね。
- B: あと学生が電子辞書を買うのは、英英辞典などの複数の辞書を持ち歩く手間を省くのと同時に、講義中に『広辞苑』を引いて、先生が何を言っているのか調べてるケースが多いと聞きましたが、最近はどうでしょうね。それと、中学や高校でどれくらい電子辞書を買わせているのかな。カシオは学販系に入ってるから、それなりに買わせているところがあると思うのですが。
- D: どうなんですかね、現状がわからないですね。
- C: 大学入学したお祝いに、親戚のおじさんが買ってくれました、どうせ中国語を履修するのだから、中国語も入っているモデルにしてもらいました、というような学生が、自分のクラスでも去年4・5人はいましたが、こういう状況だと、今年はそういう動きはないような気がしますね。
- A: 高校だと教室でのスマホ利用は禁止なので、IC辞書を使わせるっていうところが多いみたいですが。スマホの代わりに、電子辞書を買わせるっていうのもすごいですけど。
- B: 学生のパソコン操作は大丈夫でしたか？
- A: 亂暴なことにいきなりなんか中国を入力する課題まで出しちゃって、ピンイン入力はここで練習できるよっていうので、タイピング練習の問題作れるっていうサイトで、10個ぐらい作って出したら、それでまあ、済みました。
- B: 中国語入力はマニュアルを作って漢情研のWikiに上げようとしているんですが、そのWikiがいろいろとトラブルって出来ていません。これは、おいおいと。
- A: IMEのインストールや使い方については、いろんなところにあるから、ググればわかることも多いですね。

- B: 私としてはIMEの機能の解説が細かいところまで徹底していないと嫌なんですよ。
- A: Windows・Mac・Android・iOSと全部まとめて出してくれている奇特な方もおられるので、こりやいいやって言って、それを全部べたっと貼り付けてます。
- B: そのうち書きますね。今回思ったのは、学生にも教員にも、ビデオマニュアルの方が良いということです。特に教員には、絶対ビデオマニュアルですね。マニュアルを読めない人がかなり多いみたいです。
- A: うん、教員が読めない。本当に全然読めなかったりする。今回、オンライン入試のために、Zoomのあの細かい設定を、1個1個確認しながらポチポチクリックしていくだけのビデオ作ったんですよ。そしたらものすごくウケて、紙のマニュアル要りません、って言われちゃいました。
- B: 実際、ビデオマニュアルの方が、作るのが楽ですよね。操作しながら録画して、あとナレーション載せるかその場で喋るか、あるいはキャプションを付けるかだから。中国語入力だけでなく、大学が提供するマニュアルも、これからすべからくビデオマニュアル化されていくべきでしょう。
- A: と、ということで、本特集の結論としては、「教員の一番大事な資質はYouTuber」ってところでしょうか、「みんなでYouTuberになろうぜ」みたいな(笑)。十分まとまっていますが、この辺でお開きにしましょう。ありがとうございました。

※ 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「初級学習者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」(平成30年度～令和2年度、基盤研究(B)、研究代表者：田邊鉄、課題番号：18H00682)による成果の一部である。

オンライン授業の成績評価方法

語学授業でオンライン試験

田邊 鉄 (たなべ てつ)

0. はじめに

オンライン授業の困難の一つは、記憶力を問うような試験による成績評価が難しいことである。とりわけ中国語を含む初習外国語の入門段階では、「単語・例文を覚える」ことが、学習の重要な部分を占めており、試験も「教科書に記された内容や、授業で練習した内容を記憶しているかどうか」を問うものが多い。

ところが、オンライン授業では学生がどのような環境で受験しているかわからず、通信の安定を理由にカメラやマイクをオフにしていれば、教科書や辞書を見ながら受験してもわからない。

もちろん、性善説に立って、不正が行われていないことを前提に通常と同じペーパーテストを実施する、というのも一つの見識ではある。だが、初習外国語の成績が学部・学科分属の際の判定資料に用いられる大学も多く、「外国語の成績で人生を左右される」という言い方が、大げさでもなんでもない状況もあり得る、となると、対面での試験と同程度以上の公平性が担保されていることの説明が必要だと考えられる。

この問題について、全国の大学で様々な試験の工夫が行われた。ここでは、オンラインで試験を行うまでの問題点と、それを乗り越えようといかかる努力が行われているかを紹介する。本号特集の「座談会③：語学授業」でも、各大学の事例が紹介されているので、併せて参照いただきたい。

1. 利用できるコンピュータリソース

オンライン授業での試験、特に解答時間を制限しての、対面授業に近い様態で試験を実施しようとした場合、まず問題になるのは、施設設備がそれに対応するかどうか、である。

多くのLMS、e-Learningシステムには、期限を設けて小テストを実施する機能がある。Google ClassroomやMicrosoft Teamsなど、学外システムを中心に利用している大学であれば、学生がこれらのシステムを利用できる情報環境・生活環境にあるか、に気を配ればよい。ところが、オンプレミスな情報システムを構築し、それを用いて情報や語学の授業を実施しているような大学で、簡単に「利用範囲を通常授業まで拡大してやればよい」と考えてしまうと、痛い目に遭う。

ここでは、筆者の勤務先である北海道大学で「痛い目に遭った」事例を紹介する。

これまで、外国語教育のように教育目的でコンピュータ設備を大学に設置する場合、それは「教室の設置」とほぼ同義であった。北海道大学には定員60名のCALL教室が4つあり、たとえば1年生全員が必修となる「英語II(CALL)」の場合、この4つの教室だけをやりくりして授業を行っている。課題の解答や提出は、過度の集中を避けるため時間割に沿って行われ、外部からのアクセスは欠席者などごく一部に限られた。この場合、必要なサーバスペックは、教室分60名×4+αの同時アクセスである。そのため仕様策定の際は「最

大300名の同時アクセス（通常時200～250のアクセス）」というものになった。実際に、昨年度までにCALL授業は、前期の英語・後期の初習外国語とも、大きな問題は生じなかった。

今年度前期は、新型コロナで、CALL教室は閉鎖されたため、教室からのアクセスは基本的にゼロである。そのかわり、オンライン授業のプラットフォームとしてCALLのサーバ群を流用することにした。これまでも、例えば月曜日1限など、500人近くの利用者が一斉にログイン操作しても、大きな遅延は発生していなかったこと、また、第1週から第3週の、アクセスが集中しやすい時期を問題なく乗り切ったことから、このまま様子見でも問題ないだろうと考え、予算の都合もあり、サーバの増強はストレージの拡張に留まった。

ところが、学期末に、LMSの機能を利用したタイトな時間制限付きで統一試験を実施したところ、大幅な遅延が発生し、多くの学生がログインすらできない状態になった。時間内に全くアクセスできなかつた学生もいるため、再試験を実施せざるを得なかつた。

原因を調査した結果、オンライン試験を実施しなかつた科目も、オンライン教材の課題提出〆切を、統一試験日前後に設定しており、駆け込み提出が想像以上に多かったこと、オンライン試験で不正抑止のために利用していた、ランダム出題機能がCPUに大きな負荷をかけていたことなどが明らかになった。ただ、それらを突き詰めて考えるなら問題は「そもそも必要な十分なリソースが用意されていなかつた」ことに集約される。CALLシステムだけではなく、授業支援のための全学向けLMSも、数度の遅延・ダウンが発生し、学期中に幾度も増強・調整を繰り返した。

対面での試験の体験を、ネット上で得るために、かなり大きなネット及びコンピュータリソースが必要とされる。システム構築も、限られた数の端末だけを対象にしていたCALLとはかなり異なるアプローチをとらねばならない。

2018年に行われた直近の更新では、仕様策定委員会で「教室よりもサーバに厚く」という方針を立て、サーバとWiFi環境を充実させて、

BYODやChromeベースの簡易端末の導入などを検討されたが、実現しなかつた。教室をショボい環境にしてしまうと、他の情報教室との差別化ができなくなり、CALL用に専用設備を用意することの必要性の説明が難しくなる、という主として「政治的理由」で断念した経緯がある。コロナを経て「サーバに重点を置いた設備投資」への理解が得られやすくなつた一方で、「教室を使わなくともできるなら、CALL教室はなくしていいですね」と、サーバへの予算ごと削られてしまうのでは困る。後期も複数の外国語科目で、オンラインによる統一試験実施が決まっている。今後もいろいろな意味で「綱渡り」が続く。

2. 「不正行為」を防ぐ工夫

オンラインで、従来のペーパーテストと同じことをやろうとすると、事実上全て「教科書・辞書・ノートなど、何でも持ち込み可」の試験になつてしまふ。単に教科書等の参照を禁止し、他の人と相談することを禁止する、とお触れを出しても、自宅で受講する学生の行動や環境を完全に管理することは不可能だからだ。

筆者の勤務先である北海道大学国際広報メディア・観光学院では、入試の口述試験をオンラインで実施した。Webカメラなどで周囲や手元を撮影させ、バーチャル背景などの画面効果の使用を禁止することで、カンニングやなりすましといった「不正行為」を防ごうと試みているが、実地で監督できない以上、対応には自ずと限界がある。

ただ、初習外国語科目、とくに入門レベルの授業では、語彙や例文を記憶しているかどうかを問うことが、成績評価のための試験には不可欠であると考えられている。そのため、多くの大学・教員の初期の関心事は「語学のオンライン試験で従来のペーパーテストに近い試験を行うために、いかにカンニングを防げるか」にあつた。検討・実施された方法は4種類に大別できる。

①カンニングするヒマをなくす

1つは「20分で100問」のように、短時間に大



量の問題を解かせることで、何かを参照したり、誰かと相談したりする時間を削ってしまう方法である。

この方法をとるメリットは2つある。1つはもちろん、何かを参照して回答する時間的な余裕をなくすので、自分で考えて答えるしかなくなることである。もう1つは、問題数が多くなれば個々の問題の配点が低くなるため、学生の「カンニングへの動機付け」を下げられることである。

デメリットは、出題形式が短答式・選択式に偏ってしまいがちなところである。この方式で行った試験を「おおむね正規分布を描いており、対面での試験と同じように成績評価に使って差し支えない」と評価する声をよく聞くが、マークシート方式の試験を実施するとわかるように、試験形式によって成績の「中身」は大きく異なる。

今学期、北海道大学の中国語では、講堂や階段教室を使い、コロナ感染防止に留意しながら、対面での統一試験を実施した。通常60問、うち12問(=12点)程度を記述式、他をマーク式で行っているが、今学期は教室滞在時間を減らすために、40間に削減、全てマーク式とした。その結果、成績の山は4点程度高い方に移動した。オンライン試験を実施した他の語学では、システムトラブルの影響もあって結果の詳細な分析はまだだが、総じて高得点者が多かったようだ。

②手書き答案を送らせる

制限時間内に、手書きの答案を、写真に撮ったり、スキャナで読み取ったりして送らせる方法である。同期型の授業で、カメラをオンにしている状態で実施すれば、カンニング抑止効果は特に高い。非同期型の授業では、教科書やノートの参照や、ネイティブの友人に教えてもらう、などの「ズル」はもとより完全には防げない。ただ、「紙への手書き」を導入することによって、問題文を翻訳サイトに貼り付け、コピペで解答する、といった「手抜き」はある程度防ぐことができる。

また、小テストを行って1週間で採点して返却、というのは、コロナ以前から普通に行われてきたことであり、教師にとっても安心感がある。

写真やファイルの提出には、Google Classroomや、各大学で使用しているMoodle等各種LMSの、課題提出機能を利用する。回収漏れを防ぐだけでなく、フィードバックを簡単にするために。LMSを使っていない(使えない)、などの理由で、メールを使って送らせている教員もいたが、提出確認・添削や返却が完全な手作業で1日や2日徹夜しても全然終わらず、疲弊してしまうことが多い。各種LMSなど、答案回収や採点、フィードバックを簡便に行う仕組みがないと難しいようだ。

その場の情景を撮影した写真をメールで交換することは、スマホを持つ多くの学生にとっては、ごく自然な行為であり、手書きしたものを撮影・スキャンして提出、という試験のやり方については抵抗が少ないようだ。スキャナは学生全員が所有しているという前提には立てないので、「写メまたはスキャナ」とせざるを得ないが、スキャナを一度でも使った学生は、その便利さを気に入つて、授業以外で使っている、という声も聞く。

試験ではないが、筆者の担当する初級のZoom授業で、「先週欠席したところを、ちゃんと復習しました」と、指示もしていないのに、ノートをカメラ越しに見せた学生がいた。オンライン授業では学習過程を見せにくいため、自分の能力・努力が、教員に「正しく」把握されているかどうか、確かめられなくて不安だ、という声をよく聞く。従来の小テストなど、紙のやりとりは、少なくとも学生の情意面には有利に働いていた、と言える。そして手書きを見せることは、紙のやりとりに近い安心感を学生に与えるものなのかもしれない。

③ライブやビデオで出題する

Kahoot^[1]という、ゲーム仕立ての学習クラウドがある。クイズ番組のように、選択問題を提示し、それに対して、学生はスマホやPCから解答を送信する、というものだ。解答時間を、最短の10秒に設定しての早押しクイズなど、対面授業でやると、大変に盛り上がる。これは、同期型のオンライン授業でも使えるが、成績判定の材料となるような「テスト」には使いにくい。あくまでも、教室活動の支援ツールなのだ。

非同期の授業では Kahoot! はあまり使えないが、「授業コンテンツの中で試験の出題をする」というやり方は、同期・非同期に関わらず、オンラインで試験を行うまでのヒントになる。非同期の授業のために、ビデオ教材を作っているのなら、その途中でクイズを出題する。クイズは教材中で説明や練習した内容に関するもので、解答は LMS を使用したり、Flipgrid^[2]などの録画・録音ツールに書き込ませたりする。

解答する LMS などには、問題文は再録せず、あくまでもライブやビデオの中で出題すること、がこの方法の肝である。テレビのドキュメンタリーパン組で、途中にクイズを挟む形式があるが、それと同じように、どこで問題が始まるかわからないようにしておけば、全て視聴するしかない。ビデオ視聴のモチベーション維持にも役立っている、ということである。

公開期間を短く区切って、問題文が、学生の間で広く共有される前に解答させることで、カンニング効果を高めようと企図したケースもあり、今後、どの程度で問題文が出回ったか、など、効果についての調査が期待される。

④「コラボ」不正を防ぐために

プレ・コロナを知っている2年生以上では、複数の学生で連携プレーをとって、得意分野に応じて問題を分担して解き、その解答をグループでシェアする、というパターンの不正行為が行われることがある。試験中カメラで監視し、PC やスマホなどに触れさせない、というのが、一つの解決にはなるが、受験環境は様々であるので、徹底することは困難である。

この問題に対応するため、LMS の機能を用いて、選択肢の順番を、アクセスのたびにシャッフルするのは、原始的だがかなり効果がある。WebCT や Moodle などでは、出題順もシャッフルできるので、リアルタイムでの解答共有を抑止する効果は高い。ただし、前述のとおりランダム出題はサーバ、特に CPU への負荷が大きいので注意が必要である。ランダム出題に近いことなら、あらかじめ出題順を組み替えた、複数の問題セッ

トを作つておき、学生にバラバラに割り当てるといい。中には、問題内容も変えて3セット用意したケースもあり、見事に「違うセットの解答」を提出した学生がいたそうだ。多少手間はかかるが、テストのたびに実際に3セット用意しなくても、一度やるだけで、次からは抑止力になる。

以上のように不正行為を防ぎ、公平性を担保すれば、従来の試験内容や形式を踏襲でき、学生や教員の払うコストを少なくできる。

ただ、形式や内容は同じにできても、「同じ知識や能力を測っているのか」という疑問は残る。筆者の勤務先で①の方式をとったドイツ語の試験では、期末試験までに数度の試行を通して、おおむね従来の試験と同様の得点分布が得られたとして、試験結果に基づく段階評価の正当性の根拠としている。だが、実際に測っている知識や技能が、対面授業で行う試験と全く同じかどうかは、得点分布だけではわからない。結果について更なる検討が必要となるだろう。

3. 異なる試験を導入する

対面授業と「全く同じ」評価は難しい。であれば、異なる評価方法を採用すべきではないか、という意見も多い。つまり、「記憶力」を量的に測るこれまでの試験をやめ、実践的能力・応用力・発想力・思考力といった能力や、関心・意欲・態度などの意志(will)などを、評価の対象にすればいいのではないか、ということである。

これは、言うは易しであり、これまで評価の対象となっていたかったものを、評価対象に含めるためには、評価の観点を吟味し、段階評価ができるよう数量的な評価基準を決めなければならない。成績評価に、点数化できないものを含めることは難しいからだ。特に近年、GPA・単位の実質化という“思想”が大学に入り込んで以来、個々の大学や教員によって評価がブレないように、教材・試験・評価基準まで統一する方向にあることから、説得力のある点数化ができない方法は採ることができない。

そのため、一部では、ループリック評価が用い



られた^[3]。ループリックは一時期、ずいぶんと流行したが、「作るのが面倒」という理由で、手放した教員も多い。ループリックの書き方のマニュアルはたくさん出ているので、今後は学会等が手動で「〇〇語教育のためのループリック事例集」のようなものを構築していく必要があるだろう。

ここでは、実際にどのような試験や成績評価が試みられたかを紹介する。外国語科目では口頭での会話試験、朗読試験を実施したり、論文・レポート作成、プレゼンテーションを試験の代わりに課したりするケースが見られた。

①口頭試験

主として発音の正確さや流暢さを評価するための「朗読」や「暗唱」に加え、文法や表現の理解を見る「作文(造句)」、TA や教員との対話による「会話」等の試験がある。評価は「満点から間違えるごとに減点する」とか「発音や態度、流暢さなどの観点から、主観的な印象を 5 段階評価、TA や他の教員などと、必ず二人以上で採点してトライアンギュレーションを確保、公平さを確保」というやり方が多い。ただ、何人で評価しても、主観的な印象であるので、最終成績をこれだけで決めるのは躊躇する。基準を統一しようにも、教員や TA の中国語学習観が異なるので、統一は困難だ。

そんなわけで、筆者の周囲には、コロナを契機に、ループリック評価を泥縄式に導入しようとする教員もいるが、メインストリームとはなっていない。

②プレゼンテーション

①の発展形として、「自己紹介」や「故郷自慢」などをテーマに、少し長くしゃべらせる、というやり方もある。

筆者は、初級クラスで、「教科書の 1 課につき必ず 1 文、例文を使って、自分のことについて話す」という口頭試験を、オンラインで行った。各課の例文から 1 文ずつ、というルールにかなり手こずったようだが、1 課から順番どおりに文を持ってくるのではなく、それぞれに一つの文章になるよう考え、「言いたいことを言おう」として

いた。本当は、「1 課から 1 文ずつ」というのは「言いたいことではなく、言えることを言えばいいんだからね」という「親心」であったのだが、学生はそんな配慮を軽く飛び越えてきた。中国語を半年（厳密には 5 月初旬から 8 月末までの 4 ヶ月足らず）勉強しただけでも、ずいぶんいろいろ言える、とあらためて知った。

驚いたのは、学生の発音が対面で授業をやっている例年の学生と比べて遜色ないことである。オンラインデマンド教材にせよ、同期型の授業にせよ、文法知識や語彙習得のように、一人でコツコツ学ぶ系の学習項目については、対面と同じようにできるだろうと思っていたが、発音だけは、授業での発音練習と教員による指導・矯正が必須だと思っていた。

ところが蓋を開けてみると、指名朗読させても、割とちゃんと発音している。思わぬ間違いがあつたり、細かい部分で「甘い」「ゆるい」と感じるところがあつたりはするが、もともと、専門に進む以外の学生の発音は、それほど精密ではない。

もちろんこれは、「教師による発音指導や矯正是無意味だ」ということを意味しない。「たくさん練習すれば、成果は出る（逆に練習しなければできない）」ということだろうと考えられる。前述のように、オンライン授業を受ける学生は、教員からどのように評価されているかわからず、不安で仕方がないのだろう。どんな難しいことであっても、とにかくちゃんとできるようにならなければ、評価されないんじゃないのか、という強迫観念に、おそらく真面目な学生ほどさいなまれるのではないか。

マイクをオフにして、他の学生の声が聞こえない状態での発音練習を、きっとみんなちゃんとやっているのだ。他の学生の様子がわからなくなために、「囚人のジレンマ」にも似た状況が生じ、生真面目な学生は、一人でも実直に発音練習を続けたのだ。「座談会③：語学授業」で、「Google 翻訳そっくりに発音する学生」という話があったが、Google 翻訳の「声の調子」までコピーする、というのは、どれほどの修練を積み重ねたのだろうと、感動すら覚える。それと同時に、そういう

不安を学生に与え続けるオンライン授業に対して、このまま続けていいのだろうか、と懸念する。

③会話試験・ロールプレイ

同期型の授業で行われるものだが、非同期型で行うこともできる。

教員や TA と対話する、という試験も見られた。A が質問して B が答える、というダイアログを、教員・TA と、学生で入れ替えながら演じる。

筆者のクラスでは、単純に「A の問い合わせに B が答える」のではなく、HSK でよく見かける ABA の形、すなわち質問に答えた B が問い合わせる、というパターンで行なうことが多かった。学生アンケートやインフォーマルなインタビューでは、AB よりも ABA となった方が、ずっと「会話らしい」と感じているのがわかる。

ただ、これを「会話試験」ではなく「対話試験」だな、と感じるのは、全く応用が利かないからである。TA はある程度教科書の文から、言いやすい文、よく使われる表現に変えてよいことになっている。けれども、ごく単純な言葉の入れ替えや語順の変更でも、とたんにわからなくなってしまう。多くを求め過ぎてはいけないのかもしれないが、もう少し丁寧な指導ができないものか思案中である。

非同期で行う場合は、まず、Flipgrid を用いて TA に質問を吹き込ませ、そこに解答をつけていく、というやり方が手軽である。ただし、全員のビデオを全員見ることができてしまうので、どういう順番で解答するか、は思案のしどころである。筆者は安易にくじ引きで決めている。

また、学生を 2 人～4 人のグループに分け、ロールプレイを行い、それを各自 Zoom 等で演じ、録画させて提出させたりもした。

4. 試験のあり方はそのままでいいか

以上、「従来型の試験で不正行為を防ぐ」方法と、「試験のやり方を変える」という、コロナ対応の二つの方向について述べた。

ただ、これらのやり方は、いずれも「従来の試験」

や「従来の教室活動」を、「オンライン에서도できますよ」と言っているだけだとも言える。そもそも、外国語授業で試験を行うのは、また、その試験で公平性を担保しなければならないのは、外国语授業の成績が、進級から学科・学部分属にまで使われる仕組になっているからである。これまで多くの大学で、教科書を統一し、統一試験を行い、統一された基準で成績評価する、という具合に過剰なまでに統一が図られてきたのは、外国语科目の授業が「そういうもの」だったからである。

コロナ体制下で、北海道大学で中国語授業を担当する教員は、「段階評価を緩めて、3 段階とか 4 段階にするか、合否のみ判定に変えるかできないのか」と、全学教育担当に問題提起したが、結局受け入れられなかつた。従来の段階評価を堅持し、ただし、評価に使わないグレードがあつたり、評価が一部グレードに偏っても、今学期に限り不問というルールが伝えられた。中国語の主張は、全てではないが、実質認められたと考えてよい。

ただ、いつまでも「そういうもの」であつていいのだろうか。新しい外国语を学ぶにあたって、そのモチベーションが、1 点でも高く得点し、好きな学部に行くため、だけであつて構わないのだろうか。筆者には、そうは思われない。今後、外国语科目的授業、外国语科目的試験の位置づけを見直す議論を進めなければならないだろう。

注

[1] <https://kahoot.com/>

[2] <https://info.flipgrid.com/>

[3] 初級中国語科目におけるループリック評価・パフォーマンス評価の実際は、本号特集 1 の吉川氏による報告を参照いただきたい。

※ 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「初級習者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」（平成 30 年度～令和 2 年度、基盤研究（B）、研究代表者：田邊鉄、課題番号：18H00682）による成果の一部である。

初習中国語のオンライン授業における

成績評価について

—大学1年生向け授業のパフォーマンス評価実践報告—

吉川 龍生 (よしかわ たつお)

* はじめに

東京五輪の年になると思われていた令和2年は、コロナ禍元年となった。先の見通せない中で迎えた2020年度は、教室での対面授業の可能性が新学期早々になくなり、教員も学生も不慣れなオンライン授業を手探りしながら進めていくことになった。本稿は、2020年度春学期（前期）の慶應義塾大学経済学部における、筆者の担当する初習中国語クラス（週2コマ）の授業を振り返り、オンラインデマンド形式（動画配信と任意参加のオフィスアワー）とループリックを用いたパフォーマンス評価の実践について報告するものである。

初習外国語の教授において、オンライン授業は最良の方法とは言いがたいものの、より良い効果を目指して行った実践を振り返ることで、「withコロナ」の時代の中国語教育に活用できる要素を見出そうというのが、本稿の趣旨である。筆者は、CALLやICTを用いた語学教育の専門家でも、ループリックを用いたパフォーマンス評価の専門家でもなく、そもそも専門性を極限まで授業にフィードバックするような「フルスペック」型のオンライン授業・パフォーマンス評価を実践できるような教員ではない。筆者のような一般的な中国語教育スキルを持つ教員でも「実現可能」で、無理なく「持続可能」な授業を、急遽始まったオンライン

授業の中で実践してきた。さまざまな点で不充分などころのある授業実践であるが、恥を忍んで自らの問題点を示すことで、より良い授業の実現のために経験を共有できればと考えている。

本報告の対象クラスは、筆者の担当する慶應義塾大学経済学部1年の未習中国語2クラスで、履修者数はそれぞれ32名と34名で、両クラスとも水曜日と金曜日に1コマずつの授業が設定されている。もう1コマ非常勤講師の方の担当授業とあわせて、合計3コマを1年次に履修することになっているが、本稿では非常勤講師の先生の授業については言及しない。なお、筆者の担当クラスの使用教科書は、相原茂ほか『日中いぶみ交差点 エッセンシャル版』（朝日出版社、2019年）である（非常勤のかたは別の教科書を使用）。パフォーマンス課題向けに作られたわけではない教科書を使ってパフォーマンス課題をやるという授業を、ここ数年行ってきていている。原則として毎年、長くても2年で使用教科書を変更するようにしており、教科書の内容に合わせて、これまでさまざまなパフォーマンス課題を試みてきた。その中で、今回紹介する2020年度春学期に行った自己紹介の課題は、もっと多く行ってきたものである。

なお、パフォーマンス課題とは、「複数の知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような複雑な課題^[1]」のことを指し、パフォーマンス



評価とは、「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法の総称^[2]」である。また、ループリックとは、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語（descriptors）から成る評価基準表^[3]」である。

* 1. 授業形態と評価形態の決定の経緯

本稿は、ループリックを用いたパフォーマンス評価の実践報告に重点を置いた報告したいが、パフォーマンス課題・パフォーマンス評価をデザインするに当たっては、「逆向き設計」がしばしばセットで言及されるように、当該授業の最終的な目標や選択しうる授業形態から逆算して行く必要があり、授業形態や評価形態（試験形態を含む）が2020年度春学期においてどのように決まったのかという点も、報告をする上で重要な要素である。そのため本章では、まず授業形態や評価形態の決定の経緯について振り返り、考察を進めたい。

まず、授業形態については、3月末の時点でオンライン授業が不可避であることが明白であり、どのような形態が選択可能なのかの検討が始まった。筆者の所属先である慶應義塾大学経済学部中国語部会では、千田大介先生を中心に、どのようなオンライン授業の形態が適切かを、主に次のような観点から検討した。第一に、学生や教員の通信容量の問題があり、通信料の上限があったり従量課金契約であったりした場合に、ライブ形式の授業では容量を消費しすぎることが懸念された。第二に、学生や教員の授業環境の問題があり、家庭内にリモートワークやオンライン授業をする家族がいた場合、ライブの授業では音声の干渉や室内での受講場所の確保などの問題が起こることも考えられた。第三に、教員のITスキルの問題があり、ライブ形式とオンデマンド形式では、どちらがより対応しやすいのかということが検討された。

その結果、PowerPointでスライドに音声をのせて動画を作る方法が、編集もしやすくデータ容量

も少なくて済むことが分かり、作成した授業動画をデータ共有フォルダで配信（ダウンロード可）するオンデマンド形式が推奨されることになった。ここで問題となるのは、オンデマンド形式の授業で、学生に発音をどれだけ教えることができるのかという点だった。もともと、例年と同じように、パフォーマンス評価と筆記試験を併せて期末試験とする位置づけでパフォーマンス課題を設定することを考えていたものの、発音指導がどれくらい効果的にできるかの見通しが立たず、パフォーマンス課題をどうするか判断しかねる状態であった。できるだけ早く学生に最終的な課題について明示したいと思いつつも、例年も行っている発音編が完了した後の発音テストの状況を見極めることにした。結果的には、オンデマンド形式でも発音指導は機能することが確認でき、パフォーマンス課題の導入を決めた。

次に、評価形態については、3月の段階で従来どおりの「S・A・B・C・D」の評価は難しくなる可能性が高いのではないかという議論が行われたが、大学として全体的に「Pass/Fail」方式の評価を導入することはできないという方針が示され、従来どおりの評価を行う必要が生じた。また、期末試験として教室での筆記試験ができるかどうかについては、早くから絶望視されてはいたが、教室での試験が行えないという正式決定は授業開始後になった。筆者の担当する科目は通年科目のため、半期で成績評価を行う必要はなかったが、どんな形であれ半期の学習を終えた後の総括的な評価がないと、学生にとっても半期の学習の振り返りができず、教員としてもフィードバックを与えることができず、教育上は本質的な問題ではないが、成績評価のための材料が不足する懸念もあった。そうした諸々のデメリットを考慮し、前述したとおりオンデマンド形式での発音指導に見通しが立った段階で、パフォーマンス評価による発音試験を行い、それを期末試験とした。

以上のように、パフォーマンス課題を設定していく過程で、最終的な目的地もそこに至るために手段やルートもたえず揺れ動いていたのが2020年度春学期であり、たえず授業の再構築が求めら



れる状況であった。それは、授業の根幹を見据えた上で、社会的な状況や学生の反応を見ながらバランスをとっていく作業であり、巷で語られているような、単なるオンライン化の問題やITスキルの問題、学生の成績を差別化するための問題などに矮小化されて語られるべきではないと考える。パフォーマンス評価や逆向き設計の観点からは極めて好ましくない状況の中で、授業のあり方に対する「哲学」が問われていたと言ってよく、この点は忘れてはならないと言えるだろう。

2. パフォーマンス課題の設定と授業の展開

担当科目における、パフォーマンス課題実施に向けた指導は、次のような経過で行った。

5月22日：PC・タブレット・スマホでのピンインによる簡体字入力の案内

5月29日：発音テストの詳細とグループ分けの発表

※30人超のテストを90分間でこなすのは難しく、2日に分けて実施するために、グループ分けを行った。

6月3日・5日：発音テスト問題を使用した発音指導（ライブ／グループごとで全員参加／本番と同じスケジュールで接続の確認を兼ねる）

6月10日・12日：発音テスト本番（カメラOFF）

6月19日：期末テストをパフォーマンス課題とする案内

6月26日：ループリックの説明、自己紹介用作文の案内とテンプレートの説明【資料1・2】

7月1日：アンケートの結果を受けて、暗唱については取り下げ

7月3日：自己紹介作文の締め切り⇒修正してすぐにメールで送信

※簡体字とピンインが入力されたGoogleフォームのデータをExcel上で修正するだけなので、修正の手間は従来と変わら

ないレベルで行えた。メール送信には、Wordの差し込み印刷機能を使用。

7月8日・10日：発音指導（ライブ／グループごとで全員参加）

7月15日・17日：期末発音テスト本番

7月22日：発音テスト予備日

※発音指導や発音テストの日の分も、オンデマンド教材を配布し教科書の内容を進めた。期末発音テストの期間は、復習用のオンデマンド教材を配布し、小テストを行った。

前述のように、6月10日・12日に行った発音テストの状況を受けて、期末試験として自己紹介作文とそれに基づく発音テストを行うことを決め、翌週6月19日の方針を学生に説明した。発音テストで全員がライブ（カメラ・オフ）で参加できることが分かったことも、判断の後押しになった。なお、6月19日時点では、ループリックを固めることができなかったため、以前に使用したものをサンプルとしてループリック自体の説明を行った。

翌週の6月26日に、自己紹介を作文して、その作文に基づいて教員に口頭で自己紹介をするパフォーマンス課題について、全体の流れを説明した【資料1を参照】。また、確定したループリック【資料2を参照】を用いて、教員の評価の観点について説明を行った。この時点では、作文したものを見ることとしていたが、それをテストするためには試験時のカメラ・オンが必要で、対応できない学生がいる可能性があったため、ライブ接続時にカメラ・オンが可能かのアンケートを同日に行った。暗唱ができない可能性が比較的高いことは認識していたが、教員が学習の結果として到達して欲しい状態を示す意味で、あえて暗唱する「パフォーマンス」の項目を入れたループリックで、評価の観点（=到達目標）を説明した。「パフォーマンス」の項目が抜けると、単なる原稿の読み上げテストに近くなってしまい、文字通りパフォーマンス課題ではなくただの課題になってしまう感じもしていて、始めから暗唱を外すという



選択はしなかった。結果的には、3名の学生がカメラ・オン不可と回答したため、残念ながら「パフォーマンス（暗唱）」は評価対象から外すことになり、「発音」の正確さと「リズム・流暢さ」だけで評価することになった。

今回のループリックに関しては多くの反省点があるが、特に次の2点は秋学期（後期）に向けて改善が必要であると考えている。一つ目は、ループリックの観点を目標として学習を方向付けることが必要であるはずが、暗唱する「パフォーマンス」を含めないことを説明するのに気をとられすぎ、この授業がこの学期の学習で何を目指しているのかという点を、充分に明確化することができなかった点がある。授業動画でパフォーマンス課題の趣旨を強調したつもりだったが、動画を見直してみると「パフォーマンス」項目の修正のことばかり話していることに気づく。二つ目は、慌ててループリックを作成・修正したこともあり、ディスクリプターがあまり適切ではなかった点がある。特に、【リズム・流暢さ】のBの項目は、「伝えたい内容を伝えることができる」としてしまっており、リズムや流暢さとはあまり関係のない記述内容になってしまった。授業動画の中では、「つかえつかえである」とか「不適切なところで間をとっている」と説明しており、口頭の説明としてはできていたと言えるかもしれないが、ループリックの記述として明確に示す必要があったと言える。

3. パフォーマンス評価について

過去の経験から、安易にループリックでパフォーマンス評価をするだけでは、学生の不満や不安につながることも考えられたため、オンライン授業でコミュニケーションがとりづらい状況であることも考慮して、事前・事後のフォローを意識的に手厚く行った。

まず、試験の前週には一人5分程度の時間をかけて発音指導を行った。まず学生に読ませ、ミスを修正し、自学用に教員が模範を読み上げスマートフォンなどで録音させるというのを、全員に対して行っ

た。その際、その時点の評価とコメントをメモしておいた。練習の段階での出来具合を記録しておくと、本番までにどれくらい練習をしてきたかがよく分かり、学生とのコミュニケーション上有用である。発音指導に向けては、Google翻訳に自分の作文を入れて読み上げさせ、その発音を聞きながら練習する方法も紹介した。その結果、一音節ごとを切れ切れに読み、軽声であるべきところも声調をつけて読む「Google的発音」をする学生が数名見受けられた点は興味深かった。教員の案内にしたがってGoogleの音声を聞きながら必死に練習した学生が一定数いたということを示唆している。

試験本番では、後日録画を見て採点を調整する旨を伝えた上で、修正が必要な箇所や気になったところをその場で指摘した。暗唱の項目がなくなったため、少し厳しく採点する旨を事前告知した。発音指導の際のメモから、明らかに練習を重ねた形跡のある学生に評価する言葉をかけたり、良いところを積極的に褒め、修正が必要な箇所はより良くするためにはどうしたらよいか、具体的なアドバイスを行うようにした。間違いを指摘して減点するという雰囲気ではなく、より良くするにはどうしたらよいかという方向性で話をすることを心がけた。結果的には、ふだんから任意参加のオフィスアワーに参加していた学生の成績がよく、当然ではあるが練習量が結果に反映していることがよく分かった。

試験後は学生に自己評価を行わせ、教員はビデオを見直して採点を確定する。その後、出席情報と併せて、メールで自己評価と教員の採点を送付した【資料3を参照】。筆者には高度な情報処理スキルがないため、Excelで一括処理したデータを、使い慣れたWordの「差し込み印刷」機能のメール送信を使い、一人ひとりに個別のデータを送信した。学生には、自己評価と教員の評価を比べて学習を振り返ることが重要であるという説明をしておいた。学習方略や学習姿勢の改善といったメタ能力の向上につながることを期待してのフィードバックである。

今年度の自己評価と担当者の評価を見比べて興



味深く感じたのは、例年は自己評価がいい加減であったり過剰に低く評価する学生が多くいたのに対し、今年度は教員の評価に近い自己評価をしている学生が多い印象を受けた点である。オンライン授業の不安の中で相応の時間をかけて準備をし、それなりの自信を持って自己評価している学生の姿が浮かび上がるように感じられた。

* おわりに

「パフォーマンス評価が、従来のペーパー試験による成績評価方法と同じように、差別化された評価をつける上で有効なのかどうか？」という疑問に答えることが、結局のところ本稿に期待されている内容なのだろうと認識しているが、その問い合わせに対する私の答えは「YES」である。それぞれの教育機関によって評価の段階は違うにしても、「S・A・B・C・D」のように評価に差をつけることは、教育の本質的な目的ではないとは言え、現実的には教員にとって重要な点である。時間かけて練習した学生には良い評価がつくし、時間をかけなければそれなりの評価になる。その意味で、公平感のある評価が可能ではある。評価の前後にしっかりとフォローをすれば、妥当な評価が可能なだけでなく、学生が自らの学習を振り返ることで、新たな学習方略の獲得や学習意欲の向上にもつながりうる。パフォーマンス課題・パフォーマンス評価は、教師にとっても、単に従前の評価方法を見直すというだけではなく、教育の目的や授業のあり方を再構築する良い機会にもなる。

ループリックについては、筆者が作成したようなものは、いわば「野良ループリック」であり、基本的には見よう見まねで作成しているものである。しかし、ループリックを用いることで重要なのは、授業や学習の目標を明示することによって授業の方向性を示すことであって、記述内容が見た目に立派に書かれているかどうかが問題なのでない。あまり的外れでは困ってしまうが、それぞの授業の実情に合わせて、学習の後押しになるようなループリックができれば良いのではないかと考える。多少の失敗は説明でカバーできるし、

オンライン授業の成績評価方法として、ループリックは有用なものであると言えよう。

なお、ループリックの作成について、スタンダードとなるようなガイドブックは心当たりがないが、筆者が参考にしたものについては、下記のコメント付き参考文献リストで案内している。

主要参考文献・サイト

- 奥村好美、西岡加名恵 編著『「逆向き設計」実践ガイドブック『理解をもたらすカリキュラム設計』を読む・活かす・共有する』（日本標準、2020年）
※理論的な部分と実践的な部分が示されていて、逆向き設計がどのようなものかや、その中でループリックがどのように使われるのか把握しやすい。
- 公益財団法人 国際文化フォーラム『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』（2013年）
※中国語授業の実践例やモデルも掲載されていて、最も直接的に参考になる資料と言って良い。「めやす」のディスクリプターも、ループリックを作成する際の参考になる。
- 佐藤一嘉 編著『授業をグーンと楽しくする英語教材シリーズ⑩ ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト 中学1年』（明治図書、2014年）
※このシリーズは、中1から中3、高校編とあるが、初習外国語で参考にするには、この中学1年向けが一番参考になるように思われる。
- ダニエル・スティーブンス、アントニア・レビ（佐藤浩章 監訳）『高等教育シリーズ 163 大学教員のためのループリック評価入門』（玉川大学出版部、2014年）
- 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計 パフォーマンス評価をどう活かすか』（図書文化、2016年）
※本書は、本稿の執筆にあたり定義を引用するために手に取った側面もあるが、パフォーマンス課題や評価法、逆向き設計などについて理解するには好適である。語学教育に特化した内容ではないが、英語に関する実践例も挙げられている。西岡氏は、逆向き設計論のバイブルとも言

えるウィギンズ＆マクタイ『理解をもたらすカリキュラム設計』(日本標準、2012年)の翻訳をするなど、逆向き設計やパフォーマンス評価に関する著書が多数ある。

- 松下佳代『パフォーマンス評価——子ども思考と表現を評価する——(日本標準ブックレットNo.7)』(日本標準、2007年)
※松下氏も、パフォーマンス評価に関する著作が多くあり、本書は外国語教育についての言及はないが、ブックレットで簡潔にパフォーマンス評価について理解でき、簡便で良い。
- 吉島茂ほか訳・編『外国語教育Ⅱ——外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠——』(朝日出版社、2004年)
※言わずと知れたCEFRの日本語版(上記書誌は翻訳の初版)。Can-doのディスクリプターの書きぶりは、その明確さや簡潔さなどパフォーマンス評価の記述を考える際に参考になる。
- 京都大学大学院教育学研究科E.FORUM「パフォーマンス評価(用語解説)」、<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/seika/> [最終確認: 2020年8月23日]
※パフォーマンス課題やループリックについての簡潔な説明や、ループリックの作成法についての案内がある。
- National Standards in Foreign Language Education Project, *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century*, 1999
※書名どおり米国における外国語学習の基準を示したもの。中国語の章があるため、どういった内容を到達目標にしたらよいかの参考になる。なお、スタンダーズの日本語の章については、下記URLに日本語翻訳版がある。
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-2USA.pdf [最終確認: 2020年8月23日]

注

- [1] 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計 パフォーマンス評価をどう活かすか』(図書文化、2016年)、p.22。

[2] 同上、p.20。

[3] 同上、p.100。

資料1

1. まず、テンプレートにしたがって、紙に簡体字とピンインで書く(自分で追加して書く分も)。

2. PCならWordやPages、タブレットならメモなどに、簡体字で入力する。作成例で示すとおり、改行は入れず、①……②～～③……のようにつなげて入力。保存する。

3. Google翻訳↓に、入力したすべてをコピーして、原文を「中国語」・訳文を「日本語」にし、原文の下に表示されるピンインをWordやPages、メモなどに貼り付けて保存する。手書きしたピンインと比較してミスが無いか確認する。

<https://translate.google.com/>

※算用数字はピンインがつかないので、漢数字で入力すること。

※日本語訳も表示されるので、Google翻訳の翻訳がどれくらいのものか、自分の書きたい内容とあっているのかなど確認する。

4. Googleフォームで、簡体字は簡体字のところに、ピンインはピンインのところにそれぞれコピペする。日本語訳のところに、日本語の意味を書き込み、送信する。

【提出締め切り: 7月3日(金)23:59 これ以降も提出自体は可能にします】

5. 教員が修正したものがメールで送られてくるので、WordやPages、メモなどにコピペして整形したり手書きで写したりして、発音の練習を各自進める。

※Google翻訳では、原文の発音も出しきができるので、修正されて戻ってきた中国語をコピペして発音を確認することで、発音練習に活用する。

6. 発音指導の授業の時までに、だいたいでき



るようにしておき、チェックを受ける。

7. 翌週のテスト本番に臨む。

・自己紹介文テンプレート

<p>【共通項目】</p> <p>①我姓【姓のみ】，叫【姓名・フルネーム】。 ②我今年【漢数字で】歳。我的生日是【漢数字で】月【漢数字で】号。 ③我家有【漢数字で】口人，【家族】、【家族】、 【家族】…和我。 ※“和”的前に「,」は不要。「,」と「、」 の違いに注意する。 ④我老家在【日本の県名・海外国名】。 【任意選択項目】 ※最大2文まで ⑤⑥ 我喜欢【VOフレーズや名詞など実際に即して入れる】。 我去过【国名／日本の地名（cf. 教科書・単語帳）】。 その他、10課までの既習項目から応用してもよい。文脈にあった、気の効いたものがのぞましい。</p>

※誕生日・家族構成などについて、実際のものを書きたくない場合は、架空の内容で良い。

※任意選択項目は、テンプレートのものを使っても良いし、教科書の既習事項から考えてもよい。その場合、最初のものを⑤、次を⑥として記入すること。

【作成例】

①我姓吉川，叫吉川龙生。②我今年二十岁。
 我的生日是一月一号。③我家有～～

① Wǒ xìng jíchuān, jiào jíchuān lóng shēng. ② Wǒ jīnnián èrshí suì. Wǒ de shēngrì shì yī yuè yī hào. ③ Wǒ jiā yǒu ~～

①私の苗字は吉川で、フルネームは…

資料2

評価項目	S	A	B	C
既習事項を活用して自己紹介を書くことができる。 【作文】	文脈にあわせて自分の言葉で内容を豊富にすることができます。【+2文】	既習事項を活用して、紹介内容を充実させることができます。【+1文】	テンプレートに基づいて、基本的な内容を書くことができる。	テンプレートの内容をしっかりと完成するための努力が必要。
相手に意味が伝わるように発音することができる。 【発音】	充分な声量で極めて精確に発音することができます。	相手が意味を確実に理解できる発音をすることができます。	最低限のコミュニケーションをとることができ。	一つひとつの発音をしっかりできるように練習する必要がある。
リズム良く話すことができる。 【リズム・流暢さ】	非常に流暢に自己紹介をすることができる。	文意を意識して、適切なりズムで話すことができる。	伝えたい内容を伝えることができる。	一つひとつの字の読み方だけでなく、意味を意識した練習が必要である。
聞き手（カメラ）を見て話すことができる。 ≠ 原稿読み上げ 【パフォーマンス】	聞き手を見ながら、表情豊かに話すことができる。	ときどき手元の原稿を確認しながら、概ね聞き手を見て話すことができる。	たまに聞き手の方を確認しながら、原稿を読むことができる。	原稿を読むだけでなく、聞き手を確認しながら話す練習が必要である。

資料3 学生宛メール文面サンプル

【氏名】君

2020年度春学期の中国語I・II（担当・吉川）の出欠状況と期末発音テストの結果は下記のとおりです。

1. 春学期出席状況（発音用作文の提出状況含む）

5月6日(水)：出席	5月8日(金)：出席
5月13日(水)：出席	5月15日(金)：出席
5月20日(水)：出席	5月22日(金)：出席
5月27日(水)：出席	5月29日(金)：出席
6月3日(水)：出席	6月5日(金)：出席
6月10日(水)：出席	6月12日(金)：出席
6月17日(水)：出席	6月19日(金)：出席
6月24日(水)：出席	6月26日(金)：出席
7月1日(水)：出席	7月3日(金)：出席
7月8日(水)：出席	7月10日(金)：出席
7月15日(水)：出席	7月17日(金)：出席
7月22日(水)：出席	発音用作文：提出

※授業の1週間後の23時59分59秒までで、機械的に切ってあります。

2. 期末発音テスト結果

自己評価、教員による評価の順に記載しています。採点はビデオで見直し調整をしました。予告どおり少し厳しへに採点しましたので、「発音」と「リズム・流暢さ」が、A・B或いはB・Aになつていれば「まあまあ良い」、A・Aになつていれば「良い」、それ以上はかなり良くできています。「パ

フォーマンス」「備考・コメント」は一部の学生に書いてあります。

【自己評価】

作文：S（文脈にあわせて自分の言葉で内容を豊富にことができる）【+2文】

発音：A（相手が意味を確実に理解できる発音をすることができる）

リズム・流暢さ：A（文意を意識して、適切なズムで話すことができる）

【教員による評価】

作文：S

発音：S

リズム・流暢さ：S

パフォーマンス：N/A

備考・コメント：よく練習できていて、正確な発音でとても流暢に発音していました。

何かミスや問題があれば、問い合わせ用アドレスまで連絡して下さい。「授業支援」の掲示板やメッセージ機能は休み中に確認することが極めて少ないでの、対応できない可能性が高いです。

問い合わせ用アドレス：~~@keio.jp

以上

※本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「初級学習者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」（平成30年度～令和2年度、基盤研究（B）、研究代表者：田邊鉄、課題番号：18H00682）による成果の一部である。

オンライン授業 Tips 集

オンデマンド教材の作成

千田 大介 (ちだ だいすけ)

* オンデマンドかリアルタイムか

オンライン授業の方式には、大きく分けて、教材動画のオンデマンド配信方式、Zoom・Webexなどによるリアルタイム方式、文書配布方式の3種類がある。

このうち、文書配布方式は、端的に言えば、通信教育の添削指導の通信方法を郵送からインターネットに置き換えたものであり、教員・学生の情報通信環境が十分に整わない場合はこの方法しか取り得ないし、また上級の語学授業の訳読の訓練など、この方法に向いたタイプの科目もあるが、学生の興味を喚起することが難しく、教員と学生、学生相互のコミュニケーションが生まれにくいという問題もある。

このため、オンデマンド配信方式とリアルタイム方式、および両者のハイブリッド方式が、多くの大学でオンライン授業の主な方式になったことと思われる。

一部には、リアルタイム型の方が高度なITCスキルを要求される上級の方法である、という誤解があり、非常勤講師にZoomの使用を義務づけた大学もあると側聞している。しかし、NIIの「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」で、「データダイエットへの協力のお願い:遠隔授業を主催される先生方へ」(<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/tips.html>)が公表されているように、遠隔授業とテレワークでパンク寸

前の状況にある我が国のインターネットインフラの状況に鑑みると、できる限りオンデマンド配信を活用すべきである。その方が教員・学生のアクセス集中を防ぐことができるし、また通信環境や機材のトラブルが発生しても対処する余裕が生まれるので利便性も高まる。

一方で、プレゼンテーションやディスカッション、語学の発音指導などには、リアルタイム方式が適している。こうした特性を生かしつつ、オンデマンドとリアルタイム、場合によっては対面の授業・試験などを組み合わせた、ハイブリッド形式の授業を効果的に展開することが、今後しばらくオンライン授業が継続するのであれば、求められるものと思われる。

* PowerPoint 動画を作成する

◎ スライドに音声・映像を乗せる

オンデマンド教材の作成については、PowerPointスライドに音声もしくは映像を乗せて、それを動画出力することで作成した人が多いものと思われる。Zoom・Webexなどのオンライン会議システムで一人会議を設定して録画する、という方法もあるのだが、結局のところ、PowerPointスライドを提示しながら話すことになるので、初めからPowerPointで動画を作成した方が効率が良い。



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

PowerPoint に音声・映像を乗せる方法であるが、ネット上で流布しているマニュアルの中には、スライドの冒頭から録音・録画していかなくてはならないとしているものもある。しかし実際には、Windows 版 PowerPoint の場合は、スライドごとに録音・録画していくことができる。なお、録画への対応は Office 2019 / 365 版からで、Office 2016 は録音だけに対応している。

その方法については、ネット上にいくつかのマニュアルが公開されているので検索していただきたい。筆者も以下にビデオマニュアルを公開しているので、参照されたい。

● <https://keio.box.com/s/81fqi34z4dhyk7i1pe87rg2pf9wl0bv>



◎ PowerPoint スライドは省力で

特に語学の場合など、スライドに教科書の内容をそのまま記述して、それをもとに解説する、というようなやり方をしている人が多いと思われる。しかし、そのような詳細なスライドは本当に必要だろうか？

対面授業では、教科書の内容をすべて板書して解説する、というケースは稀で、大半は文法のポイントなどを解説する際に必要な例文や説明を板書していることだろう。オンライン授業でのスライドは、対面授業の板書の代用であるので、学生が教科書を持っているのであれば、解説に必要な部分だけをスライドで提示すればよい。

例えば、中国語の本文スキットを読んで訳すのであれば、スライドには「教科書 40 ページのスキットを読んで訳します」とだけ書いておけば十分である。

多くの人のオンライン授業のイメージは、NHK のラジオ講座や、放送大学がベースになっているものと思われるが、それらは専門スタッフの助力があればこそ、教科書を画面に再現するといった作り込みが可能になるのである。個々の教員がサポートなしに教材を作る場合、上述の「節約スライド」で対応するべきであると考える。

◎ スライドに複数の音声ファイルを配置して動画出力する

語学のオンデマンド教材を作成していると、教科書の音声を聞かせて、それについて解説する、というようなスライドが必要になることがある。このとき、スライドショーの記録で、スライドに配置した音声を再生して、その後にナレーションを吹き込んで、とやろうとすると、マイクが常にオンになっているため、録音にノイズが被ってしまうし、また動画出力すると音声が思ったように再生されないことが多い。

そうした場合は、以下のように操作することで、スライド上に配置した複数の音声ファイルを順番に再生し、動画に出力することができる。

①スライドに教科書の音声ファイルを配置する①。



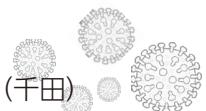
②「挿入」タブ②の「オーディオ」③をクリック、「オーディオの録音」④をクリックする。



③クリックして、ナレーションを録音する⑤。「OK」をクリックして終了。

④スライドに録音が配置される。スライド上の適当な位置にドラッグして移動させる⑥。





- ⑤「アニメーション」タブ⑦の「アニメーション ウィンドウ」⑧をクリックする。
 ⑥アニメーションウィンドウが表示される。
 再生順を変更するファイル名をクリックし
 ⑨、「▲」「▼」⑩をクリックして順序を変更する。②～⑥をくり返して必要な解説を追加する。



- ⑦「アニメーション」タブ⑪の「アニメーション ウィンドウ」⑫をクリック、アニメーションウィンドウの2番目以降の音声ファイルを、Ctrlを押したままクリックして全て選択する⑬。
 ⑧「開始」プルダウンで「直前の動作の後」
 ⑭をクリックする。



こうして設定したスライドを動画出力すると、設定した順序で音声ファイルが再生される。

ところで、PowerPoint に音声・映像を載せるとき、ともすると学会発表のような語り口になってしまいがちである。そのような教材動画は概して学生の受けが悪いので、シナリオを用意して厳密にその通りに話したり、ちょっと言い間違えたら撮り直したりということは避けて、なるべく碎けた感じで話すように心掛けた方がよいだろう。

* スライドに手書きしながら録画

スライドに表示した文章や資料、データなどにコメントを付けながら講義したいようなケースでは、まず、教科書の PDF からテキストをコピー＆ペーストする、あるいは教科書をスキャンした画像を適宜トリミングして貼り付けるなどして、

スライドを作成する。その上で、PowerPoint の描画ツールを使ってフリーハンドで書き込みながら、講義することになる。

このとき、マウス操作で文字を書くのは全くもって現実的ではなく、ペンタイプの入力デバイスを使用する必要がある。

1つの方法は、タッチパネルを備えた PC を利用することである。タッチパネル対応 PC では、画面にスタイラスペンで書き込むことができるので、多少練習して慣れておけば、紙のノートにペン書きするのに近い感覚で、スライドに手書きすることができます。Microsoft Surface は全機種タッチパネルを搭載しているし、その他のメーカーからも対応 PC が発売されている。

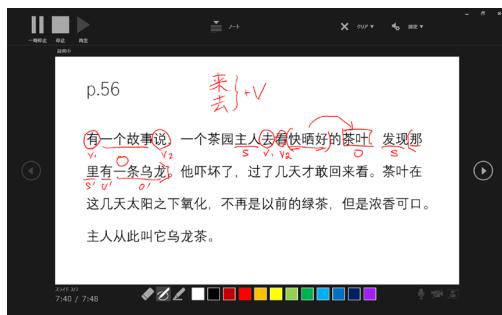
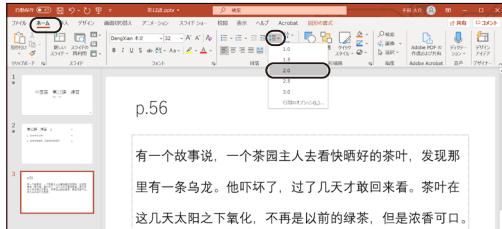
もう1つの方法は、ペンタブレット（ペンタブ）、あるいは液晶ペンタブレット（液タブ）などの、スタイラスペン入力デバイスを使う方法である。これらを使うことで、現有の PC でペン入力ができるようになる。

ペンタブが黒いパッドにペン入力するのに対して、後者はパッドに液晶ディスプレイが組み込まれており、そこに画面を表示させて直接書き込むことができる。どちらも PowerPoint のスライドだけでなく、オンライン会議のホワイトボードへの書き込みなどでも使用できる。

液タブの方が断然使い勝手が良いが、価格はペンタブが 5,000 円以下でも入手できるのに対して、安価なもので 3 万円程度と安くはない。

ペンタブ・液タブは、パソコンでイラストを描く道具として使われることが多く、その分野では国産のワコム社製に定評があるが、授業・プレゼン用途であれば安価な中国製でも機能的にして問題ない。ただし、日本語マニュアルが必ずしも充実していないので、PC があまり得意でないのであれば、日本語で情報が入手しやすいワコム社製を購入した方が確実だろう。

PowerPoint ではスライドショーの録画画面で、ペンツールを使ってスライドに書き込んでいくことになるが、書き込みスペースを確保するために、スライドのテキストの行間を 1.5 ~ 2 行に広げておいた方がよいだろう。



タブレット端末で画面録画アプリを使う方法もある。iPadは標準で画面の録画・録音機能を備えているので（詳細は以下を参照。https://www.ipodwave.com/ipad/howto/screen_recording.html）、KeynoteやGoodNotesなどの手書き入力可能なノートアプリに、教科書のPDFや画像・テキストなどを表示して、書き込みながら解説、それを録音・録画すればよい。この場合も、Apple Pencilなどのスタイラスペンは必須である。

Androidの場合はAndroid 11に画面録画・録音機能が標準搭載されたので、iPadと同様に手書き入力可能なアプリを使って教材動画を作成することができる。Android 10以前を使っている場合は、録画アプリを導入する必要がある。ネット上の評価が比較的高いのは「AZスクリーンレコーダー」である。

こうした方法については、ネット上にマニュアルや紹介記事が幾つか公開されているので、詳細を知りたい人は、検索してみて欲しい。

* Google ドライブによる動画配信

オンデマンド動画の配信には、各大学が契約・提供しているLMSやクラウドサービスを使うの

が一般的であるが、モバイル端末も含めたアクセシビリティの良さから、YouTubeを利用したケースも多いようである。

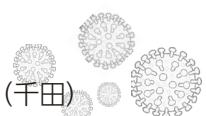
YouTubeの利点は、学生がインターフェイスに慣れていること、高画質の動画をアップしても自動でSD画質など複数ビットレートが用意されて、回線状況に応じて提供されることなどが挙げられる。一方で、毎回、動画をアップロードしてURLを告知する手間がかかる。

オンデマンド動画教材の配信には、YouTubeよりもGoogle ドライブが便利である。Google ドライブに動画をアップロードすると、自動でYouTubeと同じように複数ビットレートへの対応が行われ、動画ファイルをダブルクリックすると、YouTube ライクな画面で動画が再生される。



このとき、ビットレートは360p・720p・1080pが用意される（アップした動画よりも低いビットレートのみが用意される）。YouTubeよりも段階が大まかである。PowerPointの最低画質480pの動画をアップすると、360pにダウンされ相当画質が悪くなってしまうので、Google ドライブで配信するのであれば、720pもしくは1080pで動画を出力した方がよい。

Google ドライブを使う利点は、授業のフォルダを作って学生と共有を設定てしまえば、あとはそのフォルダ、あるいは授業回数ごとのサブ



フォルダに動画をアップロードすれば、学生からもファイルが見えるので、一々動画の URL をアナウンスしなくて良い点にある。

このとき、学生全員が Google アカウント = Gmail アドレスを持っている必要がある。大学が G Suite for education を導入し、学生メールに Gmail を使っている場合は、そのアドレスを使えばよい。

Google ドライブフォルダは、以下の手順で共有する。

- ①共有したいフォルダの上で右クリック、「共有」をクリック①。



- ②「ユーザーやグループを追加」に学生のメールアドレスを貼りつける②。1 行 1 アドレスのリストを、Excel などからコピーして貼りつければよい。



- ③「ユーザーやグループと共有」ダイアログが開く。招待するユーザーの権限を「編集者」から「閲覧者」に変更する③。
- ④ユーザー招待メールにメッセージを入れる場合は入力する④。
- ⑤「送信」をクリックする⑤。

これで、学生に招待メールが配信されるので、招待を承諾するようにアナウンスする。

注意点であるが、稀に Google ドライブ上の



動画再生ができなくなることがある。Google ドライブや Chrome ブラウザにアプリやアドオンを追加した場合などに、こうした症状が発生することがあるので、授業視聴に使うアカウントは、あまり弄らないように注意喚起した方がよかろう。

* 中国からのアクセシビリティ

受講生に中国人留学生がいて、なつかつ新コロナウイルス流行の影響で来日できていないケースでは、中国在住者を対象としてオンライン授業を展開しなくてはならない。このとき、いわゆる Great Firewall——電子の長城の存在が問題となる。

よく知られているように、Google 社の諸サービスは、YouTube も含めて、フィルタリングによって中国国内からのアクセスが制限されている。Twitter・Facebook なども同様である。

Google などのメジャーなサービスの場合はある程度、報道などから状況が分かるが、オンライン授業の実施にあたっては、その他のサービスや Web サイトを使うことが多く、アクセス可能であるかどうかの確認に頭を悩ませた人もいることだろう。

アメリカには、中国のネットワークでのフィルタリング状況をチェックできるサービスがいくつか存在する。以下は、その一例である。

- China Firewall Test (<http://www.chinawalltest.com/>)

確認したい URL を Box に入力して「TEST SITE」をクリックすると、中国の北京・深圳・内モンゴル・黒竜江・雲南の 5箇所におけるフィルタリング状況が表示される。

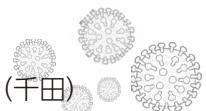
中国のネットワーク接続規制は、地域によって



まちまちであるし、国際的イベントがあると一時的に緩められるなど運用も弾力的であるため、一概に繋がる繋がらないと言い切れない面もある。

このため、上記サイトで OK / BLOCKED だからといって、100% 繋がる / 繋がらないと言い切れないことには注意が必要だが、それでも重要な判断材料となるだろう。

※ 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「初級学習者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」(平成30年度～令和2年度、基盤研究(B)、研究代表者：田邊鉄、課題番号：18H00682)による成果の一部である。



課題・オンライン試験

千田 大介 (ちだ だいすけ)

* ぶつけ本番はダメ

オンライン試験でトラブル発生、という話は、筆者の所属先でも発生したし、他大学の事例も多々、耳にしている。そうした事例の多くは、ぶつけ本番でオンライン試験を実施していたようである。

普段の教室での試験については、教員側にも学生側にも、長年の経験でやり方が染みついているので、双方、問題なく試験に臨むことができる。しかし、オンライン試験のノウハウは、双方ともに蓄積していないため、想定外の事態が発生しやすい。

だから、本番の試験を実施する前に、プレテストを実施して、教員側・学生側、双方が慣れるとともに、問題点の洗い出しを行うことが望ましい。オンライン試験の成否を分けるのは、こうした周到さ、慎重さであると考える。

* 小テストの問題はスライドに

オンライン授業では、普段の出席に代わって小テストやリアクションペーパーを課した人も多かったものとおもわれる。筆者も、語学教材を視聴した確認として、動画中に聞き取り問題を組み込んで、Google フォームで回答させた。

そうした問題を、Google フォームに問題文と選択肢を逐一入力して作成した方も多いと思われるが、省力化という観点からすると、むしろ問題文は授業動画・配布文書などに埋め込んだ方が作りやすい。

例えば、PowerPoint のスライド動画を、図のように作成する。

Google フォームなどの個々の設問には問題文

第12課 小テスト

・問1～4：中国語を聞いて、以下のどの意味か答えなさい

1. 私はあなたに電話する。
2. 私の家は駅から遠い。
3. あなたは今日の午後、時間がありますか？
4. 私は日本で中国語を勉強する。

問1

- 1
- 2
- 3
- 4

問2

- 1
- 2
- 3
- 4

も選択肢も入力しない。

Google フォームや多くの LMS では、問題文や選択肢の言語やフォントを設定できないので、中国語の簡体字の場合「晚」と「晩」、「骨」と「骨」といった細かな字体差が表現できない。PowerPoint やドキュメントに問題・選択肢を掲載することで、そうした問題を回避できるメリットもある。

* Google フォーム

授業での課題や小テストには、LMS を使うのが一般的だろう。しかし、新コロナウイルス流行に伴うオンライン授業では、LMS への負荷が想定を大きく超えたことから、動作の不安定やストレージの容量不足といった問題が頻発した。また、LMS によっては試験の機能が不十分だったり、逆に多機能すぎて使いこなせなかったりという事例も多かったようだ。このため、多くの大学・教員が LMS 以外のサービスを利用したが、とりわけ Google フォームが広く使われたようである。



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

Google フォームは、Google が提供しているオンラインサービスの 1 つで、アンケート・投票そして試験などを簡単にオンラインで実施できる。大学が G Suite と契約している場合はその一部として利用できるし、Gmail アドレスを取得すれば、個人でも無料で使用できる。

以下、Google フォームの Tips を幾つか紹介したい。

◎ ファイル提出

2020 年度のオンライン授業開始時には、筆者の所属大学でも LMS のストレージ容量不足の問題が発生したが、その代替手段の一つとして Google フォームを利用した。

Google フォームでは、設問の種類に「ファイルの提出」が用意されている。ただし、ユーザー（学生）が Google にログインしていないとファイル提出できないので、注意が必要である。



質問の設定で「特定のファイル形式のみ許可」を選択すると、提出可能なファイル形式を限定できる。



アップロードされたファイルは、Google ドライブの、\フォーム名\設問 フォルダに保存される。

筆者の所属先の中国語授業では、PC・スマートなどによるピンイン・中国語入力を、全ての教員が教授することは困難であると判断して、中国語

の課題は紙や教科書に手書きし、画像ファイルを Google フォームを通じて提出させる方法を推奨するとともに、学生向けのマニュアル・ビデオマニュアルを作成・配布した。以下に公開しているので、興味をお持ちの方には参照されたい。

- ① 手書き課題提出マニュアル (pdf) : <https://keio.box.com/s/a4vc554vwntdjb7127yc2a0jb4kyne>
- ② iOS+OfficeLens+GoogleForms.mp4 : <https://keio.box.com/s/6vagm2ahf8zzufvjgh4yergo0et4ashh>
- ③ Android+OfficeLens+GoogleForms.mp4 : <https://keio.box.com/s/vhzm3ocel3y0hm12315f7c2g1i4iznc3>



① ② ③

◎ Google フォームで提出されたファイルのフィードバック

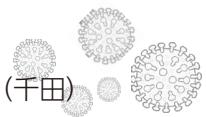
学生が提出した課題を添削して返却したいケースがある。対面の授業であれば、プリントしたものに赤を入れて返却すれば良いのだが、オンライン授業の場合はそうはいかない。

LMS によってはレポートのフィードバック機能を備えているが、Google フォームで提出されたファイルについても、学生への返却が可能である。以下では、提出された Word ファイルを返却する前提で解説する (PDF ファイルや画像ファイルにコメントを入れることもできる)。

◦ フォームの設定

フィードバックする場合は、「✉」をクリックしてフォーム全体の設定で「メールアドレスを収集する」を必ずチェックしておく。ここで収拾されたメールアドレス宛に、添削したファイルの URL を送信することになる。

大学が G Suite と契約しているのであれば、ア



クセスを大学のユーザーのみに限定した上で、メールアドレスを収拾する。

◦ ファイル保存フォルダと回答一覧の確認

設問のフォルダが生成されて、そこに提出されたファイルが蓄積される（下図参照）。

また、ファイルが提出されたら、フォームの「回答」タブをクリックし、「回答をスプレッドシートに表示」ボタンをクリックして回答一覧をGoogleスプレッドシートに書き出しておく。

◦ ファイルを添削する

提出されたWordファイルは、Googleドキュメントで添削するのが便利である。まず、以下の手順で、WordファイルをGoogleドキュメントで開く。

- ①コメントを付けるファイルを右クリック、「アプリで開く」、「Googleドキュメント」をクリックする。
- ②Googleドキュメントでファイルが開く。

コメントは以下の手順で付ける。

①コメントを付ける文字列を、ドラッグして選択する①。

②「コメントを追加」ボタンをクリックする

②。

③コメントを入力する③。

④「コメント」をクリックする④。

コメントは、Googleドライブのビューワーでは上手く表示されないので、Googleドキュメントで開くか、もしくはダウンロードしてWordで閲覧するように、学生に指示する必要がある。

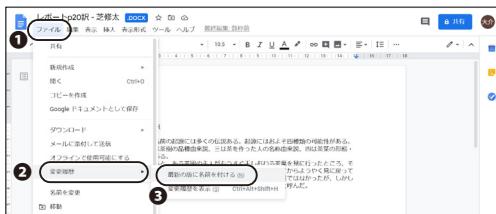
提出されたWord文書にコメントを入れずに、直接添削する場合は、Googleドキュメントで本文をそのまま書き換える。終了したら、以下の手順で、版を保存する。

- ①「ファイル」をクリックする①。
- ②「変更履歴」をクリックする②。
- ③「最新の版に名前を付ける」をクリックす



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

る③。



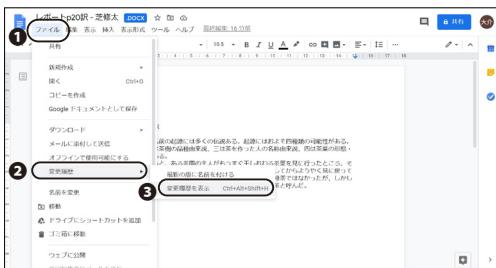
④任意の版の名称を入力する④。

⑤「保存」をクリックする⑤。



なお、学生には、以下の手順で更新履歴を閲覧させる。

- ①「ファイル」をクリックする①。
- ②「変更履歴」をクリックする②。
- ③「変更履歴を表示」をクリックする③。



④変更履歴が表示される。

⑤クリックして、変更履歴表示を終了する④。



○提出された全てのファイルに共有を設定する

次に、添削が完了したファイルの共有を設定する。以下の手順で Google ドライブのフォルダ内の全ファイルに、共有リンクをまとめて設定することができる。

- ①提出されたファイル = 添削済みファイルが保存された Google ドライブのフォルダを

開く。

②全てファイルを選択する（ドラッグして選択する、あるいは Ctrl+A を押す）。

③選択したファイル上で右クリック、「共有」をクリックする①。



④「リンクを取得」をクリックする②。

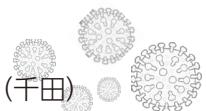


⑤「制限付き▼」をクリックする③。



⑥大学が G Suite と契約している場合は大学名をクリックする④。契約していない場合は、「リンクを知っている全員」をクリックする⑤。





⑦「完了」をクリックする⑥。

◦差し込みメールで学生に通知する

以上のように共有を設定すると、Google フォームの回答一覧スプレッドシートのファイル URL が、そのまま共有ファイルの URL として機能するようになる。

あとは、差し込みメールで、学生にファイルの URL を告知すればよい。

差し込みメールを送信する方法はいくつかある。Google スプレッドシートと Gmail を使う場合は GAS (Google Apps Script) で差し込みメール用のスクリプトを作成して送信する。サンプルとなるスクリプトはネット上に複数公開されているが、以下に一例を掲げる。

- 【Gmail】スプレッドシートを使うだけで同じ文面を一斉送信できる - OTONA LIFE | オトナライフ (<https://otona-life.com/2019/02/14/10250/>)

スクリプトを書くのは少々ハードルが高い、という人は、Word・Outlook などを使う方法もある。Google スプレッドシートを Excel ファイルとしてダウンロードした上で作業すればよい。こちらもネット上に解説ページが幾つもあるので、以下に一例を掲げておく。

- ワードを使ってメールを送る！？入力の手間とミスを減らせて地味に便利 | GetNavi web ゲットナビ (<https://getnavi.jp/business/271327/>)

◎ YouTube 動画による聞き取り試験

語学の試験で Zoom・Webex などを使って聞き取り問題を出題したが、回線状況が悪くて聞き取れない学生がいた、マイクをオフにし忘れた学生がいて上手く聞き取れなかった、というようなトラブルの事例があったと聞いている。

そうしたトラブルへの対策の1つとして、事前に録音したファイルを動画として YouTube にアップしておき、それを試験に埋め込んで視聴させる、

という方法がある。

聞き取り用の動画は、PowerPoint などで作成して、事前に YouTube にアップロードしておく。リンクを知っている人だけが視聴できる限定公開に設定する。

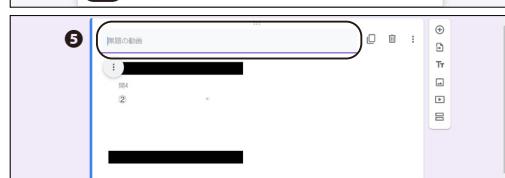
Google フォームに YouTube 動画を追加する手順は以下の通り。

①「動画を追加」ボタンをクリックする①。



②YouTube の URL を指定し②、動画をクリック③、「選択」をクリックする④。

③動画のタイトルを入力する⑤。



動画の再生速度を変更することはできない。また、動画を埋め込んだ場合、学生は何度でも録音を聞き直せるので、時間制限を工夫した方が良かろう。

上図のように、YouTube 動画は設問と同じレベル



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

で表示され、問題には埋め込めない。このため、問題出題順のシャッフルを使うことができないので注意が必要である。

Google フォームには、自動採点、出題順序のシャッフル等の機能もある。それらについては、ネット上に多くのマニュアルが公開されているので、検索・参照されたい。

* Microsoft フォームを使う

Micorosoft フォーム（以下、MS フォーム）は、Google フォームと同様のオンラインアンケートサービスである。文字通り、Microsoft 社が提供するサービスで、マイクソフトアカウント（Windows のセットアップ時に作成を推奨されるもの）を持っていれば、だれでも無償で利用することができる。

MS フォームは、Google フォームに比べて知名度は遙かに劣っているが、ことオンライン試験としての利用に限って言えば、Google フォームよりも多機能で使いやすい面もある。また、執筆時点では、中国からのアクセスチェックで OK が出ているので、中国在住の学生への対応に使うこともできそうである。

以下、その機能について、概略を紹介する。

◎ MS フォームにサインインする

MS フォームには、以下の URL からサインインする。

<https://forms.office.com/>

①「開始する」をクリックする①。



②マイクロソフトアカウントのメールアドレ

ス等を入力②、次へ③をクリックし、パスワードを入力する。アカウントを持っていない場合は「アカウントを作成しましょう」をクリックして登録する④。



③ MS フォームのトップページが表示される。



◎ 試験を作成する

MS フォームで試験を作成する手順は、Google フォームと大差ない。

①左上の「新しいクイズ」をクリックして、フォームを新規作成する①。



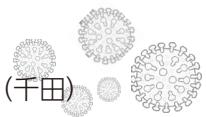
②タイトルを入力する②。

③「新規追加」をクリックする③。



④追加する質問のタイプを選ぶ④。

⑤質問文、選択肢などを入力する⑤。



④

⑤

プレビュー画面は、PC とスマホに対応している。

編集画面に戻るには、「←戻る」をクリックする。
フォームを公開するには、「送信」をクリックして、共有 URL を取得する。

回答結果は「応答」タブを開いて表示する。
Excel ファイルとして保存することができる。

◎ シャッフル機能

MS フォームでは、以下の手順で選択肢を自動シャッフルすることができる。

①選択肢問題の右下の「…」をクリック①。

①

②「オプションをシャッフル」をチェック②。

②

③プレビューすると、選択肢の順序が入れ替わっている。

出題順序をシャッフルすることもできる。

①「送信」ボタン右の「…」をクリック①、「設定」をクリックする②。

① ②

②「質問をシャッフル」をチェックする③。

③氏名・学籍番号などをシャッフル対象外に設定する。「画面をロック」をチェック、



特集1 新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

シャッフル対象外の問題番号範囲を指定する④。



選択肢・質問ともに自動シャッフルできるので、オンライン試験の不正行為対策には役立つだろう。

一方で MS フォームでは、セクションが分かれていると出題順序をシャッフルできないという制限がある（Google フォームはセクション内でシャッフルされる）。複数形式で出題する大きい試験の場合は、設問タイプごとにフォームを分けて、公開・終了時間を調整する、といった工夫が必要になろう。

◎「ランキング」形式の設問

Google フォームなどで並べ替え問題を出題する際には、「3 番目の空欄に当てはまる語を選べ」といった選択肢問題に加工して出題することになり、手間がかかる。

MS フォームには「ランキング」形式が用意されている。これは選択肢に順位を付けるものだが、そのまま、並べ替え形式の出題に応用することができる。このとき、同じ選択肢があると、複数回答が生じてしまうので、例えば

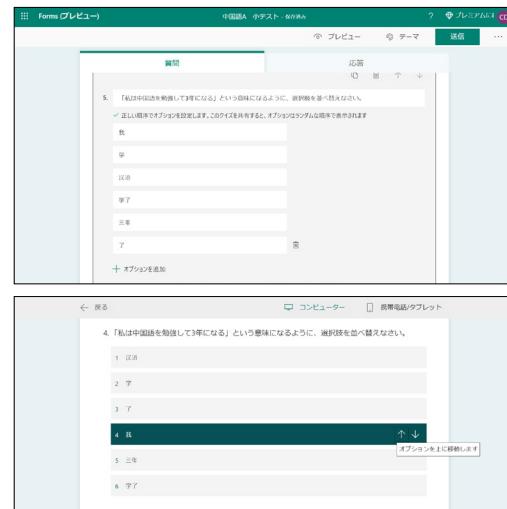
我 / 学 / 汉语 / 学 / 了 / 三年 / 了

ではなく、

我 / 学 / 汉语 / 学 了 / 三年 / 了

とするような工夫が必要になる。

ランキング形式の出題では、語順通りに選択肢を埋めると、出題時に自動でシャッフルされるので、問題が作りやすい。



◎ YouTube 動画の埋め込み

Google フォームの YouTube 動画は、前出のように個々の質問に埋め込むことができないが、MS フォームは各質問に YouTube 動画を埋め込むことができるので、リスニング問題をシャッフル出題することもできる。

①質問の問題文の Box 内でクリック①、Box 右端に表示される「メディアの挿入」アイコンをクリックする②。

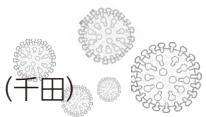


②「ビデオ」をクリックする③。



③YouTube 動画のリンクを入力し④、「追加」をクリックする⑤。

④質問に YouTube 動画が埋め込まれる。



① 右上の「…」をクリック②、「設定」をクリックする。

③ 「開始日」④・「開始時間」⑤を設定する。

⑥ 同様に「終了日」・「終了時間」を設定する。

動画の再生速度も調整できる。

なお、YouTube 動画は中国から再生できないので、注意が必要である。

◎ 開始・終了時刻の設定

Google フォームは、公開開始・終了時刻の設定にデフォルトでは対応していない。機能を追加するアドオンはあるが、制限があるなど、いさか使いづらい面もある。

この点、MS フォームはデフォルトで、公開開始・終了時刻を設定する機能を持っている。

①右上の「…」をクリック②、「設定」をクリックする。

②「開始日」・「終了日」をチェックする③。

③ 「開始日」④・「開始時間」⑤を設定する。

⑥ 同様に「終了日」・「終了時間」を設定する。

③ 「開始日」④・「開始時間」⑤を設定する。
「開始時間」のプルダウンは 15 分刻みだが、
Box をクリックして直接時間を修正・入力
できる⑥。

④ 同様に「終了日」・「終了時間」を設定する。

① 「…」をクリックして設定画面を開じる②。

② 「開始日」③・「終了日」をチェックする④。

③ 「開始時間」④・「終了時間」を設定する⑤。

⑤ 「…」をクリックして設定画面を開じる⑥。

プルダウンは 15 分刻みだが、時刻のボックスを直接編集すると、1 分単位で指定できる。

終了時刻を設定した場合、終了時刻までに「送信」をクリックしないと回答できなくなってしまう。受験時間を制限した試験を課す場合、学生に事前に周知しておく必要があるし、オンライン会議システムを繋いでおき注意喚起しながら受験させる、締め切りを学生にアナウンスした時刻よりも 1・2 分後に設定する、などといった対応が必要になろう。

◎ MS フォームの短所

Google フォームにあって MS フォームにない機能としては、回答者のメールアドレスの収拾や、回答回数の制限がある。アカウント認証によって個人を同定することができないので、Google フォームよりも替え玉受験がやりやすい。

また、ファイルのアップロード機能は、OneDrive for Business の契約が必要になるよう、無償の Microsoft アカウントでは当該質問タイプが選択肢に現れない。それぞれの特性を見極めて使い分けて頂きたい。

なお、マイクロソフトの公式ヘルプとラーニングが、以下に公開されているので、MS フォームを使う際には、閲覧しておくことをお勧めする。

<https://support.microsoft.com/ja-jp/forms>

※ 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「初級習学者を対象としたコンテンツ駆動型中国語学習基盤の構築」（平成 30 年度～令和 2 年度、基盤研究（B）、研究代表者：田邊鉄、課題番号：18H00682）による成果の一部である。

オンライン学会事例報告

日本印度学仏教学会 第71回学術大会

参加者の立場から

師 茂樹（もろ しげき）

* はじめに

2020年7月4～5日、日本印度学仏教学会・第71回学術大会がオンライン開催された。本稿は、一参加者としての参加の記録である。

日本印度学仏教学会は、インド学・仏教学を代表する全国学会であり、会員数は2,000名を超える。毎年開催される学術大会も、人文系のなかでは比較的大規模であり、例年であれば、10部会が設置され、発表者約250人、来場者はその数倍にもなる。スタッフの確保や懇親会の差配なども含めて、学術大会の開催校にはいつもたいへんな負担となっている。

第71回（2020年度）の学術大会の開催校は、創価大学（東京都八王子市）である。前年の第70回大会で創価大学での開催が発表されて以来、学術大会専用のサイト^[1]が開設され、2～3月頃には例年通りの参加申し込み・発表申し込みに加え、ホテルや託児所のオンライン予約などが順調に進んでいた。3月の段階では、筆者も、発表の申し込みやホテルの予約を終えていた。

ちなみに、2019年度の学術大会において、「将来構想委員会」（筆者も委員として参加）の提言が承認され、この第71回学術大会から、開催案内や大会プログラムの印刷・郵送などが廃止され、多くの情報がオンライン化されることになっていた。

その意味では、今回のコロナ禍があろうとなからうと、学会全体としても、大きくオンライン化の方向に舵を切りはじめる年であった^[2]。

ご存知の通り、4月が近くにつれて、多くの大学が入学式を中止するという判断をするようになり、オンライン授業が現実味を増していた。学外者が大学に入構できなくなり、国内外の多くの学術イベントも中止や延期に追い込まれていった。仏教研究で言えば、たとえば8月16～21日に韓国・ソウルで開催予定であった国際仏教学会（IABS）は2021年に延期となり、国内では10月10～11日に開催予定の日本仏教学会第90回大会も翌年に延期、10月31日に開催予定であった仏教史学会の学術大会は中止となっている。

日本印度学仏教学会の学術大会の開催は、前述の通りオンライン開催となった。4月以降、学会がどのような対応をとったかについては、以下のページで詳細な情報・資料が公開されており有益であるので、参照されたい。

- 「第71回日本印度学仏教学会学術大会（オンライン）」（<https://sites.google.com/view/jaibs71/>、以下「大会レポート」とする）

筆者は、発表者として、また大会運営をサポートする「部会ホスト」（後述）として参加したので、



その視点から、この大会をふりかえりたいと思う^[3]。事実誤認等もあるかもしれないが、ご容赦いただければ幸いである。

＊ 大会前

◎ 部会ホストを引き受けるまで

4月22日、学術大会実行委員会（創価大学）より、学術大会での発表内定者宛に、1通のメールが届いた。2020年度の学術大会については、①オンライン会議システム（Zoomなど）を用いたライブ発表もしくは②発表原稿をオンラインに公開する形でのオンデマンド発表を検討しているが、そのような形態での研究発表の可否についてアンケートを取りたい、というものであった。筆者は、その時点では未経験ではあったが、①での研究発表を選択した。最終的に、発表辞退が14名、②での発表が16名、残る218名が①での発表だったようである（「大会レポート」）。つまり、ほとんどの発表者が①を選択したことになる。

その後、理事会での正式決定を経て（私は理事ではないので、そのあたりの消息はわからない）、5月19日、暫定プログラムが公開され、学術大会のオンライン開催が告知された。

翌日、学会より「部会ホスト」担当についての打診があった。「部会ホスト」とおよび「部会ホスト補助」とは、今回のオンライン学術大会のために設置されたものである。通常の学術大会であれば、発表者・聴衆以外に、司会・タイムキーパー・会場での資料配布係などにおいて、各部会が運営される（他の学会も同様であろう）。今回、オンライン会議システムを用いるにあたって、

- 司会（通常の学会同様、口頭での司会を担当）
- 部会ホスト（発表者・司会者・質疑応答での質問者などの権限を切り替えるなど、技術的な操作全般を担当）
- 部会ホスト補助（部会ホストを補助するとともに、タイムキーパーなども行う）

という体制をとることになっていた。

これは、部会やプログラムの構成、時間割、司会進行などをほとんど変えず、いつもの学術大会をオンライン上で再現する、という考え方である。一つの会場に参加者全員が集まって、数人が順番に発表する、というような規模であれば、オンラインで行おうが、オフラインで行おうが、それほど大きな変化はないだろう。しかし、部会が複数あり、発表者が何十人、何百人といいうような比較的大規模な学会の学術大会をオンラインで開催する場合には、従来の（オンラインではない）実施方法をオンライン上で再現するか、オンラインでやりやすいように大会のプログラムや構成自体を変えてしまうか、という選択肢がある。たとえば日本宗教学会の場合、2019年度大会では13部会に分かれて個人発表とパネルが配置されていたが、Zoomを使ったオンライン開催となった2020年度は8グループに再編され、会員総会などもなくなってしまった。どのような形態で開催するかは、開催方法について決断をしなければならない時期の社会状況や、その時点で得られる情報、主催者の持つ人的・技術的リソース、参加者に期待されるICTスキルなど、非常に多様な要因に左右されることであるので、どの方法がより適切か、といった一般論として議論されるべき問題ではない。日本印度学仏教学会は、4月の時点で、上記のような開催方法を選択した（そして、それがかなりうまくいった）、ということである。

ともあれ、この時点ですでに、具体的な手順が書かれたマニュアル（「大会レポート」で公開されている）と、それに基づいて実際にZoomを使った研究発表のシミュレーション動画が提供されており、「部会ホスト」なる初めて聞く役割がどのようなものか、具体的にイメージすることができた。そこで提示されていた役割については、特段、難しいと思われるものではなく、ネットワークトラブルやマシントラブルさえなければ十分にこなせるものであると判断したため、引き受けることにした。



◎ 大会に向けた練習

7月の学術大会開催に向けて、発表者・部会ホスト・部会ホスト補助に対する講習会・練習会が開催された。また、部会ホスト・部会ホスト補助に対しては、通信回線の安定のために主催者負担によるレンタル Wi-Fi ルータの貸し出しも案内された（筆者は大学から参加することにしたので、Wi-Fi ルータは借りなかった）。

講習会・練習会は、以下の日程で複数回開催された。

- 6月 13 日：部会ホスト向け講習会・発表者向け発表講習会
- 6月 20 日：部会ホスト向け講習会・発表者向け発表講習会
- 6月 27 日：部会ホスト立ち上げ練習会
- 6月 28 日：部会ホスト立ち上げ練習会

筆者も実際に参加し、予行演習をすることができた。本番への不安を大きくやわらげることができたと思う。

これらの講習会のなかで明らかになった不具合や、参加者から出た疑問点などをふまえて、マニュアルが随時改定され、メーリングリストなどを通じて部会ホストなどに提供された。

＊ 大会当日

こういった準備期間を経て、いよいよ学術大会当日を迎えた。

日本印度学仏教学会の学術大会は、毎年以下のようなスケジュールで行われる。

- 1 日目午前：個人研究発表（10 部会）
- 1 日目午後：個人研究発表（10 部会）・会員総会・懇親会
- 2 日目午前：個人研究発表（10 部会）
- 2 日目午後：パネル発表（4 パネル）

先にも述べたように、2020 年度の学術大会は、

オンラインであってもこの構成を崩さず実施された。

通常と大きく異なる点は、参加申込み方法である。Zoom を使ったオンライン開催となったことから事前申し込み制となり、通常の学術大会では可能であった当日参加申し込みができなくなってしまった。そのため、申し込みを忘れて大会に参加できなかった者がいたようである（筆者の知人にも数名いた）。発表者も含めた参加者は 448 名とのことである（「大会レポート」）。

参加申し込みに関連して指摘しておきたいのは、参加費の支払い方法である。大会参加費の支払い方法が郵便振替である学会・研究会は少なくないと思うが、これはオンライン開催の利便性を低下させる原因になってはいないだろうか。クレジットカードなどによるオンライン決済を導入し、決裁と同時にオンライン参加のための情報が配信される仕組みを構築すれば、大会直前あるいは大会途中でも参加を受け付けることができる。さらに言えば、郵便振替文化は、国外の会員の参加を阻害している面もあるのではないかと思われる。

◎ 部会ホストを担当（7月 4 日）

1 日目午前は、第 4 部会の部会ホストの担当である。午前の部は 9 時に開始であるが、部会開始 30 分前に部会ホストが部会用の Zoom ミーティングを開始していかなければならないため、8 時ごろに大学に出勤をして、マイクのセッティングなど諸々の準備を行った（すでにオンライン授業で慣れていた）。念のため、Zoom のホストを担当する PC は再起動しておき、最小限のソフトウェア以外は立ち上げないようにしておいた。また、バックアップ用に別 PC を用意しておき、部会ホストとは別アカウントでミーティングに参加しておいた^[4]。

8 時 30 分に部会を立ち上げたが、部会ホスト補助とのやりとりのなかで、筆者の声が参加者に聞こえない、というトラブルが発生した。普段、そのようなことは起きず、不具合の原因は不明であったが、一度 Zoom のクライアントを終了させて、再起動することで、不具合は直った（その間、ホスト権限は、別アカウントに移行していた）。



部会ホストの仕事は、それほど難しいものではない。要するに、基本的には参加者全員を強制的にミュートに（発言できないように）しておき、発言すべき人に発言できる権限を与える、ということである。実際に行ったのは以下のようなことである。

- 参加者全員をミュートする。
- 部会ホスト補助を共同ホストにする。
- 司会者を共同ホストにする（司会が終わったら、共同ホストから外す）。
- 発表者を共同ホストにする（発表が終わったら、共同ホストから外す）。
- 質疑応答においては、質問したい人が「手を挙げる」機能などを使って意思表示をする。その中から司会者が指名した人のミュートを解除する（終わったらミュートにする）。
- トラブルがあった場合は、学会本部に携帯電話等で連絡する。

作業自体はそれほど難しいものではないが、部会を立ち上げる8時30分から、午前の部が終了する12時20分まで、約4時間ぶっ続けでホストを行うのは、心身ともに疲労が大きかった（途中で休憩があればよかったのかもしれない）。ともあれ、大会前の準備が入念に行われていたこともあってか、大きなトラブルもなく、自分の担当を終えることができた。

なお、学術大会中は、全10部会をモニタリングしていたとのことである。「大会レポート」にその様子が写真入りで紹介されているので、参照されたい。

◎一参加者として

午後の部（13:20～16:40）以降は、部会ホスト等の担当がないので、一般の参加者と同じように研究発表を聞いていた。部会の移動は、事前に配布された一覧表にしたがってZoomのミーティングルームを切り替えるだけなので、階段を登ったり降りたりしなければならないオフラインの大会よ

りは楽だったかもしれない（方向音痴なので、いつも会場で迷うのだが、そのようなこともオンラインではなかった）。また、発表者の配布資料は、通常であれば印刷されたものが配布されるが、今回はオンラインストレージ上にPDFが置かれ、それを参加者が各自ダウンロードするという形になっていた。この形態であれば、印刷部数が足りなくて資料がない、といった問題もなく、またコピーの束がかかるということもないため、個人的には非常に快適である。研究発表の面だけで言えば、オンライン開催は十分に従来のオフラインでの学術大会を代替し得るし、場合によってはそれよりも快適とさえ言えると思う（開催校や学会本部の入念な準備があったからこそ、そのように感じることができたのだと思うが）。

ただし、もともと筆者は、学術大会に参加しても書店ブースをうろついたり、控室で久しぶりにあった友人・知人との情報交換などに時間を使ったりすることが多い。大学院生などの若い研究者にとっては、研究発表以外の場は人脈を作る貴重な機会でもある。そのあたりをオンライン開催に求めるのは、現時点ではないものねだりなのである。

2020年は特殊な年であり、オンライン開催も緊急避難的なものであって、いずれ従来どおりの学術大会が戻ってくるだろうから、この件についてはあまり心配しなくてもよい……という考え方もあるかもしれない。しかし、今回のコロナ禍を経て、研究・教育が強制的にオンライン化されたことによって、オンラインにはオンラインの良さがある、ということに（怪我の功名的ではあるが）気づかされたのも間違いない。特に地方や海外の研究者にとっては、出張をしなくてもよいというメリットは小さくない。また、研究発表の前に、発表レジュメ等をオンラインで共有することは以前から行われてきたが、発表動画を事前に共有して大会当日はディスカッションに時間を使う、ということも他学会には見られる（反転授業の学会版）。そのようなメリットを考えると、コロナ禍が去ったからといって、オンライン学術大会が完全になくなってしまうとも考えにくい。今後は、オンライン



イン／オンラインのメリット・デメリットを考えながら、よりよい学術大会のあり方を模索していく必要があるのだろう。

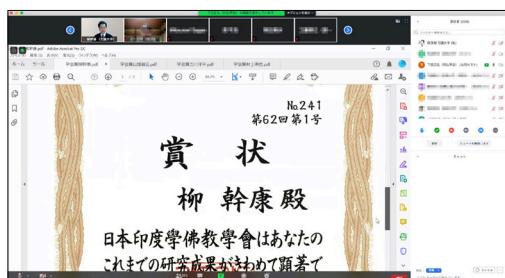
◎ オンライン全体会議（7月4日）

さて、1日目の17～18時は「オンライン全体会議」ということで、以下の行事が行われ、200人ほどが参加した。

- 理事長挨拶
- 大会実行委員会委員長挨拶
- 次年度開催校代表挨拶
- 学会賞発表
- オンライン懇親会

通常の学術大会であれば、会員総会と懇親会が開催されるところであるが、議決を伴う会計報告などはなく、総会のなかで行われてきた挨拶や学会賞の表彰だけが行われた形となる。

学会賞の発表では、下図のように実際に賞状が画面共有され、理事長によって読み上げられた。その後、受賞者によるスピーチもあった（いつもの学術大会ではスピーチは行わない）。



学会賞の発表



オンライン懇親会

オンライン懇親会では、それぞれが飲み物を持って、代表者による音頭のもと、乾杯がなされた。オンライン会議システムでは、誰かがしゃべってしまうと他の人がしゃべれなくなるため、通常の懇親会のように小グループがたくさんてきて、それだけで話が盛り上がる、といったことをできないのは物足りないが、一体感が得られ、金銭的負担もなく、すぐに抜け出しやすいのはメリットかもしれない。

◎ 自分の研究発表（7月5日）

2日目の午前の部には筆者自身の研究発表があった（第5部会・「九州国立博物館蔵写本・文軌『因明入正理論疏』卷一について」）。通常の学術大会では、PowerPointなどのスライドを用いる発表者が少なかったため、その分セッティングに時間をとられることがあるので、筆者も印刷した配布資料だけで発表することが多かった。しかし、Zoom上での発表であれば画面共有をするだけでよいので、スライドを用いた発表をすることにした。

個人的な観測範囲に限られるが、例年よりスライドを用いて発表する人が多く、またスライドを使わない場合も、配布資料を画面共有しながら発表する人が多かったように思われる。

発表後に投稿される論文とほぼ同内容の配布資料が、WordやPDFで画面共有され（しかも多くの場合、編集用のメニューが表示されたままなので、共有画面の3分の1程度は配布資料と関係がない）、それを発表者がそのまま読み上げるだけ、という発表の仕方については、改善の余地があろう。今後はオンライン研究発表にふさわしいプレゼン・スキルが開発され、研究者にも求められてくるのだと思われる。

発表・質疑応答ともにスムーズにすることができた。他の部会に参加した人の話を聞いても、大きなトラブルはほとんどなかったようである。

＊ おわりに

以上、あくまで参加者の視点で、簡単に報告を試みた。細かいことを言えばきりがないのであろ

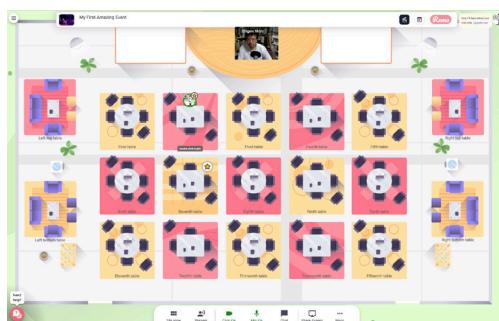


うが、全体的に言えば「大成功」と言っても過言ではないように思う。短期間の準備でここまで成功した背景には様々な要因があろうが、開催校・学会本部の高い技術力と、入念な準備によるところが大きいのではないかと思う（大会の準備においては、深夜でもメールが飛び交ったと聞く）。主催者、部会ホスト・部会ホスト補助の担当者をはじめ、大会開催を支えた多くの人々に感謝申し上げたい。

一方で今回、比較的大規模なオンライン学術大会を体験したことによって、対面ではなくオンラインであることの限界と新たな可能性の両方について考えるきっかけとなった。

まず「限界」について言えば、前述した通り、一箇所に人が集まることのメリットである研究者どうしの交流が、現状ではほとんどできない、という点があげられる。ただ、現時点で普及しているツールでは難しい、というだけあって、Remo (<https://remo.co/>) のようなツールが普及すれば、交流がよりしやすくなるかもしれない。Remo は、オンライン会議システムの一種であり、Zoom のブレイクアウトルームのように参加者が小グループに分かれて話すことができるが、小グループが「同じテーブルを囲む人たち」として可視化されており、参加者はグループ（テーブル）間を自由に移動できるようになっている点に特徴がある（下図）。このツールを導入すべきだ、ということではないが、こういった技術の進歩によってオンライン学術大会の「限界」は徐々に解消されていくのではないかと思われる。

また「新たな可能性」という点で言えば、まず



Remo

思いつくのは国際交流の活性化である。日本印度学仏教学会は、過去に一度、外国で開催したことがある（2002年7月、韓・日共同印度学仏教学術大会／日本印度学仏教学会・第53回学術大会）。ヨーロッパやアメリカでは時差の問題もあるが、東アジアや東南アジアあたりであれば、時差の問題はほとんどない。もちろん、実際の交流においては、上の「限界」で述べた問題が常につきまとだが、国際交流の場合、研究発表を相互に聞くだけでも大きな成果が得られるであろう。

また、オンラインにふさわしい研究発表のスタイルはどのようなものか、と考えた時、「発表者が話すのを聴衆が一定時間だまって聞き、その後質疑応答を行う」という方法が最適解だとは思えない。チャットなどで流れてくるコメントを随時拾いながら話すスタイル^[5]や、先述したような反転授業型の発表スタイルなど、新たな発表スタイルを模索してもよいのではないだろうか。

今回、オンライン開催された日本印度学仏教学会の学術大会の最大の成果は、参加したインド学者・仏教学者の意識を大きく変えたことかもしれない。オンラインでも学術大会はできるし、使い方によってはメリットも多い。そのような種をもいたというだけでも、今回の学術大会は「新たな可能性」を切り開いたのではないだろうか。

注

- [1] <https://office10367.wixsite.com/jaibs71conference>
- [2] 提言の中には、会議のたびに東京出張をしなければならない地方の理事等のために、オンライン会議システムを導入すべし、という提案もあった。この提言がなされた2019年の時点では、オンライン会議システムについての情報はあまり共有されていなかったが、奇しくもコロナ禍によって一挙に実現してしまった。
- [3] この学術大会に関するTwitterでのつぶやきを収集して、Together上にまとめている。「日本印度学仏教学会 第71回学術大会 - Together」(<https://together.com/li/1554103>) 参照。
- [4] 「大会レポート」にあるように、「部会ホストには開催実行委員会が契約したホスト権限を割り当てたが、実

験段階で、すでに勤務校などでZoomのアカウントを有している場合に既存のアカウントとバッティングして不具合が生じることがあった。筆者は、勤務先が契約しているアカウントを持っていたが、それとは別に、この部会ホスト用のアカウントを用意して対応した。

[5] 筆者は大学での講義科目で、そのような方法を用いたことがある。拙稿「『情報と社会』におけるつぶやき授業——ICTで社会とつなぐ」(花園大学アクティビティーニング研究会編『私が変われば世界が変わる—学生とともに創るアクティブ・ラーニング』ナカニシヤ出版、2015年) 参照。

中国語教育学会の事例報告

氷野 善寛 (ひの よしひろ)

＊ 経緯

2020年4月上旬、中国語教育学会第18回全国大会（2020年6月6日・7日）は新型コロナウィルス感染拡大の影響を受けて、当初予定されていた大東文化大学での開催は中止とし、その大会の内容を一部引き継ぐ形で、オンライン形式で実施することが決まった。当時、不特定多数の参加者が集まるイベントが相次いで中止になっていることや、今後しばらくは会場の貸し出しも難しくなるだろうということから中止となったが、3月の段階で決定していた発表予定者が長い時間をかけて準備してきた研究成果を発表できなくなることは避けたいという思いからオンライン大会での実施に踏み切ることになり、開催まで2か月を切った2020年4月10日にオンライン大会開催のための大会準備委員会が設置された。この報告ではオンライン大会の事前準備から当日の運営を中心に、このオンラインで開催された大会について紹介したい。なお本大会は初日に理事会、模擬授業、会員総会、談話会が、2日目に分科会とアフターセッションが開催され、16本の研究発表が行われ、計308名の参加申し込みがあり、書店や出版社を中心に11社が参加した。

＊ 発表の成立条件

オンライン大会の実施に際しては、「対面形式の発表>オンライン形式での発表」という構図にならないように注意し、会場がオンラインという「場」になることで発表者にとって不利にならないようにするために、大会の運営に際して様々なルールを決めていった。

発表は発表内容を参加者が聞き、その上で繰り

出される質疑に答えることで成立する。そこで対面形式の発表と同じ長さの発表時間と質疑応答時間を持たせた上で、対面での発表よりも質疑応答を円滑にできるように留意するとともに、当日通信エラーなどで発表自体ができなくなることも想定し、発表の成立条件を決めていった。オンライン形式の大会では、個人の機器トラブルだけではなく、使用するサービスの障害などにより発表者の責任に帰することができないトラブルも想定できるため、以下のような取り決めを行った。

①大会当日にZoom側の不具合によりオンライン会議そのものが開催できなかった場合。発表者の責任ではないので、下記の方法で発表成立と見なす。

- (1) PowerPointのファイル、及び20分間の発表動画の提出。
- (2) (1)を一定期間、パスワード付きページで公開。
- (3) 参加登録者に(2)を案内し、メールによる質問を大会委員会で一定期間受け付ける。
- (4) 発表者は(3)にメールで返答し、大会委員会が質問者に転送する。

②大会当日に発表者側の通信環境などの理由で、当該発表者のみがオンライン会議に出席できなかった場合。

- (1) 事前にPowerPointファイル、または20分間の発表動画の提出があれば、それをZoom運営担当が表示、上映する。
- (2) その場でZoomのチャットで質問を受け付ける。
- (3) 大会委員会が発表者に(2)をメールで送る。



新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

(4) 発表者は(3)にメールで返答し、大会委員会が質問者に転送する。

※(1)の提出がない場合は、発表辞退と見なす。

※(1)の提出は義務ではないが、事前に発表者に呼びかける。

幸い本大会ではトラブルが発生することもなく全員発表することができた。後日実施した参加者向けアンケートでは「通常の対面形式の発表よりも集中して発表が聞けた」、「スライドが見やすかった」、「質疑応答に問題を感じなかった」といった意見が多く寄せられ、当日時間の関係で答えられなかつた質問についても大会準備委員会が発表者と質問者の間に入ることでやり取りを可能にすることで、対面での発表に勝るとも劣らない質を確保することができたと考えている。

◎ 利用したツール

本大会では発表用のツールとしてZoomを採用した。数多くあるサービスからZoomを選んだのは、ミーティングIDとパスワードがあれば、参加者がユーザー登録やログインせず特別な設定もなしで利用できる点を評価した。

また大会準備委員会の中のやり取りはSlackというメッセージプラットフォームを使って作業内容ごとにチャンネルを作ってやり取りをしていた。

＊ 大会の流れ

オンライン大会の準備から当日までの流れを発表者、司会者、参加者、団体会員への対応に分けて順番に確認していきたい。

◎ オンライン大会開催に向けて

全国大会に先立ち、オンライン大会の運営で起りうる問題を把握するため、テストを兼ねてオンライン形式の研究会を実施することになった。それが4月23日に実施した「中国語教育学会2020年度第一回研究会（東日本・西日本合同主催）緊急企画 「中国語の遠隔授業をデザインする」」

である。この企画ではコロナ下のオンライン授業をどう設計するか考えてみようということで企画したものであるが、小規模に実施するつもりが、参加申し込み開始後1日で上限を超える申し込みがあり、結局200人規模での開催となった。この事前テストによりZoomの設定、ホストの役割、発表者として注意しなければいけないこと、参加受付から参加者へのミーティングIDの通知方法などを確認することができた。実際この研究会では、Zoomの設定で注釈モードがオンになっていたことで発表スライドへの書き込みがあつたりなどいくつかのミスをしてしまったが、そのミスが大会本番では大いに教訓となり円滑に大会を運営することができた。

◎ 対発表者

大会準備委員会は大会発表予定者に対して、オンライン大会でも発表する意思があるかどうかの確認を行った。仮に参加希望者が半数以下だった場合は大会自体の中止を決めていたが、大会準備委員として裏方に参加いただいた1名を除いて、全員が参加する意思を示したため、正式に大会を開催することになった。その後発表者には予稿原稿と当日使用するスライドの提出を求めた。さらに現在とは異なりZoomの操作に皆が必ずしも慣れているとは言えない時期であったこともあり、大会数週間前に発表者全員に対して事前テストを実施した。

◎ 対司会者

司会者を担当される先生方にも発表者と同様に事前に集まつていただき接続テスト実施した。そこで発表時間が20分、質疑応答等が10分であるなど、分科会の運用ルールについて周知し、Zoom運営担当者と司会の役割を明確にした。その際取り決めたルールは以下の通りである。

(1)	Zoom運営担当者	分科会に入った時点で全員のマイクをミュートにする。 Zoom運営担当者より発表者と司会者以外はマイクミュート、カメラOFFにするように指示。
-----	-----------	---



(2)	Zoom 運営担当者	発表者を共同ホストにする（画面共有のため）。 発表者のマイクミュートを解除。 司会者を共同ホストにする。 司会者のマイクミュートを解除。
(3)	司会者	発表者の紹介。
(4)	司会者	(a) 質問は以後隨時チャットに書くように指示。 (b) 必ず全員宛（皆様宛）で書くことを指示。
(5)	発表者	画面共有で発表、カメラを ON にするかどうかは発表者判断で。
(6)	Zoom 運営担当者	20 分になった時点で、マイク ON で「20 分です」と伝える
(7)	司会者	司会者がチャットから質問を選んで、発表者に尋ねる。司会者は質問の冒頭で質問者の氏名と所属を紹介する。
(8)	Zoom 運営担当者	30 分になった時点で、マイク ON で「30 分です」と伝える。

◎ 対参加者

Zoom のミーティング ID を配布する関係で大会への参加は「事前登録制」にし、会員には郵送とメーリングリストで通知し、さらにウェブページや SNS を通じて周知を行った。

参加申し込みには「Google フォーム」を利用した。現在であれば「こくちーずプロ」などのサービスもオンライン大会の申し込み受付で利用することができるよう規約が変更されているが、当時はオンライン大会の参加申し込みに使えるサービスが少なく、自由に質問事項を決めることができる Google フォームを利用した。さらに Zoom の参加者人数に上限があるため回答期限や回答数を設定することができる「FormLimiter」というアドオンを使った。

参加申し込みの際には、氏名、メールアドレス、会員か非会員か、所属機関や教員か学生などを入力してもらった。メールアドレス以外の情報を収集したのは、無料で不特定多数の人に参加の機会を提供するにあたって「荒らし」や「スパム」を防止するためである。

さらに上記の情報を登録するだけではなく、以

下の 4 点について同意することで参加申し込みを行うことができるようとした。

- ①誰でも見られる場所（ブログ、Twitter など）にミーティング ID とパスワードを書き込まない
- ②Zoom 会議室に入室する時には、本名@所属先を名乗る。
- ③Zoom の接続環境は自分で準備する。
- ④ヘッドセットまたはイヤフォンを用意して参加する。

①と②については荒らし対策、③は大会準備委員会のリソースでは全ての質問に返答する時間がないため、④はより良い音質で聞いてもらうための配慮と、質疑応答を音声オンで実施した際に外部の雑音が入るのを防ぐことを目的としている。またメールを収集しているのは Zoom のミーティング ID を参加申込者に直接送付するためである。

ここで収集したアドレスに対して、大会準備委員会のアドレスから、大会数日前にミーティング ID やパスワードを記した特設ページのアドレスを配布した。この際困ったのは、登録されたアドレスの入力ミスや、何らかの理由でエラーが生じて届かないケースである。こういった問題が少なからずあり、相手不明で十数件戻ってきた。しかし申し込みをした本人からメールが来なければ不安になるので、こういったアドレスについては以下の点について確認して再度送りなおした。

- ①全角と半角の混在していないか
- ②ピリオドが抜けていたり、カンマになっていたりしないか
- ③アルファベットや数字に間違いないか

多くのメールはこれらのチェックで届けることができたが、それでも届けることができなかつたメールが数件あったのと、届いていてもスパムメールとして処理されている可能性があるので、学会のウェブページに〇月〇日に事前登録者にはミーティング ID に関するメールを発信したとい

う情報を掲載した。実際このメールを見た事前登録者から、届いていないという問い合わせがあつた。

事前登録締め切り後に、追加で申し込みができるないかという依頼が何件もあったが、これについては一律お断りをさせていただいた。理由としては、申込の期間が十分に設けられていたこと、会員向けに繰り返し案内していることと、仮にこれらの申し出に対応すると、追加の申し込みがあるたびにメールを送付しなくてはいけなくなり、大会準備委員会の限られたリソースの中で対応するのが出来ないと判断したためである。

問い合わせをする立場からすると私一人ぐらいかまわないのでないかと思われるかもしれないが、校務や授業の間のわずかな時間を見つけて、大会の開催準備をしているということを想像して欲しい。学会はあくまで研究者による相互扶助会のようなもので、一方が一方にサービスを提供するものではなく、誰しもが運営する側にまわる可能性があることもぜひ今一度確認して欲しい。

◎ 対団体

研究者だけではなく団体も学会を構成するメンバーである。そのためオンライン大会であったとしても何らかの形でかかわってもらうことができないかということで「団体企画」を企画した。通常の大会であれば書店や出版社に出店や出展を依頼するが、今回は同じような形式ではできないので、オンラインでできることということでの3つの方式で参加を検討していただくことができないか打診し、事前の説明会をオンライン形式で1回実施した。

- ①各社教材を使った模擬授業
- ②Zoom 即売会、相談会
- ③全国大会特設ページへの情報掲載

①については教科書名を出すのは良いが積極的な宣伝活動を控えるという条件で募集をかけたものの、東方書店から申し込みがあり、審査の上、関根謙先生（慶應義塾大学名誉教授）によるオンライン

模擬授業が実施された。

②についてはZoomのアカウントとミーティングIDは各社で準備していただき

1日目／13:00-18:00

2日目／09:30-16:30

の枠を設定し、各社がそれぞれ設定する時間に実施された。

書籍の即売会ではバーチャル背景に書籍の写真を並べたり、本を並べた様子をTwitterに投稿したり、リアルに書籍を机の上に並べている団体があり各社の工夫がみられて個人的には面白かった。

また即売会だけではなく、出版企画の相談や教科書採用の相談などもされている団体もあり、各社の工夫が大きいにみられたところであった。

③については、リアルタイムで対応をしない団体を中心に学会の数日前から6月末までの期限を設けて、PDF(1団体A4/5枚まで)やリンクを掲載した。

* 大会特設ページ

大会用に設置した特設ページには、大会期間中に使用する複数のミーティングID、予稿集、座談会資料、団体企画を掲載し、6月30日まで掲載した。大会当日はデジタルリソース委員会がリアルタイムで情報の更新や発信を行っていた。

* 大会開催費用について

今大会は、会員へ郵送したプログラムの印刷費と郵送費用、それに加えてオンライン開催に利用したZoomの費用以外かかっていない。Zoomは無料でも利用できるが、無料版では時間制限(40分)と人数制限(100人)があるため、当日ミーティングを主宰するホストとバックアップ用のホストのアカウントを大会期間中のみプロアカウントに変更し、さらに500人まで参加できるオプションをつけた(現在は料金体系が当時と異なる)。

通常の大会で支出の多くを占める会場費、印刷費や人件費などが必要でないことから、会員・非



会員問わず、参加費を無料で実施することができた。非会員に対しても無料で開放したのは、どこからでも参加できるオンライン大会の機会にぜひ一度本学会を覗いてもらいたかったからもある。

＊ 大会当日の運営

大会当日は大会準備委員が各ミーティングルームに分かれて待機し、参加者へのアナウンスや注意喚起、時間のコントロールなどを積極的に行つた。結果として当日までの入念準備も合わせて、大会 자체は特に大きな問題も発生することなく無事終了した。

最後に本大会で Zoom のデフォルトの設定から変更して運用した点について下記にまとめておく。

◎ Zoom の設定

Zoom はウェブページからログインすると細やかな調整をすることができる。

そこで大会での利用に際して、以下の設定をデフォルトから変更している。

①ワンクリックで参加できるように、招待リンクにパスコードを埋め込む OFF
この機能をオンになるとワンクリックでミーティングに参加できるため非常に便利ではあるが、簡単に参加できるということは主催者が意図しない参加を招くこともあるためオフにした。

②参加者ビデオ OFF
データダイエットのため、参加者はビデオオフでの参加を求めた。

③ホストの前の参加 ON
ホスト = (大会準備委員会のメンバー) が通信エラーで不在になった場合でもミーティングルームが閉じないようにするために。

④参加者をエントリ後にミュートする OFF

⑤プライベートチャット OFF

⑥共同ホスト ON

画面共有 ON 共有できるのは「ホスト」のみ

ここをオンにすることでホストと共同ホストのみ画面を共有することができる。発表者は発表前に「共同ホスト」にすることで発表時に画面共有をすることができるようとした。

⑦注釈 OFF

この機能がオンになっていると、発表中に参加者がスライドに書き込みを行うことができるのオフにしておく必要がある。

⑧遠隔操作 OFF

⑨プレイクアウトルーム ON

＊ オンライン大会で困った点

◎「名無し」の扱い

参加者には「お名前@所属」という「名札」をつけて ZOOM のミーティングルームに入ってくださいと繰り返し案内をした。これは荒らしを防ぐ目的と、参加者の上限を超てしまわないようすることを目的としている。しかし実際には繰り返しお願いをしても名前の変更をしてくれない参加者や、そもそも意図的に名乗らないで入ってきていると思われる参加者がいた。途中から悪質な事例については個人宛にメッセージを送ったり、待機室送りにしたりしたが、それでも繰り返す参加者はいた。

＊ 感想と評価

大会終了後のアンケートで良かった点として一番多く挙げられたのは、場所や時間に縛られることなく参加できたことである。物理的な移動が発生しないので、交通費や移動時間の節約になるだけでなく、子育てや介護などで普段参加できない研究者にとっても参加への敷居は低くなつたようである。当然家事をしながらでも、たとえ体調が悪くても参加することができる。また普段の大会では分科会が複数ある場合、同時に 1 つの分科会しか見ることができないが、オンライン大会では、複数の端末を準備すれば、同時に複数の分科



新型コロナウィルスの流行と 中国学の教育・研究

会にも参加することもできる。私自身、ホストとして分科会の1つを運営していたが、全体の状況をモニタリングするために、複数の分科会に参加し、左耳と右耳に別々のイヤフォンをつけて2つの発表を聞いていた。次に多く挙げられていたのが、教室での発表よりも集中していくことができたという点である。これは発表者が画面共有でスライドを提示して発表をしているため、スライドが参加者の目の前にあるディスプレイに表示されていること、発表者の声以外に雑音がないことによる。

悪かった点としては、休憩時間などに参加者同

士で会話ができないことや、参加者の表情が見えないことや、発表後に情報交換ができないことなど参加者間の交流に関するものが多くかった。また発表の音声が一部途切れたり、タイムラグが生じて聞きづらい部分があるなど通信状況に関する問題や、質疑応答のところで一部うまくコミュニケーションが取れていないところなどが多く指摘されていた。

今後研究会の運営がどうなるかまだ正直分からないが、この内容がオンラインでの開催を考えている研究会や学会の参考になればと願う。



特集 2

デジタル時代の 中国学リファレンス ③

本特集も3回目になるが、これまでに引きつづき、情報化時代の中国学の調査方法について解説する。今号では、現代中国語・文献・歴史・音韻・映画などの分野の、基本的な知識や調査方法、参考図書・叢書・データベースなどの扱い方について、取り上げている。これからそうした専門課程を学ぼうという学生・大学院生だけでなく、広く周辺領域に目配りしたいと考えている方々にも、ご活用頂けたら幸いである。

なお、本特集では著作権法など、法的な問題を孕む可能性のあるコンテンツについては、原則として取り上げていない。

CONTENTS

1. 現代中国語をしらべる	
正しい読み方をしらべる	138
ピンインの正しい表記法をしらべる	140
2. 文献をしらべる	
蔵書印をしらべる	142
3. 歴史をしらべる	
人口をしらべる	145
移民をしらべる	148
日記をしらべる	151
解説：法制史	153
4. 音韻をしらべる	
解説：音韻学～中古音と上古音	155
音注の意味	171
中古音をしらべる	173
上古音をしらべる	176
方言音をしらべる	178
5. 映画をしらべる	
中国映画を見る	180
映画のストーリー・俳優・製作スタッフをしらべる	182
映画の評価・興行成績をしらべる	185
解説：中国映画史を学ぶ	187

現代中国語をしらべる

❖ 正しい読み方をしらべる

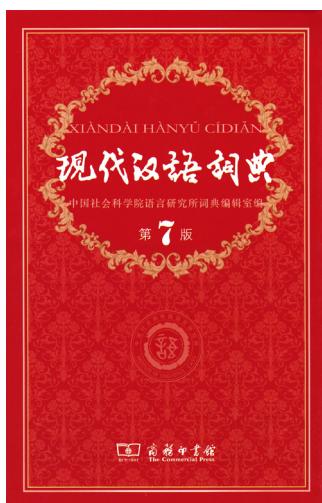
Q: 「そば」の中国語がある教科書では「旁邊 pángbiān」に、別の教科書では「旁邊儿 pángbiānr」になっていました。どちらが正しいのでしょうか？

❖ 困ったら『現代漢語詞典』

中国語に限らず、あらゆる言語は常に変化しています。新しい事物や概念が登場すると、それを表現する新しい語彙が生まれますし、発音も時代とともに変化します（「音韻をしらべる」の項目参照）。

さて、中国では「普通话」と呼ばれる共通語の普及が進められています。その標準を決める業務は教育部の語言文字工作委員会が司っており、最新の標準は『現代漢語詞典』に反映されます。

- 『現代漢語詞典』第7版（中国社会科学院語言研究所詞典編集室編、商務印書館、2016）



漢字表記や意味だけではなくピンイン表記についても、同書が現代中国語の規範となります。

❖ 『現代漢語詞典』の凡例を読もう

それでは『現代漢語詞典』の「旁邊」の項目を見てみましょう。

【旁邊】 pángbiān (～儿) 图 方位词。左右两边;靠近的地方: 马路～停着许多汽车|小区的～有一个公园。

ぱっと見た感じでは「旁邊 pángbiān」が正しいように思えますが、ここで要注意なのが「(～儿)」です。凡例を確認してみると、以下のように見えます。

2.3 ……书面上一般不儿化，但口语里一般儿化的，在释义前加“(～儿)”（书面では一般にアル化しないが、口語では一般にアル化するものは、語釈の前に「(～儿)」を加えた）

ここから、「(～儿)」が語釈の前に書いてある「旁邊」は、簡体字で書くときは「旁邊」が、ピンイン表記は口語をふまえて「pángbiānr」とするのが規範的であることがわかります。

辞書の凡例は、とかく読み飛ばしがちですが、こと『現代漢語詞典』のピンイン標記については、軽声に関する「・」、離合詞に関する「//」など、ほかにも押さえておかなくてはならない記述ルー

ルがありますので、きちんと押さえておくよにしましょう。

中国語の習得を目指しているのであれば、『現代漢語詞典』は是非とも手元に備えておきたいものです。まして、中国語教育に携わり教材を作るのならば、折に触れて最新版の『現代漢語詞典』を確認しなくてはなりませんし、改定版が出版されたら、どのような変更があるのか、ネット上のニュースなどに目を通しておくべきです。

❖ 『現代漢語詞典』の改訂と新語の「公認」

中国では、ある言葉が現代中国語の最も権威ある「官方」(政府公式)の辞書である『現代漢語詞典』に収録されることは、それが政府によって公認されることを意味します。

2005年に刊行された第5版では、6,000あまりの新語が追加され、2,000あまりの語が削除されました。出版に際して商務印書館が強調したのは、「体认」(体得)と「愿景」(ビジョン)の収録でした。

この二語は、2005年4月に中国を公式訪問した当時の台湾国民党の連戦主席と胡錦濤国家主席との会見後に発表されたコミュニケで使われた言葉で、商務印書館は印刷開始2日前のタイミングであったにも関わらず、突貫工事で第5版に収録したというのです。

これは、『現代漢語詞典』が不可避的に政治性を帯びていることを示すエピソードです。日本人からすると、このような政治性の強さに違和感を感じるかも知れませんが、中国において——あるいは日本でも——権威や正統性は、しばしば政治権力の承認によって生まれます。

また2012年の第6版では、「宅」に日本語の「オタク」に由来する新たな意味が書き加えられ、第7版では更に「宅男」・「宅女」という熟語も収録されました。

ただしその意味ですが、日本語の「オタク」とはいささか異なっています。第7版の「宅男」・「宅女」の語釈は以下のようになっています。



「宅男」のイメージ（2012年の広告ポスター）

整天待在家里很少出门的男子 / 女子，多沉迷于上网或玩电子游戏等室内活动。」（一日中家にいてほとんど出かけない男子 / 女子で、多くがインターネットや電子ゲームなどの室内活動に耽溺している。）

漫画・アニメなどのマニアであることよりも、「引きこもり」・「ニート」および「ネット廃人」といった意味あいが強くなっています（なお「宅」は、引きこもってネットやゲームをする、という意味の動詞になります）。

オタクという語は、台湾経由で中国に広まり、当初は「御宅族」と呼ばれていたのが、「宅」・「宅男」・「宅女」などに変化して定着したものです。一般化する過程で「宅」の語感に引きずられて「ヒキニート」的なニュアンスを強く帯びるようになり、『現代漢語詞典』がそうした使い方を「公認」したことになります。

一方、第6版では「剩男」・「剩女」(独男・独女)が、差別的ニュアンスを含むとして収録されませんでしたので、そこから逆に「宅男」・「宅女」に蔑視するような意味あいが薄いことがわかります。「オタク」という言葉は、日本でも時代とともに使われ方が大きく変化していますが、意味の振れ幅が大きいのは、日中を問わずサブカルチャー系語彙の特色と言えるかもしれません。

いずれにせよ、その時代の言葉とその背景にある社会、さらには政治のあり方を映す『現代漢語詞典』は、オフィシャルな中国語の確認にとどまらず、様々に読み解くことができる辞書であると言えるでしょう。

(千田 大介)

❖ ピンインの正しい表記法をしらべる

Q: 中国語の「一月」のピンインは、頭を大文字にした「Yīyuè」
と「yīyuè」、どちらが正しいのでしょうか？

❖ ピンインなら『漢語拼写詞典』

「ピンイン」はあくまでも、中国語の漢字の発音をローマ字表記する方法に過ぎません。英単語を覚えるときには、発音を音声的に覚えてしまい、発音記号を一つ丸暗記しないと思いますが、中国語の場合、漢字が表音文字ではありませんので、学習に際してピンインを覚える必要が出てきます。ですが、あくまでも補助的な発音表記法ですので、中国で生活したり中国語で仕事をしたりする上で、声調符号付きピンインを書くような機会は、まずありません。その意味で、中国語学習者は正確なピンインの綴りを覚えるのが大切で、質問のような細部にこだわる必要はない、といえるでしょう。

しかし、中国語の教科書や教材を作る立場となると話は別です。学習者が質問のように混乱することを防ぐためにも、軌範に則ってピンインを書かなくてはなりません。そのときに大いに役立つのが以下の辞典です。

- 『新華拼写詞典』（中国社会科学院語言研究所詞典編集室編、商務印書館、2016）



『現代漢語詞典』と同様、商務印書館の出版で、ピンイン表記の規範が示されています。

ピンイン索引を引くと「月份的拼写法」という項目が247ページにあります。そこを見ると、以下のように書いてあります。

●8月(月份和星期的拼写法)

一年的12个月，习惯上作为专有名词看待，开头字母必须大写。例如：

一月 Yīyuè

正月 Zhēngyuè (农历用)

一年的12个月，习惯上作为专有名词看待，开头字母必须大写。（1年の12ヶ月は、習慣的に固有名詞として扱うので、初めの文字を大文字で書かなくてはならない。）

ここから、質問については「Yīyuè」が正しい、ということになります。

この項目の前後には年や日の書き方も載っていますが、いずれも固有名詞扱いではないので冒頭は小文字になります。年は、各数字および「年」の前を一文字ごとに開ける、日は数字と「日」・「号」の間を開ける、というルールになっていますので、「二〇二〇年一月一号」ならば「èr líng èr líng nián Yīyuè yī hào」になります。

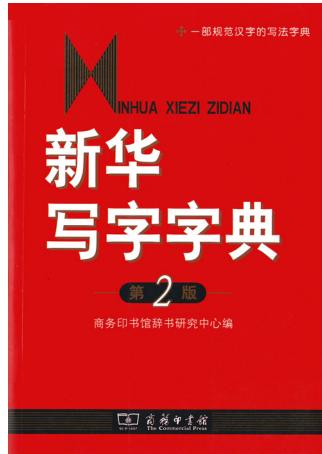
中国語の教材を作っていると、このほかにも、細かなピンイン表記に迷うことがあると思います。一例として「了」を挙げると、本書を引くことで、動態助詞（いわゆる「了」の1）は前の動詞と繋げて書く、語氣助詞（いわゆる「了」の2）は前の語と離して書く、句読点の前の動態助詞兼語氣助詞は全て前の語と離して書く、というルールだとわかります。

中国語の教科書や教材を作成する際に必携の辞書だといえるでしょう（日本語の人名の部分には、誤りもみられます）。

❖ 『新華写字字典』も必携

商務印書館では、このほか「新華」シリーズの辞書を幾つか出版していますが、中国語の学習・教育に役立つものとして、『新華写字字典』があります。

●『新華写字字典』（第2版）（商務印書館、2015）



読んで字のごとく、漢字の書き方（書き順）辞典です。

簡体字の書き方は、特に明朝体（宋朝体）フォントで印刷・表示されている場合、分かりにくいものです。例えば「樂」の簡体字「乐」ですが、『新華写字字典』をしらべると、以下のような筆画であることがわかります。

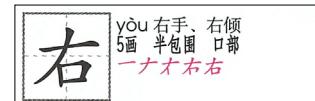


特に一画目・二画目の書き方は、印刷された字体からは判別しにくいですが、このように書き順が示されれば一目瞭然です。

このほか、「長」の簡体字「长」は、要するに「米」と同じ書き順であることがわかります。



日本の漢字教育の問題点として言及されることも多い「右」・「左」の書き順ですが、中国ではどちらも横棒から書き始めます。



日本の中国語教科書は、大半が簡体字の書き順を載せていない上に、明朝体系フォントを使うことが多いので、簡体字の書き方がいまひとつ判然としません。中国語を学習する上で、あるいは教授する上で、簡体字の書き方を正確に把握できる『新華写字字典』は、必携の辞書だと言えるでしょう。

（千田 大介）

文献をしらべる

❖ 蔵書印をしらべる

Q: デジタルアーカイブで漢籍をみていたら、冒頭部分に図のような印鑑がたくさん捺してありました。これは、どういうもので、何が書いてあるのでしょうか？

❖ 蔵書印・鑑藏印・落款とその基礎知識

古い書物や古文書、美術作品には様々な印が捺されていることがあります。まずはこういった印のうち代表的なもの3つ（蔵書印・鑑藏印・落款）について説明します。なお正確には、印・印章・印鑑・印判という場合はモノとしてのハンコ 자체を指し、紙などに印を捺した結果、転写された文字や文様のことは印影、文字や文様じたいを印文、さらに印の所有者を印主と言います。

蔵書印の印主は書物の所有者で、個人のほか、図書館などの収蔵機関の場合もあります。これに対して鑑藏印とは、所蔵（所有）者や書画の鑑賞者・鑑定者の捺した印の総称です。一般には書画の分野で使用する言葉ですが、書物においても鑑賞・鑑定者が捺印したものは、蔵書印と区別して鑑藏印と呼んで差し支えありません。所有者以外の印

が捺されていることは不思議に思うかもしれません、書画や古典籍を著名な鑑定人や大学者、一流の文化人などが鑑賞した記録に、印ばかりか感想や解説（これらを観款や識語などと呼びます）まで残すことは、古くからよくあることでした。鑑賞記録の多寡と資料の真偽が必ずしも相関するわけではありませんが、著名人の鑑藏印や観款、識語があれば、作品価値は高いと判断されやすいのもまた事実です。

次に落款は、書画の作者が作品に捺す印のことです。作品の真偽の決め手の一つになるため、蔵書印や鑑藏印以上に偽造も多く注意が必要です。

古い資料には、落款・蔵書印・鑑藏印といった印主の異なる印が混在して捺されています。質問の印鑑（既に述べたように正しくは印影ですね）は、漢籍、つまり書物に捺されているということですから、所有者の蔵書印か鑑賞者の鑑藏印だと推察できます。

印影の色は朱が最も多いのですが、青（藍色）や黒（墨色）もあります。図1や図2のように文字や文様部分が色付きのものを陽刻、図3のように文字や文様が白抜きのものを陰刻と呼び、これと色を組み合わせて、陽刻朱印、陰刻墨印などと表現します。

また、印や印影を数える単位は「顆」であることを併せて覚えておきましょう。



図1



図2 図3



いずれも『皇明條法事類纂』（東京大学総合図書館所蔵）より

❖ 印文を判読する

次に質問の印に彫られている内容をみてみましょう。図1は藏書印の中でも肖像印と呼ばれるもので、印主の肖像がデザインされています。上部の文字は右から左に向かって「仲魚圖像」と読み、「仲魚」という人物の肖像画だということがわかります。図2は縦一行で「海寧陳鱣觀」、また図3は縦三行にわたって「得此書費辛苦後之人其鑒我（この書を得るに、辛苦を費やせり、後の人、其れ我を鑒とせよ）」と書いてあります。

所蔵印や鑑藏印には、所有者の名前や籍貫（本籍地）・居住地のほか、書斎名や書庫の名称などがよく見られます。図1の「仲魚」は見たところ姓名ではなく、字か号でしょう。これに対して図2の印文は籍貫と姓名からなり、印主が海寧（現在の浙江省海寧市）の陳鱣という人物であることがわかります。

一方で、図1のように別名による表記であると、各種工具書やデータベースを使って、人物の本名を特定する必要があります。ここではCBDB（別名から本名をしらべる）に仲魚と入力して検索してみると、陳鱣・丁芳洲・朱苔の三名がヒットします。詳細情報を比較すると、陳鱣の籍貫が海寧州であることから、図2の印主である陳鱣と同一人物の印であることがわかります。ここまでわかれれば、あとは歴史上の人物の調べ方に従って、陳鱣がどういった人物なのか調べてみましょう（人をしらべる）。陳鱣（1753－1817年）は、字を仲魚、号を簡莊といい、大蔵書家としても知られる清代の儒学者です。

次に図3ですが、藏書印や鑑藏印には、印主にとっての座右の銘が彫り込まれることがあります。内容は古典の表現を典拠としたものから、自作の警句など様々です。いずれにせよ、著名なものは、いろいろな書物に引用されていますから、まずは一般的な典故を探す方法と同様に、データベースや検索エンジンで検索してみましょう。そうすると、「得此書費辛苦後之人其鑒我」は、清末の政治家かつ目録学者である葉徳輝の『書林清話』に陳鱣の藏書印文として紹介されていることがわか

ります。結局、3つの印はすべて陳鱣のものであつたのです。

ちなみに、図3の印文は、子孫への蔵書の保持・保存を願う内容なのですが、それも空しく、嘉慶22年（1817）に陳鱣が死去すると、彼の蔵書は早々と売却処分されてしまいます。

ここまで、簡単に説明してきましたが、実際の印文解読は骨が折れる作業です。図からわかるように、印文は楷書体ではなく、篆書もしくはそこから印章用にデフォルメされた書体からなっています。また図3のように本文の文字と重なったり、捺し方によって印影が薄かったり、かすれたり、潰れたりしていると文字の特定はさらに難しくなります。こうなると、字書を引こうにも画数や部首もわからず、お手上げとなることもあります。

判読のための字書として、専門的なものは多々ありますが、日本人の初学者向けには、『必携篆書印譜字典』（篆毛政雄編、柏書房、1991年）や『必携落款字典』（落款字典編集委員会編、柏書房、1982年）などがわかりやすいです。

なお、後述する国文学研究資料館の蔵書印データベースには「篆字部首検索システム」(https://base1.nijl.ac.jp/-collectors_seal/seal_script/) が附属しています。これは印文判読のためのデジタル字書で、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている篆刻字書類の画像や、蔵書印データベースの実際の印影を篆字の用例として表示してくれます。同じく「篆書の例：蔵書印に見える頻出字と難読字」(https://base1.nijl.ac.jp/-collectors_seal/seal_script/tensho.pdf) は、蔵書印によく使用される文字の篆書のパターンを一覧にしたものです。

❖ 蔵書印データベース

近年では、蔵書印（鑑藏印や落款を含む）に特化したデータベースが公開されています。印影そのものを直接比較できるので、判別に便利です。

- NIJL 蔵書印データベース (https://base1.nijl.ac.jp/-collectors_seal/)

国文学研究資料館が提供する蔵書印データベー



図4 国文学研究資料館蔵書印データベース

スです。国内の図書館や研究機関等に所蔵される典籍資料にみられる蔵書印を集成しているもので、2020年3月末現在で37,819点の印影が収録されています。詳細検索画面では、印主や印文だけではなく、印の形状や出現位置、サイズ、色、陰陽など多様な検索手段が用意されています。

●九州大学蔵書印データベース (<https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/qstamp>)

九州大学所蔵資料の蔵書印の集成で、現在のデータ数は829件です。カテゴリ、印主名ヨミ、字数の3種類をツリーから階層検索できます。

両データベースの特徴は、印文がすぐに判読できない場合に備えて、文字検索以外の多様な検索手段を用意していることです。どちらも登録されている印主は日本人が大半を占め、中国人の登録は多くありません。ただし、国文学研究資料館のデータベースでは、陳鱣の図2の印影がヒットしますから、試してみる価値はあるでしょう。

他方、漢籍に特化した蔵書印データベースの構築も進んでいます。蔵書印データベースZO-SAN (<https://zoshoin-db-zosan.herokuapp.com/>)は、ユーザーが蔵書印を登録することで、検索できるデータが増えるという、共同構築型のデータベースです。ただし、現在の印影画像の登録件数は222件と少なく、現在試験運用中です。

このほか、図書や漢籍のデータベース類には、印記として、書物に捺されている印文の内容が記録されているものも多いです。一部が解読できれ

ばこういった種々のデータベースで、手当たり次第検索することで、手がかりを得られる可能性もありますから、印文が全部判読できないからといって、あきらめる必要はありません。

❖ 印譜

蔵書印・鑑藏印・落款などの印影を集めて本にしたものを作ります。蔵書印データベースが登場する前は、印や印主の特定は印譜を調べるしかありませんでした。著名な作家や収蔵家は多くの印を持っているため、個人ごとに印を集成した印譜があります。また、博物館や図書館など収蔵機関の単位で数多くの印譜が刊行されています。ただし、数量が多く一覧できるような図書館はわずかであること、印譜の多くが印影の鑑賞を目的として編集されていることなどから、初学者が印譜を自在に使いこなすのはなかなか大変です。

❖ 余録

対象資料が古文書であると、そこには当該文書の発信や受信にかかる印が捺してあることがあります。多くの場合は役所の印、すなわち官印になります。中国の官印については片岡一忠『中国官印制度研究』(東方書店、2008)が、古代から清朝までの官印や公印の印譜も兼ねた、概説書となっています。

書物に見られる印影は、本文内容からは読み取れない、書物の伝来情報を得ることができる重要な情報源です。また、既に述べたように、時には資料の真贋にもかかわる内容を含んでいます。印文は慣れないと解読は難しいかもしれません、最近はデジタルツールが充実してきていますから、ぜひ解読に挑戦してみてください。

なお、今回の質問の印影は偶然にも同一人物のものでした。落款は時間とともに捺してある数が増えることはありませんが、蔵書印と鑑藏印は、所蔵者の変更、著名人の閲覧の増加などから、時間の経過とともに印影が増加します。このため、資料によっては何十もの人物を特定する作業が必要になることもあります。

(小島 浩之)

歴史をしらべる

❖ 人口をしらべる

Q: 1950 年代に毛沢東が「ヒトが 1 人生まれたら、口は 1 つ増えるが、手も 2 本増える」といって人口抑制に反対したとあります。その前後の時期を含めて中国の人口を調べるにはどうすればよいでしょうか？

❖ 中国人口史の概況

人口動態は、政治、社会、経済など多方面にわたる中国の動向を考えるうえで鍵となる指標の 1 つなので、20 世紀全体や前近代との比較など長期的な動向を把握する必要があります。

●『中国 人口超大国の行方』(若林敬子、岩波書店、1994)

1990 年代初頭までの概況は、まずはこの本と若林敬子の一連の著作（例えば、『中国の人口問題』東京大学出版会、1989）を読めばよいでしょう。

中国人口史については、復旦大学中国歴史地理研究中心が歴史地理学の手法を用いて蓄積してきた研究を、まずは参考するとよいと思います。

①『中国人口発展史』(葛劍雄、福建人民出版社、1991)

②『中国人口史』シリーズ（葛劍雄主編、復旦大学出版社、2000 ~ 2002）

第 1 卷：葛劍雄『導論、先秦至南北朝時期』

第 2 卷：凍國棟『隋唐五代時期』

第 3 卷：吳松弟『遼宋金元時期』

第 4 卷：曹樹基『明時期』

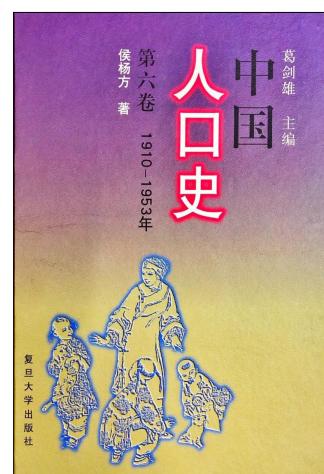
第 5 卷：曹樹基『清時期』

第 6 卷：侯楊方『1910-1953 年』

①は長きにわたって中国の歴史地理学をけん引してきた葛劍雄の手による中国人口史概論で長期的動向が簡明かつ鋭く整理されています。

②は葛劍雄率いる復旦大学中国歴史地理研究中心のメンバーが著した各時期の人口史です。

清末以前の人口統計は正史や地方志にも戸数や口数として現れます。しかし、「戸」は課税・徭役単位としての家であり、「口」は課税・徭役対象の男性人口であったように、近代中国における人口統計は、統治のために「上」から課された指標であったことに気を付けなくてはなりません。



また、唐代の租庸調制や明代の里甲制など、課税・徭役の制度の内実と変遷を理解する必要があります。これらを踏まえた上で、明代以降は黄冊（人口調査簿）によって上述の人口動態を追うことができます。清代後期までについては清冊（戸部による人口等の調査簿）の数字から相当正確な数字を得ることができますが、後に地方官が正確に報告しなくなった点にも注意しなくてはなりません。

上記の官製史料からは把握できない人口動態については、族譜（家系図）などの民間史料を用いて、出生率の変遷や世帯の規模などを推定し、官製史料の数字を補正する必要があります。

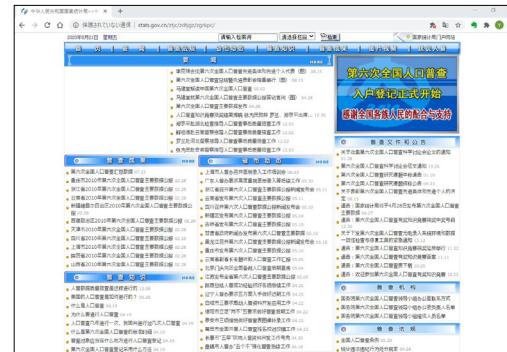
第6巻が対象とする時期には現代的な統計データが登場し、人口学的な分析に耐えうる数字と数多く出会えます。本書はこのようなデータを縦横に用いて清末から中華人民共和国初期までの人口動態を多面的に分析しています。特筆に値するのは、中国最初の議会選挙のために実施された清末の選民調査が現在の基準からみてもかなり精度の高いものであり、人口センサスに次ぐ精度を持っていましたという指摘です。

❖ 人口センサスのデータをしらべる

どこの国であれ、人口動態を知るもっとも基礎的な情報は人口センサスのデータです。中国における第1回人口センサスは1953年に実施されました。この状況については前掲の『中国人口史』第6巻も参考になります。今までの実施状況は、第1回（1953年）、第2回（1964年）、第3回（1982年）、第4回（1990年）、第5回（2000年）、第6回（2010年）となっています。2020年に第7回が予定されています。また、1987年と1995年、2005年には1%を抽出して行う中間センサスが行われています。これらの、第5回と第6回人口センサスを中心とするデータが中国国家統計局のウェブページで公開されています。

- 中華人民共和国国家統計局「人口普查」
(<http://www.stats.gov.cn/ztjc/zdtjgz/zgrkpc/>)

毛沢東が「産めよ、増やせよ」政策を推進し



た時期の人口センサスについては、様々な出版資料から確認する必要があります。注意しなくてはならないのは、この時期の数字はその後さまざまに修正が加えられていることです。この点についても、前掲の若林敬子の著作を参照してください。

❖ 人口センサス以外の統計データ

人口センサスでは十分に分からぬ情報については、相当限界はありますが、各年度の『中国年鑑』『中国統計年鑑』など様々な年鑑類を併せて参照するとよいと思います。また、日本の中国研究所が1985年以降刊行している『中国年鑑』の情報も役に立ちます。地域ごとの状況を知りたい場合、省・直轄市、市など行政単位ごとに発行されている統計年鑑（例えば『上海統計年鑑』など）や新編地方志をみてみるとよい方法もあります。

さて、質問に戻ります。毛沢東による1950年代の急進的（盲進的）政策が急激な人口増加を促



したこと、1959年から1962年にいわゆる「三年自然災害」による人口急減を招いたことは広く知られています。「三年自然災害」によって失われた人口は、論者によって1,600万～4,600万人と推定の値には相当の幅があります。推計値にこれ

だけの幅があるのは、この時期の人口統計の正確性に限界があったことを考慮しておく必要があります。

(佐藤 仁史)

❖ 移民をしらべる

Q: 授業で中国ドラマ『闖関東』が紹介されていて面白かったので、「闖関東」を中国語辞典で引いたところ、清代の東北地方への移民という意味だと分かりました。その実態を詳しく知るには、何をしらべたらよいでしょうか？

この表現には、19世紀後半から20世紀前半にかけて進んだ、山東半島の住民（特に漢民族）による東北地方への移住が反映されていることはよく知られています^[1]。しかしながら、中国東北地方の移民を調べることは決して容易ではありません。広大な東北地方での地域性や時期によって、様々な移住のパターンがあるからです。現代的な統計や戸口管理という観念や制度が入ってくるまでは、人の移動を正確に捉えることが極めて難しいことを念頭に置き、個別の事例と大情況とをうまく関連させながら考える必要があります。

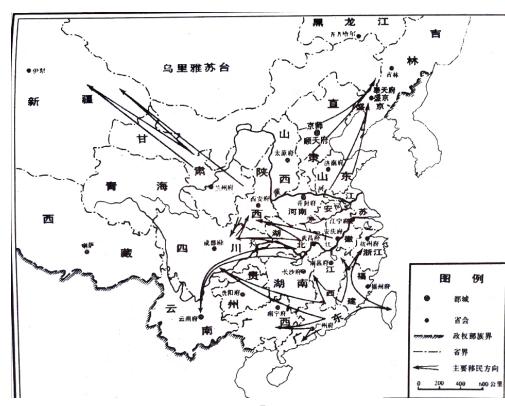
❖ 移民史に関する概説書

中国東北地方の移民を理解するためには、中国移民史全体の流れを押さえておく必要があるでしょう。この点については、以下の概説書が便利です。

- ①『簡明中国移民史』（葛劍雄・曹樹基・吳松弟、福建人民出版社、1993）
- ②『中国移民史』全6巻（葛劍雄・曹樹基・吳松弟編、福建人民出版社、1997）

ともに、復旦大学中国歴史地理研究中心の研究チームによって記された中国移民史に関するもっともスタンダードな概説書です。①は②の簡易版という位置づけですが、それでも700頁を超えるボリュームがあり、中国移民史の全体像を大掴みにするのに十分な情報が網羅されています。移民史を考える上では、人々の自由な移動を連想しますが、これ以外に政策による強制移住や移民の募

集があったことも踏まえておく必要があります。



清初の人口移動（『簡明中国移民史』）

移民史は中国各地の開発や技術伝播の変遷を考える上で重要であるのみならず、地域文化の伝播や交流などを捉える意味でも重要です。例えば、北京ダックが北京にもたらされた背景に、永楽帝による江南から北京への強制移住政策がありました。香港や東南アジアのチャイナタウンで楽しめる潮州料理も、清代以降における潮州人の海外移住の動向と切っても切り離せません。

さて、話を「闖関東」に戻すと、『簡明中国移民史』では清代初期の移民の動向に5つの特徴がみられるとしています。それぞれ、①湖廣地方からの四川（特に山間部）への移住、②東南山間部への移住（「棚民」「客家」と呼ばれるエスニックグループが特徴）、③台湾への移住、④西部への移住、そして⑤「闖関東」、すなわち東北地方への移住です。⑤について詳しくしらべるにはどうすればよいでしょうか。

❖ 地域資料からしらべる

すぐに考えられるのは新旧地方志やそれに類する資料をあたってみることです。例えば、『盛京通志』などの史料を参照することができます。ただ、満洲は清末に東北三省として中国本土と同様の行政体制になるまで、封禁の地として特殊な制度下に置かれていました。したがって、旧地方志についても中国本土と同様に詳細に得られる訳ではない点に注意しなくてはなりません。

新編地方志にも地域の住民構成に関する部分に、現在の民族構成や祖籍との関連で言及されている場合もあるので、手がかりを得るために参考になります。新編地方志を調べるには、万方数拠地方志データベースを利用するとよいでしょう。

- 万方数拠地方志データベース (<http://fz.wanfangdata.com.cn/index.do>)

❖ 調査資料からしらべる

満洲における移民については、「満洲国」期に行われた様々な調査から生み出された詳細な調査報告書も参考になります。臨時産業調査局による農村実態調査は、1935年～1936年にかけて、37県39村によって実施されました。うち、いくつかの村においては複数年にわたって実施されており、分家文書など関連史料も収録されているなど、当時の農民の生活を知るのに好個の史料です。産業調査局の農村実態調査報告書は国立国会図書館のウェブページにおいてオンライン公開されているので、すぐにしらべることができます。

- 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)

例えば、綏化県蔡家窩堡の戸別調査に拠れば、当該村の発展史において重要なのが蒼氏と蔡氏でした。村の名前は後者に由来します。調査当時に村において支配的であった蒼氏については次のように記されています。満洲八旗に属し、順治年間に一度北京に移住しましたが、招民開墾政策

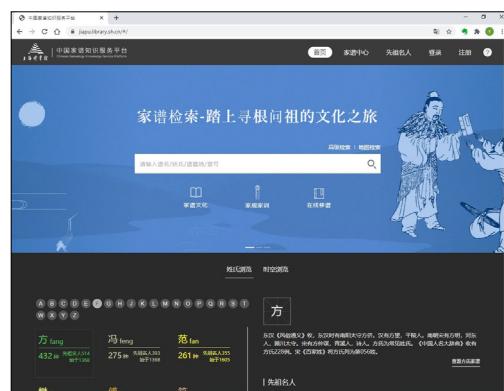
に伴って乾隆年間に熱河に再移住しました。その後奉天の復県西藍旗屯への移動を経て、道光年間に吉林の双城県劉鎮窩堡に移住しました。その後、綏化県一帯の開放を聞き、1872年に蔡家窩堡に移住しました^[2]。このように、満洲での移民史は一般に考えられているよりも遙かに複雑です。

❖ 家系図からしらべる

中国移民史を知る上で極めて重要な史料が族譜や家譜などと呼ばれる家系図です。族譜を有している血縁組織は割合から言えば、都合良く族譜が入手できるか否かは運次第ですが、もし入手できれば、そこから少なからぬ情報を入手することができるでしょう。

従来の代表的な族譜目録には、多賀秋五郎『中国宗譜の研究』下巻（日本学術振興会、1982）、『美国家譜学会中国族譜目録』（成文出版社、1983）、『中華族譜総合目録』（中華書局、1997）などがあります。族譜収集・整理・公開の主体は多岐にわたりますが、もっとも包括的でデジタル化に先進的な取り組みをしてきたのが以下の2機関です。

- ①上海図書館「中国家譜知識服务平台」(<https://jiapu.library.sh.cn/>)



- ②末日聖徒イエス・キリスト教会 Family Search(<https://www.familysearch.org/>)



①は上海図書館が国内外の所蔵機関と協力して作成した54,000種の族譜目録を基礎とし、うち6,086種の族譜の画像データを公開しているデータベースです。一部は直接ダウンロードでき、それ以外のものについては上海図書館家譜閲覧室に直接赴く必要があります（ダウンロードは有料）。また、1990年代以降に編纂された新編の族譜についてはプライバシーなどの関係上オンライン公開はされておらず、現地で閲覧する必要があります。

②は末日聖徒イエス・キリスト教会が公開している家系図データベースです。中国の族譜も数多く収録されており、一部はオンラインないしは協会事務室においてダウンロードが可能です。上海図書館と相互協力をしており、多くの族譜が重複しています。ホームページから「検索」→「カタログ」と移動して、地名や人名をキーワードとし

て検索できます。両機関とも、祖先や関係者に関して、アイデンティティと直結した情報を調べに来る人が多く、これらの史料が活きた歴史実践と密接に関係していることが判ります。

ただ、残念ながら蒼氏に関する情報は上記のデータベースからは判明しませんでした。実は、蒼氏は1990年に族譜を編纂して私費で印刷し、関係者に配付していました（蒼久助・蒼久武・蒼恵馨編『蒼氏家譜』私家版、2006）。筆者も2012年に現地を訪れた際に関係者にみせてもらってその存在を知りました。族譜はその性質からいって、一般的な図書市場に出回らないことは言うまでもなく、多くの所蔵機関でも探し出すことは困難です。県レベルの図書館や地方志弁公室がこうしたローカルな史料の情報を持っている場合もあります。

注

- [1] 近代の満洲移民については、荒武達朗『近代満洲の開発と移民——渤海を渡った人びと』（汲古書院、2008）を参照してください。
- [2] 蔡家窩堡の蒼氏の移住や農家経営については、菅野智博「分家からみる近代北満洲の農家経営——綏化県蔡家窩堡の蒼氏を中心に」（『社会経済史学』83巻2号、2017）で分析されています。

（佐藤 仁史）

❖ 日記をしらべる

Q: 明治・大正期に東京にやってきた中国人学生は、どのような日常生活を送っていたのでしょうか？

近代の中国人が残した日記については今まで清末に西洋や日本を視察した官僚などによる考察日記などがよく知られてきました。また、大官僚や著名な作家による日記の整理・出版も早期から行われてきましたが、下層官僚や在地知識人、学生、商人、農民、女性のものは限られていきました。ところが近年の中国では大量の日記が陸続と整理・刊行されるようになっています。

❖ 中国留学生関係文献をしらべる

従来の研究では明治期における日本視察や清国留学生に関する研究が蓄積されています。この点に関して真っ先に参照すべきは東京都立図書館の実藤文庫です。当該文庫は早稲田大学教授であった実藤恵秀の旧蔵書で、主に清末以後の日中文化交流に関する文献からなっています。ここには数多くの東遊日記（中国人日本留学生などの日記）が含まれています。目録情報がオンラインにて公開されています。

- 東京都立図書館「実藤文庫」(<https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/collection/features/catalog/sanetou/contents/index.html>)



中国人留学生の動向については近年、神奈川大学の研究班が研究を進めているので、最新の成果は関連著作を参照するとよいでしょう（例えば、孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」「愛國」「近代』』東方書店、2019）。

❖ オンラインで日記をしらべる

オンラインで公開されている近代中国の日記は現段階ではかなり限定されています。

- 国学網「近現代日記全文検索数据库」(<http://www.guoxue.com/cp/jxdrj.htm>)

北京国学時代文化伝播股份有限公司によって開発されている商用データベースの1つで、現段階では28種の日記が収録されています。魯迅など著名人のものが中心ですが、地方官吏、知識人、エンジニア、幕僚などの日記があり、様々な角度から近代中国を考える手がかりとなります。日本との関連でいえば、清末に日本視察にきた張謇の日記が含まれています。

- 中央研究院近代史研究所「近代春秋 TIS 系統」(<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/diary/enter.php>)

その名が示すように、近代中国の「春秋」編纂を目指すべく、様々な文献を時間軸によって組み合わせて構築されている新型の編年史のデータベースがこれです。ここには、『徐永昌日記』『王世杰日記』などの日記史料や『中華民国史事日誌』『蔣公大事長編初稿』のような年譜史料が含まれています。

このデータベースを検索すると徐兆瑋（1867-



1940、江蘇常熟の出身、光緒年間の進士）という人物の日記の記録が現れます。ここに記された国會議員として国政に参与した経験や地方自治における活躍が目を惹きますが、1年あまりの法政大学速成科における時代の日記も特筆に値します。特に面白いのは著名な書籍収集マニアであった徐兆瑋の神田神保町における書籍収集の記録などです。こうした日記を読み込むことで中国人留学生の日常生活がわかります^[1]。

❖ 出版された日記をしらべる

日記史料の場合、紙版ものが数多く出版されています。特に膨大な稿本・抄本を所蔵する上海図書館などが大部の日記資料集を出版しています。これらには、地域の紳士層や地主層の日記が数多く含まれていることが特徴です。

- 『上海図書館藏稿本日記叢刊』(全 86 冊)(周德明・黃頤功編、国家図書出版社、2017)
- 『蘇州博物館藏近現代名人日記』(全 39 冊)(蘇州博物館編、文物出版社、2018)

出版された日記史料は枚挙に暇がありませんが、以下の目録が有用です。なお、中国では徽州文書をはじめとする民間文書の収集・整理が進んでおり、ここには生員層・商人層の日記が含まれています。

- 中国近代人物日記目録(1810 年代至今)(<https://www.douban.com/note/536037689/>)

十一月初一日、晴、東历十二月五日。

上午、天氣甚暖。至神田购《支那思想发达史》一部，又汉译清水謙《宪法》一部。复至文豪堂书店购陈繼《二十七史堂集》一部。此书中固无印木，只有日本传刻，可宝也。午后，蒋瑞平来，言钱锐臣将返中国，而亏欠各项四十余元，不能归本国，欲合一会，全会十元，半会五元，予与一帆皆允许半会。又言前日锦辉馆开十八省联合会，议江南路一事，有革命派指其党百余人在内，竭力反抗，且将苏浙乱捕，打伤三人，而会局遂扰乱，不能成议。又言同乡尚有一人赴上海，几有不得过江之势，且此人感情与同乡最薄，将来不知局如何。钱锐臣尚能搭会，此人恐欲握手而无从。予谓此必徒供其也，闻之果然。

其行拂来钱吉庵十月十九日函，云敝处学堂虽令叔叡、青翟丁君翠竭力调护，奈领者待金令僧海为详学司，得势猖狂。本月初八日，经左大令函请劝学所邀集两造开会演辩，被处同志裁约至，而被领知此举激怒公愤，恐临场冲突，屡避不到，函约劝学所准于十二日到馆，乃改期明日演辩。距伊仍数日，直至翌日拂曉始到。而同人悉次往赴，渡于奔走，既苦且憊，其心刁难如此。现虽然订二十日集议，然近日经费多从中調處，重依然如故。现在策劃同人上轟各大光，且見城乡各界中人均不直仰之行为，恐事漸敗，吉庵將行拂氏出發，扶同到校，弟素自指力薄，恐不足以抑此亂風潮，乞与雷同乡贤共及家叔叔凡、舍甥周占群諸君一为设法援手，除清布告同乡会学堂諸公，以期澈悟公愤，函致本省督撫托長山道外，或电达学部，或函告江苏省教育总会以及各報館刊頭，以使天下學界共人公決。各節悉照卓識，如其中執事者不秉出面之光，不妨請諸家叔叡，蓋屢無有胆识，必能熱心贊助也。吉庵與頗好爭掌空學業，一私人交涉，且因爲興学起見，斷不能信此衆矣。且同乡会何能力，而重視如此？可免留东二字，内地人尚重視若否。吉庵如此，其他則又何說？

丁未日記
光緒二十九年（1903）五月廿二日

803

徐兆瑋の東京留学時代の日記

www.douban.com/note/536037689/

近代に中国人と交流した日本人の日記も有用です。国立国会図書館憲政資料室の資料に関連資料やその手がかりがある可能性があります (<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/kensei-kyuzosha.php>)。

❖ 学園史資料をしらべる

留学生を取り巻く状況を知るには学園史資料にあたる必要があります。特に清国留学生を大量に受け入れた各大学の学園史研究の成果物は有用です。例えば、法学や政治学の分野では、先に挙げた徐兆瑋が在籍した法政大学には HOSEI ミュージアムが設置されており、学園史資料もオンライン公開されています。

- HOSEI ミュージアム (<https://museum.hosei.ac.jp/>)

これ以外にも、早稲田大学・明治大学など多くの清国留学生を受け入れましたので、これらの大学の史資料センター所蔵の資料や刊行物をあたってみるとよいでしょう。

注

- [1] 徐兆瑋日記は中国哲学書電子化計画 (<https://ctext.org/zh>) にも収録されています。

(佐藤 仁史)

解説：法制史

❖ 律と令

前近代中国の法制度の歴史を考える際、最初に律や令についての理解が必要です。

律とは刑罰法規、令とは非刑罰法規を指します。律は、秦から清末までの約2,000年間、制定法の中核であり、基本法典として機能してきました。これに対して令は、西晋の泰始律令の制定（267年）から南宋（1127-1279年）までの約1,000年間、律とともに国政の基本法典として機能しました。

ただし、行政運営という点からみると、実質上、令が機能したのは唐の中期までで、それ以降は、副次法典とされる格（律令の修正規定）や式（施行細則）、単行指令と呼ばれる制・勅などの皇帝の命令に、その機能をとって代わられます。

このように、中国では律が国家の基本法典であることは古代から清末まで動かず、律令が基本法典として並立する期間は長くありません。このため、日本の古代において「律令制」や「律令時代」と表現するように、律令の言葉をもって国制概念を表すことは中国では一般的ではありません。

中国では、刑と礼はともに社会秩序を維持するための両輪だと考えられてきました。刑とは秩序を乱した者に外から加えられる罰であり、礼とは社会秩序を逸脱しないように内から規制するものであったのです。このように、刑罰法規は民の教化の手段であるというのが伝統的な中国の法観念であり、律が2000年近く国家の法体系の中心であった理由もここにあるわけです。

❖ 刑罰法規を中心とした中国法制史研究

したがって、中国法制史の研究は自ずと律に関する研究に比重が置かれることとなります。以下の諸研究に関しても、刑罰法規を中心とした叙述のものが多くを占めます。

秦漢時代からの律は魏晋南北朝時代を経て、唐律として集大成されます。唐代後半期以降においては、唐令が勅格にとって代わられ最終的に散逸してしまうのに対し、唐律は南宋まで基本法典として通行し、遼金元時代は最も重要な参考法として用いられます。その後、明・清律や安南（ベトナム）の刑律の成立に、大きく寄与します。また、唐律は日本の古代国家に移入され、日本律の母法となっています。

ここでは簡単に説明しましたが、こうした法典の編纂経緯や、各法典間の継承関係の究明といった法典編纂史は、法制史が最も力を入れてきた研究分野のひとつです。滋賀秀三「法典編纂の歴史」（『中国法制史論集 - 法典と刑罰』創文社、2003年）がまず目を通すべき最良の概説でしょう。

このほかでは、刑罰制度、裁判制度、官僚制度、家族法、身分制、現代法との関連などが、法制史研究の主要な分野です。これらは、石岡浩ほか『史料からみる中国法史』（法律文化社、2012年）を読んだ上、同書巻末の文献目録に掲載の専門研究を参照するという手順を踏むのがよいでしょう。

また、散逸した法典の復原研究も盛んに行われてきました。秦律や漢律の復原は、簡牘資料の出土によって大きく進展しました。そのほかこの分野では、仁井田陞『唐令拾遺』（東方文化学院東京研究所、1931年）および『唐令拾遺補』（東京大学出版会、1997年）、張鵬一『晋令輯存』（三秦出版社、1989年）など、逆に散逸した令に関する研究成果も特筆されます。

❖ 法科法制史と文科法制史

法制史研究には、法学研究からのアプローチと、歴史学研究からのアプローチがあり、法学部系の法制史研究を法科法制史、文学部系の法制史研究を文科法制史などと区別することもあります。

法科法制史は、前節で述べたような研究分野に

対して、法の構造的理解を前提として史的に法や法制を研究する学問です。これに対して文科法制史は、ヒトやモノを規律する社会や制度の背後にあるものとしての法を史的に究明する学問です。制度史研究を例にするならば、前者は法から制度を考え、後者は制度から法を考えるといえるでしょう。法制史を学ぶにあたっては、両方のアプローチを知っておく必要があります。

法科法制史からの最新の概説書には、寺田浩明『中国法制史』（東京大学出版会、2018年）があります。法学部の学生用のテキストとして作られたもので、著者の深い学問的知見を随所にちりばめつつ、高度な内容を平易に語っています。また、先行する概説書としては、すこし古くはなりましたが仁井田陞『中国法制史』増訂版（岩波書店、1952年）も評価の高いものです。

文科法制史からの体系的な概説書というの 少ないですが、大庭脩「講義ノート中国法制史概説」（『木片に残った文字：大庭脩遺稿集』柳原出版、2007年）が法学の考え方をもふまえたよき手引きとなっています。このほか梅原郁「唐宋時代の法典編纂」（『宋代司法制度研究』創文社、2006年）は、唐・宋時代の法典編纂概説ですが、前掲した滋賀秀三「法典編纂の歴史」の該当部分と読み比べることで、法学者の滋賀と歴史学者の梅原のアプローチの違いがわかると思います。

❖ 参考図書など

江戸時代は日本で明律の研究が広く行われ、多くの注釈書が出されました。その中で生まれた荻生徂徠の『明律国字解』は、現在でも、中国の法典の理解には欠かせない参考書となっています。弟の荻生北渓が翻刻した律および条例（皇帝の判断

に基づく単行立法やこれらが積み重なった先例をまとめたもの）と、国字解を対照した、内田智雄・日原利国校訂『律例対照底本明律国字解』（創文社、1966）は、巻末に索引もあり最も使いやすいです。江戸時代に刻された『明律国字解』の版本は、国立国会図書館デジタルコレクション（<https://dl.ndl.go.jp/>）でも閲覧可能です。

また、唐律の総則規定である名例律の滋賀秀三による訳注は、先述した唐律の後世への影響の大きさを考慮すると、すべての時代の法制研究にとってのよき参考書といつても過言ではないでしょう（『訳註日本律令』五（唐律疏議訳註篇一）東京堂出版、1979年）。

法制史料の解説・解題としては滋賀秀三編『中國法制史：基本資料の解説』（東京大学出版会、1993年）があり、古代から現代に至るまでの主要な法制史料を28項目に分けて解説しています。また、山本英史編『中国近世法制史料読解ハンドブック』（東洋文庫リポジトリで全文公開：<https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/>）は、宋代以降の法制史料の扱い方や読解方法について、具体的な史料を挙げて論じています。

専門論文については、法制史学会が、1980年以降の法制史に関する研究文献目録をWebサイトで公開し、検索・閲覧できるようにしています。1980年から1989年は、法制史学会編『法制史文献目録III（1980～1989）』（創文社、1997年）、1990年以降は機関誌『法制史研究』所載の研究文献目録によるものです。

- 法制史文献目録（1980～）（<https://www.jalha.org/bksrch.htm>）

（小島 浩之）

解説：音韻学～中古音と上古音

❖ 音韻学とは

「音韻学」というと、難解な分野であるというような印象を持たれる方が多いのではないでしょうか。「音韻学には素人が専門家しかいない」とか、「入門が一番難しい」等といった脅し文句を耳にすることもあります。有名なことばに「桃栗三年、韻鏡十年」というものもあります。また筆者が学生だった頃、音韻史の授業後にある先輩が思わず漏らしたことば——「バットを持たないでバッターボックスに立っている気分だ」——は音韻学が分かりにくい分野であるということを如実に表しているのかもしれません。

本稿ではこのように難解とされる音韻学の中でも、特に基本となる中古音と研究の進展が著しい上古音について紹介してみたいと思います。

ちなみに「音韻学」と「音韻論」は厳密には同じものではありません。大まかに言うと、音韻論は理論言語学の一分野であり、音韻学は専ら中国語音韻史を指します。両分野は別のものではありますが、基礎的な考え方に関しては共通する部分も多くあります。

本稿では中国語音韻学の基礎のこと、中古音と上古音に関することについてできるだけ簡単に紹介していきたいと思います。

◆ 用語の確認

「バットを持たずにバッターボックスに立っている」という表現は実に的を射ていると言えます。音韻学には数多くの専門用語があり、これを予め身につけておかないとなかなか理解することができません。このことが音韻学の入門の妨げとなっているようです。まずは最も基本的な用語を確認しておきましょう。

中国語の音節構造は IMVE/T から構成されます。「I (Initial)」は音節頭子音である「声母」、M (Medial) は副母音の「介音あるいは介母」を表し、V (Main

Vowel) は「韻腹または主母音、核母音」、E (Ending) は音節末子音あるいは副母音の「韻尾」を表し、この音節全体に T (Tone)、すなわち「声調」が覆いかぶさっていると考えられます。伝統的には、IMVE/T のうち、「I」を「声母」とするのに対して、声母を除く MVE/T をまとめて「韻母」とします。また韻母は介音の有無によって 4 種——「四呼」——に分類されます（図は大島（1997:163）を一部修正）。

- 開口呼：介音のない韻母のこと
- 齊齒呼：i をもつ韻母のこと
- 合口呼：u を持つ韻母のこと
- 摍口呼：ü を持つ韻母のこと

	四呼	i	u	直拗
開口	開口呼	×	×	直音
	合口呼	×	○	
合口	齊齒呼	○	×	拗音
	撮口呼	○	○	

中古音については「開口」と「合口」という二分法で論じられるのが一般的です。また表の右列にあるように、i を含まないものは「直音」、i を含むものは「拗音」と呼ばれます。

音韻学の専門用語は言語学一般の専門用語でも言い換えることができます。このことが却って音韻学を難解にさせ、近寄りがたいものにさせる要因の一つとなっているわけですが、中国語音韻学を専門にする場合はやはり音韻学の用語と言語学の用語を覚えなければなりません。さらにはその中国語訳、英語訳というように場合によっては、数種類の表現を覚えておかなければなりません。たとえば声母のひとつを表す「端母」という場合、以下のようなバリエーションがあります。

日本語	タンボ
ピンイン	Duānmǔ
音声学（日本）	無声無氣歯茎閉鎖音
音声学（中国）	舌尖不送气清塞音
音声学（英語）	voiceless unaspirated dental stop

これを IPA（国際音声記号）で表すと、/t/ というように一つの記号で表すことができてしまうのですが、現時点では「等韻学」の述語に加えて、上に挙げたような複雑な用語体系をある程度把握しておかなければなりません。もちろん等韻学の述語を用いることにメリットがないわけではありません。「端母」と言えば、声母の調音点、調音方法、有声性・有気性の有無などをたったの一言で言えてしまうわけですから。

❖ 中古音 (Middle Chinese)

「上古音」の概説に入る前に、まずは中古音について簡単に紹介しておきたいと思います。

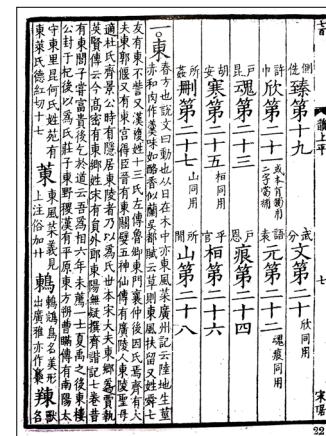
中古音は中国語音韻史上における最も重要な定点です。中古音から時代をさかのぼって上古音を論ずるにせよ、時代を降って近世音を扱うにせよ、中古音なしに論ずることはできません。

中古音には広義の中古音と狭義の中古音があり、前者は南北朝から唐末五代の頃までを含みます。後者は「韻書」である『切韻』(601年)に反映する音体系、すなわち「切韻音系」を指します。

◆ 中古音の推定資料

中古音の研究資料のなかで核となるのはもちろん『切韻』です。『切韻』は隋の時代(601年)に陸法言らによって編纂されたものですが、その原本はすでに散佚てしまっているので、北宋(1008年)の『廣韻』が資料として用いられます。『廣韻』の正式名称は『大宋重修廣韻』であり、切韻系韻書に増補・改訂が加えられたものです。増補・改訂と言っても、増字や注の増加がほとんどであり、音体系についてはほとんど手が加えられていないため、『廣韻』を使用したとしても基本的には切韻音系をターゲットとしていると言って良いでしょう。ちなみに切韻系韻書というと、儀鳳年間の『長孫訥言箋注切韻』、開元年間の孫愬『唐韻』

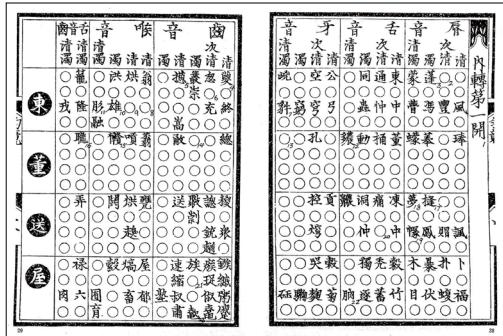
等があげられます（残巻があるのみ）。敦煌出土の残巻には「切一(S2683)」、「切二(S2055)」、「切三(S2071)」、「王一(P2011)」と称される写本があります。また北京故宮で発見された唐写本の王仁昫『刊謬補缺切韻』(「王二」)や唯一の完本である「王三」(または『完本王韻』)と称される王仁昫『刊謬補缺切韻』があります。王仁昫による増訂の過程については古屋(1984)に詳細な考察が見られます。



『大宋重修廣韻』上平声卷第一「東韻」

「韻書」とは詩の押韻の規範をまとめた、いわば作詩のための実用書であり、『切韻』は韻書の一つです。『切韻』では同音字が「小韻」というグループにまとめられ、それぞれの小韻には字音を表す「反切」が付されています。この反切を整理することによって『切韻』の音韻体系を明らかにすることが可能になるというわけです（☞「反切系聯法」）。『切韻』に加え、音節構造を図式化した「韻圖（等韻圖）」が中古音の研究資料として利用されます。最も年代が古いものに『韻鏡』と宋の鄭樵『通志』に見える「七音略」があります。制作年代も作者も不明とされますが、切韻系韻書の一種にもとづき、唐代中期頃までに作成されたと推定されます。

このほか本稿では紙幅の関係上、詳しく述べることはできませんが、中古音に先立つ資料として『玉篇』、中古音後期として慧琳『一切經音義』(788～810の間)等が主な研究対象とされます。慧琳『一切經音義』は唐末以降の韻の合流等が手にとるようにわかります。



『韻鏡』内転第一開

◆ 日本漢字音

中古音の再構には韻書と韻図のほか、中国の周辺言語に伝わった漢字音が用いられます。いわゆる日本漢字音、朝鮮漢字音、越南漢字音と呼ばれるものです。日本漢字音は「吳音(和音、対馬音)」、「漢音(正音)」、「唐宋音」というように層を形成しており、体系として伝承されたことがわかります。これを「層的伝承」と呼ぶことがあります(沼本(1986))。これに対して、朝鮮漢字音や越南漢字音には日本漢字音ほどはっきりとした層的伝承は見られないようで、層を分けることもなければ、それに対する呼称もありません(ただし河野(1968/1979)のように朝鮮漢字音を複層的とする見解もあります)。

吳音が中国語のどの時代のどの方言を母胎しているのかについてはまだ明確になっていません。一般的には『切韻』(601年)を下限とするそれよりも少し前の時代の(400~600年頃と推定)、北方の標準音とは隔たりのある言語が母胎であると推定されています。また伝承の経路については、中国から直接伝承したというよりは朝鮮半島を経由して伝来したものであるとの見方が有力です。漢音は切韻体系よりも後の体系であると考えられ、唐代長安音を反映する慧琳『一切經音義』の体系に近いとされます。

吳音と漢音の使い分けは文献にも現れます。主として仏典は吳音で読まれ、漢籍は漢音で読まれるというように資料によって用いられる体系が異なります。これは漢字音の伝承と学習の違いに起因するものと考えられています。

それでは吳音と漢音の違いについて、「唇音(両唇音)」を例に見てみましょう。たとえば幫母(p-)と滂母(p^h)は吳音・漢音ともにハ行に読みます。日本語では無気音と有気音の区別がないため(=有気音か無気音かによって意味を区別しない)、幫母(p-)と滂母(p^h)の違いは捨象されて取り入れられます。並母(b-)は中古音で有声音ですが、吳音では濁音バ行に読み、漢音では清音のハ行に読みされます。明母(m-)は吳音ではマ行、漢音ではバ行に読みます。これは唐代長安音でm->mb-というような音変化(非鼻音化または脱鼻音化)が起こっていたためであると考えられます。

	幫母 p	滂母 p ^h	並母 b	明母 m
吳音	ハ行	ハ行	バ行	マ行
漢音	ハ行	ハ行	ハ行	バ行

ただし韻尾に-ŋ等を有する場合は、非鼻音化が生じません。たとえば「寧」は中古音で韻尾に-ŋを有するため、漢音で「デイ」とはならず、「ネイ」のままです。これに対して韻尾に鼻音を持たない「泥」や「奴」はそれぞれ漢音で「デイ」、「ド」というように非鼻音化を経たことを反映しています。

ちなみに吳音よりも古いものとして「古音」と呼ばれるものがあります。たとえば「移(ヤ)」、「意(オ)」、「止(ト)」、「奇(ガ)」。いずれも上古音に近い音であるわけですが、これら古音も中国から直接上古音を輸入したというわけではなく、やはり朝鮮半島を経由して伝承したものとされています。

以下、中古音研究において中心となる『切韻』の構造と『韻鏡』の構造を見てきましょう。

◆『切韻』の構造

『切韻』は三層からなります：



まず声調(上平声、下平声、上声、去声、入声)によつ

て分類されます。平声が上平声と下平声の上下に分けられるのは単純に平声字が多いからであるとされます。各声調の内部は相互に押韻可能な韻ごとに分類され、その韻を代表する一文字が韻の名称、すなわち「韻目」となります。『広韻』は206の韻からなり、原本『切韻』は推定193韻の韻目から構成されます。各韻目はさらに「小韻」にわけられ、基本的に同じ小韻に所属する文字は完全に同音となります。そしてこの小韻を代表する文字——「小韻代表字」——の注釈の最後に小韻の字音を表す「反切」が付されます。反切の後には漢数字が加えられていますが、これは同じ小韻に含まれる文字数を示しています。たとえば「東」の小韻には反切（「徳紅切」）のあとに「十七」とあり、これは「東」の小韻には17字の同音字がおさめられているということを表しています。

◆ 四声相配：東董送屋

韻の配列順は、声調間（平・上・去・入）で統一されているので、平声の韻の並び順と同じように、上声・去声・入声の韻も並べられています。つまり平声「東韻」と上声「董韻」、去声「送」は（声母と）声調を除き同音となります。入声は韻尾に-p, -t, -kを持つ音節ですが、入声「屋」は韻尾に-kをもち、東韻の-ngとは調音点を同じくします。これを四声相配と呼びます。下表で母音と韻尾（の調音点）が同じであることを確認しましょう（中古音の「表記」は Baxter (1992) による）。

平声	上声	去声	入声
東	董	送	屋
tuwng	tuwngX	suwngH	'uwk
徳紅切	多動切	蘇弄切	烏谷切

四声相配という配列のルールがあるため、平声の韻目で他の声調の韻目を表すこともあります。たとえば「送韻」を「東韻去声」と言い換えることも可能です。

ちなみに入声は日本漢字音でフ・ク・ツ・チ・キで（「葉」：エフ）、粵語や閩南語では-p, -t, -kで終わります。ただし英語等の音節末子音とは異なり、開放のない無声閉鎖音（内破音）です。

◆ 反切

「反切」とは小韻に所属する文字の字音を漢字二文字で表したものであり、小韻代表字の注釈の最後に付されます。たとえば「A BC 反（あるいはBC切）」とある場合、Aの発音をBとCの漢字二文字で表しています。このうち、BはAの声母を、CはAの韻母を表します。Aを「反切帰字」、Bを「反切上字」、Cを「反切下字」と呼びます。少し難しい言い方をすると、反切帰字は反切上字と「双声」の関係であり（声母を同じくする関係）、反切帰字と反切下字は「疊韻」の関係にあります（韻母を同じくする関係）。

実例を挙げてみてみましょう。上に挙げた上平声第一の「東韻」の小韻「東」には全部で17文字が収められています。小韻代表字である「東」の反切を見てみると、「東, …徳紅切」とあります。ここでは東が「反切帰字」であり、「徳」が「反切上字」で「東」の声母を表し、「紅」が「反切下字」で「東」の韻母を表します：

$$\begin{array}{ccc} A & B & C \\ \text{反切帰字} & = & \text{反切上字} + \text{反切下字} \\ \text{東 tuwng} & & \text{徳 t} \boxed{\text{ok}} & \text{紅 h uwng} \end{array}$$

四角で囲った部分を組み合わせると、「東」の音になるというわけです。小韻「東」に含まれる17文字はすべてこの「徳紅切」の字音となります。

ただし「紅」は現代普通話で読むといわゆる第二声（陽平）に読まれるため、第一声の「東」の声調とは一致しません。これは「紅」が後の音変化を被ったことによるものですので、いまは問題にはなりません。

この「徳紅切」という反切は音韻学を学ぶ際に必ず出てくる反切ですので、これを知らない音韻学者はこの世に存在しませんが、「紅」が第二声（陽平）であることを考えると、入門段階で示す例としてはあまり適切ではないかもしれません。

また反切は直音と拗音の違い（介音-iの有無）も反映します。（切韻系韻書では）反切帰字（A）が直音の場合は直音の反切上字（B）が選ばれ、帰字（A）が拗音の場合は拗音の反切上字（B）が選ばれる

というように、直拗の違いも考慮される傾向にあります。これは反切が理論的に作られたのではなく、口承によって生み出されたものであるからと考えられます。反切上字の直音と拗音の使い分けはよりなめらかに発せられるように工夫された結果であると言えます。

また漢字によって複数の字音を有することもあります。たとえば「東」の小韻に含まれる「凍」には「又都貢切」とあります。これは「凍」が「徳紅切」という字音だけではなく、「都貢切」という反切によって表される字音（送韻=東韻去声）も有していたことを示しています。これを「又音反切」（「又音」あるいは「又切」）と称します。

反切の創始者は魏の孫炎とされますが、実際のところはよくわかつていません。梵語の影響であるとか、中国語独自の特徴に基づくとか、色々な説があります。中国語の特徴に基づくというのは、たとえば『論語』には「之」の声母と「於」の韻母を合わせた「諸」のような縮約語がありますが、原理としては反切と大きな違いはありません。つまり反切を生み出す下地がすでにあったと考えられるわけです。

いずれにしてもこの反切を整理することで、当時の音体系の大枠を捉えることができます。以下、反切の整理について見ていきましょう。

◆ 反切系聯法

清朝の陳澧による「反切系聯法」とは『廣韻』に見える反切を系聯させる——すなわち「つなぎあわせる」——方法で、これを用いて『廣韻』の反切を帰納的にグループ分けすることが可能になりました。まずは声母（反切上字）の具体的を見てみましょう。

「多」：得河切

「旦」：得按切

「多」と「旦」の反切上字はどちらも「得」が使われています。したがって「多」「旦」「得」はみな同じ声母（端母）であったと推定されます。次に韻母を見てみましょう。

「東」：徳紅切

「公」：古紅切

「東」と「公」の反切下字はどちらも「紅」が使われています。したがって「東」「公」「紅」はみな同じ韻母（=東韻）であったと推定されます。これが反切系聯法と呼ばれる方法です。すべての反切がうまく系聯するわけではないので、研究者の採る方法によって結果に差異が生じますが、陳澧は反切系聯法によって声母40類、韻母311類を導き出しています。

◆『韻鏡』の構造

『韻鏡』は『切韻』の193韻（『廣韻』206韻）を43枚の図（転図）に置き換えたものです。『韻鏡』は縦軸と横軸から構成され、その交点から字音を知ることができます。

縦軸は二層構造であり、まずは声調に基づき上から平・上・去・入の順に分類されます。各声調はさらに一等から四等までの「等位」に基づき分類されます。平声を取り出して見てみましょう。

平声	一等
	二等
	三等
	四等

横軸も二層からなり、まずは唇音・牙音・舌音・歯音・喉音の「五音」（半舌音と半歯音を含めると七音）に分類され、さらに清音・次清音・全濁・次濁の4種に分類されます（『韻鏡』では「次濁」を「清濁」としますが、以下すべて「次濁」とします）。これが「字母」すなわち「三十六字母」に対応します。唇音を取り出して見てみましょう。

唇音				
清濁	濁	次清	清	

唇音・牙音・舌音・歯音・喉音の「五音」はいわゆる調音点を表し（一部は調音方法も含む）、清音・次清音・濁（全濁）・次濁（清濁）の4種は発声類

型 (phonation type、次濁については調音方法) を表します。「清音」は無声無気音、「次清音」は無声有気音、「濁 (全濁)」は有声無気音 (Karlgren は有声有気音を再構しますが、現在では有声無気音が一般的)、「次濁」は鼻音に対応します。ちなみに『韻鏡』の横軸左には「齒音舌」とありますが、これは半舌音と半齒音と呼ばれるものです。

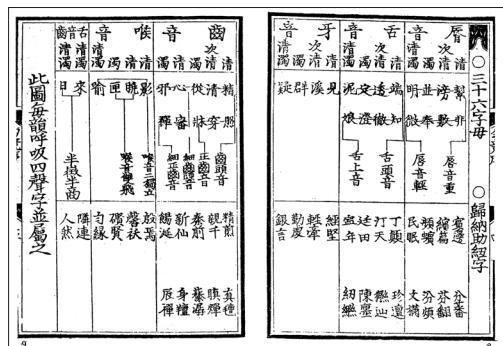
「韻鏡十年」と言われるほどですので、韻図は使い慣れるまで、少し時間がかかるかもしれません。が、五十音図を思い出してみてください。五十音図も横軸は子音の調音点と調音方法 (あ・か・さ・た・な...) を表し、縦軸が母音の違いを表します。基本的な概念・構造は『韻鏡』とまったく同じものです。

◆ 等位

縦軸の等位は「一等」「二等」「三等」「四等」に分類されます。大まかに言うと、等位は母音の広さ・狭さ (舌位の高さ) を反映しています。「一等」が口の開きが最も広く、順に狭くなっています。「三等」は介音 -i- を有します。「一等」に分類される韻を「一等韻」と称します。ちなみに東韻の反切をグループ分けしてみると (反切系聯法)、2 系列の反切があるということがわかります。つまり東韻には二種類の韻母が含まれていることになります。『韻鏡』ではそれぞれ「一等韻」と「三等韻」に配置されます。

◆ 字母 (三十六字母)

横軸は調音点、調音方法、発声類型 (有気性、有声性等) によって分類されていますが、これと同じ声母を持つ字の中から 36 種の代表字が選ば



『韻鏡』「三十六字母」

れています。これを「三十六字母」と称します。三十六字母は転図には直接表出されず、巻首の「三十六字母図」に示されています。

唇音を例に等位との関係を見てみましょう (字母の横に中古音の再構音を加えています)。

唇音				
次濁	濁	次清	清	
明 m	並 b	滂 p ^h	幫 p	一等
明 m	並 b	滂 p ^h	幫 p	二等
明 m 微 m _j	並 b 奉 v	滂 p ^h 敷 f ^h	幫 p 非 f	三等
明 m	並 b	滂 p ^h	幫 p	四等

三等をみてみると、幫組 (幫滂並明) と非組 (非敷奉微) の 2 系列が見られます (前者 (p ~ m) を「重唇音」、後者 (f ~ m_j) を「軽唇音」と称す)。このように等位の違いによって声母が異なることがあります。

◆ 重紐と等位

中古音には「重紐」とよばれる少し厄介な (裏を返せばおもしろい) 問題があります。「重紐」とは、別的小韻に属するにもかかわらず (= 韵母を同じくし、声母を異にする)、反切を系聯してみると声母も同じで、まったくの同音であるかのように見えるものを指します。

たとえば支韻の「奇 (渠羈切)」と「祇 (巨支切)」はどちらも同じ支韻に所属するので、韻母はまったく同じはずです。それぞれ別の小韻の代表字ですでの、「韻母を同じくし、声母を異にする」ものと予想されます。ところが、反切上字の「渠」と「巨」は同じ声母 (群母 g-) に分類されるため、韻母も声母も同じグループに分類されることになります。このように同音の小韻が重複したように見える対立を「重紐」と称します。過去の研究ではしばしば無視される重紐の対立ですが、この対立は声母の口蓋音化の有無 (または介音の口蓋性の強弱) であるとされています。このように重紐の対立がある場合、「奇」を重紐 B 類、「祇」を重紐 A 類と称します。

さてこの重紐ですが、『韻鏡』では重紐 B 類は

3等に置かれ、重紐A類は4等に配置されるというように異なる等位に配置されます。また重紐の対立は朝鮮漢字音、越南漢字音、上代特殊仮名遣に反映するだけでなく、上古音とも関係があります。このように重紐の対立は反切以外からもその存在が認められます。

◆ 十六摂

中古音の韻母は韻尾の種類によって「摂」と呼ばれる16種のグループに分類されます。いくつか例を挙げておきましょう。たとえば果摂-øには「歌韻、戈韻」、効摂-uには「豪韻、肴韻、宵韻、蕭韻」、山摂-nには「寒韻、桓韻、刪韻、山韻、仙韻、元韻、先韻」、宕摂-ŋには「唐韻、陽韻」が含まれます。以上はいわゆる「内転系」の摂(一部)になります。「外転系」には、遇摂-ø「模韻、魚韻、虞韻」、流摂-u「侯韻、尤韻、幽韻」、臻摂-n「痕韻、魂韻、臻韻、真韻、諱韻、殷韻、文韻」、通摂-ŋ「東韻、冬韻、鍾韻」等があります。内転と外転の違いについては諸説ありますが、母音の違いによると考えられています。

◆ 中古音韻母体系

中古音の音価は研究者によって出入りがありますが、ここでは三根谷（1972）の中古音の音価を挙げておきます（一部修正）。

摂	1等	2等	3等	4等
通-ŋ	東 $\text{t} \text{auŋ}$ 冬 uŋ		東 $\text{t} \text{iuaŋ}$ 鍾 iuaŋ	
江-ŋ		江 auŋ		
止-i			支 ie/ueiAB 脂 iei/ueiAB 之 iAI 微 iAI/iuAI	
遇-ø	模 uʌ		魚 iʌ 虞 iʌ	
蟹-i	泰 ai/uai 咍 ai 灰 uAI	佳 ai/uaI 皆 ei/uei 夬 ai/uai	祭 iai/iuaiAB 廐 iai/iuai	齊 ei/uei
臻-ŋ	魂 uʌn 痕 ʌŋ		真 ienAB 諱 iuənAB 臻 ien 文 iʌn 欣 iʌn 元 ian/uaŋ	

山-n	寒 an 桓 uan	刪 an/uən <small>山 ən/uən</small>	仙 ian/uaŋAB	先 en/uen
効-u	豪 au	肴 au	宵 iau	蕭 eu
果-ø	歌 a 戈 ua		戈 iua	
仮-ø		麻 a/ua	麻 i/a	
宕-ŋ	唐 aŋ/uŋ		陽 iŋ/uŋ	
梗-ŋ		庚 aŋ/uŋ 耕 eŋ/uŋ	庚 iŋB/iuŋB 清 iŋ/uŋA	青 eŋ/ueŋ
曾-ŋ	登 ʌŋ/uŋ		蒸 iŋŋB/ieŋB	
流-u	俟 ʌu		尤 iʌu 幽 ieuAB	
深-m			侵 iemAB	
咸-m	覃 ʌm 談 am	咸 em 衡 am	塩 iamAB 嚴 iám 凡 iám	添 em

* ABとあるのは重紐の対立がある場合

* 平声の韻目のみ

* 之韻と蒸韻については平山久雄（1966）を参照

❖ 中古音声母体系

中古音声母体系を挙げておきます（三根谷（1972）を一部修正。口蓋化-ŋについて省略。）。

幫 p	滂 p^h	並 b	明 m			
端 t	透 t^h	定 d	泥 n	來 l		
知 t	徹 t^h	澄 d				
章 tʂ	昌 $tʂ^h$	常 dʐ	曰 n̥	書 s̥	船 z̥	以 j
精 ts	清 ts^h	從 dz		心 s̥	邪 z̥	
莊 tʂ	初 $tʂ^h$	崇 dʐ		疏 ſ̥	俟 z̥	
見 k	溪 k^h	群 g	疑 ɳ	曉 x̥	匣 y̥	影 ?

* 三根谷説では匣母と于母を同一音素に、泥母と娘母も同一音素としています（ここでは示していません）。このほか中古音の再構音は平山（1967：145-148）がよく利用されます。

◆『切韻』と『韻鏡』

『切韻』から導出される切韻音系と『韻鏡』の音体系は必ずしも一致しません。たとえば重唇音(幫組)と軽唇音(非組)の違いは、『切韻』の反切からは導出されません。つまり『韻鏡』に見られる

軽唇音は切韻音系よりも後の音韻体系を反映したものであると考えられます。また歯音については、『韻鏡』では正歯音が一系列しか用意されていませんが、切韻体系では歯上音（あるいは正歯音2等）と正歯音（正歯音3等）の二系列に分類されます。唐代中期以降、様々な変化が見られるようになるので、切韻音系と『韻鏡』に反映する音韻体系の違いについては十分に注意する必要があります。

以上が中古音に関する最も基本的な知識です。本稿では切韻の成立背景、切韻系韻書・韻鏡の書誌学的研究、切韻系韻書（残巻）に基づく切韻の復元、重韻、重紐と四等、類相関、中国語諸方言、日本漢字音との関係等についてはほとんど触れていません。まずは基本的な概念を把握した後で、各方面的専門書を読んでみてください。

参考資料（Web上のものに関しては後述）

- 「漢字音【中国の音韻】」（遠藤光暉、『日本語学大辞典』、東京堂出版、2018）
- 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」（平山久雄、『東洋学報』第49巻1号、1966）
- 「中古漢語の音韻」（平山久雄、『中国文化叢書I 言語』、大修館書店、1967）
- 「朝鮮漢字音の研究」（河野六郎、『河野六郎著作集2』295-512頁、平凡社、1968/1979）
- 「王仁昫切韻と顧野王玉篇」（古屋昭弘、『東洋学報』第65巻、167-201頁、1984）
- 「越南漢字音の研究」（三根谷徹、東洋文庫、1972）
- 『音韻学入門—中古音篇一』（中村雅之、富山大学人文学部中国言語文化演習テキスト、1998）
- 『日本漢字音の歴史』（沼本克明、東京堂出版、1986）
- 『〈辞書〉の発明』（大島正二、三省堂、1997）
- 『韻書と等韻図I』（太田斎、神戸市外国语大学外国语研究所、2013）
- 『中国古典を読むために』（賴惟勤著、水谷誠編、大修館書店、1996）
- 『中国語音韻論』（藤堂明保、光生館、1980）

❖ 上古音

20世紀後半以降、長江流域を中心に膨大な量の出土資料が発見・公開されています。それに伴つ

て上古音研究も日々進歩しています。後世の手垢に塗れていない生の資料を扱えるとあって、竹簡をもとに再構された上古音はこれまで以上に現実味のあるものになりつつあります。そこで以下では近年の成果について紹介していきたいと思います。

◆ 上古音の時代区分

研究者によって上古音の時代区分は必ずしも一致していません。諧声時代と詩経時代の2期に分類するものやこれに太古時代（遠古）を加えて3期に分類する等さまざまな見解があります。これは基づく資料によって再構される音体系に差異が見られることになります。たとえば諧声関係を基礎とした音系と『詩経』を基に再構された音系ではやはり差異が見られます。

ここで一つ例を挙げておきましょう。「世」は「葉」と諧声関係を有します（=「世」が「葉」の声符）。「葉」は中古音緝韻なので韻尾に-pを持ちます。これは広東語で[jip]となること、日本漢字音で「エフ」と読まれることからも明らかです。したがって、「葉」は上古音でも韻尾*-pを有していたと考えられます。同じ声符を有しているため（「世」はそれ自体が声符）、「葉」と諧声関係にある「世」も上古では韻尾に*-pを有していたと考えられます。ところが「世」は中古音では祭韻—開音節（音節末に子音なし）——となり、『詩経』では「揭」「害」「撥」という韻尾に*-tを有する語と押韻します（再構音はBaxter (1992)。本稿では「*」が付く場合は上古音の再構音を表します）。

『詩経・大雅・蕩』

文王曰咨	
咨女殷商	
人亦有言	
顛沛之揭	*kjat
枝葉未有害	*fikat(s)
本實先撥	*bat
殷鑒不遠	
在夏后之世	*hljaps > *-ts

このように「世」と「葉」の諧声関係が成立し

た時代においては、「世」も韻尾に *-ps を有しており、これが『詩經』の時代になると、*-ts に変化したと推定されます。さらに時代が下ると、「世」の入声韻尾 *-t が脱落し、開音節になったと考えられます（音節末の *-s は去声への変化を促すものと考えておいてください）。

以上のような例を根拠にして上古音を諧声時代と詩經音時代に分類するというわけです。このように基づく資料によって再構される音体系がやや異なるので、注意が必要です。

一方で、特に時代を区分するわけではなく、上古音を反映する文献や諸方言（特に閩語）に見られる様々な現象ができる限りすべて説明できるように再構したものと上古音とするという考え方もあります。

◆ 上古音の「韻部」

経典を正しく理解するための研究が古音研究（=上古音研究）の端緒であり、『詩經』等の押韻の整理が目的の一つでした（「古音」というと上古音、「今音」というと中古音を指す）。伝統的には、『詩經』の押韻が当時の韻の枠組みと一致しない場合（=押韻とはみなせない場合）、叶韻をはじめとする「改経」が行われてきましたが、明から清初になると、陳第、顧炎武らを筆頭とする考証学者らの手によって韻のおおよその枠組み——すなわち押韻可能な枠組みが明らかにされました。この枠組みを「韻部」と称します。

◆ 韵部

明末清初の顧炎武の十部説（10の韻部に分類）にはじまり、段玉裁による支脂之の三部分部、真文の分部、尤侯の分部、戴震の入声独立、孔広森による東冬の分部、王念孫の至部、章炳麟による隊部と至部の分部、そして王力による脂部と微部の分部というように時代が下るとともに韻部の枠組みがより細分化します。Karlgren、李方桂の段階に至って、韻部の枠組みは概ね確定したと言って良いでしょう。

◆ 段玉裁「同声者必同部也」

このように脚韻字の整理によって韻部の枠組みが明らかとなったわけですが、しかしすべての文字が上古の文献において脚韻字となるわけではあ

りません。文字によっては脚韻字にもならず、読若、異文、声訓でも現れないことが少なくありません。これに加えて、押韻は声母について何の情報も与えてはくれません。このような場合は中古音の枠組みから上古の字音を類推する（投影する）ほかありませんでした。再構の証拠が少なければ、復元される再構音の蓋然性も自ずと低くなると言わざるを得ません。

そこで重要なのが段玉裁による「同声者必同部也（六書音均表）」という「高らかな宣言」です（古屋（2010：8））。すなわち「諧声符を同じくするものは必ず同じ部に帰属する」という仮説です。漢字の大部分（およそ8割）が形声文字であるということから、諧声符を整理すれば、大半の漢字の韻の帰属と声母を見極めることができます。もちろん形声文字が作字された時代や地域は一様ではないので、その点については十分に注意を払わなければなりません。

それでは諧声関係（諧声符を共有する関係）の有無を見極めるための「諧声原則」について見てみましょう。

◆ 諧声原則

諧声関係は「同音あるいは類音（音が似ている）」であれば成立するとされます。「同音」が意味するところは問題ないとして、「類音（音が似ている）」とは一体どういうことでしょうか。李方桂（1971/1980：10）に見える諧声原則を大まかにまとめると以下のようになります：

- (1). 上古音では調音点を同じくする閉鎖音は互いに諧声可能。
- (a). 軟口蓋閉鎖音は互いに諧声可能、喉音（影母および曉母）と諧声関係にある例もあるが、鼻音（疑母）とはあまり諧声関係はない。
- (b). 歯茎閉鎖音は互いに諧声可能であるが、鼻音（泥母）とはあまり諧声関係はない。歯茎破擦音あるいは摩擦音とは諧声関係はない。
- (c). 両唇閉鎖音は互いに諧声可能だが、鼻音（明母）とはあまり諧声関係はない。

(2). 上古音の歯茎破擦音または摩擦音は互いに諧声可能だが、歯茎閉鎖音とは諧声関係はない。

このままではやはり難解ですので、古屋(2003: 95-96)を参考に、具体的に見てみましょう(一部修正)。

唇音の系列

幫 p	滂 p ^h	並 b	明 m
方	芳	防	
祕			密

閉鎖音は互いに諧声関係を有しますが(幫滂並)、鼻音(明母)とはあまり諧声関係を有しません。

牙喉音の系列

見 k	溪 k ^h	群 g	疑 n̄	影 ?	曉 x	匣 y	于 y
哥	可	奇	鑄	阿	呵	河	
	誇			汙	吁	鄂	于

牙音と喉音はしばしば通用します。近年の研究では、牙音(見溪群疑)と喉音(影曉匣于)の諧声系列の分布の違いを根拠に軟口蓋閉鎖音(*k-, *k^h-、*g-)に加えて、口蓋垂音(*q-, *q^h-、*G-)が再構されることもありますが、本稿では扱いません。また閉鎖音(見溪群)は鼻音(疑母)とはあまり諧声関係を有しません。

歯音の系列

精 ts	清 ts ^h	從 dz	心 s	莊 tʂ	初 tʂ ^h	崇 dʐ	疏 ʂ
精	清	情	姓	繕		靖	生

破擦音(精清从莊初崇)と摩擦音(心疏)は互いに諧声関係を有します。しかし舌音(下記参照)とは諧声関係を有しません。

舌音の系列

	端 t	透 t̪	定 d	知 t̫	徹 t̪̫	澄 d̫
T	旦	坦	但	鱣		袒
L		床	塗			除

	章 t̪s	昌 t̪sh	常 dʐ	書 s̫	船 ʐ̫	以 j	邪 z
T	翫		澶	羶			
L				賒	荼	余	徐

舌音系列は表からもわかるように、中古音の舌頭音(端透定)、舌上音(知徹澄)、正齒音3等(章昌常書船)と以母・邪母を含みます。正齒音3等は舌音と諧声関係を有していることからも、上古では舌音に由来すると考えられます。

またこの舌音の系列はT-typeとL-typeの2類に分類されます。原則としてT-typeとL-typeの諧声系列が混在することはありません(後述)。

李方桂の諧声原則で述べられるように、調音点と調音方法を同じくする場合は、発声類型(有気性、有声性的有無)が異なっていたとしても諧声関係を有します。たとえば「精」と「清」は前者が精母——すなわち無声無気音*ts-であり、後者は清母——無声有気音*ts^h-ですが、気音の有無を問わず、どちらも「青」を声符とし、諧声関係を有しています。有声音(從母)の「情」についても同様です。

上に挙げた諧声原則が諧声・通用関係を見極める上の基本となります。しかし実際の諧声関係はさらに複雑であり、この枠組みを越えるものが多数ありますが、それでも「ある一定の枠組み」からはみ出るものはそれほど多くありません。近年の上古音研究を基礎にした諧声・通用関係の枠組みについては古屋(2010)が参考になります(一部後述)。

◆近年の韻部研究の成果

20世紀後半以降、韻部研究における最も重要な成果は「一つの韻部に対して、母音は一つであるとは限らない」という点が明らかになったことです(根拠となるのは前舌母音仮説、円唇母音仮説、六母

音仮説等と呼ばれるものですが、ここでは仮説の説明はしません)。これは極めて重要な考え方ですが、すべての研究者——とくに他分野——の間で共有されているとは言えません。

たとえば「元部」を見てみましょう。従来の研究では元部に *-an というように、ただ 1 種類の韻母を認めるだけでした。したがって同じ元部に所属するものは、互いに通用可能であると見なされていました。しかし近年の研究では、元部に主母音の異なる 3 種類の韻母 (-an, *-en, *-on) を認めます。この 3 種の韻母は互いに押韻も通仮もしません。もちろん例外もありますが、原則として *-an は *-an とのみ押韻・通仮が可能であり、*-on は *-on としか押韻・通仮しません。

具体例を見てみましょう。「原」と「願」は中古音ではどちらも合口 -won であり、声調を除き同音となりますが、上古ではそれぞれ声母と主母音が異なります（中古音の表記は Baxter (1992)）。

上古音	中古音	普通話
原 *ng ^w jan	> ngjwon	yuán
願 *ngjons	> ngjwonH	yuàn

「原」の韻母は *-an と再構されます。声母には円唇性を帯びた軟口蓋鼻音 *ng^w- が再構され、中古音合口への変化が説明されます。これに対して、「願」の韻母は *-on と再構されます。これは《願》が金文等では「元」を声符にする字で表されることによります（{} は語 word を表す）。「元」の韻母は *-on と再構されるので、《願》の韻母も本来は *-on であったと考えられます。『説文』によると、「願」の声符は「原」とありますが、これは《願》の *-on が（前漢以降に）*-wan のように二重母音化した後の解釈でしょう。「原」と《願》は中古音までに（声調を除き）同音となります。いずれにせよ「原」と《願》は原則として互いに押韻・通仮はしません。

ここで面白い例を一つだけ挙げておきましょう。『詩經』「齊風・猗嗟」を見てみると次のようにあります。

猗嗟^變兮、清揚^婉兮、舞則^選兮、射則^貫兮、
四矢反^兮、以禦亂^兮

脚韻字「變、婉、選、貫、反、亂」のうち、「反」を除く諸字の韻母は *-on です。これに対して、「反」の韻母は *-an と再構されます。すでに述べたとおり、母音が異なるので、これでは押韻しているとは考えられません。ところが近年公開された上海博物館蔵戦国楚竹書『孔子詩論』では「於（猗）差（嗟）曰、“四矢弁兮”」とあり、ここでは「反」ではなく「弁」と表記されています。「弁」の韻母は他の資料に基づき *-on と再構されるので、「弁」は「變、婉、選、貫、亂」と押韻していることになります。「弁」が「反」と表記されるようになったのは、*-on が二重母音化し *-wan になった後（少なくとも前漢以降）のことであると推定されます。

元部に -on が再構されることで、たとえば『説文』に見える「短、豆声」のような元部と侯部の奇妙な説解も理解しやすくなります。李方桂の再構音によると「短」*tuanx と「豆」*dugh となり、その関係性がまったく不明瞭ですが、たとえば円唇母音 *-on を採用した Baxter の再構によると「短」*ton?、「豆」*dos となり、韻尾は異なりますが、主母音が一致します。ちなみにこの上古音の円唇母音は閩語との対応関係からも支持されるため極めて蓋然性の高い仮説と言えるでしょう（秋谷・野原（2019））。

このように一つの韻部に数種の母音を認める韻部には、元部、歌部、月部、祭部、文部、微部、物部、幽部、覓部、宵部、藥部、侵部、緝部、談部、盍部があります。主母音が異なれば原則として通用不可と考えられるので、通仮の可否を考える際には細心の注意を払う必要があります。韻部の表を以下に挙げておきます（Baxter (1992: 562-563) を一部修正）。

-n	真 *-in/-ing	文 *-ən	文 *-un
	元 *-en	元 *-an	元 *-on
-t	質 *-it	物 *-ət	物 *-ut
	月祭 *-et	月祭 *-at	月祭 *-ot

-j	脂 *-ij	微 *-ej	微 *-uj
	歌 (*-ej?)	歌 *-aj	歌 *-oj
-ø	(*-i > *-ij?)	之 *-ə	幽 *-u(*-iw)
	支 *-e	魚 *-a	侯 *-o
-k	(*-ik > *-it)	職 *-ək	覓 *-uk (*-iwk)
	錫 *-ek	鐸 *-ak	屋 *-ok
-ŋ	(*-ing > *-in)	蒸 *-əŋ	冬 *-ung
	耕 *-eng	陽 *-ang	東 *-ong
-w	幽 *-iw(*-u)		
	宵 *-ew	宵 *-aw	
-wk	覓 *-iwick (*uk)		
	藥 *-ewk	藥 *-awk	

◆ *-r- の再構

Jaxontov (1960) の研究を契機に、中古音二等韻と三等韻の一部（重紐 B 類）に対応する上古音には *-r- (*-rj-) が再構されます（異説もあり）。従来の研究では *-l- が考えられていましたが、近年の研究では *l- と *r- が入れ替えられるため、*r- が再構されます (*l- は舌音の L-type)。

この二等韻と三等重紐 B 類への *-r- の再構は、二等韻に來母字がほとんど存在しないことや（常用字は「冷」のみ）、來母字と諧声関係にある字の多くが二等韻であることによります（たとえば「監二等」：「藍一等」、「剝二等」：「彖一等」等）。これにより複声母（二重子音）の説明も格段にわかりやすくなりました。このほか二等韻に *-r- を再構することとの利点は舌上音（知徹澄娘）と正歯音二等（莊初崇疏）のそり舌音化を説明できること（ただしそり舌ではなく口蓋化した声母とする説もあります）、そして二等韻の母音の前より化と弛緩化（[-back]、[-tense]）を説明することができる点にあります。たとえば「肩」と「間」は上古音では元部の *-en と再構されますが、中古音二等の「間」には *-r- が再構されます（Baxter (1992: 259)）。

	上古音	中古音	普通話
肩	*ken	> ken	> jiān
間	*kren	> kən	> jiān

「肩」は中古音四等の先韻、「間」は中古音二等

の山韻となります（すでに魏晋の頃には押韻できないようです）。「肩」と「間」は現代北京語ではどちらも jiān と発音されますが、たとえば閩東語で「肩」は kien̄、「間」は kaŋ̄ となるように、多くの方言で区別されます。

重紐 B 類に関しては、*-rj- が第一口蓋音化を妨げると考えられます。たとえば「技」のような重紐 B 類は口蓋音化を生じないため中古音でも見母 k- のままで（☞「第一口蓋音化」）。

従来の研究では、同じ韻部内で中古音一等韻になるものと二等韻になるものを区別するために、たとえば介音として *-e- や *-o- を主母音の前に再構するというような措置がとられていました。しかし *-r- を再構することでより多くの現象を一度に説明することが可能となり、シンプルな体系になりました。

◆ 近年の声母研究の成果

基本的に上古音の声母は中古音と諧声関係をもとに再構されます。最もベーシックな諧声原則についてはすでに述べたとおりですが、ここでは特に注意すべき点をいくつか紹介しておきたいと思います。

① 軽唇音（非敷奉微）はない

『韻鏡』を見てみると、三十六字母に軽唇音が含まれていますが、上古音では（切韻音系でも）軽唇音について考える必要はありません。

② 舌音、正歯音 3 等、歯上音は T と L に分類

（これはすでに述べたとおりですが）まずは下記の諧声系列の表を見てください。

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
旦	坦	但	鱣		祖	蕪		漚	羶			
	塗			除				賒	荼	余	徐	

「旦」を声符にする系列を T-type (T 類)、「余」を声符とする系列を L-type (L 類) と称します。この T-type と L-type の諧声系列上の分布の違いをマルバツ形式で表すと下記のようになります。

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○
×	○	○	×	○	○	×	○	×	○	○	○	○

網掛け部分に着目してみると、T-type は中古音端母、知母、章母、常母と諧声関係を有しますが、船母、以母とは諧声関係を有しません。反対に、L-type は中古音端母、知母、章母、常母とは諧声関係を有しませんが、船母、以母とは諧声関係を有します。このように「端母、知母、章母、常母、船母、以母」との諧声関係の有無により、その語が上古で T-type であるのか、または L-type であるのかについて判断することができます。またこの対立は戦国出土資料に見える通仮からも支持されます。諧声系列に基づき T-type とされる語は戦国出土資料中では必ず T-type の語と通仮し、L-type の語とは通仮しません。L-type についても同様です。

例を一つだけ挙げておきましょう。「單」を声符とする「彈」は中古音定母 d- です。また「兌」も同じく中古音定母 d- です。しかし諧声系列を見てみると、それぞれ分布が異なります。

端	透	定	知	徹	澄	章	昌	常	書	船	以	邪
單	嘩	彈			戰	燁	禪		×	×		
×	脱	兌	×			×		×	說		悦	

「彈」は端母、章母、常母と諧声関係がありますが、船母、以母とは諧声関係を有しません。したがって T-type、*dan と再構されます。これに対して、「兌」は以母と諧声関係を有しますが、端母、知母、章母、常母とは諧声関係を持ちません。したがって L-type、*lots と再構されます。

	上古音	中古音	普通話
彈	*dan	> dan	tán
兌	*lots	> dwajH	duì

従来の研究ではどちらも *d- と再構されていましたが、近年では T-type と L-type に分けるのが主流となっています。

③ 以母は 2 種以上の上古音声母に由来

中古音以母 *y-* ([j]) については、すでに Karlgren が *d-、*g-、*z- を再構するように、諧声系列に基づき数種類の上古音が推定されています。李方桂 (1971/1980) になるとやや簡化し、*r-、*brj-、*grj- 等となります。近年の成果に基づくならば、以母は少なくとも 2 種に由来するとされます。

● *l- (流音) に由来する以母—「余」 *lja

● *g- (有声口蓋垂音) に由来する以母—「夜」
*cjAks

個別の例では研究者間に出入りが見られますが、*l- は Karlgren の *d- に相当します。*g- は Karlgren の *g- に相当します。

このほか、*r- に由来する以母もあるかもしれません。「聿」の諧声系列を見てみると、幫母「筆」(重紐 B 類) や來母「律」があるため *r- が最もふさわしいと考える研究者もあります (*l- にするものもあります)。

重要なことは、この *l- に由来する以母と *g- に由来する以母は先秦では通用関係がないということです。

④ 書母は 5 種類以上の上古音声母に由来

中古音書母 sy-[š-] は極めて複雑な諧声系列を有しており、調べてみると少なくとも 5 種類の上古音声母に由来することがわかります。

● *stj- に由来する書母：「書」 *stja

● *lj- (無声流音) に由来する書母：「說」 *ljot

● *ŋj- (無声鼻音) に由来する書母：「恕」
*ŋjas

● *ŋj- (無声鼻音) に由来する書母：「勢」
*ŋjets

● *qʰj- (口蓋垂音) に由来する書母：「赦」
*qʰjAks

これらはすべて中古音書母へ変化しますが、先秦の文献においても互いに通用関係にないため注意が必要です。

*st-については、閩語においてもその痕跡を見いだすことができます。閩語では中古音書母に相当する字音は無声無氣破擦音 TS と無声有氣破擦音 TSH であらわれますが、上古音の *st- は閩語の無声無氣破擦音 TS と対応関係にあります（有氣音のものは上古の *st- 以外）。したがって逆説的ではありますが、閩語の字音から上古音の声母を予想することも可能となります。「少」の字音を見てみましょう。

上古	廈門	福州	中仙
*stew?	tsio3	tsieu3	tʃo3

廈門、福州、中仙において、「少」の声母が無声無氣破擦音であらわれていることから、「少」の上古音声母も *st- であると推定されます。

⑤ 晓母 x- は鼻音と関連する（無声鼻音の再構）

諧声原則によると、基本的に鼻音は調音点を同じくする鼻音とのみ諧声関係を有するものとされますが、一部の鼻音は曉母 x- と関係を有します。たとえば次のとおりです。

明母 m- と曉母 x- の諧声関係

	墨	黒
中古音	明母 m-	曉母 x-
吳音／漢音	モク／ボク	コク

疑母 ng- と曉母 x- の諧声関係

	午	許
中古音	疑母 ng-	曉母 x-
吳音／漢音	ゴ	コ／キヨ

泥母 n- と曉母 x- の諧声関係

	難	漢
中古音	泥母 n-	曉母 x-
吳音／漢音	ナン／ダン	カン

このように鼻音（明母 m-、疑母 ng-、泥母 n-）が曉母 x- と諧声関係を有する場合、中古音曉母の方は無声鼻音に由来すると推定されます：

黒 *mək > xok > hēi	（墨 *mək > mok > mó）
許 *ŋja? > xjoX > xǔ	（午 *nga? > nguX > wǔ）
漢 *ŋans > xanH > hèn	（難 *nan > nan > nán）

ところが泥母 n- については、透母 th- とも諧声関係を有します。

泥母 n- と透母 th- の諧声関係

	難	嘆
中古音	泥母 n-	透母 th-
吳音／漢音	ナン／ダン	タン

したがって泥母については曉母 x- だけでなく透母 th- とも諧声関係を有しており、曉母に変化する方言と透母に変化する方言が存在したと考えなければなりません。

	上古音	中古音	普通話
難	*nan	> nan	nán
漢	*ŋans	> xanH	> hèn 方言
嘆	*ŋans	> thanH	> tàn 方言

ただしすべての曉母字が鼻音と関連し、無声鼻音が再構されるというわけではありませんので、一つずつ諧声系列を確認する必要があります。鼻音と諧声関係を有しない曉母 x- はシンプルに *x- (あるいは *q^h-) と再構されます。

⑥ 心母と関連する鼻音と L-type

鼻音は曉母 x- と諧声関係を有するだけでなく、心母 s- とも諧声関係を有します。ここでは「人」を声符とする「信」について見てみましょう。「信」は『説文』では会意文字とされますが（「从人从言」、出土資料などの用例から見ても形声文字であることは間違ひありません。「信」は中古音心母 s- になるため、*n- の前に *s- が再構されます。

	上古音	中古音	普通話
人	*njin	> nyin	rén
信	*snjins	> sinH	xìn

「信」以外に「人」を声符とするものに「千」「年」「身」「仁」等があります。これらはみな上古音では鼻音の *n- が再構されます。

	上古音		中古音		普通話
人	*njin	>	nyin	>	rén
信	*snjins	>	sinH	>	xìn
千	*sp̥in	>	tshen	>	qiān
年	*nin	>	nen	>	nián
身	*njin	>	syin	>	shēn
仁	*njin	>	nyin	>	rén

心母 *s-* と関連する鼻音は泥母 *n-* だけではありません。明母 *m-* や疑母 *ng-* とも諧声関係を有する例が見られます。

また流音である L-type の声母もしばしば心母と諧声関係を有します。

	上古音		中古音		普通話
悠	*ljiw	>	yuw	>	yōu
條	*liw	>	dew	>	tiáo
修	*sliw	>	sjuw	>	xiū

このように鼻音や流音のようないわゆる共鳴音 (sonorant) の前に *s- が立つ場合、*s- に続く共鳴音は脱落します。これに対して、④で述べた *st- に由来する書母は、閉鎖音 *t- の前に置かれる *s- が脱落したと推定されます（音変化については異説もあります）。

⑦ 第一口蓋音化

最後に第一口蓋音化について見ておきましょう。口蓋音化というと後期近世音の口蓋音化——すなわち「尖団の合流」——がよく知られていますが、上古音にも口蓋音化が存在し、「第一口蓋音化」と呼ばれます（河野（1950/1977））。

たとえば「技」「祇」はそれぞれ中古音見母 *k-* と群母 *g-* ですが、「技」の声符である「支」は章母 *ty-* (*ts-*)、「祇」の声符である「氏」は常母（禪母）*dzy-* (*dž-*) となります。日本漢字音でも「支」は「シ」に、「氏」は「ジ」に読まれます。いずれにしても、「支」「氏」は「技」「祇」との諧声関係に基

づき、本来は牙音（見母等）であり、口蓋音化を経て章母や常母（禪母）に変化したと考えられます。これが第一口蓋音化とよばれる音変化です。

	上古音		中古音		口蓋音化
支	*kje		章母 : tsye		あり
技	*grje?		群母重紐 B : gjeX		なし
岐	*gje		群母重紐 A : gje		なし

すでに述べたように（☞「*-r- の再構」）、「技」は重紐 B 類であるため、*-r- によって口蓋音化が阻止されたと推定されます。

この条件下では「岐」についても口蓋音化が生じるはずですが、「岐」は中古音でも群母 *g-* のままです。また「祇」の中古音には群母 *g-* と章母 *ty-* (*ts-*) があります。このように例外と思しき事例について、河野（1950/1977）は言語層の違いを考え、口語層では口蓋音化が生じ、文語層では口蓋音化が生じなかつたと推定しています。このように語によって、口蓋音化が生じるものとそうでないものがあり、何らかの言語層の違いや方言等を想定するほかありません。

以上、近年の上古音研究に関する大まかな枠組みについて述べてきました。上古音研究は 20 世紀中葉以降、出土資料の発見や方言研究の進展とともに飛躍的に進んでいます。今後は竹簡等を活用した方言差・時代差を考慮した上古音研究やシナ・チベット祖語を視野に入れた形態論的な研究の方面でさらなる進展が見られると予想されます。本稿で取り上げた上古音はその基本となるものです。紙幅の関係上、中国語の親族関係、閩語との関係、借用語、声調の起源等については触れていません。また Baxter and Sagart (2014) 等の最新の研究成果については紹介していません。基本的な概念を理解した上で、最新研究に触れることをおすすめします。

参考資料

- 〈上古音唇化元音仮説与閩語〉(秋谷裕幸・野原将揮、『中國語文』1、2019、15-25 頁)
- 〔中國音韻史研究の一方向—第一口蓋音化に關聯して〕(河



デジタル時代の 中国学リファレンス ③

野六郎、『河野六郎著作集 2』、平凡社 1950/1979、227-232 頁)

- 「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」(古屋昭弘、『中國語学』257 号、2010、4-33 頁)
- 《上古音研究》(李方桂、商務印書館、1971/1980)
- 〈上古漢語の複輔音声母〉(謝・叶・雅洪托夫 (Jaxontov, Sergej)、《漢語史論集》([蘇]謝・叶・雅洪托夫著、唐作藩、胡双宝編)、北京大学出版社、1960/1986、42-52 頁)

● 〈也談來自上古 *ST- 的書母字〉(野原將揮・秋谷裕幸、《中国語文》4、2014、340-350 頁)

- Baxter, William H. 1992. *A Handbook of Old Chinese Phonology*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Baxter, William H. and Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. Oxford University Press.

(野原 將揮)

❖ 音注の意味

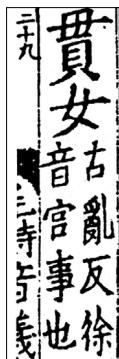
Q: 司馬遷『史記』を読んでいると、「葉」という地名のところに「葉式渉反」という注釈がついていましたが、これはどういう意味でしょうか？

『廣韻』を見てみると、葉韻に「葉…與渉切又式渉切十」とあり、「葉」には「與渉切」という反切に加えて、又音反切として「式渉切」が付されています。「與」は中古音以母ですので、吳音・漢音でヨウ(エフ)、「式」は中古音書母にあたるので、吳音・漢音でショウ(セフ)とよみます。したがって「葉式渉反」というのは、ここでは「ショウ」と読むということを意味しています。

このように音注はある文字が基本義ではなく、派生義等を表す場合や難読字に付され、「破読」、「破音」等と呼ばれます（これとは反対に基本義の場合、音注は付されません）。上の例で言えば、「葉」の基本義は「與渉切」で表される {葉 leaf} という意味ですので、ここでは「式渉切」と読むように注を加えているというわけです。

このような「破読」は現代語でも見られるもので、たとえば「好」を第3声で読むと「良い」という意味になり、第4声で読むと「好む」という意味になります。これを『廣韻』で探してみると、上声に「善也、美也」とあり、去声には「愛好」とあります。

またたとえば『詩經』「魏風・碩鼠」に「三歲貫女」とありますが、『經典釈文』毛詩音義上を見てみると「貫女」の下に「古亂反」とあります。『廣韻』を見てみると、「貫」には平声に相当する「古丸切」と去声の「古玩切」の二つの音があり、平声の字音には「穿也」とあり、去声の字音には「事也、穿也、累也、行也」とあります。『經典釈文』の「古亂反」は去声に相当するので、ここでは「事也」の意味を表してい



ることになります。

「反切」のほかにも音注の形式がいくつかあります。たとえば「A 読若 B (A は B のように読む)」、「A 読如 B」、「A 読為 B」というような「讀若」と呼ばれる形式や『孟子』「仁也者，人也」や『論語』「政者，正也」のような「聲訓」があります。「聲訓」とは、ある文字の音義を双声疊韻語や近似した音の文字で表すというものです（ただし同音とは限らない）。このほか、「A, 音 B」というように同音字を直接示す方法を「直音」といいます。

「破読」は自然に生じたものであるのか、それとも人為的なものであるのかについては様々な見解がありますが、音韻学者はその違いを極力説明しようと試みる——つまり再構音に反映させようとする——傾向にあります。たとえば「清濁別義」と呼ばれる声母の清濁の違いが語の意味を分ける現象がありますが、その中でも特に有名なものに陸徳明『經典釈文』(583~589年の間)に見える「敗」の音注があります。『春秋左氏伝』宣公十二年には次のようにあります。

晉師在敖、鄗之間。鄭皇戌使如晉師，曰：「鄭之從楚，社稷之故也，未有貳心…楚師必敗。」
彘子曰：「敗楚、服鄭，於此在矣。必許之。」

陸徳明は「楚師必敗」には音注を付していませんが、後者の「敗楚」には「敗楚 必邁切」というように反切を付しています。「必」は中古音幫母(p-)となります。

『廣韻』の注釈を見てみると、「楚師必敗」に当たる字音には「自破曰敗，薄邁切」とあり、反切上字「薄」は中古音並母(b-)であることがわかります。またその意味は「自敗」、すなわち「自

分が敗れる=敗北する」という意味になります。これに対して、「敗楚」に対応する字音には「破他曰敗, 補邁切」とあり、「補」は中古音幫母 (p-) です。その意味は「破他」、すなわち「他を破る=敗北させる」という意味になります。

このように並母 (b-) に読む場合と幫母 (p-) に読む場合で意味が異なります。これが「清濁別義」とよばれる現象です。音韻学者はこの違いを積極的に再構音に取り入れる傾向にありますが、未だ見解の一致を見ておらず、研究者の間でしばしば激しいやり取りが見られます。ここで一例として、Baxter and Sagart (2014) の再構音を挙げておきましょう。

「楚師必敗（自破曰敗）」：

*N-p^čra[t]-s > baej > bài “suffer defeat”

「敗楚（破他曰敗）」：

*p^čra[t]-s > paej > bài “defeat (v.t.)”

見解の異なるものとして、*s-prefix に使役化を考える Mei (2012) を挙げておきます。

「楚師必敗（自破曰敗）」：

*brads > bwai > bài

「敗楚（破他曰敗）」：

*s-brads > *prads > pwaj > bài

ところがこの「敗」という動詞はいわゆる「非対格動詞 (unaccusative verb)」に分類されることから、そもそも prefix (接頭辞) 等を考える必要がないという見解もあり、陸徳明の反切は人為的な音注であると考える研究者もあります（「非対格動詞」については、戸内俊介 (2019) が日本語でわかりやすく紹介しています）。このように『經典釈文』等に見える音注は未解決の問題をはらんでいます。

- Mei, Tsu-Lin. 2012. The Causative *s- and Nominalizing *-s in Old Chinese and Related Matters in Proto-Sino-Tibetan. *Language and Linguistics* 13. 1: 1-28.
- 「再び甲骨文の「不」と「弗」について——使役との関わりから——」(戸内俊介、『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2 使役の諸相』、2019、219-238 頁)

(野原 将揮)

❖ 中古音をしらべる

Q: 李白の「白髮三千丈」の唐の時代の発音はどうやってしらべたら良いでしょうか？ 漢和辞典には子音や母音しか載っていなくてよく分かりません。

そもそも中古音の再構音は韻書の枠組みに基づいて音を当てはめたものであり、諸現象をうまく説明するための架空の体系ですので、唐の時代の実際の発音をどれくらい忠実に表現しているかという点については疑問があります。したがって唐詩を再構された中古音価で発音することにはあまり意味がないと考えられるかもしれません。しかし当時の雰囲気や詩歌を理解する上で一助となることは間違いないでしょう。あくまで雰囲気を掴むものというように考えていただくのが良いと思います。筆者の経験では、学部時代の中古音の授業で「春曉」などを中古音で詠んじたことをよく覚えています（いまでも発音できます）。これは IPA を読む練習も兼ねていたと思います。

さて唐の時代の発音の調べ方ですが、最も簡単な方法はやはり Web 上に公開されているものを

利用することです。たとえば台湾大学と中央研究院による「小學堂」の「中古音検索」があります。

● 小學堂 (<https://xiaoaxue.iis.sinica.edu.tw/zhongguinyin>)

トップページ左側の「字形」の欄に調べる漢字を入力し、「確定送出」をクリックすると、「相關連結」というページがあらわれ、各項目に飛ぶことができます。

上古音、中古音、各方言等がありますが、ここでは中古音を検索するということですので「中古音」をクリック。すると高本漢 (Karlgren)、王力、董同龢、周法高、李方桂、陳新雄の中古音の再構音が表出されます。

次に数年前にリニューアルされたばかりの上海師範大学の「東方語言学」を見てみましょう。

中古音											
攝	攝調	韻目	字母	開合	等第	清濁	上字	下字	又音	又切	
廣韻	通	平	東	端	合	一	全清	娘	紅		

時代	韻圖系統名稱	韻部	韻母	韻母	偏註
魏		東		ung	
晉		東		ung	
南北朝	宋北魏前南	東冬齊江		əŋ	
隋	北魏後隋北齊	東		uŋ	
南北朝	齊梁陳北周隋	東		t	uŋ
隋唐	齊音/高木漢系統			t	uŋ
隋唐	擬音/董同龢系統			t	uŋ
隋唐	擬音/周法高系統			t	uŋ
隋唐	擬音/李方桂系統			t	ung
隋唐	擬音/陳新雄系統			t	əŋ

● 東方語言学 (<http://www.eastling.org/>)

トップページ上の「中古音」をクリックします。
検索ボックスに調べたい文字を入力し「中古音查詢」をクリック。



そうすると中古音に関する情報が表出されます。

字擴	誤書信息	學者	中古擬音
東	中古音：施束合一平 反切：德紅	高本漢	t <u>uŋ</u>
		王力	t <u>uŋ</u>
		董同龢	t <u>uŋ</u>
		周法高	t <u>uŋ</u>
		李鼎	t <u>uŋ</u>
		邵衛芳	t <u>uŋ</u>
		董立本	t <u>uŋ</u>
		鄭張尚芳	t <u>uŋ</u>
		潘伯賛	t <u>uŋ</u>

「韻書信息」には中古音の音類と反切が表示され、高本漢（Karlgren）、王力、董同龢、周法高、李栄、邵栄芬、蒲立本（Pulleyblank）、鄭張尚芳、潘悟雲の再構音を参照することが可能です。

以上の二つのサイトでは各方言の音価を調べることができます。従来に比べ、かなり細かい地点まで検索が可能となりました（方言については後述します）。

韻図や各種韻書との関連も併せて検索する場合は大阪大学・鈴木慎吾先生による「篇韻データベース」が大変便利です（「篇韻」というと、『玉篇』と『切韻』を併称したものですが、これに由来する名称でしょうか）。

- 篇韻データベース (<http://suzukish.s252.xrea.com/search/>)

「篇韻データベース」は『廣韻』所収の全音節を韻図形式で表出したもので、Karlgren と李方桂の音価が参照可能です。上古音に関しては、今後さ

らに改良されるとのことで非常に期待されます。

中古音を検索する場合は「Web 韻圖～廣韻檢索」をクリックします。「韻字檢索」のボックスに調べたい字を入力し、「検索」をクリック。そうすると、辻元春彦『廣韵切韵譜』(臨川書店, 2008年)の体裁にもとづく韻図が表出されます。

<p>篇韻DB</p> <p>Web讀闇 ～廣韻検索～</p> <hr/> <p>Options</p> <p>頌書 <input checked="" type="radio"/> 廣韻 <input type="radio"/> 王韻</p> <p>形式 <input checked="" type="radio"/> 切韻讀闇 <input type="radio"/> 韻鏡</p> <p>反切 <input checked="" type="radio"/> on <input type="radio"/> off</p> <hr/> <p>韻字検索 :</p> <input type="text"/> <p>検索</p>	<h2>篇韻データベース</h2> <p>いまは上古音関連のツールを中心になっています。</p> <h3>上古音</h3> <ul style="list-style-type: none"> 諸家詩經韻讀 (作成中) 諸家先秦韻讀 (作成中) また、「Web讀闇」の検索結果にて諸家上古音値を表示。 <h3>玉篇</h3> <ul style="list-style-type: none"> 宋本「玉篇」検索 <h3>切韻</h3> <ul style="list-style-type: none"> Web讀闇～廣韻検索～ 「切韻」諸本組覽 (作成中) 「切韻」佚文檢索 <h3>篇韻合璧</h3> <ul style="list-style-type: none"> 篇韻 <p>玄廟に戻る</p> <hr/> <p>作成者: 鈴木慎吾 (大阪大学 言語文化研究科) 連絡先: "suzukish+" + "@" + "lang.osaka-u.ac.jp"</p>
--	--

右のボックス「廣韻注（澤存堂本）」で注を参照することも可能です。驚くべきことに、左欄の「Open in 切韻緝覧」をクリックすると、各種切韻残巻を参照することが可能です。

それぞれに特徴があるので、用途によつていろ

いろと使いわけてみるのも良いと思います。当然ことながら、Web 上のものですので、使用の際には書籍に当たる必要があります（筆者の知る限り、リニューアル前の「東方語言学」では、沢山の人が入力していましたので絶対にミスが無いとは言い切れません）。

このほか『中国都市芸能研究』第十八緝（2019）にも「小學堂」、「漢典」、「韻典綱」がわかりやすく紹介されています。併せて参照してください。

また大島正二『唐代の人は漢詩をどう詠んだか』（岩波書店、2009年）は音韻学の基礎や復元方法等を解説しており参考になるほか、「付録」には唐詩10篇に長安音の再構音が付されています（李白「秋浦歌」も含む）。また音声がYouTubeで公開されており、雰囲気を掴むことができます（<https://www.youtube.com/user/KanshiPoetry>）。

（野原 将揮）



❖ 上古音をしらべる

Q: 出土資料を扱う際に、上古音の再構音はどの研究者のものを使ったら良いでしょうか？

主要な上古音の再構音というと以下のものがあります。

- 『上古音韻表稿』（董同龢、中央研究院歴史語言所集刊、1944）
- 『上古音研究』（李方桂、商務印書館、1971/1980）
- Baxter, William H. 1992. A Handbook of Old Chinese phonology. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 『上古音系』（鄭張尚芳、上海教育出版社、2003/2013）
- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later han Chinese*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Baxter, William and Sagart Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. Oxford University Press.

このうち董同龢（1944）の再構音については、近年あまり使用されません。また（董同龢も含めて）李方桂（1971/1980）は六母音体系を採用していないので、あまりおすすめできません。しかしそちらにも参考すべき点が多くあります。実際に筆者が最近の論文で扱った事例でも、董同龢（1944）のみが限られた資料の中で、とある現象を指摘していたということがありました。

Baxter (1992) と Baxter and Sagart (2014) について、韻母に関しては大きな変化はありません（ただし韻尾の*-r や三等韻と非三等韻の違い等について少し変化が見られます）。これに対して、声母は変化が激しく、Baxter and Sagart (2014) の声母体系はかなり複雑な体系となっているため理解するのに時間がかかるかもしれません。また Baxter and Sagart (2014) の再構音の表記は極めて煩雑で、たとえば「卷」

の再構音は下記のようになります。

上古音	中古音	普通話
卷 *[k](r)o[n]? >	<i>kjwenX</i> > juān	

声母の *k- と韻尾の *-n を囲う角括弧は再構音に有力な証拠がないことを示しています。*-r- に付される丸括弧は *-r- を再構する余地がある場合に加えられます。ただし積極的に再構する根拠がない場合に限られます。このほか <r> は接中辞の *-r- を表すとか、ハイフンは接頭辞をあらわすとか、共時的に接頭辞であるかどうかわからない場合はハイフンではなくピリオドを打つというようにあまりに煩雑であるため、欧米ではしばしば「アンフレンドリーな再構音の表記」とすると批判されています。しかし、上古音を研究する立場から冷静に見てみると、再構の根拠の有無が再構音に明示されているという点については、むしろ親切な表記であるとも考えられます。もちろん上古音の再構音を二次的に利用する側から見れば不親切な表記であるということについては否定しうるかもしれません。

そういった面から言うと、押韻や通仮を考える場合には Baxter (1992) か Schuessler (2009) を利用するのが個人的には良いと考えています。Schuessler (2009) は書名に「Minimal」とあるように、最大公約数としての上古音であり、根拠に乏しい仮説や再構音を却って複雑にするような仮説は排除し、よりシンプルな再構音を提示しています。したがって通仮を論じる上ではとても使いやすくわかりやすいものとなっています。実際に、近年の日本国内における出土資料関連の論文を見ていると Schuessler (2009) の再構音を使用するものが多数見られます。ただ中国に関しては、鄭張尚芳

(2003/2013) の再構音が主に使用され、台湾では李方桂 (1971/1980) に修正を加えた再構音が使用される傾向にあるようです。

いずれにしても通仮や押韻を考える際には、再

構音の音価に惑わされることなく音類によって見極めることが重要です。

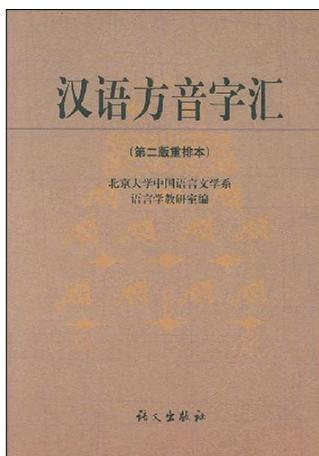
(野原 将揮)

❖ 方言音をしらべる

Q: 中国諸方言の発音はどのようにしらべたら良いでしょうか？

まずは北京大学の『漢語方音字匯』でしらべるのが良いでしょう。

- 『漢語方音字匯』（第二版重排本）（北京大学中文系語言学教研室編著、語文出版社、2003）



「目録」に普通話の母音が掲載されており、そこから目的の字を探すことができます。『漢語方音字匯』は「北京」、「濟南」、「西安」、「太原」、「武漢」、「成都」、「合肥」、「揚州」、「蘇州」、「溫州」、「長沙」、「雙峰」、「南昌」、「梅県」、「廣州」、「陽江」、「廈門」、「潮州」、「福州」、「建甌」の各地点の発音が掲載されており、重要な方言地点を満遍なくカバーしています。

さらに範囲を広げて調べる場合には、前項に挙げた Web 上の情報を利用することも可能です。

- 小學堂 (<https://xiao-xue.iis.sinica.edu.tw/zhongguyin>)

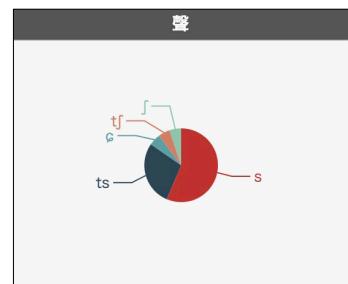
「小學堂」には「官話」、「晉語」、「吳語」、「徽語」、「贛語」、「湘語」、「閩語」、「粵語」、「平話」、「客家語」、「土話」等を検索することができます。各方言の調査地点をクリックすると、Google Map で調査地点

を確認することができます。

- 東方語言学 (<http://www.eastling.org/>)

「東方語言学」のサイトでは「吳語」、「粵語」、「閩語」、「平話」、「客家語」、「贛語」、「官話」を検索することができます。「東方語言学」の特徴は各方言区域の中で声母・韻母・声調の量的データを抽出することができる点です。

たとえば「少」の閩語の字音を検索してみると、下記のように「聲（声母）」、「韻（韻母）」、「調（声調の調値）」のデータが表出されます。ここでは「聲（声母）」のデータを取り出してみてみましょう。

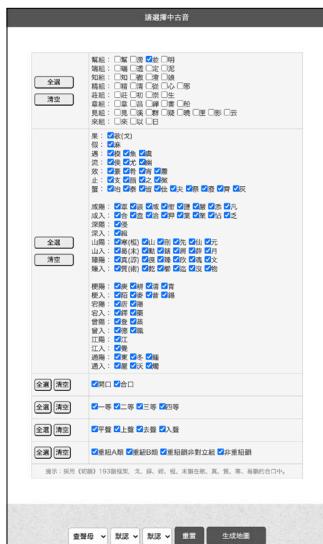


これによると「少」の声母は閩語で [s]、[ts]、[tʃ]、[ʃ] で読まれ、[s] が最多であることがわかります。見ているだけでも面白いものですが、もちろん注意が必要な点もあります。たとえば「調（声調の調値）」については、調値と調類が一部混在しているようです。また上に挙げた「少」の声母のデータからも明らかなように、文読音と白読音もあまり明確に分類されていないため注意が必要です。調査地点の多寡によって、結果が異なるであろうことは言うまでもありません。検索結果はある程度の目安にしておくのが良いと思われます。

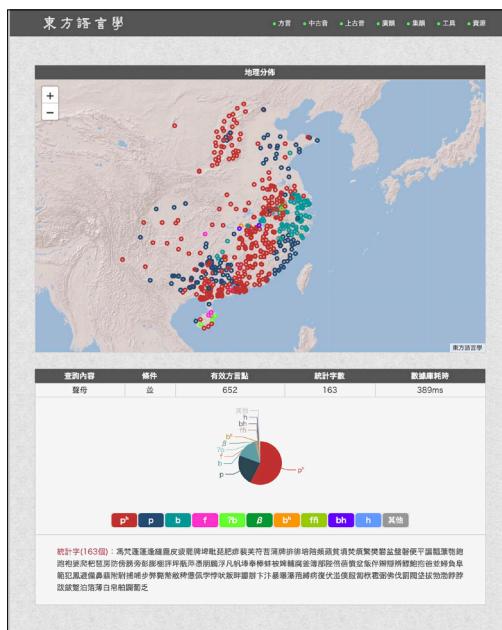
また中古音の音類を指定して、各方言でどのように発音されるのかを地図化することも可能です。

4. 音韻をしらべる 方言音をしらべる

まず下記のページで中古音の音類を選択します。
ここでは韻母を問わず「並母 (b-)」のものをすべて地図化してみましょう。



「生成地図」をクリックすると、次のような言語地図が現れます。



音価によって色で分類されており非常にわかりやすいものとなっています。

このように Web で簡単に検索できるため方言の検索も非常に便利になりました。しかし Web

上のデータにも限りがあります。そういう場合には、やはり専著や調査報告等にみえる「同音字表」を参照するのが良いでしょう。「同音字表」というのは同音の字音を配列したもので、仕組みはいたって簡単です。たとえば秋谷(2012)『閩東区古方言研究』(福建人民出版社)の「同音字表(p.43)」を見てみましょう。

2.1.7 同音字汇^⑤

i

p [55] 脯碑口(牛～：一种牛身上的吸血虫) [33]脾(内脏之一) 肺枇口 笮(～恼： 笮子)
口(～口)^b：一种用来罩在菜豌豆上面的罩子口(～口)^b： 编辑) [41]比口(用手指指)
[11]痴秘口(淮) 叔(～麻)口(～豆： 痴豆) [224]币阱馅饼 ॥ [52]被(～告)

p^b [41]瓶匪匪(土～) [11]筭(床～： 筷子) 鼻

b [55]口(车螺～： 拧螺丝) ॥ [35]口(口)^b： 一种竹编圆形器具，较深，背在身上)

m [33]迷弥眉梢媚维谁遣唯 [41]米美耳木(～) [224]未(z地支之一) 味 ॥ [45]口(沙～团： 细沙)

t [55]知 [33]迟 [11]蒂智致置口(老鼠～： 瘦子) ॥ 口(～口)liŋ^b： 咽喉) [224]堆
(～鸟： 山鸡) 地(～基)痔治(攻～)

t^b [55]口(口)苔(～苔) [33]持

n [33]第(～弟： 兄～弟) [11]匪口(猫～： 猫) [224]二膩(细～： 小心)

上部中心に i とありますが、ここで挙げられる字音はすべて [i] の発音を韻母に持っています。左列のローマ字 (IPA) は声母を表します。角括弧内にある数字は声調の調値を示しています。たとえば「碑」と「卑」は声母を p とし、韻母を i、声調が [55] となるので、どちらも pi55 という発音であることがわかります。「碑卑」の後ろに「□(牛～:)」とありますが、この「□」は文字化けではありません。本字が不明である場合は「□」で表記することになっています。

文献によってはある特定の方言音を基礎として書かれていることがしばしばあるかと思いますが、文献に反映されている方言を同定するのは極めて難しい作業となります。関係がありそうな地域の方言を少しづつ絞っていくような手順が必要になるかと思います。たとえば説唱詞話（明代の民間芸能のテキスト）に反映する基礎方言を同定したものに、古屋昭弘（1984）「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言」（『中国文学研究』10、29-50頁）があり参考になります。周振鶴・游汝傑（2006）『方言与中国文化（第2版）』（上海人民出版社）には「方言和戲曲与小說」という章があり、方言と文学作品について扱うものもあります。当該書は日本語訳もあり、とても参考になります（内田慶市・沈国威監訳（2015）『方言と中国文化（第2版）』光生館）。

(野原 将挿)

映画をしらべる

❖ 中国映画を見る

Q: 中国の最新の映画を鑑賞したいのですが、日本ではどこの映画館で見られますか？

❖ 新作映画を見る

日本で劇場公開される新作の中国映画は残念ながら多くありません。日本語字幕付きで新作をより多く鑑賞したいと思えば、中国やアジアの映画をセレクトしている映画祭で上映される作品を観るのが一番です。代表的なものとしては、次のような映画祭があります。

①東京国際映画祭 (<https://2020.tiff-jp.net/ja/>)

※ 2020 年のサイト



②東京フィルメックス (<https://filmex.jp/>)



③大阪アジアン映画祭 (<http://www.oaff.jp/>)

④アジアフォーカス・福岡国際映画祭 (<http://www.focus-on-asia.com/>)

⑤山形国際ドキュメンタリー映画祭 (<https://www.yidff.jp/>)

⑥東京・中国映画週間 (<http://cjiff.net/>)

※東京以外での開催歴もあり

①は日本を代表する国際映画祭で、中国語圏の映画が多く出品されます。⑥は、①の提携企画で、①と⑥は原則として中国国内で検閲を通過した作品が上映されます。②はアート系の作品が多く、③は娯楽作品が多く上映されます。④は、近年各地域ごとの特集が組まれることが多く、台湾映画が特集された年もありました。⑤は隔年開催で、毎回多くの中国のドキュメンタリー映画が上映されます。

中国映画をよく上映している映画館としては（主観的ですが）、東京都内に限って言えば、以下の6館が挙げられます（50音順）。

●アップリンク (<https://www.uplink.co.jp/>)

●岩波ホール (<https://www.iwanami-hall.com/>)

●シアター・イメージフォーラム (<http://www.imageforum.co.jp/theatre/>)

●K's シネマ (<http://www.ks-cinema.com/>)

●ポレポレ東中野 (<https://www.mmjp.or.jp/pole2/>)

●ユーロスペース (<http://www.eurospace.co.jp/>)

いずれも、いわゆるミニシアターです。東京以

外の各地のミニシアターすべてに言及するわけにはいきませんので割愛させて頂きますが、数が減ってしまったとはいえ、こうした劇場で中国映画が上映される機会はありますので、各館のウェブサイトなどで確認してみるのがよいでしょう。

❖ 旧作映画を見る

旧作に関しては、上述の映画祭などで特集上映が組まれる場合もありますが、より確実に鑑賞したいと思えば、やはりDVDなどの映像ソフトかインターネット上のコンテンツに頼ることになります。ただ、かなりの有名作でも、近年はレンタルDVDの在庫が減少しているように感じられます。大学図書館などで、映像資料を多く揃えているところはありますが、一般的にはAmazonやyesasia (<https://www.yesasia.com/>) などで映像ソフトを購入するかインターネットに頼らざるを得ない状況と言えます。



とは言え、インターネット上で観られる作品は、日本語字幕がついていることは多くないので、中国語が分からぬ場合は英語字幕に頼るしかあり

ません。まずはYouTube (<https://www.youtube.com/>) やニコニコ動画 (<https://www.nicovideo.jp/>) などで探してみてください。

有料でも構わないということであれば、以下の動画配信サービスもチェックしてみましょう。

● Amazon プライム

(<https://www.amazon.co.jp/amazonprime>)

● Netflix (<https://www.netflix.com/>)

● hulu (<https://www.hulu.jp/>)

中国の映画作品も視聴できますが、ラインナップが充実しているかと言えばそうでもなく、入っていればラッキーくらいに考えたほうがいいでしょう。いずれにしても、ここに行けばだいたい揃うというサイトはないと言えます。

上述のサイトで見つからない場合は、中国の百度 (<http://baidu.com/>) などの検索サイトで原題を入れて検索すると、ストーリーミングサイトが見つかることもあります。ただ、中国国外からのアクセス制限がかかっていたり、そもそも日本語字幕は期待できなかったりという難点があります。中国国内サイトも、ここを見ればたいてい揃うというところは管見の限りではなく、それぞれの作品に応じて探すしかないと言ってよいと思います。さらに一步踏み込んだ方法については、ぜひ自己責任で試してみてください。

(吉川 龍生)

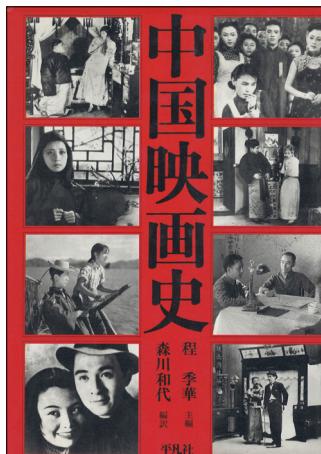
❖ 映画のストーリー・俳優・製作スタッフをしらべる

Q: 原題が『小城之春』という未見の映画のストーリーや俳優・製作スタッフを知りたいのですが、日本語でまとめてある書籍やウェブサイトはありませんか？

❖ ストーリーを紙媒体でしらべる

紙媒体の資料には、どうしてもアップデートが追いつかないという問題がありますが、特定時期以前という条件では、次のいくつかの資料はたいへん有用です。

- ①『中国映画史』（程季華主編、森川和代編訳、平凡社、1987）



1949年の中華人民共和国建国直後までの内容ですが、本文に多くの作品のあらすじを引用しており、映画史の流れの中で中国映画の概要を知るために有用です。

- ②『FC』（東京国立近代美術館フィルムセンター）
 ○84号「中国映画の回顧〈1922～1952〉」（1985年7月発行）
 ○88号「中国映画の回顧〈1932～1964〉」（1987年10月発行）

○91号「孫瑜監督と上海映画の仲間たち 中国映画の回顧」（1992年10月発行）：1905年から49年までの中国映画作品目録つき

いずれも、旧フィルムセンターで上映された作品のあらすじが掲載されていてたいへん有用です。1949年の中華人民共和国建国について、まず以下の2冊を調べましょう。

- ③『中華電影完全データブック キネマ旬報 第1239号臨時増刊』（キネマ旬報社、1997）
 ④『中華電影データブック 完全保存版』（キネマ旬報社、2010）



③は中華人民共和国建国前後の作品から、本書刊行までに日本国内で上映あるいはビデオ発売された主要な作品408作をカバーしており、④は1970年代くらいから2009年11月までに日本国内で劇場公開や上映などがされた作品について

5. 映画をしらべる 映画のストーリー・俳優・製作スタッフをしらべる

カバーしています。④では、③に収録されていた、文化大革命以前の作品は掲載されていないようです。

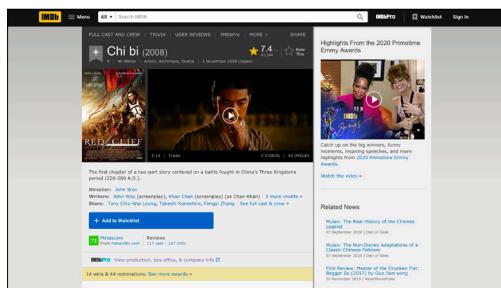
その他では、映画祭や特集上映の公式パンフレットなどに作品の詳細が書かれていますが、必ずしもアクセスしやすいとは言いにくい面もあります。また、インターネット上には作品を実際に鑑賞した人の手による紹介や感想も多くあり、それらを参照するのもよいでしょう。

ご質問の『小城之春』については、④『中華電影データブック 完全保存版』に掲載されており、2002年製作・2003年日本公開の田壯壯監督作品で、邦題は『春の惑い』、「1946年、戦争が終わったばかりの蘇州に暮らす夫婦と、そこにやって来た夫の親友で妻の初恋相手の男との間で、一時的な淡く複雑な感情と関係が展開する」というストーリーであることと、1948年に費穆監督が撮った『小城之春』、邦題『田舎町の春』のリメイク作品と分かります。『田舎町の春』については、②の91号によって、ストーリーが『春の惑い』にも引きつがれていることが分かります。

❖ ストーリーをネットでしらべる

2010年以降や上記資料に記載がないものについては、個別に調べるほかはありませんが、中国語の事典や、英語あるいは中国語のウェブサイトが参考になることもあります。

① IMDb (<https://www.imdb.com/>)



②百度百科 (<https://baike.baidu.com/>)

③中国語版 Wikipedia (<https://zh.wikipedia.org/>)

④時光網 Mtime (<http://www.mtime.com/>)

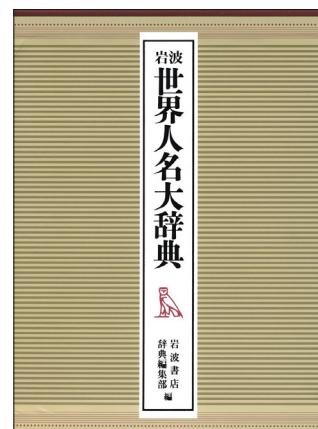
⑤『中国電影大辞典』(上海辞書出版社、1995)

①はInternet Movie Data Base の略で、現在Amazonによって運営されており、膨大な数の映画・俳優・映画人・映画賞などを網羅しており、中国映画も数多く収録されています。最新の映画の情報は、②③④などの中国語サイトの情報を調べるのが一番簡単だと言っていいでしょう。⑤は中国語の事典で、作品や人名など、刊行年までのさまざまな事項を収録しています。

❖ 俳優・製作スタッフをしらべる

俳優や監督、製作スタッフを調べる時にも、基本的には上述の作品概要と同じ資料やウェブサイトを使うのがよいでしょう。

「趙薇」を「ヴィッキー・チャオ」と呼ぶようなイングリッシュネームは、大陸の俳優・製作スタッフの中ではあまり見かけず、名前の漢字を日本語の音読みにする以外に、中国語読みにカタカナを当てた呼び名で呼ばれる場合もあります。「章子怡」を「チャン・ツイイー」と読むような、ピンインを適切ではない形でカタカナにしてしまったものが通用しているような場合もあります。香港や台湾出身者の場合は、イングリッシュネームがある場合も多いですが、それは親族や学校の先生がつけたり、自分が気に入っている名前をつけたりなど、いわば芸名のような場合が多いと言えます。漢字名からイングリッシュネームやカタカナ読みを調べる、あるいはその逆の場合は、検索サイトで調べれば出てくる場合も多いですし、『中





デジタル時代の 中国学リファレンス ③

華電影データブック 完全保存版』の索引を活用することもできます。

人名については、以下の辞書に記載されていることもあります。

- 『岩波 世界人名大辞典』(岩波書店辞典編集部編、岩波書店、2013)

『岩波 世界人名大辞典』はジャパンナレッジ版もあり、所属している学校などで契約していればオンラインでも利用できます。

以上の資料から、2つの『小城之春』それぞれの主演女優は、費穆監督『田舎町の春』は韋偉(1922年5月17日-)、田壯壯監督『春の惑い』は胡靖釗(1976年10月26日-)であることが分かります。

(吉川 龍生)

❖ 映画の評価・興行成績をしらべる

Q:『レッドクリフ Part I』という映画の、日本・中国および世界市場での興行成績や評価は、どのようにしらべたら良いでしょうか。

❖ 興行成績

日本国内の近年の興行成績については、次のサイトに前年の映画産業に関するレポートが掲載されています。

- 般社団法人日本映画製作者連盟 (<http://www.eiren.org/toukei/index.html>)

The screenshot shows a table of box office data for 2010 (FY2010) in Japan. The data includes the number of theaters, audience count, average ticket price, and total box office revenue.

年	劇場数	入場者数	平均料金	年間収益
2010年	164,910	1,153,600	106,210	14,600億
2009年	164,910	1,153,600	106,210	14,600億
2008年	142,170	944,500	115,650	10,200億
2007年	118,170	845,400	114,600	9,400億
2006年	118,170	845,400	114,600	9,400億
2005年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
2004年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
2003年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
2002年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
2001年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
2000年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1999年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1998年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1997年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1996年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1995年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1994年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1993年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1992年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1991年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億
1990年	121,060	1,020,000	121,000	12,400億

これによると、『レッドクリフ Part I』の日本国内における2008年の興行収入が、50.5億円であることが分かります。

続いて、中国での興行成績ですが、映画の製作や配給が民間に開放される以前はあまり重視されなかったためか、1990年代後半以降にならないと、詳しいデータが入手しづらい面があります。近年のデータについては、日本語のサイトとしては、以下のようないサイトで当該年の興行成績が掲載されていることがあります。

- アジアンパラダイス (<http://www.asianparadise.net/>)
- 映画.com (<https://eiga.com/>)
- 映画ナタリー (<https://natalie.mu/eiga>)



- 人民網日本語版 (<http://j.people.com.cn/>)

中国国内の日ごと、週ごとの詳細情報が欲しい場合は、以下の中国語のサイトで確認することができます。

- 芸恩 (<https://www.endata.com.cn/>)
- 猫眼 (<https://maoyan.com/>)



- 電影票房数据庫 (<http://58921.com/>)

上記のサイトの情報から、『レッドクリフ Part I』の興行収入が、2.7～3.2億元であることが分かります。また、文字ベースでの確認をしたい場合は、次のような資料もあります。

- ①『中国年鑑』(大修館書店)
- ②『中国電影年鑑』(中国電影出版社)

①は日本語文献で、2008年版以降の「映画」のまとめでは、その年のヒット作の興行成績に言及されることが多いっています。②は中国語文献で、2005年版以降で、興行成績ランキングが掲載されるようになっています。

ワールドワイドの興行成績については、前項で紹介したIMDb (<https://www.imdb.com/>) が有用です。それによると、『レッドクリフ Part I』の全世界累計が \$129,710,514 であることが分かります。

❖ 作品の評価

作品の評価でしばしば参照されるのは、次のサイトです。

● 豆瓣電影 (<https://movie.douban.com/>)



豆瓣 (<https://www.douban.com/>) は中国のソーシャルネットワークサービスで、読書・映画・音楽などカルチャー系の話題に強いことで知られています。近年、中国映画の評価を論じる際に、「豆瓣電影」の得点とコメントが、特によく言及されるようになっています。ただ、これはもちろん中国語版しかないため、細かい内容は中国語が分からないと理解できませんが、評価の数字（5つの★で示され、10点満点）で表示されている部分は利用しやすいと言えるでしょう。中国語が分かる場合は、「豆瓣電影」サイトでは、作品のあらすじや出演者、製作者の情報も確認できるので便利です。『レッドクリフ Part I』については 6.4 点の評価になっています。

日本語で中国映画の評価をまとめて確認できるようなサイトはありませんが、劇場公開された作品については『キネマ旬報』に講評が掲載されたり、映画関係サイトに評価が掲載されることもあります。個々の作品について調べるしかない、と言えるでしょう。

(吉川 龍生)

解説：中国映画史を学ぶ

中華人民共和国建国までの映画史について、定番となっているのは、良くも悪くも前述の以下の書籍です。

- ①『中国映画史』（程季華主編、森川和代編訳、平凡社、1987）

同書の原書は1960年代に書かれた映画史で、当時の中国共産党の映画史観・歴史観が強く反映されたものになっています（それでも後に批判されるのですが）。本書に書かれた映画史の観点がやや偏っていることを指摘することも、研究手法の一つとなっているような側面があります。現在の視点からすると鵜呑みにはできない面があるものの、まずは参照すべき古典的名著ということもできるわけで、その意味で「良くも悪くも」ということなのです。細かいところはともかく、本書を読めば、中国に映画が伝わったところから中華人民共和国建国までの映画史の骨格を確認することができます。

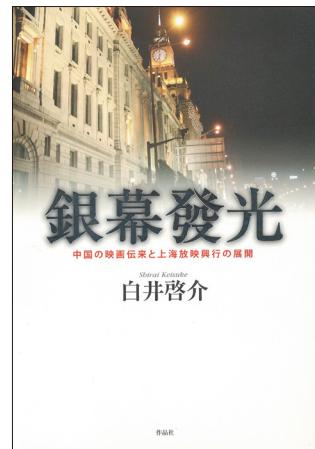
また、中国で映画製作が始まってから約100年間の流れを、主要作品のあらすじとともに概説した次の書籍は、流れをつかむ上で参考になります。

- ②『中国映画の100年』（佐藤忠男、二玄社、2006）

中華民国時期の映画については、以下の本も参考になります。

- ③『銀幕發光——中国の映画伝来と上海放映興行の展開』（白井啓介、作品社、2019）
 ④『戦時日中映画交渉史』（晏妮、岩波書店、2010）

③は初期の中国映画について詳しく書かれてい



ます。④は、日中戦争期の日本と中国の映画における影響関係について論じた名著です。

中華人民共和国建国後の中国映画について、中国国内では数多くの映画史本が出ていますが、日本語文献では建国前を扱った『中国映画史』に相当するような系統立てて映画史を記述した文献は出でていません。特定の時期やトピックについての流れを押さえるのであれば、次の書籍も有用です。

- ⑤『日中映画交流史』（劉文兵、東京大学出版会、2016）
 ⑥『中華電影データブック 完全保存版』（キネマ旬報社、2010）
 ⑦『中国映画のみかた』（応雄編、大修館書店、2010）

⑤は、建国以前の日中の映画交流から説き起こし、文化大革命の後に続くまでの流れを追っており、日本との交流という視点から建国後の中国映画の流れも提示しています。⑥についてはすでに紹介しましたが、冒頭に簡潔に中国映画の流れがまとめられています。⑦にも、中国映画の流れを簡潔に概説した章があり、さまざまなトピックに

について中国映画を観る視点を提供するような論考も揃っています。

インディペンデント映画（独立映画）の流れも含む、文化大革命以降の中国映画を概観するものとしては、次の3冊が挙げられます。

⑧『アジア映画の森 新世紀の映画地図』（作品社、2012）

⑨『現代中国独立電影』（中山大樹、講談社、2013）



⑩『中国ドキュメンタリー映画論』（佐藤賢、平凡社、2019）

⑧では、他のアジア諸国での映画製作状況のなかに中国の状況がまとめられていて、インディペンデント映画についても言及されています。⑨は、制作者のインタビューに解説を加えた形で、貴重な資料になっています。⑩は、文化大革命後のドキュメンタリー映画の流れをつかむには好適と言えるでしょう。

個別の作品や監督、俳優、トピックなどについては、さまざまな書籍や論文も出ており、自分の知りたい事項に応じて調べれば、かなりの情報を手に入れることができると思います。

（吉川 龍生）

レビュー & リソース紹介

2019年から2020年上半期にかけての、中国関連のソフト・リソースのレビューをお送りする。ソフトウェアの多言語対応が一巡し、大規模データベースの開発も一息という感があり、本号でも取り上げたトピックはさほど多くはない。しかし、Officeや音声合成、さらには内外の図書館における漢籍データベースやOPACの動向は、読者諸賢にとっても、常日頃の研究・教育活動と切っても切り離せない、関心事なのではなかろうか。

Contents

MS Office 2019・365	千田 大介…… 190
Amazonの音声合成“Polly”	田邊 鉄…… 192
オンライン漢籍	小島 浩之…… 194
中国国家図書館の古典文献データベース	千田 大介…… 202
慶大・早大図書館の新OPAC	千田 大介/・小島 浩之…… 204

MS Office 2019・365

千田 大介 (ちだ だいすけ)

❖ サブスク化の進む MS Office

マイクロソフト社は、Office のサブスクリプション化を進めており、最新の Office 2019 では、むしろサブスク版である Office 365 の方に力を入れているようである。

大学では、MS 社の EES プログラムを採用し、所属教員・学生に Office 365 のライセンスが与えられているケースが多いものと思われる。ライセンス版の Office 365 は、Windows のみならず、MAC・iOS・Android でも使用できるので、端末室の利用を前提としなくとも、学生が Office を導入しているものとして授業を進めることができるようになった。特に、2020 年度上半期の新コロナ流行時期に、その恩恵を受けた教員・学生も多かったことだろう。

筆者の所属先では、Office 2019 ライセンス版の提供は本年度いっぱいになり、以降は原則として Office 365 を使用してもらうことになるとアナウンスされており、サブスク化が待ったなしになっている。

一方で、大学を卒業・定年したあとに、大学のライセンスによる Office 365 が使えなくなるという問題も発生する。また、複数の教員・学生が使用する共同研究室などの共用 PC では、ユーザーアカウントごとに Office 365 を設定しなくてはならず、運用に支障を来すケースも出てくるだろう。あまりに急なサブスク化は、そのような環境での MS Office 離れと、Google ドライブなどへの移行を促すことになりはしないだろうか。

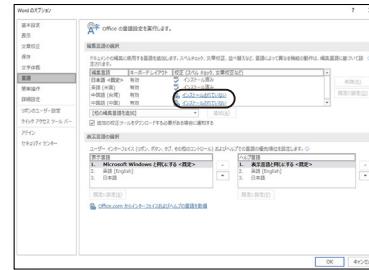
❖ 多言語校正ツールの導入

さて、本誌の Office レビューで恒例の多言語機能の検証だが、MS Office 2019 / 365 では多言語校正ツールの導入が、より一層、簡単になっている。以下、その手順を解説する。

- Word の「校閲」タブで「言語」アイコンをクリックし、「校正言語の設定」をクリックする。



② Word のオプションダイアログが開く。「編集言語の選択」に、Windows で IME 等を追加した言語が表示される。「校正」の「インストールされていない」リンクをクリックする。



③ ブラウザで「Office の言語アクセサリパック」ページが開く。



④ 下に移動し、「手順 1」以下のプルダウンで、校正ツールを追加する言語を選択し、システムに合わせて 32bit もしくは 64bit のパックをダウンロードする。



⑤ ダウンロードしたファイルを実行すると、校正ツールが追加され、Word の「校閲」タブに「中国語の変換」が追加される。



かつて、多言語校正ツールを導入するには MS Office Proofing Tools を購入する必要があり、その入手には何かと困難がつきまとったが、Office 2019 /365 では、以上のようにさしたる手間もかからずに導入できるようになった。中国語処理環境がより簡単に構築できるようになったことは、大いに歓迎される。

言語アクセサリパックを導入すると、各言語のフォ

清晨的第一缕阳光透射到她的书桌上。

等线
3 フォント フェイス

ントが追加される。簡体字中国語については、従来のフォントに加えて、新たに「DengXian」(等线) フォントが採用されている。従来には無かった細丸ゴチック体フォントであり、中国語ドキュメントのデザインの幅が広がることだろう。

Amazon の音声合成“Polly”

田邊 鉄 (たなべ てつ)

❖ 無料で使える音声合成サービス

Amazon Polly は、AWS (Amazon Web Service) で提供されている、入力されたテキストを、リアルな音声に変換する、読み上げサービスである。

テキスト読み上げサービスやアプリは、これまでにもたくさん出ているが、市販の音声合成アプリの高性能なものは、ほとんどが高価である。日本語しか利用できないものが多く、中国語のライブラリは別売りで、これまた高価だったりする。高電社の World Voice 2 などは、1万円を切る価格から見て、かなりいいセン行っていると思うが、合成された音声の商用利用は認められていない。たとえば World Voice の音声を開発したビデオ教材に組み込んで、YouTube にアップロードして広く利用してもらう、というような使い方はできない。商用利用 OK のライセンスはおおむね非常に高価で、教員個人で利用するにはハードルが高い。

無料で気軽に使って、教材開発などの商用利用にも使える音声合成サービスはないものか、とお悩みの方がおられたら、ぜひ試して頂きたいのが、今回紹介する、Amazon Polly である。従量課金制の有料サービスであるが、初回利用から 12 ヶ月間は 1 ヶ月あたり 500 万字まで、無料で使える。500 万字（アルファベット換算、句読点等の記号も含む）といえば、音声ではおよそ 100 時間程度使えることになるので、試しに使ってみるだけなら十分過ぎるほどだろう。また、12 ヶ月経過後も、100 万字まで \$4 と格安で利用できる。

❖ 利用には AWS アカウントが必要

Amazon Polly を利用するには、AWS のアカウントが必要である。これは普段買い物に使っている Amazon アカウントとは別物である。AWS のサイト^[1]にアクセスし、左上の「今すぐ無料サインアップ」をクリックし、必要事項を入力する（図 1）。クレジットカード番号などの入力を求められるが、無料枠だけを使っている限り、いきなり課金されたりはしないので安心してほしい。



図 1 AWS のトップページ

登録が完了すると、AWS の提供している様々なサービスが利用可能になる。メニューの左端にある「製品」をクリックすると、利用可能なサービスがずらりと並ぶ。本レビューとは関係ないが、「人工衛星と通信する地上局をマネージする」というようなサービスまである。Polly もその一つ、ということになるが、メニューから探していると時間がかかるので、Polly のアドレス^[2]をブックマークしておこう。

❖ 中国語にも対応

Polly は日本語や標準中国語を含む 25 フラ国語以上に対応している。早速中国語を入力してみよう。言語とリージョンのドロップダウンリストから、標準中国語を選ぶ。真ん中にあるテキストボックスに読ませたいテキストを入力またはコピペする。

3,000 字以内のテキストならば、入力を終えた瞬間に、直ちに音声を聞いたり、MP3 ファイルとしてダウンロードしたりできる（図 2）。この速さは感動もので、本当に「一瞬で」変換されているイメージで、初めて使う時は面食らう。

3,000 字を超えるテキストの場合は、AWS 標準のストレージ機能である S3 を通して受け取る。なんだか面倒くさく思えるが、もともと AWS は、用意されている機能を連携させて、簡単に Web によるサービスを提供するサーバを構築するためのクラウドサービスである。Polly で得られる合成音声も、会社などのサイトに、音声サービスを追加するために用いられるも

のなので、AWS のストレージに送る、というのは本来の使い方である。

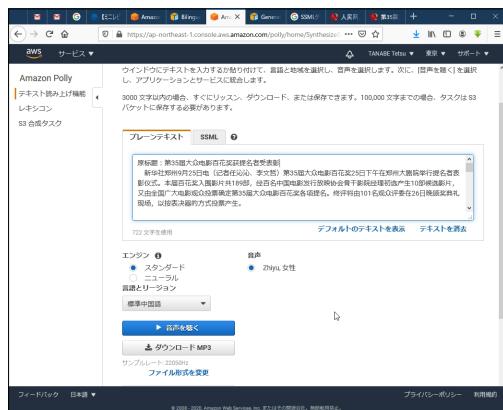
❖ 多言語対応は限定的

Polly は多言語の音声を一度に変換する機能もある。テキストボックスの上にある SSML をクリックすると、音声合成マークアップ言語 (SSML) の入力ができるようになる。SSML の lang タグを使って言語を切り替えながらしゃべらせることができる。

たとえば：

```
<speak>
  こんにちは！<lang xml:lang="cmn-CN"> 你們好！
</lang>
</speak>
```

のようにし、言語を日本語にしておくと、日本語と中国語の両方で発音する。ただし、この場合、中国語の方も、日本語の音声エンジンが発音するため、かなりブローカンである。上の例では、「你们好！」と発声させているが、日本語の音声エンジンによる中国語のシミュレーションなので、声調もほとんどつかず、「にーめんほう」と棒読みしている。日本語とフランス語、中国語とフランス語の組み合わせでも同じ現象が起きる。多言語機能はこのように、限定的なものであり、実用性はほとんどないだろう。



だが、音声合成エンジンが「母語」以外の言語を、「外国人っぽく間違えて発音する」という面妖な多言語機能を、承知の上で、というより、「狙って」やっているのだとしたら、深層学習の応用課題として、非常に興味深い。それはヒトが言語を学ぶ仕組を解明するためのモデルの一つになるだろうからである。

❖ 教材やアナウンスに簡単に中国語を

Polly の日本語や中国語の発音は、とても自然で、リアルなものだ。教科書の聞き取りテストなどに使っても、問題ないんじゃないかと思えるほどであり、実際に教科書のテキストを流し込んだところ、教科書に付属する、ネイティブによる音源と比べても遜色がないほどだった。

残念ながら中国語は女声のみで、1種類の音しか選べない。男声・女声、また、さらに多くの音を選ぶことができるようになれば、ダイアログを中心とした教科書の音声化に、より臨場感を付け加えられるようになるだろう。

教材や、イベントのアナウンスのために、中国語など外国語の音声が急に必要になったとき、Polly は強い味方ってくれるはずだ。試してみるだけでも構わないが、授業などで実際に使う音声を合成し、教材を作成することをお勧めする。音声合成の最先端に触れることができるだろう。

注

- [1] <https://aws.amazon.com/jp/>
- [2] <https://aws.amazon.com/jp/polly/>

オンライン漢籍

小島 浩之（こじま ひろゆき）

はじめに

新型コロナウィルスによって、高等教育機関や研究機関における研究・学習環境は、オンライン中心に移行せざるをえなかった。このため、以前に増して、デジタル公開されているオンラインの漢籍データを利用する機会が増えた。なお、ここでは漢籍を古典籍という狭義の意味で用いている。

本稿は、この数ヶ月間で、国内外のオンライン漢籍データを利用した経験から、筆者の興味に沿ってレビューを試みる。なお、採り上げるサイトは、これまで本誌で未紹介のものや、詳しく紹介できなかったものなどで、誰もがフリーでアクセスできるものを中心とする。

国内の漢籍データ

- 東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション（<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/asia/page/home>）

東京大学では東洋文化研究所の漢籍善本文影蔵資料庫（<http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp>）が知られており、筆者も何度か紹介を試みている。それとは別に、今秋の開館が予定されているアジア研究図書館がデジタルアーカイブを構築しており、充実しつつある。

このデジタルアーカイブは、その研究部門である東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）が提供している。漢籍関係は①碑帖拓本コレクション、②水滸伝コレクション、③U-PARLセレクションの三種のコンテンツからなる。①は法帖、つまり碑文の文章を折り本仕立てにして収録したもの、②は水滸伝の各本、③はその他の漢籍のデジタルアーカイブで、いずれも東京大学総合図書館の所蔵資料である。③に含まれる南宋刊本『元氏長慶集』残巻（巻四三～四六、四八）は、修復が入っているものの、線装本登場前の胡蝶装の姿を残している貴重な刊本で、越本ないしは浙本と呼ばれるもの。越本は静嘉堂文庫にも巻40～42がある。このほか、別系統の

宋版残巻が中国国家図書館にあるという。

- 京都大学人文科学研究所「東方學デジタル圖書館」（<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/top.html>）

京都大学人文科学研究所所蔵漢籍のデジタルアーカイブで、一覧ページのリストから画像にリンクするだけという大変シンプルな作りである。近年のデータベースは、利用者への忖度が過ぎた設計により、かえって使いづらくなったり、インターフェイスに違和感のあるものが多いので、基本的なHTMLだけで記述できるシンプルさは、ある意味、気持ちよい。

刊本の貴重さもさることながら、鈔本や手稿本、官文書に類するものなど、一点ものを数多く公開しており、圧巻の内容である。

- 関西大学東アジアデジタルアーカイブ（<https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/books/about>）

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター所属の研究者や関西大学総合図書館が所蔵する東アジアに関する資料のデジタルアーカイブ。トップページによれば、2019年3月時点で約1,500冊分のデータを公開しているという。

清朝から近代の印刷物が多いものの、明版や鈔本も少なからず含まれている。また、東洋史研究者の立場からすれば、内藤文庫の漢籍を公開している点が特筆される。内藤文庫は言わざと知れた内藤湖南と、その子息である法制史研究者・内藤乾吉の蔵書である。

残念ながら、書誌情報や画像に少々不備のあるものも見受けられる。たとえば内藤文庫の『文選考異』は刊行年に「嘉慶14序〔1809〕」とあるが、これは嘉慶14年刊の覆宋本を、近代になって複製（画像だけからは判定し難いが石印のように見える）したものである。複製本の書誌の刊年として、原本の序文の年代を採用するというのは、非常に違和感がある。また、同じ内藤文庫の『位署書式私考』は、公開画像の天地が全て逆転している。

他にはない新たなデジタルアーカイブの取り組みであり、アジア研究の専門機関でもあるので、こういった細かな点にも配慮を願いたい。

- 国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp>)

国立公文書館所蔵資料の目録検索とデジタルアーカイブの閲覧ができる。国立公文書館には、行政文書以外に、江戸幕府の紅葉山文庫の系譜を引く内閣文庫の典籍が所蔵されており、これらの目録検索や画像閲覧も同システムを利用する。

試みに、このデジタルアーカイブにおいて、公開済の内閣文庫の典籍中、漢籍に該当する件数（タイトル数）と、デジタル公開されている内数を四部分類の別に確認し、デジタル化の割合（電子化率）を算出すると以下のようになる。

分類	漢籍件数	既電子化内数	電子化率 %
経 部	1,886	1,440	76.3
史 部	3,766	1,169	31.0
子 部	5,268	1,158	22.0
集 部	3,824	627	16.4
叢書部	279	47	16.8
合 計	15,023	4,441	29.6

表1 国立公文書館デジタルアーカイブ公開の漢籍

経史子集に属する漢籍の件数は、書誌数に対応するが、叢書部はそうではなく、1件が一叢書に対応し、そこに含まれる全ての書目（子目）を含む。このため同じ1件のカウントでも単純に同一の尺度で計れない点は注意されたい。

このことを念頭においても、4,441件の漢籍がデジタルアーカイブとして公開され、宋元版など多くの貴重な善本を含んでいる点は特筆されるべきであろう。



図1 国立公文書館デジタルアーカイブ詳細検索画面

デジタル化された漢籍のみを効率よく検索するには、詳細検索画面に移動し、資料群欄は「内閣文庫」、検索対象欄は「簿冊」、画像等有無欄は「画像等有」にそれぞれチェックを入れた上で、キーワードを入力して検索するとよい。また、公開画像はPDFかJPGで全てダウンロード可能となっている。

- 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp>)

既に概要については、何度か本誌でも採り上げているので詳細は省くが、今回は、このデジタルアーカイブで効率的に漢籍だけを検索する方法を紹介する。

- ①トップページの検索ボタン横に、詳細検索へのアイコンがあるので、これをクリックして詳細検索画面に移動する。
- ②公開範囲欄の「インターネット公開」だけにチェックを入れる。
- ③資料群欄の「古典籍資料（貴重書等）」のみにチェックを入れ、他のチェックははずす。
- ④件名欄の右端のプルダウンメニューで「OR」を選択する。
- ⑤件名欄の検索ボックスに「経部 史部 子部 集部 叢書部」と入力する。それぞのキーワードの間には半角もしくは全角スペースを入れること。
- ⑥キーワード欄やタイトル欄などに、検索したい字句を入力して検索する（キーワードを入れずに検索すると、該当する範囲に含まれる全ての漢籍がヒットするが検索結果が3,000件までしか表示できない）。

ポイントとなるのは、④と⑤の操作である。④は件名欄に複数のキーワードを入力した際に、論理和・論理積のいずれかをとるかの選択のため、「AND」であれば全てのキーワードを含む、「OR」であればいずれかのキーワードを含むという検索となる。

国立国会図書館デジタルコレクションの漢籍には、四部分類の件名が付されている。このため、「経部 史部 子部 集部 叢書部」と入力すれば、このキーワードのいずれかを含む範囲内、すなわちデジタル公開されている漢籍の範囲内に検索対象を絞りこむことができる。上記は漢籍全体であるが、もちろん「経部

レビュー & リソース紹介



図2 国立国会図書館デジタルコレクション詳細検索画面

だけや「史部と叢書部」などと、組み合わせ次第で範囲を絞ることもできる。

また、収録されている書誌は、オープンデータセットのページ (<https://www.ndl.go.jp/jp/dlib/standards/opendataset/index.html#opendataset01>) で全て公開されている。インターネットを通じて公開されている漢籍については、「国立国会図書館デジタルコレクション書誌情報>古典籍>インターネット公開」部分のファイルをダウンロードしてください。

2020年7月15日時点のデータから、四部分類の件名についているものを抜き出すと13,957件ある。ただし、これは書誌数であって、物理的な冊数ともタイトル数とも異なっているようである。詳しくみてみると、1タイトル1冊の漢籍であればカウントは1となるが、1タイトル複数冊からなる漢籍であると、全体を包括する書誌が1、物理単位の書誌が冊数分だけがあるので、冊数+1が書誌数となっている。つまり10冊の線装本からなる漢籍は書誌数でカウントすると11となる。

そこで、他のデータ要素と掛け合わせて実際のタイトル数と冊数を計算してみたところ、タイトル数は1,650、冊数は12,308という結果を得た。国立国会図書館の公式発表ではないので、あくまでおよその傾向として理解されたい。

公開画像には、日本の古写本や和刻本など、わが国で制作されたものも多く含む。中国の版本では明・清の版本が主流をなすが、貴重な宋・元の版本もあり、世界的に希有と言われる北宋の版本も公開されている（北宋版『姓解』）。

さて、日本に現存する北宋版として知られるものに宮内庁書陵部所蔵の『通典』がある。『通典』は、古代から唐後半期までの典章・制度を通史的に述べたもので、政書とよばれる書物のジャンルの走りとされている。以後、『通志』、『文献通考』と続き『清朝統文

献通考』までの10の政書は、十通と呼ばれるようになる。この北宋版『通典』を含む宮内庁所蔵の漢籍善本に特化したデジタルアーカイブが、宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧である。

●宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧 (http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php)

『図書寮典籍解題』漢籍篇に著録される漢籍善本についてのデジタルアーカイブ。ただし、宮内庁ではなく、科研費によって外部の研究者が構築したもので、URLを見る限りは慶應義塾大学斯道文庫のサーバーから提供されている。

漢籍集覧に納められているものを含めて、宮内庁所蔵漢籍の全体を検索するには、書陵部所蔵資料目録・画像公開システムがある (<https://shoryobu.kunaicho.go.jp>)。

漢籍の検索はトップメニューから「図書寮文庫」をクリックする。図書寮文庫の検索画面に遷移したら、検索画面の検索ボックスに適宜キーワードを入れて検索すればよい。キーワード無しでの検索もできる。表示された検索結果一覧の最右欄にサムネイル画像が表示されているものと、「外部へのリンク」が表示されているものは、カラー画像で漢籍の全文を閲覧できる。

サムネイルのものはクリックすれば直ぐに画像閲覧システムが立ち上がる。一方、「外部へのリンク」の方は、クリックすると一旦、書誌詳細表示に切り替わるので、



図3 書陵部所蔵資料目録・画像公開システム詳細検索画面

書誌最下段の画像欄にあるリンク先をクリックすればよい。前掲の漢籍集覽に画像のあるものは、漢籍集覽としてリンクが張ってある。

残念ながら、検索対象を漢籍に限定する方法はないようである。ただし、詳細検索画面で刊写情報欄に、宋版、明写など、「王朝名+版」や「王朝名+写」と入力して検索することで、当該時代の版本や鈔本の一覧をおおよそ把握できる。また併せて、資料画像欄の「画像がある資料だけを検索する」にチェックを入れておくと、デジタルアーカイブのあるものだけに検索対象を絞り込める。

このように数千冊規模の漢籍デジタルアーカイブを相互に参照できるようになると、次のように利便性がより高まる。

南宋の王応麟が編纂した類書『玉海』は、現在では散逸してしまった唐・宋時代以前の資料が多数引用されており、利用価値の高い史料である。『玉海』の刊行は元の至元6年(1340)まで待たねばならなかつたが、以後、この版本を使い続けて、摩耗すると補修したり新しい版本に彫り直すなど補刻しつつ、清朝まで刊行が継続された。



図4 『玉海』明初の刷本



図5 『玉海』嘉靖通修本

全200巻と大部なこともあり、通行本は清の浙江書局本や四庫全書所収本の影印で、活字本や点校本はない。このため研究利用では、元刊本の系統で字句や内容の確認を迫られることが多い。

国立国会図書館デジタルコレクションでは、至元6年版を明初に刷ったものと、万暦年間の通修本(二回以上の版本の補修を経て印刷された本)が公開されている。筆者はこれらを非常に重宝しているが、明初の刷本は欠損があり、偶然にも確認を必要とする字句の部分に

当たっていた(図4)。このため次に万暦通修本のデジタル画像で同じ部分を閲覧した。するとその版心には「萬曆癸未補刊」とあって、該当葉は万暦11年(1583)に版本を再彫して交換した上で印刷されたものであった。このため、できれば版本が交換される前より古い刷のものを確認したいと考えた。

そこで他を探すと、国立公文書館デジタルアーカイブで嘉靖通修本が公開されており、こちらの該当葉の版本は、少なくとも明初の刷本と同じと判断された(図5)。

このように、複数のデジタルアーカイブを駆使することで、疑問のあった字句をより古い版本で確認することができるのである。この程度のことかと思われるかもしれないが、デジタルアーカイブがなければ、複数の図書館を右往左往しなければならない。何よりデジタルアーカイブであると、今回のように複数の版本を直接ビジュアルに比較できる点が素晴らしいではないか。

図書館によっては、撮影・複写を禁じられているところもあるから、そうなるとメモと記憶を頼りに比較するしかない。デジタルアーカイブであればそれも気にする必要はないのである。

比較といえば、東京大学アジア研究図書館、関西大学、国立国会図書館のデジタル画像はIIIF対応となっているので、こういった複数の書物の比較には向いている。まだ一般化しているとは言いがたいIIIFだが、学術研究用のデジタル画像に普及が進むことを願いたい。

❖ 統合検索サイトやOPACなど

Google ブックス(<https://books.google.co.jp>) や Internet Archive (<https://archive.org/index.php>)でも、意外と漢籍がデジタル公開されているので、困ったら検索してみることをお薦めする。

Google ブックスでは明・清の隨筆の類いが案外にヒットする点、公開されている版本はOCRがかけてあるので、不完全ではあるものの版本の内容をテキスト検索できる点が特筆される。ただし、検索範囲を漢籍に絞り込みようがなく、キーワード検索以外の手立てがほぼ無いことが難点である。

Internet Archiveはインターネット上で公開されている情報のリポジトリとしての役割を果たしている。こ

レビュー & リソース紹介

のため収録されている漢籍も Internet Archive が所蔵しているわけではないので、所蔵元を確認し素性を確かめるべきで、研究利用にあたって、ここから直接の引用は避けるべきであろう。

慶應義塾大学メディアセンター (<https://www.lib.keio.ac.jp>) の OPAC では、Google ブックスで公開する自館所蔵分のデジタルアーカイブにリンクしている。このように OPAC の書誌からデジタルアーカイブへのリンクも一般化しつつあり、筑波大学附属図書館や東京大学附属図書館の OPAC でも、実はかなりの量のデジタルアーカイブが書誌とリンクされている。しかしながら、現状ではいずれの OPAC もデジタルアーカイブのリンクする書誌だけを検索する手段がなく、宝の持ち腐れ状態であることは否めない。

近年ではジャパンサーチ (<https://jpsearch.go.jp>)、カルチュラルジャパン (<https://cultural.jp>) など、いわばデジタルアーカイブのポータルサイトもできつつある。これらには、東京大学アジア研究図書館や国立国会図書館のデジタル画像、さらには他の国立大学や国立博物館などのデジタルアーカイブが収録されている。

ジャパンサーチは、詳細検索画面で「時間 / 時代」や「場所」の入力欄をうまく使うと、必要な情報を絞り込める。ただし、複数の機関のメタデータが収録されていることから、たとえば「時間 / 時代」については、西暦、和暦、世紀、王朝名など多様な表現がある。このため思いつくものを、いくつか試してみる必要があり、情報は大量にあるけれど、必要とする情報になかなかたどり着けないというもどかしさを感じざるを得ない。なお、詳細検索画面に進むには、トップページでキーワードを入力せずに検索を実行すればよい。

カルチュラルジャパンも、トップページでキーワードを入力せずに検索を実行すると、絞り込み条件を設定できる画面に遷移する。条件は画面の左側にツリー構造で表示されるので、「基本区分」(図書や古文書などの資料区分)、「時間」、「時代」、「言語」あたりの条件をうまく設定すると、ある程度、漢籍のデジタルアーカイブに絞り込むことができよう。

❖ 海外の漢籍データ

次に、海外の図書館等が提供するオンライン漢籍で、最近、筆者が使って重宝したものを紹介する。

●臺灣國家圖書館古籍影像檢索 (<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/Search/Index/1>)

本誌 15 号のレビュー「中国・台湾の古典籍検索」でも紹介しているが、その際には、まだ構築途上のサイトであった。

台湾国家図書館のほか、トロント大学図書館、フランス国立図書館、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館、アメリカ議会図書館、プリンストン大学東アジア図書館、ワシントン大学図書館、ブリティッシュコロンビア大学図書館、ドイツベルリン国立図書館、韓国国立中央図書館が所蔵する漢籍の目録およびデジタルアーカイブを検索できる。いずれも、台湾国家図書館との共同プロジェクトによるデジタルアーカイブ構築事業の成果である。

もちろん、個別の図書館のサイトでもデジタルアーカイブとして公開されていると考えられるが、中国語もしくは英語の利用者インターフェイスを備えたポータルとして、当該サイトの利便性は高い。なお、今のところ、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の漢籍は、目録検索のみで、デジタルアーカイブは提供されていない。



図 6 臺灣國家圖書館古籍影像檢索

検索画面の「是否有影像」欄にチェックを入れると、デジタルアーカイブのあるものだけを検索対象してくれます。このチェックのみの状態で検索ボタンをクリックすると、16,300 件ヒットするのでこれがデジタル化された漢籍のタイトル数と考えられる。また、上記のチェックに加えて、「版本」欄に鉢本と入力して検索すると、3,239 件ヒットする。これがデジタルアーカイブ中の鉢本のタイトル数ということになろう。このように、明清を中心とする鉢本が多くデジタル化されているのも、当該データベースの大きな特徴である。

検索において所蔵の図書館を絞り込みたいときは、

「原書館藏地」のプルダウンメニューで、必要な図書館にチェックを入れる。なお、メニュー中の「國圖代管原平圖古籍微片」は、旧北平図書館旧蔵の漢籍善本のマイクロフィルムのことを指し、ここからスキャンした画像が公開されている。北平図書館とは、中国国家図書館の前身であり清朝以来の漢籍善本が豊富に蔵されていた。これらの漢籍は、日中戦争時にアメリカ議会図書館に疎開、寄託されたが、戦後になって故宮博物院が管理することとなったものである。日本の国立国会図書館にもマイクロフィルムが所蔵されているほか、中国では影印本も出版されている。

- 香港中文大學數碼典藏 (<https://repository.lib.cuhk.edu.hk/tc>)

香港中文大学提供のデジタルアーカイブは、22 のコンテンツからなる。内容は大学図書館の所蔵資料から大学の法人文書類、学位論文など多岐にわたる。古典籍ということに限定すると、以下の表のような4つのコンテンツに、合計834件のデジタルアーカイブが収録されている。

コンテンツ名	件数
中國古籍庫	564
中醫古典文庫	142
北山汲古：利氏北山堂贈中國古籍善本	59
道教經典文庫	69

表2 香港中文大学數碼典藏所収の古典籍

このほか、明の魚鱗図冊や清朝から民国時代の土地文書をアーカイブ化した「土地契約文書」(167件)、文化大革命期の広州の風刺画を集めた「漫畫中的文化大革命：廣州の諷刺宣傳畫 1966-1977」(216件)、大学図書館所蔵甲骨コレクションをアーカイブ化した「聯合書院甲骨」(47件)など、古代から現代に至る多彩な資料が電子化されており、人文社会系の研究にとって有用である。

- Harvard Library HOLLIS (<https://library.harvard.edu>)

ハーバード大学のOPACであり、イエンチン図書館の漢籍もここで検索でき、なかには画像を閲覧できるものもある。Advanced search (詳細検索画面) で、

Language を Chinese に設定し、Publication Date を適宜設定することで検索の対象範囲をある程度絞り込むことができる。ただし、これらの検索条件はキーワードを入力することが前提であり、言語や年代だけのブラウジング的な検索はできない。したがって、デジタルアーカイブのある漢籍にたどり着くのは、以外と困難を極める。

そこで、次のような裏技を紹介する。イエンチン図書館は「中國哲學書電子化計劃」(<https://ctext.org/zh>) を支援して画像を提供しており、その一覧が公開されている (<https://ctext.org/library.pl?if=gb&collection=139>)。この一覧にある4,418点の漢籍は、ほぼデジタルアーカイブが公開されていると考えて差し支えない。したがって、

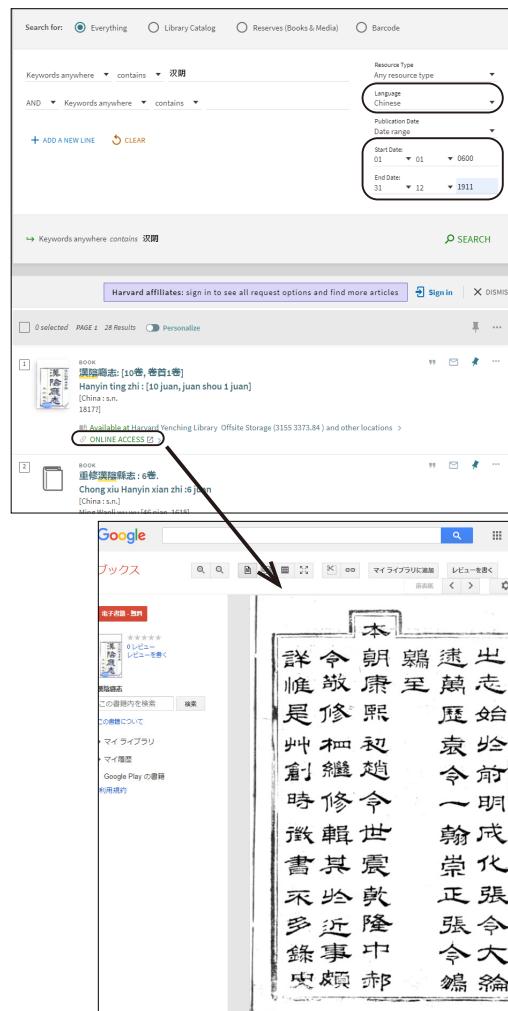


図7 ハーバード大学 OPAC 詳細検索画面の検索例と Google ブックスへのリンク

レビュー & リソース紹介

全くもって本末転倒なのだが、イエンチン図書館の公開する漢籍画像にもっとも効率的にたどり着く方法は、第三者の公開するリストから書籍名を探し、OPACに戻って検索し直すことである。なお、「中國哲學書電子化計劃」でも画像は見られるが、イエンチン図書館が公開する元画像の方が画質が良い。

検索する場合、日本の常用漢字の新字ではヒットしない場合があるので(本誌「慶大・早大図書館の新OPAC」参照)、確実な検索結果を望むならば簡体字を使って検索する方が無難である。検索結果の一覧に ONLINE ACCESS とあるものがデジタルアーカイブの書誌であり、このリンクをクリックすると専用のビューアーが開いて画像を閲覧できる。内部公開画像の場合は、ID とパスワードを要求され、それ以上進めない。

ハーバードイエンチン図書館は世界有数の東アジア研究機関に附属し、質量ともに素晴らしいコレクションを所蔵している。中国国家図書館にも所蔵のない善本があり、今後の活用が期待されるデジタルアーカイブである。

なお、ハーバード大学は Google ブックスにも参加しているので、イエンテン図書館以外の漢籍で、Google ブックスに入っているものも、同様に ONLINE ACCESS から画像がリンクされている(図7)。

- 中国国家图书馆中华古籍资源库 (http://www.nlc.cn/pcab/zy/zhgj_zyk/)

漢籍善本の宝庫として、中国国家図書館を外すわけにはいかないが、中華古籍資源庫は登録制である。以前は海外からも登録することができたのだが、近年、仕様の変更があり、残念ながら海外からの新規登録はできなくなってしまった。外国人が同館のデジタル資源を利用するには、一度、中国国家図書館に直接出向いて入館証を作成するのが、最も現実的な方法である(詳しくは本誌 17 号千田大介氏の「中国国家図書館 OPAC」を参照)。しかし、コロナ禍の現状では、それもままならない。こういった社会状況の変化も考慮して、同館には海外からの登録再開を切望したい。

❖ おわりに

本稿で紹介したデータベースには、検索においてキーワード入力が必須なものと、そうでないものとが

ある。人文社会科学系の研究にとっては、特定の情報にたどり着けることも、ざっと全体をブラウジングできることも、どちらも重要であることに変わりはない。また、キーワードは利用する側の思い描くものと、メタデータの記載は必ずしも一致しない。

このため、キーワードは必須で他の検索条件は絞り込みにしか使えないインターフェイスであると、筆者にはかなり苦痛に感じてしまう。本稿で紹介した中だと、このタイプは、ハーバード大学図書館や慶應義塾大学メディアセンターの OPAC が該当する。この種の OPAC は、アナログからデジタルまで様々なメディアに対応できるものとして、今後世界の主流になっていくようである。しかし、検索できるメディアの範囲を広げるのであれば、逆にキーワード以外で検索範囲を限定する方法も充実させないと、利用者は情報の海に溺れることになってしまう。

少なくともこういったタイプの OPAC は、人文社会科学系の研究者にとって使い勝手のよいものではないと考える。今後の図書館利用者インターフェイスの設計時には、ぜひ配慮をお願いしたく、この場を借りて、日本の図書館関係者に強く訴えたい。

さて、デジタルアーカイブを利用する側にとっては、画像より検索でき、そのままコピー & ペースト可能なテキストデータの方が重宝されるであろう。

ただし、テキストデータは OCR の認識ミスや、データ変換時のミス(たとえば元データが簡体字で、そこから繁体字に変換された結果、云が雲になってしまうなど)が残る場合もあり、特にフリーでネット公開されているものは、注意が必要である。そもそも、テキストデータの多くが基づいている点校本も、絶対的に正しいテキストとは限らない。情報の複製において、情報の欠損や誤認を 100% 防ぐことは不可能であり、複製回数が多いほど内容の誤脱が多くなる。より古い本ほど善本と言われて価値が高いのは、情報誤脱のリスクが低いからである。

点校本は、版本を活字化するにあたって、複数の版本・鈔本(写本)を比較検討することで字句を校訂し、できる限り原本に近づけようと試みたものである。1980 年代以降、その出版は激増したが、特に 20 世紀の学術環境下、つまり現在のように善本画像を電子的に一覧することができなかった時代の作業による点校本には、おのずと限界があることを理解しておかねばならない。

もちろん、この時代にも影印本、すなわち典籍の善本写真をそのまま出版したものも存在した。しかし、これらは撮影した写真ネガから画像を紙焼きし、それを切り貼りして編集したものをさらに写真に撮影して、白黒二値で印刷するという工程を経る場合が多かった。写真は複製を繰り返すことで画質が落ちるため、撮影ネガから数えて曾孫世代となる出版物の写真が美しいはずはない（本誌18号拙稿『『皇明條法事類纂』電子化剖記』参照）。

筆者はアナログ時代の点校本や影印本をことさら貶めようとしているわけではない。現在のようなデジタル技術や環境の整わない時代の作業は、想像を絶する困難の連続であったであろう。この意味でアナログ時代の点校本や影印本の編集・出版に関わった方々には心から敬意を表している。

しかし、史料にアクセスできる環境が変わり、デジタル技術が進展した以上、彼らの仕事に対して今の環境を生かして批判・検討するのは、現在の研究者の責務でもある。現代は、過去の点校本に基づいたテキストデータを、デジタルアーカイブで公開されている版本画像を使って、再校訂できる時代なのである。そうであるならば、テキストデータではなく、画像データで古典籍をそのまま公開するサイトは、今後の文献研究の核となる情報を提供していることになる。

本稿において、テキスト系のデータベースではなく、敢えて画像系のデジタルアーカイブばかりを採り上げたのはこのような趣旨からである。

※ 本稿はJSPS科研費JP20H01298による研究成果の一部です。

中国国家図書館の古典文献データベース

千田 大介（ちだ だいすけ）

❖ 古典文献データベースのリニューアル

以前にも何度か紹介している中国国家図書館の数字古籍・数字方志を始めとする古典文献データベースが、リニューアルされている。

●中国国家図書館 (<http://www.nlc.cn/>)

以下では、どの部分がリニューアルされたのか、簡単にレビューしたい。

❖ 検索システムの改善

中国国家図書館の古典文献データベースには、まずトップページの「读者门户登陆注册」(读者ポータルにログイン・サインアップ) をクリックしてログインし、「读者云门户」(读者クラウドポータル) に移動することになる。

このページにリニューアル後、「特色资源」検索ボックスが設置され、古籍・方志などの各データベースを横断検索できるようになった。



検索結果画面では、左にカテゴリ・データベースごとのヒット数が表示される。そこをクリックして、候補を絞り込むこともできる。従来は、ここに掲載されているリンクから各データベースのページにジャンプ



して、個別に文献を検索する必要があったが、そうした使い勝手の悪さが改善されている。

❖ 新版 Edgeへの対応

従来のシステムでは、Acrobat Reader の設定などがIEの使用を前提としており、他のブラウザではうまく動作しなかった。それが、おそらくはEdgeがChromiumベースにアップグレードしたことに対応したのであろう、新版のEdgeで動作するようになっている。

一方、筆者が試したところでは、Windows 10環境のChrome・FireFoxでは上手くログインできず、文献を閲覧できなかった。最新版のブラウザに対応したのは歓迎すべきことだが、完全なクロスブラウザが実現されなかつたのは残念である。

❖ 文献閲覧画面の改善

検索した文献を開くと、書影・書誌情報の下に、各巻へのリンク一覧が表示される。一部の文献では、このリストに「在線閲読」のほか、「対照閲読」と表示されることがある。



「在線閲読」では写真PDFだけが表示されるのに対して、「対照閲読」では写真PDFとベクタ版(要するにテキストデータ版)PDFが左右に表示される。



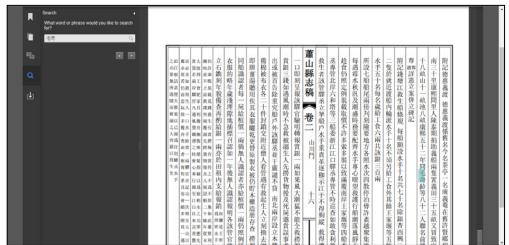
ベクタ版は、テキストコピーこそできないが、虫眼鏡アイコンをクリックして、閲覧中のPDFを検索することができるので、調査効率が高くなるだろう。ただし、簡体字・繁体字など異体字の一括検索には対応していないので、上手くヒットしない場合は、異体字で検索するといった工夫が必要になる。

ベクタ版作成済み文献の閲覧ページ最上部には、「影像」・「矢量」・「对照阅读」のモード切り替えボタンが表示される。



検索機能を使う場合は、ベクタ版「矢量」を選択した方が使い勝手が良い。

PDF表示のインターフェイスも変更されており、旧版よりも操作性がよくなり、安定性も上がっている



ような印象を受ける。

なお、各卷リストでリンクをクリックすると、文献のPDFがポップアップで表示されるので、セキュリティソフトのポップアップブロックを解除する、例外登録するなどの対応が必要になることがある。

❖ おわりに

全体として旧版のインターフェイスよりも使い勝手が良くなっているし、最新のEdgeブラウザに対応したこととは、他のブラウザへの対応が不十分であることを見差引いても、評価に値しよう。

新型コロナウイルスの流行によって、インターネットにおける研究・教育インフラ整備の必要性が、従来にも増して浮き彫りになっているが、こうした状況もありまつて、中国国家図書館の古典文献データベースの研究・教育上の価値も、益々高まっているといえよう。

慶大・早大図書館の新OPAC

千田 大介（ちだ たいすけ）・小島 浩之（こじま ひろゆき）

❖ 新しい OPAC の誕生

2019年9月2日より、慶應義塾大学メディアセンター（図書館）と早稲田大学図書館のOPACが一新された^[1]。両者は図書館システムを共同運用することでコンソーシアムを形成した上で、イスラエルのEx Libris社（2015年にアメリカのProQuest社に買収され、現在ではその傘下企業）が提供する、クラウド型の図書館システムAlmaと利用者インターフェイスPrimo VEを導入した^[2]。

周知のように日本の大学図書館は、国立情報学研究所（NII）で目録システムも共同化しており、この書誌・所蔵データをCiNiiBooks（<https://ci.nii.ac.jp/books>）を通じて公開している。ただし、一部の雑誌等を除き、両大学の書誌・所蔵情報はここでは検索できない。両者ともに、独自システムの構築を進め、他の大学図書館の動向とは一線を画してきたのであった。この意味で、今回、両者が手を結び共同でシステムを運用するということは、驚きをもって感じられた。

さて、Ex Libris社はAlephと呼ばれるパッケージ型の図書館システムを開発しており、世界の多くの図書館で導入されている。国立図書館でもこのシステムの使用が散見され、日本の国立国会図書館（NDL）や中国国家図書館の図書館システムもAlephをベースとしている。ただし、Alephはパッケージ型と書いたように、買い切りのシステムであって、それぞれの図書館の実情に応じてカスタマイズがなされている。このため、細かな仕様は図書館によって異なっている。慶應義塾大学メディアセンターも以前はこのAlephを使用



慶應義塾大学図書館 OPAC の「魯迅」検索結果

していた。

今回、慶應義塾大学と早稲田大学が導入したAlmaはクラウド型図書館システムとのことなので、システムメンテナンスを自前でする必要が無く、全体的なコストや負担も下がるはずである。一方、パッケージ型のシステムのように、ローカル事情に合わせたきめ細やかなカスタマイズは不可能である。

このことが災いしたのであろう、更新されてまもなく、両大学の中国関係教員から、中国書籍が上手く検索できないという声が上がった。「魯迅」で検索しても「魯迅」をタイトルに含む資料がヒットしない、「論語」で検索しても「論語」がヒットしないなど、一部の漢字の一括検索ができなくなっていたのである。

慶應義塾大学・早稲田大学の旧OPACは、いずれも常用漢字の新字・繁体字・簡体字の一括検索に対応していた。慶應義塾大学ではピンイン（ローマ字）検索でカードの画像が表示されるシステムが長らく使われていたし、早稲田大学は1990年代末に米国からのシステム導入を試みるなどしており、いずれも2000年代になってようやく中国書籍のスムーズな検索が実現した経緯があるが、それが今回の更新で損なわれてしまったことになる。

本稿は、かかる漢字検索の不具合について、その傾向を検証し、原因についていさか推測を試みたものである。

❖ 検証結果

検証は、慶應義塾大学・早稲田大学のOPAC以外に、参考としてNDLのOPAC（NDLオンライン）を加えた三者で行い、これらの3つのOPACに同じキーワードを入れて、フレーズ検索でのヒット数を比較した。

フレーズ検索とは、検索語をダブルクオーテーションで括ることで、語句の並び順を指定できる検索方法である。完全一致検索で検証してみたかったが、NDL以外はこれが用意されていなかった^[3]。なお検索結果は2020年9月12日のデータに基づくものである。

手始めに、「観光」「觀光」「観光」のキーワードで

検索したが結果に差異はなかった。簡体字、繁体字、常用漢字の新字の間では、検索の互換性が保たれていくように見える。

加えて、いわゆるコードセパレート文字（字形の若干異なる同じ漢字が包摂されず別々のコードに割り振られているもの）の問題を含むもので検索してみた。その結果を表1に示すが、こちらも特に問題はないようである。

	慶應	早稲田	NDL
啓蒙	1,473	1,670	7,426
啟蒙	1,473	1,670	7,426
启蒙	1,473	1,670	7,426
説文解字	116	190	375
說文解字	116	190	375
说文解字	116	190	375

表1 コードセパレート文字（「啓」「説」「說」）を含む、簡体字・繁体字・常用漢字間の検証結果

これらを見る限りでは、簡体字、繁体字、常用漢字のいずれも互換性があり、コードセパレート文字にもうまく対応しているように見える。

続いて、異体字について検証してみた。「清史稿」と「清史稿」で検索したが、どちらも慶應21件、早稲田23件となり、「清」と「清」の間で検索に差は出なかった。しかし、「衛」と「衛」の場合は表2のように明確な差が出てしまった。

	慶應	早稲田	NDL
李衛公	29	30	59
李衛公	9	6	59
李卫公	9	6	59

表2 「衛」の異体字間の検索

「衛」は「衛」の繁体字であるものの、現在の台湾では「衛」が標準字体である。つまり日本・台湾で同じ字体が使われている。だが、それと異体字の「衛」、簡体字の「卫」が上手く関連付けられていない。「衛」はJIS X 0208 内字、台湾 BIG5 コード外字であるため、中華圏で作成された異体字テーブルからは抜け落ちる危険性の高い字である。

しかし、検索結果は、「衛」・「卫」が同じで「衛」のみ異なるという不可解なものとなっている。「衛」は Unicode に複数の字形が登録されているが、表1の「啓」「説」とは異なり、日本・台湾で使われる字体・

早稲田大学図書館 OPAC の「論語」検索結果

コードポイントが一致している。これは日本語の異体字テーブルから「衛」・「衛」が漏れていることを窺わせる。

いずれにせよ、パッケージ型の NDL が基本的に異体字間の検索の互換性がうまくとれているのに対して、クラウド型の方では、互換性が何らかの条件下において崩れることがわかる。

そこで、別の簡体字、繁体字、常用漢字新字の組み合わせで、再度検証を試みた。検索に用いたキーワードは「記録」と「団練」である。

	慶應	早稲田	NDL
記録	12,676	19,460	240,382
記録	12,676	19,460	240,382
记录	12,676	19,460	240,382
记录	166	54	240,382
记录	166	54	240,382
记录	166	54	240,382
団練	4	4	85
團練	4	4	85
团練	4	4	85
团练	0	0	85
團练	0	0	85
团练	0	0	85

表3 「記録」と「団練」での検証結果

「記」と「練」は、いわゆる新字がなく常用漢字と繁体字とで同じ字体が使われているが（「練」は厳密には新字だが、Unicode で「練」とユニファイされている）、簡体字は異なっている。「錄」と「團」は新字であり、常用漢字・繁体字・簡体字の三者で字体が全て異なっている。

パッケージ型の NDL は全く影響を受けなかったが、クラウド型の検索結果には明確な差異が認められた。結果から判断するに、この場合、検索結果に影響

レビュー & リソース紹介

を与えているのは、「記」と「練」であることがわかり、以下のように考えられる。

- ① 「記」や「練」のように、繁体字と日本の常用漢字が同じ（すなわち新字がない、あるいは Unicode で旧字体とユニファイされている）場合、簡体字との検索の互換性がとれていない。
- ② 逆に「錄」と「錄」、「団」と「團」のように、繁体字に該当する旧字体が異体字として JIS に定義されている場合は、どの字体でも問題なく検索できる。

①については、「東京」と「东京」、「手術」と「手术」の検索においても同じ結果が出ており、②については表 1 の例からも裏付けられる。

このほか、複数の繁体字が 1 つの簡体字や常用漢字の新字にまとめられた例や、日本の新字と簡体字で異なる字体が採用されているものについて検証してみた。

A) 发

簡体字の「发」は髪・發がまとめられている。これらについて、「祝髪」「祝发」「祝發」「祝發」で検索をしたところ、「发」・「發」・「発」の三者は検索結果が同じとなるが、「发」と「髪」は検索に互換性がない。NDL オンラインも同じ仕様となっている。

B) 云

簡体字の「云」は云と雲がまとめられているので、「雲亭」と「云亭」で検索してみたところ、同じ検索結果となり、「雲=云」として扱われていた。NDL は「雲」と「云」を別扱いとしており、検索の互換性は担保されていない。

C) 后

簡体字の「后」は后と後がまとめられている。「皇后」と「皇後」で検索したところ、「後=后」として扱われていた。なお、NDL オンラインは、後と后は別扱いとなっており、検索の互換性は担保されていない。

D) 芸

「芸」と「藝」は本来異なる漢字だが、常用漢字の新字では「芸」にまとめられてしまっている。これに対して、中国では「芸」と「艺」（藝の簡体字）で使い分けられている。「藝文」「芸文」「艺文」で検索したところ、慶應と早稲田の OPAC では「藝=芸=艺」として扱われていた。

ところで、同じクラウド型のシステムを使っている

ハーバード大学図書館の OPAC で、表 3 の「記録」と「團練」を同じように検索してみた。その結果、「記録」「記録」、「團練」「團练」の場合だけ検索結果が異なっていた。「記録」と「記録」は共に 1,338,364 件のヒットだが、他は 1,340,699 件のヒットがあり、「團練」と「團练」は共に 2,671 件のヒットに対して、他は 2,681 件のヒットである。

つまり、「錄」と「團」のように、検索キーワードに日本の新字が入ると、検索結果が変わってしまうようである。

同じクラウド型にもかかわらず、日本とアメリカでこのような差が生じるのは、システムが標準としている言語の違いに起因するように思われるが、確証はない。ただ、Ex Libris 社のシステムが漢字検索において、CJK 漢字の枠組みを考慮せず、中国の漢字を全ての基本において設計していることは想像がつく。これを日本に導入するにあたっては、本来であれば、全体の漢字異体字テーブルの設計し直しなど、抜本的な手直しが必要であったのではないかと思われるが、いずれにせよ、両大学図書館の事前検証が不十分であったことは明らかである。

❖ おわりに

慶應義塾大学メディアセンターと早稲田大学図書館の新しい OPAC について、中国学研究の立場から検証を試みた。欧米言語を基本とする検索システムでは、いわゆる CJK 漢字についての問題があまり顧みられていないことがわかった。この点、Ex Libris 社がアジア、なかでも日本の図書館にクラウドシステムを今後も広めようと考えているのであれば、抜本的な見直しが必要であろう。

当面、中国関連書籍を検索する場合は、ユーザー側が日本語だけでなく中国語でも検索語を入力するといった対策をするほかなく、不便を強いられよう。研究・教育上、好ましいこととは言い難い。

慶應義塾大学メディアセンターと早稲田大学図書館には、こういった漢字検索に関する問題について、今後更に検証を重ね、ユーザーの立場から Ex Libris 社に問題提起とクラウドシステムの改善を働き掛けるよう、お願いしたい。「日本初となる図書館システム共同運用を開始しました」^[4] と大々的に宣言している両図書館であるから、せっかくのシステムが画竜点睛を欠く

ような事態につながるこういった問題に、目をつぶることないと信じたい。

注

- [1] 慶應義塾大学は KOSMOS、早稲田大学は WINE という愛称が付けられているが、本稿では一般名称としての OPAC で統一する。
- [2] コンソーシアム形成からシステムの導入までの詳細は、本間知佐子・入江伸「早稲田大学・慶應義塾大学コンソーシアムによる図書館システム共同運用に

向けた取り組みについて」『カレントアウェアネス』343 (<https://current.ndl.go.jp/ca1969>) <最終アクセス 20200912> を参照。

- [3] NDL の完全一致検索は、キーワードの前後に全角スラッシュを入れる仕様となっている。なお、NDL の場合はフレーズ検索も通常の検索も、検索結果数に変化がなく、どういう意味でフレーズ検索が用意され、機能しているのかよくわからない。
- [4] 「早・慶図書館システム共同運用開始」(<https://www.waseda.jp/top/news/66247>) <最終アクセス 20200912>

執筆者紹介

石井 公成 (いしい こうせい)

1950年生まれ。駒澤大学仏教学部教授。アジア諸国の仏教教理、および文学・芸能・近代ナショナリズム・酒・言葉遊びなどと諸国の仏教の関係を研究中。主著に『華厳思想の研究』、『聖徳太子——実像と伝説の間』、『<ものまね>の歴史——仏教・笑い・芸能——』、『東アジア仏教史』、共著に『教えを信じ、教えを笑う』などがある。

梅村 卓 (うめむら すぐる)

1975年生まれ。上智大学文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(史学)。現在は西南学院大学国際文化学部専任講師。専門は中国メディア史、満洲・東北地域史。著書に『中国共産党のメディアとプロパガンダ——戦後満洲・東北地域の歴史的展開』(御茶の水書房、2015年)、共編著に『満洲の戦後:継承・再生・新生の地域史』(勉誠出版、2018年)がある。

川瀬 由高 (かわせ よしたか)

1986年生まれ。首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程満期退学。博士(社会人類学)。現在は江戸川大学社会学部専任講師。専門は社会人類学、中国民族誌学。著書に『共同体なき社会の韻律——中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌』(弘文堂、2019年)がある。

菅野 智博 (かんの ともひろ)

1987年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士(社会学)。現在は中山大学歴史学系(珠海)副教授。専門は中国近現代史。主要業績に、「近代南満洲における農業労働力雇用——労働市場と農村社会との関係を中心に」(『史学雑誌』第124編第10号、2015年)、「分家からみる近代北満洲の農家経営——綏化県蔡家窩堡の蒼氏を中心に」(『社会経済史学』第83卷第2号、2017年)、共編著『戦後日

本の満洲記憶』(東方書店、2020年)がある。

小島 浩之 (こじま ひろゆき)

1971年岐阜県生まれ。東京大学大学院経済学研究科講師・経済学部資料室室長代理。専門は東洋史学および歴史資料の保存と活用に関する研究。最近は中国古文書学の理論体系の構築に精力を傾けている。

佐藤 仁史 (さとう よしふみ)

1971年生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程修了。博士(史学)。現在は一橋大学大学院社会学研究科教授。専門は中国近現代史。著書に『近代中国の郷土意識——清末民初江南の在地指導層と地域社会』(研文出版、2013年)、共著に『嘉定県事——14至20世紀初江南地域社会史研究』(広東人民出版社、2014年)、『垂虹問俗——田野中的近現代江南社会与文化』(広東人民出版社、2018年)がある。

鈴木 史己 (すずき ふみき)

1982年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(文学)。現在は南山大学外国語学部講師。専門は中国語学。共著に『漢語方言解釈地図(続集)』(好文出版、2013年)、論文に「漢語方言有关“臉”的詞語比較——以江浙地区的高精度地圖為線索」(『東部亜洲地理語言學論文集』、2019年)がある。

田邊 鉄 (たなべ てつ)

1963年京都府生まれ。大阪外国语大学大学院外国语学研究科修士課程修了。北海道大学情報基盤センター准教授。CALL授業を自動学習から「能動学習」へと変えるためにジタバタ中。目下のテーマはパンダモチーフ。

千田 大介 (ちだ だいすけ)

1968 年東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程中退。慶應義塾大学経済学部教授。専門はここ 1,000 年くらいの中国のサブカル、近頃のテーマは清代中期の女形エロ芝居とマジカル戦闘美少女物語発展の関係。Web サイト：電腦瓦崗寨 <http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/>

野原 将揮 (のはら まさき)

1981 年愛知県生まれ。愛知県立大学外国語学部中国学科卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学、博士（文学）。現在は成蹊大学法學部准教授。専門は上古音研究。最新の業績は “Old Chinese ‘egg’: More evidence for consonant clusters” (*Language and Linguistics*. John Benjamins Publishing Company. (in press))、「構擬“泉”字音—兼論“同義換讀”」(『中國語言學集刊』12。74-87 頁。Brill. 2019 年) 等。

氷野 善寛 (ひの よしひろ)

1980 年大阪生まれ。目白大学外国語学部中国語学科専任講師。N 高等学校中国語講座の教材制作およびカリキュラム設計を担当。e-Learning 教材として『NetAcademy2 中国語コース』(アルク教育社)、共著として『キクタン中国語』シリーズ(アルク)、『官話指南の書誌的研究』(好文出版)。

師 茂樹 (もろ しげき)

1972 年生まれ。花園大学教授。博士(文化交渉学)。『論理と歴史—東アジア仏教論理学の形成と展開』(ナカニシヤ出版、2015 年)、『『大乗五蘊論』を読む』(春秋社、2015 年) など。Twitter ID: @moroshigeki

宮原 佳昭 (みやはら よしあき)

1977 年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士（文学）。現在は南山大学外国語学部准教授。専門は中国近代教育史。共著に『近現代世界における文明化の作用 —「地域」の視座から考える—』(行路社、2020 年)、論文に「袁世凱政権期の学校教育における『尊孔』と『読經』」(『東洋史研究』第 76 卷第 1 号、2017 年) がある。

山下 一夫 (やました かずお)

1971 年生まれ。慶應義塾大学文学研究科後期博士課程単位取得退学。慶應義塾大学理工学部教授。専攻は中国文学で、中華圏の古典小説・伝統演劇・宗教信仰・大衆文化などに興味がある。

吉川 龍生 (よしかわ たつお)

1976 年神奈川県生まれ。慶應義塾大学大学院後期博士課程単位取得退学。慶應義塾高等学校教諭を経て、慶應義塾大学経済学部教授。専門は、中国映画史・中国近現代文学・外国语教育。翻訳（日本語字幕）に映画『私たちの青春、台湾』(傅榆監督、2017 年) などがある。

編集後記

『漢字文献情報処理研究』第19号をお届けする。本誌の刊行は2年ぶりだが、時節柄、新型コロナウイルス流行の影響を色濃く受けた内容となった。執筆者の大半は、各大学・部署で新コロ事態対応やオンライン授業実施の最前線で活躍させていたが、本來であればその疲労を癒やすべき夏休みの貴重な時間を本誌原稿に割いていただいたことに、まずもって御礼申し上げたい。かかる状況下でいかに研究・教育を継続するかは、個々の研究者が取り組まなくてはならない課題であるが、本誌特集をそれを考える上で一助として頂けたら幸いである。

さて、漢情研が有料会員制度を廃止したとき、爾後の本誌刊行は科研費プロジェクトの採択状況によって決まる旨アナウンスした。本2020年度が現在の科研費プロジェクトの最終年度になるが、本会幹事それぞれが自らのプロジェクトを抱えており、本務校の業務にも忙殺されている状況であることから、後継企画の申請は行っていない。このため、本誌の刊行は本号をもって一旦、休止となる。もっとも、本会の出版計画がこれで終わりというわけではなく、本誌に3号に渡って掲載したリファレンスマニュアルを単行本として刊行する計画が進んでいるので、引き続きご協力賜れば幸甚である。

末筆ではあるが、本誌の刊行にご尽力いただいた好文出版の尾方社長、および様々なご援助を賜った漢情研会員諸賢に御礼申し上げたい。ありがとうございました。別了！（凶）

漢字文献情報処理研究 第19号

発行日 2020年10月14日

定価 2,200円(本体2,000円+税10%)

編集 ©漢字文献情報処理研究会
<http://jaet.sakura.ne.jp/>

編集委員 ○千田 大介 上地 宏一
小島 浩之 佐藤 仁史
田邊 鉄 二階堂善弘
師 茂樹

デザイン 電脳瓦崗寨：
& DTP <http://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/>

発行人 尾方敏裕

発行所 株式会社好文出版
〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巣町540
林ビル3F
TEL:03-5273-2739
FAX:03-5273-2740
URL:<http://www.kohbun.co.jp/>

◎本誌に関する訂正・補足情報は、漢字文献情報処理研究会サイト(<http://jaet.sakura.ne.jp/>)に掲載します。

※本誌および本誌掲載論文・記事は、日本学術振興会科学研究費補助金「情報時代における中国学研究・教育オープンプラットフォームの構築」(平成28年度～令和2年度、基盤研究(B)、研究代表者：二階堂善弘、課題番号:16H03351)による成果の一部である。

ISBN978-4-87220-223-6

C3004 ¥2000E



9784872202236



1923004020005